

平成22年度

文化財保存修復研究センター研究成果報告書

Bulletin of Institute for Conservation of Cultural Property



東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター

2011. 3

目次

はじめに.....	3
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究概要.....	5
事前視察報告 文化財総合的把握モデル事業視察.....	9
大山龍顕・岡田 靖・北野博司	
調査・研究活動報告	
A. 大江町 文化遺産悉皆調査	
法界寺文化財悉皆調査.....	13
長坂一郎・半田正博・岡田 靖・大山龍顕	
七軒・本郷地区第1次社寺調査.....	23
岡田 靖・大山龍顕	
B. 西川町 文化遺産悉皆調査	
吉祥院文化財悉皆調査.....	32
長坂一郎・半田正博・岡田 靖・大山龍顕	
C. 高畠町 文化遺産悉皆調査	
大聖寺（亀岡文殊）文化財悉皆調査.....	43
長坂一郎・半田正博・岡田 靖・大山龍顕	
高畠石と地域文化遺産.....	68
北野博司	
D. 保存環境調査	
山形県高畠町大聖寺の環境調査.....	77
米村祥央	
平成22年度研究調査報告会.....	83
総 括.....	125
文化財保存修復研究センターの概要.....	128
平成22年度研究活動業績一覧.....	132
報道紹介.....	132
研究者一覧.....	133

はじめに

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター センター長

長坂 一郎

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターではこの度、文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受けて、平成 22～26 年度に渡って『複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究』を行うことになりました。本書はその 1 年目、平成 22 年度の研究成果を報告するものです。

本センターは東北初の芸術系大学である東北芸術工科大学付属の研究機関として平成 13 年開設以来、文化財の保存修復に関する技術、研究の高度化と地域還元、教育との関係を掲げて活動してまいりました。幸いにして、地元・山形県を始め東北地方の方々のご支援を賜り、この 10 年間の活動はおおむね順調に推移してきたものと考えております。

しかし、21 世紀を 10 年過ぎた地域社会の現状、とくに過疎化、高齢化、少子化、空洞化、均一化、停滞化、など様々な言葉が用いられる東北地方の地域社会を見渡してみますと、現状の活動を続けることだけで今後の文化財の保存修復活動として事足りるのかという、基本的な問題意識を感じてしまう事もありました。

そこで、これからの文化財の保存修復活動とは単に目の前にもたらされたものを即物的、物理的に修復するというだけでなく、修復活動における知見、研究から新たな地域社会の遺産としての価値を見出し、それを地域社会と共有することで、地域社会の遺産を守っていくことになるのではないかと、そしてその地域の価値をさらに大きな地域に発信し認められることで、小さな地域の遺産が大きな地域さらには全国の遺産になり、ひいては過疎化、高齢化、少子化に悩む地域の文化遺産を全国で保護、保存していく形になるのではなかろうか。このような考えにより新たな研究を計画いたしました。東北地方唯一の保存修復研究機関として、今後も地域社会の現状に寄り添って活動を進めてまいりたいと思っております。

本年度は研究初年度でなかなか軌道に乗らなかった面もありますが、本文ご閲覧の上、ご指導、ご鞭撻を賜れば光栄に存じます。ご協力賜りました関係機関、諸氏にはこの場にて改めて御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災とその後の東京電力福島第一原子力発電所の放射線漏れ事故によって日本社会全体が変わる可能性があるようにも思われます。本センターも「文化財レスキュー」活動に携わっており、現在も図書、古文書、立体作品、東洋絵画作品等の応急処置、一時保管を行なっております。今回の震災、事故の結果、東北各地の地域文化遺産がどうなるのか、地域文化はどうなるのか、予測はつきません。

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究概要

複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究

研究の経緯と研究基盤

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターは、東北地方における唯一の総合的な文化財の保存修復機能を持つ機関である。修復分野としては、古典彫刻を含んだ立体作品修復、西洋絵画修復、東洋絵画修復の3分野を持ち、またそれらを支える保存科学、美術史、考古学の各研究分野を備えており、「文化財保存の理論と実践」を同一機関において実行することができる全国にもまれな組織となっている。また機器類に関しては作品修復にあたっての作業の前提としての調査のための大型透過X線画像撮影解析装置、三次元計測器をはじめとする各種検査装置や分析機器の充実度は保存修復機関としては全国に誇るものであり、さらに修復作業にあたっての文化財修復用レーザー・クリーニング装置をはじめとする先進的な修復機器や現実に近い強制劣化実験が可能なキセノン・フェードメーター装置をはじめとする実験機器も装備されている。

本センターは平成17～21年度に渡りオープン・リサーチ・センター（ORC）整備事業として『地域文化遺産の循環型保存・活用システムに関する総合的研究』を行ってきた。それは地域文化遺産の再発見・再評価を行ない、かつその保存と活用を地域住民と共に行い、その結果を地域に還元するという「循環型」の保存活動システムの構築を目指したものであった。その研究において各種地域文化財の調査、研究、再評価、保存科学的研究、教育普及活動などさまざまな分野で優れた研究成果を得ることができたが、一方で対象とする地域文化財を各分野がそれぞれ選択した結果、地域としての特色の把握についての課題も残った。そこで本研究では前回とは異なり対象とする文化財を設定するのではなくはじめに地域を設定してそこにおける文化財を対象とする方法を考えた。地域文化遺産に対する保存、修復、研究の各分野の視点を一地域に集中することにより、個々の地域文化遺産の意味のみではなく、その地域ゆえの相互の関係をも読み取ることが可能になり、その結果としてその地域文化をよりダイナミックに理解、説明することができると考えるからである。これは前回、ORC整備事業における地域文化財の「再評価」を志向する研究をさらに高次にする方法であり、その結果、対象地域にとっては新たな地域文化理解を示すことになるものである。もちろんそのためには対象地域との連携が不可欠であり、その結果、本センターと地域との関係強化が図られることになる。

また本センターは東北芸術工科大学付属機関であるが単独の研究機関として活動しているのではなく、本学の学部美術史・文化財保存修復学科および歴史遺産学科および大学院芸術文化専攻の実技教育との連携を図ってきた。新たな概念による本プロジェクトは今後の保存修復活動、あるいは地域文化研究に大きな意味を持つものであり、その進捗過程における状況を逐次、学部生あるいは大学院生の参加という形で直接的に教育現場に反映させていくことができる。美術史・文化財保存修復学科と歴史遺産学科の学部2学科および大学院芸術文化専攻を有するという本学の教育の特色を、さらに実践面から補強するという面ももつ。本研究は本学の教育内容の進展に資するものともなるものである。

さらに本学開学の平成4年以来、本学部2学科および大学院の卒業生で文化財関連の仕事に従事しているものは全国各地域に存在している。本研究の成果、ノウハウをそれら卒業生に伝えネットワーク化（「東北芸工大文化遺産保存修復ネットワーク」）することも可能である。それは全国の地域文化遺産の保存活動に大いに益することになるであろうし、本学の特色である文化財保存活動教育の基盤の強化に役立つことになるものである。

このような研究体制の下、活動の姿勢としては東北地方が文化財保存の面ではやや立ち遅れている現状を鑑みて、積極的に地域に進出していくことを目指してきた。現在までに各分野がそれぞれ実績を積み重ねてきているが、更に今回新たな研究を計画し、本センターの文化財保存活動のさらなるレベルアップを目指すことにした。

以上の経緯から、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターでは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、平成22年度から平成26年度の5年間に渡る研究プロジェクト『複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究』を実践することとなった。

研究の目的

文化財を保護し、保存し、活用する目的は、単にあるものを保存し伝存することではなく、地域社会の環境、歴史、文化のなかで意味づけて将来にわたって保護、保存していくことであろう。しかし現在までの地域文化財の保護、保存については、個々の文化財を単品主義的な観点から評価する方法が多く採用され、問題点も指摘されてきている。本研究で、個々の文化財を総合的、複合的にとらえることで地域に存在する文化財の総体としての文化財を地域文化遺産と位置付け、それらを踏まえて保護、保存についての新たな試みを行なうものである。

まず地域文化財の再発見のための調査活動において、本センターの各分野の研究者（東洋絵画修復、西洋絵画修復、立体作品修復、古典彫刻修復、保存科学、考古学、美術史学）および学内外の研究者（民俗学、美術史学、歴史学、歴史地理学）が共同で行なうことにより、今までのいわゆる総合調査と称されるような単なる多分野による文化財の現状調査ではなく、保存・修復および防災、防犯の観点をも含めた、文化財を将来に残すことを視野に入れた複合的な調査活動を行なうことである。

ついで調査活動をもとに各文化財に対する多面的な検討を行なうことにより、その意味、意義、背景を確認する。従来の文化財調査は文化財の「現状」で文化財の意味、意義を判断してきているが本研究では「現状に至るまでの過程」をも考察に入れた調査、研究を行う。この研究方法により、地域の文化特性の研究がより正確に行なうことができるであろう。

さらにその文化財の保護、保存活動を行うにあたっては新たな研究成果、技術開発を目指す。その指針は地域住民が自身で実行できる簡潔で入手しやすい知識、技術とする。保護・保存活動に対する敷居を低くすることにより、一般住民にとってそれらの活動が身近なもの、日常的なものとなることを意図するものである。さらにその普及活動を行い若年層から老年層までの普及を目指す。すなわち保護・保存活動は専門家のみで行なうものではなく、一般住民も行なうことが永続的な保護・保存活動には必要である。そのためには、住民が保護・保存活動に日常的行動の範囲として参加でき、かつ費用的にも負担が重くないということが条件となるであろう。したがって、本研究の成果によって地域文化財の保護・保存活動はこれまでとは格段に進展することであろう。

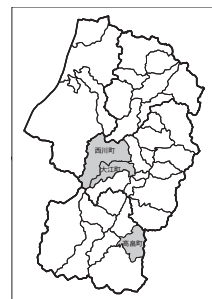
地域文化遺産についての調査、研究、保存の各段階で、かつてない方法を提示することである。地域文化遺産の重要性が認識されてきている現在においても、その具体的な実践は積極的に行なわれていないのが現状ではないであろうか。本センターは全国的にみてもそれを実行することができる数少ない機関であると考ええる。

研究フィールド

本研究ではより集約的な研究成果を得るために研究対象となる中心的なフィールドを設定することとした。研究フィールドとしては距離的な条件による研究密度の予測から山形県内を対象とした上で、前回のORC事業により先行研究および地方自治体や地域住民との関係が築かれていた山形県東置賜郡高畠町と山形県西村山郡の大江町、西川町の3町を中心的な研究フィールドとして位置付けることとした。

高畠町は県内有数の遺跡密集地として知られ、それらは県立考古資料館や町立歴史資料館を中核とする歴史公園において公開・活用されているが、またそれらが自然や生業と一体となった独特の文化的景観を形成している地域である。本センターも考古分野を中心に5年以上に渡り地域文化遺産保護活動に協力してきたが、他の分野の参加によって更なる文化遺産の発掘、新たな価値付けが可能な地域であると考えられる。

出羽三山信仰は中世以来、山形県のみならず東日本における山岳信仰の代表の一つであった。西川町は出羽三山登拝の拠点を持つ、古い信仰の歴史を担う地域である。また大江町は西川町に隣接し、県の中央を南北に貫き日本海に注ぐ大河で古来より流通の大動脈であった最上川の中流に位置し、通運の中継基地として地域文化の育成地でもあった。この両町は山岳信仰と河川流通という歴史的に重要な要因を背景に景観を形成してきた。そこには複合的な形成過程が想定でき、その解明には新たな方法が求められることであろう。



研究の方法

本研究は研究をより高質かつ効率的な研究事業を推進するために2つのテーマを設け、互いに連動する形で研究を展開することとした。

テーマ1「保存修復活動から展開される地域文化遺産の再発見と新たな価値の創出」

本研究は、総合的な地域文化遺産としての観点で、山形県下における現在まで着目されていなかった潜在的な文化財を発見もしくは再発見することを目的に、西村山郡の西川町、大江町と東置賜郡の高畠町の2地域を中心的な研究対象地域とした地域文化財の悉皆調査を実践する。そして、調査結果をもとに総合的な地域文化遺産の新たな価値の創出を図ることで、複合的保存修復活動の基盤を形成することを目的としている。

調査活動は研究対象地域の寺社、宿坊、旧家、史跡、遺跡などを中心に実践し、具体的な調査対象としては東洋絵画（掛軸、屏風、絵馬、古文書、宿帳など）、西洋絵画（近代絵画（対象地域出身作家による作品、対象地域を描いた作品など）など）、立体作品（近代彫刻、工芸品など）、古典彫刻作品（仏像、面、寺社建築彫刻など）、埋蔵文化財（出土遺物、遺跡など）、民俗文化財（民具、生活用品など）、石造物（石仏、鳥居、板碑など）などの、指定文化財および未指定文化財である。調査方法は、調査対象場所に所蔵される文化財の種類に応じて保存修復家、美術史家、歴史家、保存科学者による複合分野での調査チームを組み、地域文化遺産的観点を念頭に置いた総合的な調査活動を実践する。具体的な調査内容は、文化財の宗教的価値、美術品的価値、歴史的価値、資料的価値などの視点による多角的調査、文化財の損傷状態の調査、文化財の物質的劣化原因の調査および修復に際して実践された修復材料の経過調査、文化財の保存環境調査、文化財の防災および防犯の視点による調査、文化財にまつわる文化背景に関する文献および聞き取り調査などである。

次に、調査活動の成果をもとに総合的地域文化遺産の新たな価値の創出を模索する。対象地域とした西川町、大江町は地理的に山形県の中央に位置し、出羽三山信仰に関係する六十里越街道や道智道、または最上川舟運の交通の要所として、山形地方の文化形成における重要な地域である。また2町は、大江氏、最上氏、酒井氏の統治による文化的背景が共通して色濃く、寒河江市、朝日町、鶴岡市などの隣接地域や河北町、中山町、山形市などの周辺地域との関連も深い。一方の高畠町は、高畠石の採掘に関係する文化財が多く、縄文時代からの遺跡や高畠石を使用した石造品が各時代を通して多く存在する点が特徴的である。また、中世は長井氏（大江氏）、伊達氏の統治を、近世には伊達氏、織田氏、上杉氏の統治を経たことから、天童市、米沢市、長井市、白鷹町、小国町、川西町、飯豊町など周辺地域と関係が深い。

調査で明らかになった情報をもとに、個々の文化財を上記の文化背景や信仰形態（仏教、神道、修験道など）、様式、制作者（絵師・仏師など）、農業、産業、旧藩、時代（古代、中世、近世、近代、現代）などで線につなぎ、それらを複合的にとらえて構築することで面的もしくは立体的な地域文化遺産の新たな価値を創出する。そのためには、当センターの美術史、保存科学、保存修復、考古学、民俗学、歴史学などの各専門分野とともに、地域で活動される郷土史家や歴史家、考古学者らとの連携し、多角的に地域文化遺産を創出していくことが重要であると考えている。

期待される成果としては、対象地域において悉皆調査を敢行することにより、現在まで知られていなかった多くの文化財が発見、もしくは再発見されることが予測される。また、保存修復家、美術史家、歴史家、保存科学者との共同調査によって、文化財の形態や損傷状態だけでなく保存環境や防犯、防災体制などの文化財の周辺状況を同時に把握することができることで、総合的な調査結果が得られる。さらに、それらの文化財の関係性を探り複合的に考察することで新たな地域文化財の価値が創出できる。本研究で実践した成果は、山形県の文化の再認識や地域活性化を促すとともに、調査内容の目録作成や新たな地域文化遺産価値の創出としてまとめることで、本質的かつ総合的な新しい文化財保存システムの基盤形成に寄与するであろう。

研究成果は、出版物の発行や意見交換会、勉強会、ワークショップ、講演会、シンポジウムなどを通して、地域や広く他県および海外にむけて随時発表を行う。また、一般向けの広報活動も実践することで、より広い対象へ向けた文化財保存の理解に努めたい。

テーマ2『環境に配慮し、安全で簡便な地域文化遺産保存管理』を地域住民と展開するための基礎研究と教育普及」

現在、文化財保存の分野で国際的にも重要となっている予防的保存（Preventive Conservation）の観点では、文化財の劣化速度を最小限に抑えるために、その環境を整え、日常的なケアを行うことが重要視されている。こうした文化財の予防的保存活動を地域で展開するためには、地域文化財の歴史的・文化的な背景や特徴に関心を高めた住民が、屋内外の環境や災害が文化遺産に与える影響を知り、日常的あるいは定期的な活動（点検、清掃、簡易的な延命処置等）を継続できる形となることが望ましい。さらに、年配の世代と若い世代が一体となり、次世代へつながら活動として教育の現場などにも適用されるべきである。

本研究テーマでは、文化遺産保存を通じた地域文化力向上のための諸活動を理論的に裏付ける基礎研究を進め、活動実践へ向けた様々な実験的取組みを地域住民と共同で執り行うことで予防的保存活動の教育・浸透を図る。そして、環境に配慮し、安全で簡便な文化遺産保存管理の技術を地域住民と共に開発する。特に寒冷地である山形県の環境特性を考慮した研究を進め、地域での活動に沿ったものとなるよう検討をする。

具体的な研究内容として以下の項目を設定し、本センターにおける実験室的な研究と、現場における住民との共同研究を並行しておこなう。

- A) 悉皆調査に伴う温湿度、光等環境調査の実施と、調査結果を基にした具体的改善策の検討
- B) 悉皆調査に伴う生物被害の現状把握と、燻蒸や市販防虫剤の文化財に対する適性および影響に関する研究と IPM（総合的有害生物防除管理）の検討
- C) 防災を考慮した経済的かつ簡易的な収蔵方法の実践
- D) 寒冷地の特性を考慮した保存修復材料と修復方法の研究
- E) 保存修復に関わる材料研究

これらの研究から得られる知見を、ワークショップ等を通じた地域住民との学びによって浸透を図り、加えて次世代への教育普及を目指す。

期待される成果としては、入手しやすい器具や材料を用い、安全かつ簡便な作業で実施可能な文化財の保存方法と環境の改善に関する地域住民の理解が進み、活動の黎明となることが期待される。予防的保存の観点により、上記の研究内容は将来的な文化遺産の過度な劣化を予防するものである。一方的な研究情報の提供ではなく、参加型の研究展開をおこなうため、地域の中にも活きた経験・データとして浸透するであろう。特に小中学生など若い世代の参加が地域文化遺産保護の早期教育となり、継続的に次世代へ活動をつなげるようになることが期待される。よって、当該地域の住民の文化遺産保護に対する意識が飛躍的に向上することが期待される。また、各研究に学生および本学卒業生を積極的に参加させることで、研究分野の発展とともに若手人材の大きな教育的効果が得られる。

本研究によって得られたデータは文化財保存修復学会等、国内当該分野の学会を通して随時発信する。さらに成果は世界的に共有できるものであるため、国際学会においても成果発表を目指し、山形から世界へ情報を発信したい。

研究組織（平成 23 年 3 月 31 日現在＝平成 22 年度の研究組織）

本研究にあたる研究員は、本センター研究員（学科兼任研究員、専任研究員、嘱託研究員）と学内および外部研究協力者からなる。

本研究は、本センターの研究員が中心となっており、研究の展開により随時学内および外部研究協力者と連携体制をとって推進する。

評価体制

本研究の評価は、学内外の評価委員 3 名により行われる。

学内評価委員

入間田宣夫（東北芸術工科大学大学院長）

学外評価委員

三浦定俊（公益財団法人文化財虫害研究所理事長）

佐藤庄一（山形考古学会副会長）

事前視察報告 文化財総合的把握モデル事業視察

大山龍顕 岡田 靖 北野博司

調査目的

本センターの計画した私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」（以下、本事業）を実施するにあたり、文化庁の「歴史文化基本構想」に基づく「文化財総合的把握モデル事業（以下、モデル事業）」における取り組みに共通する点が見られるため、本事業の方向性の再確認や具体的な実践方法の学習を目的として、先行して実践されているモデル事業の実情視察を行った。

歴史文化基本構想について

「歴史文化基本構想」とは各地方公共団体が策定する「地域の文化財をその周辺環境も含め総合的に保存・活用していくための基本構想」のことで、平成19年10月30日に出された「文化審議会文化財分科会企画調査会報告書」で提言された。

「歴史文化基本構想」では、これまでの文化財保護に加え文化財を社会全体で保護していくために、文化財は歴史や風土の元で有機的につながっているという側面を重視している。人々に地域の歴史や文化を語る重要な資産として、指定、未指定を問わない「関連文化財群」や「歴史文化保存活用区域」といった保存・活用の体制の有効性を勧めている。この構想の実現には各市町村の担当部局が連携し、地域住民やNPO法人、企業などと協力して「歴史文化基本構想」を策定し、文化財を核として地域全体を歴史・文化の観点から捉え、各種施策を統合した取り組みを行うことで構想の実現が可能になると提言している。「文化財総合的把握モデル事業」による文化財調査をもとに平成23年に策定することとなっている。

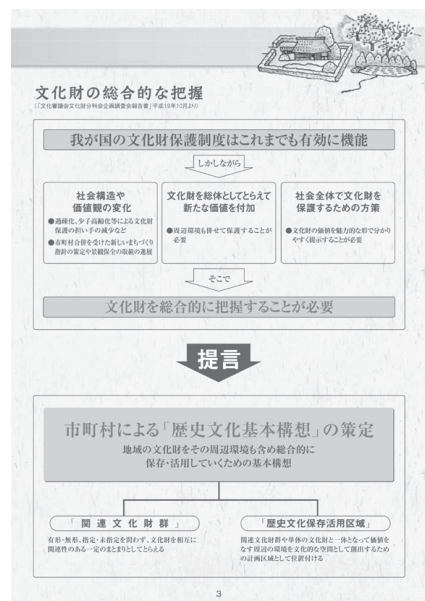


図1 文化財の総合的把握について
（文化庁作製パンフレット「文化財の保護と町づくり」から転載）

文化財総合的把握モデル事業について

「文化財総合的把握モデル事業」は、「歴史文化基本構想」を推進するために全国20箇所の地方公共団体をモデルケースとして、基本構想の策定を行い、その方向性や課題を明らかにするという趣旨のもと、平成20年～22年度の3年間で実施された。域内の全ての文化財類型の調査。調査に基づいた「歴史文化基本構想」の策定。「歴史文化基本構想」に基づいた「保存活用計画」の策定。地域住民に対する説明会等の開催を行うとしている。

視察内容

全国で実践されている20箇所のモデル事業のうち、事前に「文化財総合的把握モデル事業」の中間報告から本事業の対象地域と共通する文化や参考になると思われる地域を選択し、兵庫県高砂市と栃木県足利市での取り組みについて視察を行った。



図2 高砂市歴史文化基本構想・関連文化財イメージ
（高砂市中間報告会資料から転載）

視察①高砂市

高砂市は瀬戸内海沿岸にあり、加古川市と姫路市の間に位置している。東部に加古川の河口があり、西から北に丘陵部が広がる。世阿弥作の謡曲「高砂」の地として知られる。丘陵部の竜山では古来より、石切り場として竜山石が切り出され、その歴史は1700年に及ぶという。江戸時代には塩田開発が行われた。白砂青松といわれた沿岸部の景色は埋め立てや工業開発により様相は変化したが、町の中には今もなお、「やま（竜山）」、「うみ（播磨灘）」、「かわ（加古川他）」に育まれた文化が残っている。

高砂市では「石の文化」「みなとのまち」「塩づくり」という特徴に焦点をあてて事業に取り組んでいる。地元の特産である竜山石について再調査を行い、歴史的背景や利用方法などから町の歴史との結びつきを捉え直すことで歴史文化基本構想につなげようとモデル事業をすすめていた。

竜山石：

市街地を抜けた田園地帯には岩盤の岩肌が広がり、山形の高阜にも共通した景色が見られる。5世紀に遡る古墳の石棺や石の宝殿と呼ばれる石造物が中心的文化財として存在し、採掘場跡には古墳時代～近世・近代の石切遺構が残っていた。竜山石は様々な用途に使用されており、市街地でも各時代を通じて塀や建物の基礎などに利用されている。石の利用方法の変遷が町の変遷と重なり、独自性ある町の文化財となっていた。石の実態調査では市民団体などと協力する形で石仏、墓石調査が行われており、今回の文化財総合的把握モデル事業においても調査を継続しているということであった。

町並み調査：

古い町並みや建造物の調査では、阪神大震災以後に建築士などを中心として結成された団体である「ひょうごへりテージ」と協力して町並みの調査を行っている。高砂市には江戸時代から昭和40年代まで沿岸部には塩田があったが、現在でも塩田経営をした民家が保存され、周辺には江戸時代の町並みが残っている地区がある。また江戸時代加古川河口につくられた姫路藩の港町であったことから、河口付近には港町の町並みや近代建築、石垣などが残されており、それらの中には竜山石が使用されている。これまでも文化財として捉えられてきた建造物や町並みといった視点に加えて、地元産の石の文化という要素を加えることで町の文化の変遷を捉えようと実践する方法は、本事業の対象地域である高阜町と高阜石の関係性に通じるものが多い、大いに参考となるものであった。

視察②足利市

足利市は室町幕府を開いた足利尊氏の本拠地として知られ、北方に足尾山地、中央に渡良瀬川、南に関東平野が広がる。古墳時代の遺構も多く、中世には足利家の本拠地として重要な位置を占めた。室町期に再興された足利学校は戦国期には日本中でもっとも大きな学校として知られた。近世には日光例幣使道が整備されるとともに、江戸と舟運の河岸が作られ、幕末から明治には織物産業が隆盛し、近代化遺産として残っている。各時代、種類ともに豊かな歴史資源を有しており、平成12年には全国に先駆けて「歴史都市宣言」を行い、平成19年度には「足利学校と足利市の遺産」として世界遺産暫定一覧表候補への提案を行っている。

足利市ではすでに文化財の保存について様々な取り組みが行われており、文化財の各分野にわたって悉皆調査が進行していた。自然や歴史、風土を基にしたストーリーによる文化を捉える取り組みや、面的な文化財群としての捉え方などを行っていた。文化財調査につ



図3 高砂市 竜山



図4 高砂市 石の宝殿



図5 高砂市 竜山石の利用



図6 足利市歴史文化基本構想イメージ
(足利市中間報告会資料から転載)

いては、昭和 54 年度の文化財総合調査（美術工芸品、民俗、建造物）をはじめ、民家、絵馬、石造物、蔵といった様々な調査が行われている。今回のモデル事業では美術工芸品、名称・庭園調査、織物技術調査として、「小絵馬」や「庭園」といった分野の悉皆調査にも取り組んでいた。

小絵馬：

小絵馬の調査では以前から絵馬調査を行っていた市民団体が調査を行った。

庭園：

庭園の調査では、地元の庭師らが新たに「庭園研究会」を独自に創設して活動しており、本来あるべき庭園の形を復元するなどの具体的な活動を展開していた。その取り組みは、名勝地などの庭園だけではなく個人宅の庭園も対象として調査を行い、モデル事業の実践期間後も継続した活動ができるように精力的な活動がなされていた。

旧樺崎寺跡地：

旧樺崎寺跡地の発掘と整備を進めており、浄土庭園などを復元整備していた。

市民活動への取り組み：

文化財を市民に周知する取り組みでは、文化財一斉公開というバスなどでコースごとに廻るような企画や、文化財ボランティア講座を開催するなど、行政側からの啓発的な取り組みも盛んに行われている。



図7 足利学校



図8 旧樺崎寺跡地



図9 庭園研究会により復元された庭園

所 見

この度の視察調査では、各自治体の実際の調査活動を知ることができたことは具体的で有益な視察となった。どちらの自治体も、基本的にはこれまで行ってきた調査活動を方向性の柱としており、その上で個々の地域性についてより深める方法を模索して、事業を展開していた。

高砂の竜山石は歴史的な背景や地域の景観となっている点など、今回対象地域としている高畠町の高畠石に共通する点が多く、具体的な比較対象として調査方法のみならず、永続的な活動とするための市民活動との関係作りも含めて話を聞くことができたことで、具体的な指針となった。また、石造物調査に対する興味は足利でも話題に上り、石造物の調査は“地域に所在する文化遺産”としての重要な要素となると思われる。又地域に密着した調査では郷土史研究といった地元の有志が活躍しており、地域からの活動の重要性を表していた。

足利市の取り組みは歴史的な町であるだけに各分野に渡って充実した調査が既に行われており、小絵馬といった細部にわたる調査にも、これまでの絵馬研究の実績を活かして調査が行き届いていた。足利市が同時に取り組んでいたことは、個々の文化財同士を文化財群として捉え、文化財としての価値だけでなく、網の目状のつながりから物語を繋ぐといった取り組みだった。それは、文化的な地域としての保存を考えるだけでなく、市民に広く周知する活動を通じて文化的資源として活用するといった取り組みであり、足利学校といったこれまでもよく知られていた対象からさらに踏み込んだ旧樺崎寺跡の整備などを通じて、地域の歴史的背景を網の目状に捉えて取り組んでいた。

行政主導の事業に対して、各自治体で市民参加の活動も広がりを見せており、全ての市民参加とはいかないまでも、高砂では建築士が参加し、足利では庭園研究が進むなど、地域性に応じた広がりを見せていた。今後の保存・活用の上で住民が参加する活動になるかどうか、或いは既存の活動と連携するなど、永続的な活動として、住民に主体が移ることは重要であり、それは本事業でも課題となると思われる。

調査・研究活動報告

A. 大江町 文化遺産悉皆調査

法界寺文化財悉皆調査

長坂一郎・半田正博・岡田 靖・大山龍顕

法界寺文化財悉皆調査概要

左沢山法界寺は大江町左沢にある浄土宗名越派の寺院である。慶安元年（1648年）に福島県いわき市の専称寺住職・円蓮社眼誉上人秀天大和尚によって開かれ、江戸時代は庄内松山藩の菩提寺として隆盛を極めたが、明治維新後は無住の時期などもあった。その後、昭和に入ってから再興を果たし、昭和五十四年には本堂や位牌壇改修、観音堂建立などの落慶法要を行っている。今回の調査では、法界寺本堂（位牌堂併設）と観音堂、山門に所在する文化財の悉皆調査を実践した。

開山当初から建つ本堂の須弥壇上に安置される本尊の阿弥陀如来三尊像は、延享二年（1745年）に京仏師によって造像された銘がある優作である。本堂には他にも木造法然上人立像、木造善導大師立像が安置され、また併設される位牌堂には開山者の銘が記された木造阿弥陀如来立像や元禄三年（1690年）の銘のある木造阿弥陀如来坐像などの諸仏が安置されている。観音堂には本尊として「子育て観音」がまつられるが、形状から来迎形式の阿弥陀三尊像の脇侍像であったと思われる。また、観音像には最上三十三観音像がまつられ、観音信仰の篤さを物語っている。

書画では、当麻曼荼羅図と共に幽霊画、涅槃図などが所蔵されている。当麻曼荼羅図は規模が大きく、紙本の作品で、酒井家の菩提寺だったことなどから今後の調査により作品の背景も明らかになる可能性がある。涅槃図も密度のある大作で興味深い、双方共に横折れなどの損傷が危惧される。他にも松山藩に関する扁額や文書には江戸から現代までの年号が散見され、地域の貴重な資料となっている。明治や大正期の紙資料の劣化が著しく、紙資料保存の課題も垣間見えた。

法界寺 文化財悉皆調査リスト

仏像文化財			書画文化財		
	名 称	安置場所		名 称	保管場所
1	木造阿弥陀如来立像	本堂	1	当麻曼荼羅図	本堂
2	木造観音菩薩立像	本堂	2	仏涅槃図	本堂
3	木造勢至菩薩立像	本堂	3	幽霊画	本堂
4	木造善導大師立像	本堂	4	骸骨之図	本堂
5	木造法然上人立像	本堂	5	山号額	本堂
6	木造阿弥陀如来立像	位牌堂	6	写真	本堂
7	木造地藏菩薩立像（1）	位牌堂	7	女性像	本堂
8	木造地藏菩薩立像（2）	位牌堂	8	山号額	本堂
9	木造阿弥陀如来坐像	位牌堂	9	来迎図	本堂
10	木造観音菩薩立像	観音堂	10	善導大師像	本堂
11	木造観音菩薩立像（2）	観音堂	11	佛阿弥陀経	本堂
12	木造子育て観音像	観音堂	12	法界寺文書	本堂
13	木造虚空蔵菩薩坐像	観音堂	13	山号額	山門
14	木造最上三十三観音像 33 軀	観音堂	14	新四国八十八か所第四十七番	観音堂
			15	三字額（白琴巖）	観音堂
			16	俳額	観音堂
			17	第十九番 法界寺	観音堂
			18	写真	観音堂
			19	四曲屏風（北山崎）	観音堂

① 木造阿弥陀如来三尊立像（本堂本尊）

法 量 (cm)

像高	81.9	面長	9.1	面奥	11.9	肘張	26.2
髪際高	75.4	面幅	9.0	胸奥(右)	12.4	裙張	19.4
頂－顎	15.6	耳張	11.1	腹奥(衣上)	15.6	足先開外	11.9

形 状

肉髻、螺髪、肉髻珠、髪際は波状にあらわす。白毫、玉眼、耳朶貫通、三道、鼻孔をうがつ。内衣、覆肩衣、衲衣、裙をつけ来迎印をとる。左足をやや前にして立つ。

品質・構造

木造阿弥陀如来立像：

頭部は耳後で前後矧付け。右後頭部小材矧付け。螺髪彫出。面相部を矧いで玉眼を施す。体部は腹部以下及び肩上で矧付ける。前後三材製。左手は肩以下袖外側材及び袖の内側に二材矧付ける。左手首を差し込む。右手は肩以下一材及び袖内側一材矧付け。右手首を差し込む。左足先矧付け。右足先矧付け。衣は漆箔の上に金泥で紋様を描く。肉身部は金泥彩。

木造観音菩薩立像・木造勢至菩薩立像：

頭部は一材か。右は耳後、左は斜めに後頭部を通る線で割る。玉眼嵌入。差し首。体部は前後二材矧付け。左手は肩、肘、右手は肩、肘で各矧付け。両肘以下一材矧付け。天衣遊離部は、各矧付け。両足先各矧付け。足柄は各履柄。背面、光背差し口矧付け。背面裙部矧付けか。宝冠、簪、天冠帯は金属製。

保存状態

阿弥陀如来：本体後補部－右手第二指のみ。本体欠損部－後頭部螺髪一部。

昭和五十三年に小嶋源五郎仏具店（山形市）により表面のクリーニングが行われた。

銘 文

阿弥陀如来立像の台座内後方板貼に墨書あり。

「羽州最上左澤法界寺良恵代 師檀造立之 延享二乙丑五月吉日 京極通誓願寺前大仏師前田祐慶作」

観音・勢至の台座内に墨書あり。

「大仏師 □□（寒制か）」（延享二年＝1745年）



本堂本尊 木造阿弥陀如来三尊像

②木造阿弥陀如来立像（位牌堂）

法 量(cm)

像高	86.1	面長	11.6	耳張	12.6	肘張	24.9
髪際高	79.2	面幅	10.8	胸奥(右)	7.8	裙張	24.3
頂－顎	18.3	面奥	13.4	腹奥(衣上)	11.6		

形 状

阿弥陀如来立像。肉髻。螺髪。法衣、覆肩衣、裙を着ける。左手を軽く曲げて垂下し、右手は屈臂して、来迎印を結ぶ。蓮華座（蓮台、返花）に立つ。

品質・構造

ヒノキ材か。一木丸彫り。背面は平滑な面とする。両手先材、両足先材は別材矧ぎ寄せ。漆箔。

保存状態

表面の漆箔はほぼ剥落し、煤汚れと相まって黒色化している。

銘 文 背面、墨書銘。

「彼仏心光 常照是人 奉造立一尊円蓮社眼誉 寛文四年辰二月二日 左沢 左沢山法界寺開山秀天作」

※続いて苗字のない名前が20数名分あるが、判読不明。

（「大江町史」、「大江町の佛像 二」参照）

所 見

銘文により、寛文四年（1665年）に開山者である秀天（眼誉）によって造られたこと（発願された）が分かる。（法界寺の開山年は慶安元年（1648年）である。）



正面



背面



右側面

③木造阿弥陀如来坐像（位牌堂）

法 量(cm)

像高	30.2	面長	6.4	肘張	19.6	腹奥	10.4
髪際高	26.8	面幅	6.3	膝張	24.8	坐奥	16.9
頂－顎	11.0	耳張	7.4	胸奥(右)	8.6	裳先出	4.8
		面奥	7.9				

形 状

肉髻。螺髪。肉髻珠（欠失）。髪際波形。白毫（欠失）。玉眼、耳朶貫通。鼻孔小さくうがつ。三道。覆肩衣、衲衣をつけ、弥陀定印を示す。裙をつけ右足を上にして結跏趺坐する。

品質・構造

(本体) ヒノキ材か。寄木造。漆箔。玉眼嵌入。頭部は耳半ばを通る線で前後二材矧付け。前面材は面相部を割り、玉眼を嵌入する。体部は肩上を通る線で前後二材矧付け。前後各材は底面まで共彫りとする(前面材は腹部以下を底面まで像心束風に彫り残す)。左右両肩以下地付まで別材矧付け。両脚部一材矧付け。裳先別材矧付け。両前膊半ば以下袖口まで各別材矧付け。両手先一材矧付け。肉髻珠欠失。白毫欠失。右玉眼欠失。

(光背) ヒノキ材か。頭光・身光部一材製。周縁部は縦に円材矧付け。

保存状態

肉髻珠、白毫を欠失。右まぶた部を一部欠損。両手の第1指、右足先の一部を鼠害により欠損する。膝前の矧ぎ目の一部に亀裂が生じている。

所 見

元禄三年(1690年)の作。

台座光背も完備する江戸時代初期の作例として貴重である。

銘 文

光背背面に銘

「元禄三年庚午十一月廿九日 林空心 妻 花山道意 母 施主太田源右衛門 妻」



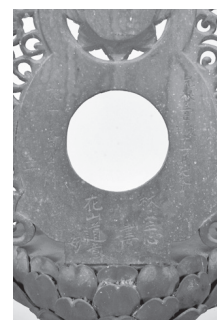
正面



左側面



光背正面



光背背面アップ

④木造観音菩薩立像(観音堂)

法 量(cm)

像高	53.3	面長	6.2	耳張	7.6	肘張	17.2
髪際高	45.2	面幅	5.8	胸奥(右)	7.5	裙張	12.6
頂-顎	14.1	面奥	7.3	腹奥	9.7	足先開(外)	9.8

形 状

肉髻、螺髪。肉髻珠(欠失)。髪際波形。白毫(欠失)。玉眼、耳朶貫通。鼻孔小さくうがつ。三道。覆肩衣、衲衣をつけ、弥陀定印を示す。裙をつけ右足を上にして結跏趺坐する。

品質・構造

(本体) ヒノキ材か。頭部は髻を含んで一材製。耳前で前後に割矧ぐ。内剝を施し、玉眼を嵌入する。体部は正中で左右二材矧付(各足柄を含む)。背面腰上から大腿部上にかけて別材矧付。両手は肩、肘前で各別付け。両足先各別付け。天衣は五材矧付け。肉身部に金泥、衣部に漆箔、髪部に彩色を施す。

(光背) 横三材製。柱一材。表面漆箔。漆塗り。

保存状態

全身に埃が堆積するが、構造的には状態は良好である。裙、天衣などに施された金箔はほぼ剥落し、下地の漆層が露出している。宝冠、白毫、胸飾、天衣の腕より先、持物(蓮台)などを欠失する。髻の頂き、指

先、背面衣部などに一部欠損が見られる。

所 見

来迎阿弥陀三尊の左脇侍か。江戸時代中期（18世紀頃か）



全体正面



左側面



背面

⑤法界寺安置のその他の諸尊



木造善導大師立像（本堂）
像高：75.0



木造法然上人立像（本堂）
像高：74.5



木造地藏菩薩立像（位牌堂）
像高 30.1



木造地藏菩薩立像（位牌堂）
像高：47.1



木造観音菩薩立像（観音堂）
像高：56.8



木造弘法大師坐像（観音堂）
像高：35.1

⑥木造最上三十三観音像（観音堂）

像高：約 18.0

最上三十三観音を表した 33 体の観音像と、ほぼ同寸の別系統の菩薩像 2 体がまつられている。

⑦当麻曼荼羅図

寸 法(cm)

本 紙	縦	195.7	横	200.0
全 体	縦	275.0	横	228.2

形態・材質技法

掛軸装 三段仏画表具 紙本着色

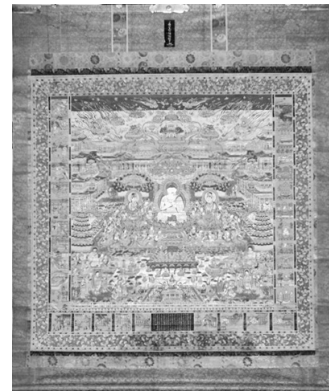
保存箱 かぶせ蓋

総縁天部分の中央に紺紙に金泥で記された付箋あり。

「南無阿弥陀仏（名前）（花押）」

保存状態

本紙には横折れが全体に見られ、中央部を中心に縦折れも多く見られる。補彩があることから一度以上の修復がなされている。保存箱は改変されている。



⑧仏涅槃図

寸 法(cm)

本 紙	縦	170.0	横	132.8
全 体	縦	257.0	横	162.4

形態・材質技法

掛軸装 三段仏画表具筋分風袋 紙本着色

保存箱 棧蓋

上巻部分に墨書あり。

「明治十六年 為正響覚音清居士菩提也 未 九月廿九日

施主原町 板垣安治」

保存状態

本紙全体に横折れあり。横折れから発展して剥がれかけている箇所もある。中央部には巻癖に起因する縦折れが見られる。総縁には全体的に擦れがある。



⑨幽霊図

寸 法(cm)

本 紙	縦	163.4	横	55.9
全 体	縦	210.3	横	71.5

形態・材質技法

掛軸装 通し明朝丸表具 絹本着色

縁 厚み3.0cm 見付3.7cm

裏面に墨書あり。

「山形懸下西村山郡 左澤村大字左澤 左澤山法界寺 位

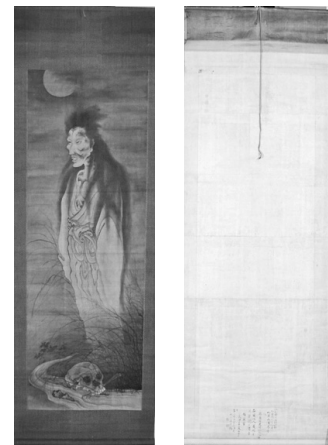
応亀井運明和尚之□ 右図他人寫取事 深禁定寫者

楼蘭齋 武田墨霞居士 時 □明治二十三 庚寅

秋八月中院」

保存状態

表具がやや波打つものの、大きな損傷も無く状態は良好



備 考

武田墨霞筆 明治二十三年（1890 年）作

武田墨霞は本名を武田忠兵衛といい、天保十二年（1841 年）大寺村に生まれた。晩年に住宅を山辺町田小路に構え、明治三十四年（1901 年）に亡くなった。

生家は武田長衛門という大寺村で農業兼綿打業をしている裕福な家で、当時、柳沢村（現在の中山町大字柳沢）にいた西塔大原という画工の内弟子として修行し、二年程で師の下を離れ、奔放な画家生活を送った。明治二十六年、山形市旅籠町永昌堂で印刷された「山形懸村山四郡書画諸先生貴名概略」に寒河江、柿本鉄堂に並んで、名前が記されており、地域で活躍をした作家であると考えられる。

墨霞の幽霊画は三幅残っているといい、一幅は習作で、生家の武田長衛門宅に保存され、今は菩提寺である山辺町安国寺に所蔵。他の一幅は専念寺（弾正淵）所蔵。残る一幅が本作品に該当すると考えられる。

⑩扁額

法界寺には扁額が数点所蔵されている。法界寺建立時制作という伝承のある、「左沢山」という額、「法界寺」という延享 3 年（1746 年）の額、墨書で「左沢山」と記された三点の山号額が確認された。

1.

寸 法(cm)

本 紙	縦	31.5	横	99.4
全 体	縦	47.5	横	107.5



形態・材質技法

額装 紙本墨書

裏面に墨書あり。

「奉納 酒井忠匡公 御筆 額一面 鈴木小市 庄司三郎兵衛」

保存状態

本堂内の鴨居に設置されている。本紙全面に茶褐色のシミと汚れが目立つ。本紙は欠損が多く、「山」部分には欠失がある。表面には虫なめの跡もあり、欠損部からは下張りの墨書が確認される。額縁と作品は固定されておらず、木材が痩せて外れてしまう可能性がある。

備 考

酒井忠匡 安政三年（1856 年）～明治四十四年（1911 年）は松山藩八代目で最後の藩主。

2.

寸 法(cm)

全 体	縦	35.8	横	91.8
-----	---	------	---	------



形態・材質技法

額装（額縁はなし）板本着色

緑の色料により彩色されている。板材は木目に特徴がある。

保存状態

現在も山門に掲げられている。緑の色料は細かくヒビが入り剥落が進んでおり、下地に青い色料が残っている。

3.

寸 法(cm)

本 紙	縦	55.5	横	128.0
全 体	縦	71.7	横	144.5



形態・材質技法

額装 板本着色

縁 一部に漆の跡があり黒塗縁

裏面に墨書あり。

「延亨三年（1746年）丙寅年七月十三日

當山良善上人代」

保存状態

本堂入口の内側に掛けられている。かつて、文字部分に彩色があったと考えられるが、経年劣化などによりほぼ全て消失している。

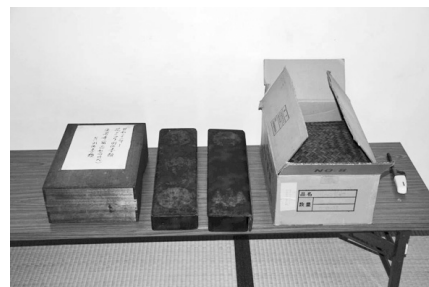
⑪文書

概要

平成22年9月に調査した際には確認できなかった法界寺の文書。今回は概要の記録と写真による撮影に留めた。花祭りや法要次第、經典、地域名簿や寄進帳など、寺と地域に関する資料194点が収蔵されていた。元禄十二年（1700年）の記載のある文書も含まれていた。

保存状態

桐の箱や漆塗りの収納箱や段ボール箱に保管されている。内容ごとに分類されている可能性もあるが詳細は不明。



⑫写真

概要

本堂内には歴代住職や参詣記念の集合写真などが額に入り掲げられている。歴代住職だけでなく、法界寺が茅葺の屋根だった当時の写真や葬式の様子も記録されており、貴重な資料となっている。

形態・材質

額装 白黒写真

保存状態

経年による褪色等の劣化が見られる。



昭和七年屋根改葺記念



昔の葬儀

法界寺文化財悉皆調査まとめ

法界寺文化財調査では、仏像文化財、書画文化財を中心に悉皆調査を行った。その結果を以下にまとめる。

仏像文化財では、位牌堂の木造開山阿弥陀如来立像、本堂の本尊である木造阿弥陀如来三尊像、位牌堂木造阿弥陀如来坐像の3体に、江戸時代の造像銘が見られた。

開山阿弥陀如来立像は開山者、秀天上人の作であると銘記されており、制作者についての真偽の程はわからないものの、法界寺開山の時期に制作された像であることは間違いなさであろう。本尊阿弥陀如来三尊像

には延享二年（1745 年）、京仏師前田祐慶の作との銘がみられた。また位牌堂阿弥陀如来坐像には元禄三年（1690 年）の銘がみられ、その造形的秀逸さから京仏師の作例であると思われる。現時点では前田祐慶の活動実態の確認ができていないが、位牌堂阿弥陀坐像の作者も含めて、今後探求を進めていきたいと考えている。

次に観音堂に安置される諸尊についてであるが、腰を曲げた来迎形式の脇侍像と思われる 2 体の木造菩薩形立像が安置されている。これらのうち、本尊としてまつられている木造観音菩薩立像については、今回の調査では現在の本堂本尊よりも様式的に古い像であると判断したため、本寺開山時期（1648 年）に近い頃に造立された初代の三尊像の脇侍像ではないかと推測している。

以上の本堂、観音堂に安置される諸尊の江戸時代初期から中期にかけての造像は、いずれも規模、質ともに秀逸であるため、本寺を菩提寺の一つとする松山藩主酒井家が大きく関係していた可能性が考えられる。

大江町左沢の近世は、元和八年（1622 年）に最上家が改易となった後、庄内に移封となった鶴岡藩初代藩主酒井忠勝の弟、酒井直次によって一万二千石の左沢藩として統治されることとなった。しかし後継ぎがなかった直次の没後、一時本家である鶴岡藩酒井家に吸収されたのち、正保四年（1675 年）に忠勝の三男忠恒が左沢領一万二千石と飽海郡・田川郡の八千石を合わせた松山藩二万石をもらいうけて分家した。松山藩は、松山（酒田市）に拠点を置き、左沢には代官所を拡充して、明治維新まで統治をおこなった。大江町史によれば、松山藩三代藩主の酒井忠休（在任期間は享保十七年（1732 年）～天明七年（1789 年））が、左沢に元文二年（1737 年）に来訪し、その時に安藤甚兵衛という家臣が案内をして法界寺に来訪したという記録がある。忠休は幕府でも奏者番や若年寄の要職を歴任した人物である。本堂本尊の阿弥陀如来三尊像は、銘文により 1745 年の制作であることが分かるため、忠休が法界寺に来訪した 1737 年から 9 年後に造立された像となる。法界寺には初代松山藩主と二代藩主の位牌が祀られており、また二代藩主の 50 回忌を天明五年（1785 年）に法界寺で忠休が営んでいることが記録からわかるため、1737 年に来訪した際に法界寺の状態を見た忠休が、阿弥陀如来三尊像を寄進した可能性もあるのではないかと推測される。いずれにしても、忠休の在任中の造立であるため、忠休が法界寺諸尊の造像に何らかの関わりがあったのではないかと考えられる。今後、法界寺の本寺である旧松山藩領内の心光寺の調査などを含め、松山藩酒井家と法界寺の関係について研究を深めていきたい。

次に、観音堂に安置される木造弘法大師坐像についてであるが、現状では近年の塗り替えによって真新しい状態となっているが、大江町教育委員会が以前行った調査では左沢原町に居住していた仏師である林家の四代目、林治郎兵衛の作であるとされている。林治郎兵衛は江戸末から明治、大正にかけて活躍した地元仏師で、大江町教育委員会の調べでは大江町を中心とした山形県内の各所に作例が認められている。また大江町の研究書には記載はされていないが、観音堂の三十三観音像も、研究書や他像の実見観察を踏まえた検討の結果、林治郎兵衛作の可能性が高いと考えられる。

林治郎兵衛は、山形を代表する近代彫刻家である新海竹太郎が青年時代に師事したことが先行研究によって明らかとなっている。今後、初代治作、2 代目文作、3 代目治三郎と続く林家仏師に焦点を当ててその造像活動について研究を進め、近世から近代にかけての山形における仏師、彫刻家の技法的、造形的変遷について探求していきたいと考えている。

書画文化財では掛軸 7 件、額 8 件、写真 9 件、古文書 1 件を調査した。

本堂所蔵の当麻曼荼羅図は、本紙寸法が約 2 m 四方になり、掛けると壁面いっぱいになる大幅である。書画作品は年代も法界寺建立の近世以降と推測されるものの墨書等の記載も少なく、作品の背景も不明である。当麻曼荼羅図も同様に制作時期等は不明だが、表装上部の付箋に銘と花押が記されており、今後の解説が課題となっている。図様や色調の点からは貞享年間以降の作品と考えられ、酒田市の心光寺にも同様の当麻曼荼羅があり、別の作品で木版の当麻曼荼羅図にも同様の作品が確認されていることから、墨刷の当麻曼荼羅図に彩色をしていると考えられる。3 点奉納されている扁額のうち「法界寺」と記された額では延享三年（1746）の年代が記されているものがあり、古文書中にも法界寺で松山藩二代藩主の法要の記録が見られた。この時期は三代藩主酒井忠保が左沢を廻村している時期でもあり、酒井家の菩提寺として深いつながりが作品にも表れていると考えられる。

また、大幅の涅槃図には「明治十六年」の墨書が記され修理跡がみられることから、墨書はその記録であると考えられた。そのため、制作時期は江戸時代に入ると思われ、制作時期は定かではないものの、地域性を感じさせる独特の造形は今後地域の造形美を捉える上で貴重な作例となると思われる。

近代の作例では、裏面に明治二十三年の墨書銘がある武田墨霞筆・幽霊図がある。武田墨霞は地域で活躍

した画家として町史にも記されており、近代に活躍していたことが分かる。幽霊画は三幅あるといい、そのうちの一幅が法界寺の作品であると考えられる。本作は、表装の際に京都の表具師が驚いたという逸話が残るほどの卓抜な描写の幽霊画である。地域の画家や芸術家の調査、再発見を通して、近現代へと続く地域性の側面が浮かび上がることで、作品の保存にとっても有益なものとなると考えられる。

法界寺では近世の酒井家の法要や地域のことについて様々な文書が残されている。写真も同様に大正期からの歴代住職の写真に混じって、本堂が茅葺であった当時の写真や葬列の写真が残るなど、近、現代へと続く貴重な資料となっている。近現代の文書資料の抱える問題には酸性紙問題が挙げられ、江戸時代の和紙を中心とした資料に対して劣化が著しい。資料的な重要度と保存処置の優先度が異なることもあり、保存上の課題となっている。

A. 大江町 文化遺産悉皆調査

七軒・本郷地区第1次社寺調査

岡田 靖・大山龍顕

調査概要

本調査は大江町の文化遺産悉皆調査の一環として、大江町の中でも山間部に位置する七軒地区および本郷地区に点在する社寺を対象に、仏像、絵画を中心とした有形文化財の保存状態調査を含めた悉皆調査と保存環境の観察を目的として実践された。本調査で対象とした社寺は地区の民間信仰に関係する所が多く、左沢などの市街地区とは異なる視点で文化財をとらえる必要があると考えている。また、当該地域は少子高齢化などの原因による過疎化が問題になっており、文化財の保存管理が難しい状況となっている社寺が少なくないのが現状である。そのような地区での文化財保護のために、地域的、歴史的、信仰的な側面から文化財を再認識することで文化財価値の再考察を行い、文化財を管理される地元の方々に対して衰退してしまった信仰とは別の文化的関心を促すことを、今後の課題として取り組んでいきたいと考えている。本調査は前記の目的のための基礎調査として位置づけており、本調査で行った個々の文化財の保存状態や保存環境に関する調査結果をもとに、防災防災管理、温湿度管理、生物被害対策などの保存体制に関する改善策を提示しつつ、総合的な保存活動システムの構築へと発展させていきたいと考えている。

調査場所

①雷神社（貫見）、②山神社（貫見）、③大里神社（貫見）、④熊野神社（貫見）、⑤地藏院（貫見）、⑥雷神社（中の畑）、⑦大日堂（黒森）、⑧八幡神社（黒森）、⑨金毘羅神社（三合田）、⑩観音堂（三合田）、⑪稲荷神社（小新）、⑫羽黒神社薬師大神（顔好）、⑬腰王神社（所部）



① 貫見 雷神社

- 1) 主祭神：雷神。大黒天風の形状。自然石か。
- 2) 他に木造稲荷像、金属製の宝剣、奉納板などが安置。

全体所見：

バイパス沿いの小高い丘の上にあるお堂。昭和六十二年に現在地に移設。お堂はその際に改修が行われたため、保存環境は良好。カメムシがやや多いため注意が必要。



② 貫見 山神社

- 1) 主祭神：木花開耶姫。木造彩色像。江戸時代の制作か。
- 2) 他に木製男根、女性の下着などが奉納されている。
- 3) 奉納板。奉納板は風化が著しく、板表面が落ち込んで墨書きの部



分だけがレリーフ上に浮きあがった状態であった。

全体所見：

バイパス沿いに建つ社。保存環境は良好であるが、蜘蛛の巣、埃などが堆積。

③ 貫見 大里神社

1) 主祭神：大国主命。合掌して座す仏像の形状。木造。像高 42cm。

現状で麻の着物を 2 枚纏っている。木造の社内に安置。

2) 他に神鏡が安置される。

全体所見：

社は小高い丘の上に建つ。保存環境は良好。周辺に墓石、石碑が多く建つ。



④ 貫見 熊野神社

1) 主祭神：石像の神像が二つ。

2) 他に男根、女陰の木彫、奉納札、扁額などがある。

3) 繫馬絵馬

板本着色。堂内壁面に板材上部中央の穴に、袋綴じ用の針金紐で吊るされている。額縁はなく、板地周辺部に欠けがある。馬の胴体部の白色顔料と墨線は剥落が進行している。『大江町の絵馬二』p.10 に掲載があり、現状と比較して大きな変化は見られない。中央部の穴は節の欠落。

全体所見：

丘の上の開けた土地に建つ社。保存環境は良好。お堂扉に穴があり小動物の出入りが懸念される。



⑤ 貫見 地藏院

概要：

貫見地区にある地藏院。土壁による土蔵造りの珍しい堂宇。

1) 木造地藏菩薩立像

像概要：

中央厨子内安置の木造地藏菩薩立像。現状で体幹部に麻の布を幾重も纏い、他にも前掛け、頭巾をかぶるため、面部の一部のみを拝することができる状態である。厨子内に岩座の一部と思われる部材が確認できたが、本像のものであるかは不明。厨子は観音開きで、扉外面に優美な蓮の絵が描かれている。

保存状態：

麻布に覆われているため詳細は不明であるが、面部の状態から推測するに、像全体が朽損している可能性が高い。厨子は埃が著しく堆積し、扉絵の表現も不明瞭となっている。

2) 木造摩利支天立像

像概要：

木造寄木造。表面は泥下地彩色。三面六臂で猪の上に右脚を曲げて左足一本で立脚する摩利支天立像。江戸時代の作か。

保存状態：

現状では埃の堆積が著しい。左第 2 腕手先、右第 3 腕手先、頭頂、持物の一部などを欠失する。表面彩色が所々剥落し、一部剥離が見られる。矧ぎ目に表面彩色の剥離が見られることや欠失部材が剥ぎ目から生じていることなどから、各部材の矧ぎ目の接着材の劣化などの構造的な問題が生じていることが危惧される。



3) 木造蚕神立像

像概要：

木造寄木造。表面は泥下地彩色。頭頂に蛾をのせ、地髪部まだら彫りで、後頭部より髪を垂らす。玉眼を嵌入する。中国風の衣をまとって靴をはき、左腕は屈臂して掌を上に向けて五指を開き、右腕は屈臂して腹前で絹糸を握る。葉を複数枚広げた形状の台座に直立する。葉座下に波座を配し、框座を配す。江戸時代の作か。摩利支天像と表現様式が酷似していることから同時期の作と推測される。

保存状態：

全身に埃が堆積する。一部に彩色層の剥落、剥離が見られる。左腕肘が矧ぎ面に沿って遊離し、表面彩色層だけでろうじて繋がっている状態である。左手に持物を持っていたと推測されるが、現状では亡失している。右手持物の絹糸の一部が脱落している。裳先、天衣先の一部が欠失している。



4) 木造不動明王立像

像概要：

上半身裸形に条帛を纏い、下半身に裙を纏う通形の木造寄木造の不動明王立像。表面は黒色泥下地彩色。江戸時代の作か。

保存状態：

全身に埃が堆積し、一部表面彩色が剥落する。宝剣の先端を欠損し、右足先を矧ぎ面より欠失する。また裙背面の矧ぎ目に割れが見られる。光背が台座より分離し、光背の部材も分解している。また一部部材が欠失している可能性もある。

5) 木造十一面観音立像（三十三観音の内の三十三番）

像概要：

十一面観音立像の木造の小像。泥下地漆箔。箱状台座に「三十三番」と朱墨書きされる。江戸時代の作か。七軒三十三観音の三十三番と思われる。

保存状態：

全体に埃が堆積する。光背の先端を欠失する。

6) 木造阿弥陀如来坐像

像概要：

通形の木造阿弥陀如来坐像の小像。江戸時代の作か。小像ながら造形的に均整のとれた様相を示す。

保存状態：

全体に埃が堆積し自然劣化が見られるが、構造、表面漆箔などは概ね健常。

7) 木造弘法大師坐像

像概要：

通形の弘法大師坐像。木造寄木造。泥下地彩色。玉眼嵌入。体幹部は4枚の板材を箱状に寄せ、背面、側面にさらに板材を矧ぎ寄せる。頭部は差し首とし、面部を別材で矧ぎ寄せる。膝前別材。造形的、構造的な特徴から見て江戸時代後期の制作か。左沢原町林仏師の作の可能性が高い。

保存状態：

表面の埃の堆積が著しい。一部表面彩色の剥落が見られる。矧ぎ目に沿って彩色層に亀裂が見られる。左手の持物（数珠）を亡失する。椅子が一部崩壊し、部材が脱落する。

8) 半鐘

安政五年の銘のある半鐘。山形鋳物佐藤金七、藤原国忠の作。

9) 他に鰐口、奉納板、奉納札、空の厨子、戦争慰霊碑など多数。

10) 門柱には幾何学模様が彫り込まれるが、その彫刻は精緻である。

全体所見：

土蔵造りの珍しいお堂であるが、現状では壁の崩壊や屋根の雨もりが発生し、ブルーシートで応急処置がされている状態である。堂内は雨もりのためもあって湿気が強く、壁にカビが繁殖し、虫、鼠の被害が深刻である。（調査中に本尊厨子内に鼠が生息していたことが確認された）

堂内部には数多くの仏像や奉納品が安置され、像の規模や造形的な質からみて篤い信仰の歴史がうかがえ

る。平成十一年の奉納品が見られるため近年までは信仰が伝えられていたと推測されるが、現在では位牌が倒壊し、埃が著しいことから、管理が行き届いているとはいえない状況である。安置品の文化財価値から考えても、早急な保存環境の改善が望まれる。



⑥ 中の畑 雷神社

概要：

山内の木々に囲まれた斜面に立つ社殿。参道には木製鳥居、山門があり、参道より脇外れに山王神社の小堂がある。

A. 雷神社本殿

社殿の壁に緑の苔が繁殖し、年間を通じて湿気が強い環境であることが推察される。社内も高い湿気を感じ、天井近くにカマドウマのものと思われる糞害が著しい。



1) 主祭神：雷神・風神

像概要：

社殿正面奥の幾重の戸帳に仕切られた祭壇に安置。雷神・風神共に木造寄木造で、矧ぎ寄せ技法は簡素である。



所 見：

構造、造形ともに素朴な造り。雷神の太鼓や小材が脱落して床に転がっている。各矧ぎ目は緩み、やや不安定。表面彩色には自然劣化が見られるが、床に蜂の巣が散乱し、壁にカマドウマの糞害が著しいため、虫による被害が心配される。

2) 雷神絵馬 二面

板本着色。右面は杉板材を三枚用い、左面は一枚板を用いている。下地を塗らず、墨線により下描きをして彩色をしている。渦中から現れる雷神と酒宴に興じる貴人が描かれ、左面には梅を愛でる貴人と港の景色が描かれている。『大江町の絵馬二』p.16。

表面にアクリル板を嵌めており、『大江町の絵馬』に掲載されていた画像と比較しても、大きな変化は見られない。主祭神を祀る祭壇の前面上部に掛けている。

所 見：

堂内には奉納絵馬が本作品の他にも、参詣絵馬や、明治期の街並みを描いた絵馬などがかけられていた。しかし、『大江町の絵馬二』p.10に掲載されている参詣絵馬は所在が確認できなかった。

3) 本作品以外の絵馬は紙を支持体としており、損傷が著しいために損失している可能性がある。他に天保十一年の銘がある鰐口、奉納札数枚がある。

B. 雷神社山門

社殿に向かう斜面の途中にある山門には左右に小部屋があり、向かって左側の小部屋の奥の壇上に仏像などが数体安置されている。

1) 木造弘法大師坐像

像概要：

一尺程度の木造寄木造の通形の弘法大師坐像。表面は泥地彩色。玉眼を嵌入。畳座、椅子に座す。本体が畳座と接着されているため構造の詳細は不明であるが、造形様式的に見て左沢原町林仏師の作の可能性があり。江戸時代後期の作か。

保存状態：

面部が剥ぎ面より遊離し、脱落しかかっている危険な状態。右目外輪を欠損し、玉眼が欠失している。右手先を欠失している。全体に埃が堆積し、表面彩色が一部剥落している。

2) 木造菩薩形立像

像概要：

菩薩形をした木造一木造の小像。舟形光背をおき蓮華座上に立脚し、下に岩座、方形の台座を配する。台座には二十八番と朱墨書きされるため、三十三観音のうちの一体と考えられる。

保存状態：

右手先、光背先端などを欠失し、表面彩色が所々剥落して、保存状態は良好とはいえない。

3) 他に、福助像、大黒天像、だるまなどの近現代の奉納品がおかれ、壁には奉納札が数枚打ちつけられている。また、第二十八番のご詠歌を墨書した額が懸けられている。

C. 山王神社

概要：

本堂のほど近く、山門をくぐった先の参道より外れた場所に建つ比較的新しい小堂。正面奥の祭壇の戸帳が数枚かけられた壇上中央に厨子が設置される。厨子内には武将形の木造山王神像の小像が祀られ、厨子の左右の壇上に木造恵比寿立像その他の奉納品がおかれている。他に奉納板数枚が壁に打ち付けられている。

全体所見：

本殿同様外壁に苔が繁殖し、内部には虫糞汚れが著しい。

⑦ 黒森 大日堂

概要：

小高い丘の上に建つお堂。堂内正面奥の木製格子で仕切られた須弥壇の上に、仏像が複数体安置されている。

1) 本尊 木造大日如来坐像

像概要：

木造寄木造の大日如来坐像。頭頂に如来像を配する。金属製の宝冠、胸飾、臂釧をつける。玉眼嵌入。条帛を纏い、裙をはいて結跏趺坐する。地髪部は彩色で、肉身部、衣部には漆箔を施す。二重円光背を配し、蓮華座上に座す。

保存状態：

保存状態は深刻な状態である。本体では簪、左腕全て、右腕肘より先、左腰三角材、裳先を欠失し、表面の漆箔が一部剥落している。台座光背は完全に崩壊し、現状では上敷茄子の上に本体が座して、その下に下敷茄子、華盤、受座、蓮肉部、返花の順に重ねられている。また各部材の一部を欠失している。

所見：

本像は大柄な厨子内に安置されており、扉内面に陰刻で奉納者や制作者の銘がある。それによれば寛文四年（1664年）に仏師栄西によって造立されたことが分かる。本像は造形的に秀麗で、技量のある正統的な江戸期の仏師の作例であると思われる。厨子と大日如来坐像が一具であるかどうかは現調査では断定できなかったが、一具であれば江戸初期の造像例を伝える貴重な作例であるといえる。

2) 木造弘法大師坐像

像概要：

本尊厨子の向かって左側に安置されている弘法大師坐像。形状は通形で、木造一木造。表面は泥地彩色仕上げとする。畳座、礼盤上に座す。玉眼嵌入。

保存状態：

保存状態は、全体に著しく埃が堆積し、面部顎部分、背中の一部、各矧ぎ面などに彩色層の剥落が見られる。持物を両方とも欠失する。構造的にはいまだ堅固である。

所見：

礼盤裏に墨書があり、天保八年（1838年）に左沢仏師文作によって制作されたことが分かる。文作は江戸末期から明治にかけて4代に渡って活躍した左沢原町仏師林家の二代目で、大江町を中心に多くの作例が残る地元仏師である。

3) これら2像の他に、厨子右脇に異国風な木造菩薩形立像、近年奉納されたと思われる木造十一面千手観音菩薩立像、大黒天像の小像が3体安置されている。



⑧ 黒森 八幡神社

概要：

黒森公民館向いの広場に立つ小堂。室内は管理が行き届き、保存環境は良好である。

堂内正面奥に木造の立派な社殿型厨子がおかれ、前面には幾重にも戸帳がかけられている。他にも大正四年の銘のある奉納絵馬、慶応元年の銘のある掛額、天保十一年の銘のある奉納板などが奉納されている。



1) 俳額・山号額

俳額や山号額など、板地に墨書した作品が多いが、経年劣化により表面の墨が失われると赤外線画像でも判読は難しい。しかし、墨の膠分の影響からか、木材が風化して表面が減退しても、文字が浮き上がって残っている。

2) 戸帳

大江町は江戸時代青苧の産地として栄え、青苧を用いて作った戸帳を神社に奉納する風習があった。戸帳は厨子や祭壇前面に祭神を隠すように掛けられる帳（とばり）で、中の畑や黒森八幡神社では祭壇前に幾重にも重ねられて奉納されている。

中の畑神社に伝わっていた戸帳は江戸初期から明治まで 50 枚近くが見られ、地元の青苧や染織文化を考える上で貴重な資料となっている。今回の調査中の、貫見 大里神社の祭神 木造大国主命坐像に掛けられている麻布は黒森八幡神社の戸帳と非常に酷似している。

⑨ 三合田 金毘羅神社

概要：

バイパスの脇に建つ社殿。社殿内には、空間いっぱいに木造の社殿が設置されている。規模、造りともに壮麗であり、細部にまで荘厳が施されている。社内にはさらに小さな社殿が設置され、内部に主祭神の金毘羅権現を祀っている。



1) 主祭神：木造金毘羅権現立像

木造の金毘羅権現立像の小像。頭部は炎髪、憤怒相。条帛、裙を纏う。背中に翼を付ける。岩座、框座の上に立つ。背面に火炎光背を配する。表面は極彩色で彩られるが、一部に剥落が見られる。持物を両手とも欠失する。

2) 社内には他に文久三年の銘のある神鏡、木造の面 2 枚、木造大黒天像、奉納札などが安置されている。

また、社殿奥には寛政十年の銘のある金毘羅大明神と印刻された石碑が安置されている。

3) 社殿脇には、湯殿山碑、燈籠などの石造物が数基設置されている。

⑩ 三合田 観音堂

概要：

三合田地区の長い石段を登った山の中腹に建つお堂。縁起では元禄三年に建立され、現在のお堂は宝暦十二年（1762 年）に再建されたと伝わる。お堂奥に設置された木造社殿型厨子内に本尊を安置する。

1) 本尊 木造聖観音菩薩立像

像概要：

木造の聖観音菩薩立像。像高一尺ほど。形状は条帛、裙、天衣を纏う通形の聖観音像であるが、左手を開いて正面を向け、右手に蓮華を持つ形式をとる。蓮華座に立ち、下に岩座を配し、背面に舟形光背を配する。構造、造形ともに素朴な造りであり、江戸時代の地元仏師の作かと思われる。



保存状態：

宝冠、天衣の一部、光背の一部などを欠失する。右腕を肘から遊離している。右脚先が遊離している。表面には経年劣化による損傷が見られる。

2) 木造弘法大師坐像

像概要：

堂内厨子脇に安置されている通形の弘法大師坐像。木造寄木造、泥地彩色仕上げ。玉眼嵌入。

保存状態：

右手先を欠失しているが、そのほかは比較的健常。

所見：

構造、造形ともに貫見地藏堂の弘法大師像と酷似しているため、同時代、同作者の作の可能性が高いと思われる。

3) 養蚕絵馬

紙本着色。現在ビニールにより表面を覆われている養蚕絵馬は『大江町の絵馬』p.10に掲載されており、大江町で唯一の養蚕絵馬である。慶応四年（1868年）辰三月十七日の日付がある。本紙には穴が開き、表面に黒いカビのようなものが現れている。

4) 堂内壁画

内陣の上部全面に龍が描かれている。白色の下地の上に彩色されており、素朴な描写。

5) 奉納幕

青苧により織られた幕が奉納されており、戸帳同様に大江町の染織や民俗文化の史料となっている。薄紅色であるのは紅花染めの褪色の可能性がある。複数枚が重なっている。

全体所見：

堂内は山腹に立地するためか湿度が高く、外壁には苔が繁殖し、堂内にも黴が発生している。またカマドウマのものと思われる糞害が著しい。入口は近年アルミサッシが取り付けられているが、現状の状態から見ると、湿度や生物被害の対策を講じる必要があると思われる。

⑪ 小鉾 稻荷神社

概要：

道路沿いに建つ稻荷大明神を祭る小さな堂。堂前に朱色の鳥居が立つ。

堂内部には奥の壇上には朱色に塗った小さな社が設置され、内部に「稻荷大明神神璽」と墨書された木製の箱が社内空間いっぱいに複数個収められている。

他に奉納板数枚が壁に設置されている。また、堂の脇には湯殿山碑などの石碑が複数基設置されている。

所見：

堂内は管理清掃が行き届いているが、今回点検した「稻荷大明神神璽」の箱内にはシミが生息していることが確認されたため、虫の被害が懸念される。

⑫ 顔好 羽黒神社薬師大神

概要：

里山の石段を登った山腹に立つ壮麗な社殿。羽黒宮と薬師宮を合祀している。縁起では大江氏（大江親廣）が黒印をもって六石四斗余の土地を寄進し、徳川治世に朱印に改められ、明治六年に現行の顔好村の村社となったとされる。

1) 主祭神：木造薬師如来立像

本殿壇上の厨子内に安置される木造一木造の薬師如来立像。表面は黒色で、漆による塗膜であると思われる。

地髪部は清涼寺釈迦如来像のような渦巻型で、優美な面相を表わし均整のとれた体躯に鋭利な衣文が陰刻された像である。

両脚は足首から別材とし、柄組みで体幹部と接合され、岩座の上に立脚している。両手先も別材で、左手先に薬壺を持つ。両手とも造形的に見て後補の可能性がある。右手先は現状で矧ぎ面より分離している。

本像は社伝によれば大江親廣に関係する尊像で、建久三年の寒河江入部の際に家臣清野播磨守菅原安親が鎌倉より賜ったご神体であるとされ、鎌倉時代の作と伝えられる。

2) 本殿壇上には、薬師像の他に神鏡2枚、御幣2つなどが祀られてい



る。

3) 天井絵

本殿は格天井で、数十枚の天井絵が嵌めこまれている。拝殿内の花鳥図は画風が共通しており同一の作者のものと思われるが、外陣の天井では個々に銘と落款の入った水墨画など多数の作者により制作され奉納されている。

4) 襖絵

板本着色。右面「高砂」左面に「松に旭日、鶴と亀」という吉祥を表す画題を描いている。板地に下地を施さず描いており落款が押されている。

5) 衝立絵 二面

板本着色。どちらも、松と貴人を描いている。「嘉永五年」の墨書がある衝立には社殿造立に関する記載が見られ、近隣諸村だけでなく、かなり遠方の地名も見られ、信仰の範囲が広がったことを示している。

6) 社殿彫刻

社殿前面の木鼻などの彫刻は、精巧で刀技の冴えた優れた造形を見せる。

7) 富士裾野巻狩絵馬

板本着色。形態は8)、10)と非常によく似ている。板地に下地を塗らず彩色して描いている。板材の中央で縦に割れが出来ている。経年による劣化が進み、汚れや剥落などの損傷が見られる。

8) 七福神絵馬

板本着色。富士裾野巻狩絵馬と同様に板地に下地を塗らず彩色して描いている。墨線を主体としており、彩色部分は多くない。汚れにより確認はしがたいが、図様はよく残っている。

9) 竜女成仏絵馬

板本着色。板材の画面下部5センチほどが欠失している。裏面には「元禄拾貳歳」の日付が記されている。水上に建つ宮殿とその先に魚を頭上に頂く人物を描き、宮殿の門から現れた竜から逃げるように女性の先に船を漕ぐ勢子が描かれている。幻想的な画題だが、法華経第十二提婆達多品に由来する画題「竜女成仏」の画題を描いている。

10) 壺に人物

板本着色。板材が割れており、元の形ではないが、7)、8)と同様の形をしていたと考えられる。



⑬ 所部 腰王神社

概要：

所部地区の石段を登った丘の上に立地する社殿。現在は近隣の寺院の住職によって管理されている。

社内奥の内陣には大小3つの社殿型厨子が設置され、それぞれの厨子に幾重もの戸帳が懸けられている。厨子周辺には腰王信仰に関係する穴のあいた石が複数奉納されている。

1) 欄間絵

板本着色。外陣と内陣の仕切り部に欄間彫刻が嵌めこまれている。

2) 羅生門絵馬

紙本着色。『大江町の絵馬 二』p.23に掲載されている。損傷などもなく良好な状態となっている。

3) 鶴と童子図

紙本着色。『大江町の絵馬』に未収録の作品で、画面右上から左へと流れる川の前で二童子が鶴に水を飲ませている。画面左下の余白に「奉納 八代 松田市太郎」の銘があり、印が押されている。

4) 参詣絵馬

紙本着色。『大江町の絵馬 二』p.15に掲載されている。損傷などの進行は確認されなかった。

5) 孟宗絵馬

紙本着色。『大江町の絵馬 二』p.29に掲載されている。余白に「大正



十三年八月廿日 松田国吉」の記載がある。

6) 旭日絵馬

波上に昇る旭日を描いている。『大江町の絵馬』には掲載されていない。「昭和三十一年九月十五日」の日付があり、「龍峰（印）」という銘がある。

奉納絵馬は現在掛けられているもの以外にも祭壇脇に置かれているものなど、複数確認された。

7) 奉納札

文政四年（1821 年）の銘のある「腰王諦子本地」の修理に関する奉納

全体所見：

室内は湿気が高く、室内天井板に水染みが見られることから、雨漏りが発生している可能性が懸念される。また社内天井角には虫の巣があった痕跡が見られ、虫による被害が懸念される。

七軒・本郷地区第 1 次社寺悉皆調査まとめ

七軒・本郷地区の社寺調査は、大江町教育委員会が昭和五十三年～平成十二年に行った有形文化財調査（調査成果は『大江町の佛像』、『大江町の絵馬』、『大江町の仏師』などに掲載されている）によって把握されている文化財の所在確認と、文化財保存修復の視点から見た保存環境及び損傷状態の確認を目的として行われた。大江町の山間部に位置する七軒・本郷地区には、古くは鎌倉時代、室町時代頃の創立縁起をもつ多くの社寺が点在しているが、今回の調査ではその中の管理者が在駐していない社寺 13 軒の調査を行った。

調査の対象とした文化財は仏像、書画（絵馬、俳額を含む）などで、主に損傷状態と保存環境の点検を行った。13 件の社寺にはそのほとんどに数体の仏像と絵馬が安置されているが、一部の社寺を除いて保存環境はあまり良い状態とはいえない現状であった。主に山間部に位置する社寺は鬱蒼とした森林に囲まれた環境にあり、体感的にはあるが湿度が高い状態にあると感じられた。そのような環境下では、冬季を除く温暖な気候の季節には虫、黴、藻類などが発生しやすい条件がそろそろ。また山形県内でも積雪量が多いことで知られる大江町山間部では、長い冬の間の大半が雪に閉ざされた環境となることから、室内の相対湿度はかなり高湿の状態となることが予測される。今回調査を実践した 13 軒の内、数軒に管理が行き届いていない現状が確認され、高湿度の環境の中で室内の風通しや清掃などが滞ると文化財に対する様々な問題が発生する。

以上のような管理不足となっている原因は、管理されていた地域社会が少子高齢化や地場産業の停滞などの要因によって過疎化したことが大きいと思われる。また、本来他の地域の末寺であった寺院が全般的な宗教衰退のために本寺との関係性が気弱となったり、土着的な民間信仰によって成立していた社寺の信仰の衰退なども、管理の問題に大きく関係していると思われる。

管理が行き届かなくなった寺院では、人が居住しなくなった住居がそうであるように、建物や所蔵品の荒廃が加速度的に進行する。扉を締め切られたことによって湿気がたまり、人気がないことによって虫が繁殖したり小動物が住みついたりすることとなり、文化財は急速に劣化、損傷を受けていく。実際に、20～30 年ほど前に大江町教育委員会によって調査された記録資料と平成二十二年現在の状況を比べた際、作品によっては仏像文化財、書画文化財ともに部材の脱落、彩色の剥離・剥落、虫喰い、黴被害などの損傷が著しく進行しているケースが見受けられた。これらの問題は、本研究の中でも重要課題として取り組むべき問題であると認識している。信仰体系の衰退は我々文化財保存修復家の努力で救えるものではないため、本研究のタイトルにも掲げる地域文化力の向上によって、地域文化遺産の保護に取り組んでいきたいと考えている。来年度以降、以上の問題に対し、具体的な環境保全活動や修復活動も含めた地域文化遺産への関心喚起につながる研究活動に着手していきたい。

また今回調査をした社寺は、西川町の湯殿山へとつながる参詣路として築かれた道智道や、寒河江市や西川町に本寺をもつ寺院の末寺、または大江氏に関係する社寺などが確認された。それらは、本研究事業のテーマ 1 として取り組んでいる文化財価値の再発見や新たな価値の創出に関して、今後他の地域との関係性を含めて歴史的な観点による調査研究を進めることで七軒・本郷地区の地域文化遺産価値の底上げを図り、その関心や保護の意義を喚起していきたいと考えている。また、同地区の江戸時代頃の特産品であった青芋などの研究を進め、現代の生活にも直結する活動にも同時に取り組むことで、地域文化力の向上に努めたいと考えている。

B. 西川町 文化遺産悉皆調査

吉祥院文化財悉皆調査

長坂一郎・半田正博・岡田 靖・大山龍顕

吉祥院調査概要

光龍山吉祥院は、西川町の現存する寺院の中では最も古い文明年間（1469年～1486年）に、寒河江の法泉寺二世邑山珠忠和尚により開山された曹洞宗の寺院である。吉祥院のある西川町吉川は大江氏が下向した際に最初に居城を置いた地であり、本寺は大江氏との繋がりが深い寺院である。堂宇は中興の祖とされる五世鉄山心牛和尚により享保十八年（1733年）に再建されるが、宝暦九年（1759年）に焼失し、現在の堂宇は六世和尚によって再建されたものである。

本堂の須弥壇には本尊の木造釈迦如来坐像を中央に木造十一面観音菩薩坐像と木造地藏菩薩立像の3体がまつられている。その地藏菩薩立像の台座には、発願者である大江氏の名前や造像の経緯とともに像の輸送ルートが記される珍しい銘文が残されており、本寺の歴史を証明するものとして意味深いものである。また、本堂内には安中坊からの預かり品である大江廣元、親廣、多田仁綱の肖像彫刻が安置されている。他にも、地藏菩薩像や観音像が数体ずつ安置され、吉川地区での地藏信仰や観音信仰を示す遺品として興味深い。

書画では、町の指定文化財「西国三拾三體観世音菩薩」笹島月山筆が保管されており、本堂内の奥の間には「悲母観音」を始め「最上三十三観音菩薩」を描いた額や、四国八十八観音巡礼の記念札を貼り集めた奉納額、巡礼絵馬などの作品が掛けられている。他にも大幅の「唐獅子図」や「菊図」、文字額などがあり、須弥壇上部の欄間部分には水墨の「双竜図」が設置されている。

吉祥院 文化財悉皆調査リスト

仏像文化財			書画文化財		
	名 称	安置場所		名 称	保管場所
1	木造釈迦如来坐像	本堂	1	西国三拾三體観世音菩薩	本堂
2	木造十一面観音菩薩坐像	本堂	2	悲母観音	本堂
3	木造地藏菩薩立像（1）	本堂	3	唐獅子図	本堂
4	木造大江廣元坐像	本堂	4	俳額	本堂
5	木造大江親廣坐像	本堂	5	額	本堂
6	木造多田仁綱坐像	本堂	6	四国八十八観世音菩薩	本堂
7	木造千手観音菩薩立像	本堂	7	最上三十三観音御詠歌	本堂
8	木造地藏菩薩立像（2）	本堂	8	摩訶般若波羅蜜多心經	本堂
9	木造僧形立像	本堂	9	俳額	本堂
10	木造地藏菩薩半跏像（1）	本堂	10	菊図	本堂
11	木造地藏菩薩半跏像（2）	本堂	11	六道絵	本堂
12	木造地藏菩薩立像（3）	本堂	12	涅槃図	本堂
13	木造僧形坐像	本堂	13	釈迦三尊十六善神像	本堂
14	木造聖観音菩薩立像	本堂	14	巡礼絵馬	本堂
15	木造地藏菩薩半跏像（3）	本堂	15	最上三十三観音菩薩	本堂
16	木造千手観音菩薩立像	本堂	16	四字墨書	本堂
17	木造十一面観音菩薩立像	本堂	17	五字墨書	本堂
18	木造地藏菩薩立像（4）	本堂	18	三字墨書（山号）	本堂
19	木造地藏菩薩立像（5）	本堂	19	巡礼絵馬	本堂
20	木造地藏菩薩立像（6）	本堂	20	双竜図	本堂
21	木造地藏菩薩立像（7）	本堂	21	いろは歌屏風	本堂
22	木造地藏菩薩立像（8）	本堂	22	飲中八仙歌（左）・俳画（右）	本堂
23	木造菩薩立像	本堂	23	巡礼絵馬	本堂
24	木造開山・邑山珠忠坐像	位牌堂	24	他の収蔵作品	本堂

①木造釈迦如来坐像

法 量(cm)

像高	29.2	耳張	7.2	腹奥	10.4	肘張(納衣上)	18.9
面長	5.7	面奥	7.7	坐奥	16.5	膝張	13.9
面幅	6.6	胸奥(右)	8.4	裳先出	4.9	膝高(左)	4.6

形 状

肉髻、螺髪、肉髻珠（水晶、赤）。髪際波形、白毫（水晶）、玉眼、耳朶貫通。三道。納衣、覆肩衣。納衣は左肩を覆い右腋に回り、左肩に回り、右肩に少しかかる。法界定印を結ぶ。裙を着け、右足を上にして、結跏趺坐する。台座は上から、蓮台、敷茄子、反花、框座（六方隈入で、背面部を直裁し、四方隈入となる）。各漆箔。

品質・構造

ヒノキ材か。全面漆箔の為、構造は不明。両脚部（前膊半ばを含み）矧付。現状では台座との接合が堅固。

保存状態

表面に埃汚れが付着し金箔の多くが剥落しているものの構造的には堅牢である。保存状態は比較的良好であると言える。

所 見

現状の十一面観音坐像を納める厨子は像と厨子に寸法の不一致が見られるため一具ではない可能性が高い。そして、現在十一面観音坐像を納める厨子は、釈迦如来坐像の台座底面と厨子内の跡が一致するため、一具であると考えられる。したがって釈迦如来坐像の制作年代は、厨子銘の「享保六年」（1722年）と考えられる。

銘 文（現十一面観音坐像の厨子銘）

【厨子右裏刻銘】

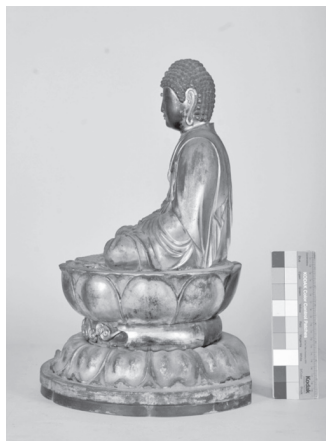
【厨子左側刻銘】

【厨子底板裏側墨書】

「施主 松田長兵衛」「為 雲頭了断 宝岳妙珠 菩提也」「當寺四世雲清代 享保六年 子八月吉日」



正面



左側面



厨子底面

②木造十一面観音菩薩坐像

法 量(cm)

頂-顎	15.1	耳張	11.6	腹奥(肉身部)	18.5	肘張	29.0
面長	10.9	面奥	11.0	坐奥	27.1	膝張	36.4
面幅	9.0	胸奥(左)	14.0	裳先出	6.2	膝高(左)	7.8

形 状

菩薩形坐像。髻欠失（柄穴はなく、貼付するか）。地髪部毛筋彫り。天冠台彫出。地髪中央部に径1.5cmの柄穴を3か所、天冠台内側に7か所穿つ。柄穴頭内部に貫通する。（柄穴は後補。したがって当初は頭頂面のない聖観音像か）。髪際毛筋彫り。鬢髪耳に渡る。白毫（欠失）。玉眼嵌入。三道彫出。天衣は両肩を覆い、左側は腋を通して右手首にかかり、外側に垂れる。右側は腋を通り、両脚部前面を渡り、左手首にかかり、外側に垂れる。条帛を付ける。裙、腰布（2枚）を付け、結跏趺坐する。左手屈臂して前に出し、五指を丸め持物をとる。右手屈臂して前に出し、掌を上に向けて膝上で五指を伸ばす。

品質・構造

木造。寄木造。ヒノキ材か。現状古色。頭部は面相部および耳半ばを通る線で矧ぎ付け。後頭部は左右二材矧ぎ付け。差し首。体部は前後三材矧ぎ付け。内刳りを施す。左手は肩、手首矧ぎ付け。右手は肩、手首矧ぎ付け。両手先矧ぎ付け。両脚部矧ぎ付け。裳先矧ぎ付け。天衣遊離部矧ぎ付け。胡粉下地。漆箔。頭髪は群青彩。現状はその上に漆箔（後補）。頭部の頭頂面柄穴は後補（現状は頭部内に貫き、木片が頭部内に落ちている）。後頭部左右材の矧ぎ目に小材を挟む（後補）。蓮台は五材製（中央四角板に周囲に四材を矧ぎ付ける）。

保存状態

頭頂の髻、化仏の全てを欠失する。（頭頂に髻を矧ぎ付けた痕跡はなく、化仏差し込み穴も比較的新しい造作であるため、後世に十一面観音像に改変された可能性も考えられる）

表面の金箔がほとんど剥落し、下地の漆塗膜が露出している。

所 見

天冠台を波状とし、髪際正面や後頭部の髪房を複雑にする点、天衣を両肩で大きく撓める所、裙の折り返し部の両端部の撓め方を大きくする所など、いわゆる宋風彫刻の作風を見せる。ただし、①衣が厚くなる所、②胸の肉われを表さない所、③毛筋が細く見開かない所、④毛筋彫りの形が鈍い所、⑤両外側に垂れる天衣の端の形が過剰になる所などの特徴から、制作は江戸時代と推測される。



正面



背面



上面



底面

③木造地藏菩薩立像（1）

法 量(cm)

像高	56.1	面幅	6.9	腹奥(衣上)	10.3	台座高	27.0
頂-顎	10.6	耳張	8.0	肘張	18.7	幅(下框座)	38.5
面奥	8.1	胸奥(右)	8.8	裾張	14.3	奥行(下框座)	27.9

形 状

円頂。白毫相。玉眼。耳朵不貫。三道。下着。衲衣。覆肩衣をつける。左手を屈臂して前に出し、蓮台付宝珠をとる。右手を屈臂し、やや垂下して前に出し、五指をまとめて錫杖をとる。右足をやや前に出し、裙をつけて立つ。台座は、蓮台、反花、六角障屏付受け座、天板底板を持つ六角敷茄子、底板付き下框座からなる。

品質・構造

ヒノキ。寄木造。玉眼。彩色。頭部は耳後ろおよび面相部で矧付けの三材製。内刳を施し、玉眼を嵌入する。差し首。体部は肩上および胸上部で矧付けの三材製。内刳を施す。左手は肩から裾先を含んで矧付。前膊部矧付。手先別材矧付。右手は肩以下矧付。手足矧付。両足先各矧付。光背は輪光部が四材からなり、柱部は一材。

保存状態

全身に埃汚れが付着するが、構造、表面塗膜ともに保存状態は良好。

所 見

銘文から造像の詳細な由来が分かる稀有な例である。銘によれば宝永五年（1708年）に、金仲山（吉川安中坊の意）理教院（廣隆の別称）の依頼により、京寺町仏師光益によって造像され、羽黒山より月山を越えて岩根沢へと至り、吉祥院に納められたとある。これは、吉祥院と安中坊（大江氏）との密接な繋がりを証明する銘である。

銘 文

台座背面に朱漆で銘記

「宝永五子八月六日 勸化祥山丹瑞 講助力理教院」

「地藏講人衆 金仲山 理教院母 理教院内

大沢 半四郎母 “壹兵工母 “朝右エ門内 小原 吉兵へ母 “彦作母 “七藏内 以上九人也」

台座底面銘記

「開眼導□（師？） 金仲山一雲院普感 勸化 当寺五世 丹瑞 講助力勸化 金仲山理教院祐賢

大沢 金仲山 理教院母 同 妻 同大沢 半四郎母 同所 喜三郎母 朝右エ門母

造金□（弍？）両 仏師京寺町通下御霊前 法橋 光益 奉彫刻

宝永四年六月 理教院 祐賢上京之刻命仏軀誂訖 同五年八月朔日ニ 京□庄内羽黒山御預り

月山越ニ岩根沢□金仲山へ 御下着 同八月 十三日ニ 吉祥院眞仏者也」



正面



背面



左側面

④木造大江廣元坐像・木造大江親廣坐像・木造多田仁綱坐像

法 量(cm)（廣元像。他の2体も概ね近似値）

像高	15.2	袖張	17.3	足先奥	9.0	肘張	9.8	腹奥	5.2
----	------	----	------	-----	-----	----	-----	----	-----

形 状（廣元像）

冠をつける（巾子冠か）。彫眼、ひげ、額にしわ。束帯姿。左手は袖にくるみ、右手は腹前で笏（欠失）をとる。両足裏を合わせて前に出し座す。腹部に「(毛利紋)」。左袖と膝の間から後面に通ずる孔（太刀を

入れるか)。

品質・構造（廣元像）

ヒノキ材。頭体一材、丸彫り。彫眼。左手先、右肘先各別材矧付け。胄左袖別材矧付け。右大腿部先別材矧付け。両脚部一材矧付け。古色。厨子内部は漆箔。外面黒漆塗り。扉内側に毛利紋。

保存状態（廣元像）

鼻頭、衣文の隆起部などに欠損が見られ、両足先のつま先部分を割損する。背面左腰部に小径の穴があく。

所 見

本像は大江家にて保管されていた像であり、現在吉祥院で預かっている状態である。江戸時代の作か。

銘 文

各像の像背面に陰刻の銘

「大江廣元 法名覚阿 法師ノ像」「大江親廣 法名蓮阿 武者ノ像」「多田仁綱 法名源宥 法師ノ像」



木造大江廣元坐像 正面



木造大江廣元坐像 背面



木造大江廣元坐像 厨子入り



木造大江親廣坐像 正面



木造大江親廣坐像 背面



木造大江親廣坐像 厨子入り



木造多田仁綱坐像 正面



木造多田仁綱坐像 左側面



木造多田仁綱坐像 厨子入り

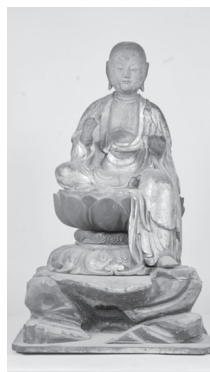
⑤吉祥院安置のその他の諸尊



木造地藏菩薩立像
像高：62.1



木造地藏菩薩立像
像高：74.6



木造地藏菩薩半跏像
座高：38.2



木造地藏菩薩半跏像
座高：32.4



木造地藏菩薩立像
像高：25.5



木造地藏菩薩半跏像
座高：15.6



木造地藏菩薩立像
像高：12.5



木造地藏菩薩立像
像高：19.0



木造地藏菩薩立像
像高：30.3



木造地藏菩薩立像
像高：13.5



木造地藏菩薩立像
像高：13.5



木造千手観音菩薩立像
像高：36.5



木造聖観音菩薩立像
像高：15.5



木造十一面観音菩薩立像
像高：19.3



木造菩薩立像
像高：21.0



木造千手観音菩薩立像
像高：25.4



木造僧形坐像
像高：50.5



木造邑山珠忠坐像
像高：37.4



開山邑山珠忠位牌
全高：49.0

⑥西国三拾三體觀世音菩薩（西川町指定文化財）

寸 法 (cm)

本 紙	縦	174.1	横	87.4
全 体	縦	243.0	横	103.8

形態・材質技法

掛軸装三段仏画表具 絹本着色

内 箱 印籠蓋、桐材、中に添書有り

外 箱 落し蓋、塗箱

箱書きあり。「西国 三拾三體觀世音菩薩」

作 者 笹島月山

箱内部に奉納時の添書あり。

「奉納 十代笹島長右衛門」

「奉納

笹島月山筆

西国三十三觀音之図一軸

右

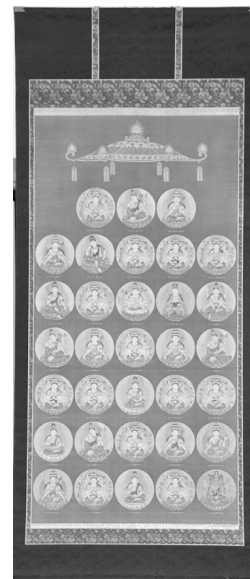
祖先累代菩提之為

昭和二十七年十一月一日

十代笹島長右衛門

吉祥院

十六世青山穿石殿」



保存状態

経年の劣化による浮き、折れ、擦れといった損傷が見られる。本紙中央に紙継ぎによる折れがある。肉身部の胡粉は全体的に浮きが見られる。本紙中央横に紙継ぎによる折れ有。

⑦悲母觀音

寸 法 (cm)

本 紙	縦	152.1	横	87.5
全 体	縦	231.2	横	95.0

形態・材質技法

掛軸装 三段表具 絹本着色

裏面に墨書あり。

「大正元年孟蘭盆月 現住青山迂禪代」

保存状態

画面表面の汚れ、上部に擦れた跡があり、裏打紙の継ぎ跡が画面両端に上下に見られる。損傷や汚れは表具下部に集中しており、右隅に巻癖による汚れ、左下には裏打紙からの浮きが見られる。軸棒の裏側には破れた箇所も見られる。



⑧巡礼絵馬

寸 法 (cm)

本 紙	縦	34.0	横	50.1
全 体	縦	39.2	横	55.2

形態・材質技法

額装 紙本着色

縁 檜内面取り 厚み 2.9cm 見付 2.7cm



画面に記載あり。

*□部分は判読不能。

画面右下「□□堂□□七十一歳画」

画面上部の短冊内「伊藤じん 安部ふみ 工藤とめ 西村山郡

大字よし賀和 最上三十三所霊場

奉順禮南無大悲観世音菩薩為

奉納大正十三年旧十一月」

右端の巡礼者の持つ笠「最上順禮 大字吉川 川土居村 同行三人」

中央の巡礼者の笠（手前から右回り）「最上順禮 迷或三界城 悟故十方空 同行三人吉川村 本来無東北 伺慮有南北」

保存状態

本紙全体が茶色く変色している。経年による劣化と思われる。本紙破損箇所は捲れあがっている。

⑨巡礼絵馬

寸 法(cm)

本 紙	縦	80.5	横	180.8
全 体	縦	91.0	横	191.6



形態・材質技法

額装 紙本着色

縁 黒縁前丸 厚み 3.1cm、見付 5.5cm

画面に墨書あり。

画面右端に「明治三十九丙午年 三月如意珠日」。

十五人目と最後尾の巡礼者の背中に

「天下泰平 奉順最上参拾参所南無大悲観世音

日月清明同行五十七人

西村山郡川□居村大字吉川

□□□□」(人名判読できず)

画面左下にも、先導(石崎真禅)世話人3名(松田すき、荒木きく、伊藤□う)講中54名の名が記載されている。

保存状態

画面左下に虫のなめた跡がある。画面中央には補彩の跡や、本紙破損の修理跡が見られる。「奉納」の文字は左〜右へと記されており、あとで記した可能性がある。部分的には剥落も見られる。

⑩最上三十三観音菩薩

寸 法(cm)

本 紙	縦	119.2	横	133.3
全 体	縦	125.2	横	145.0

形態・材質技法

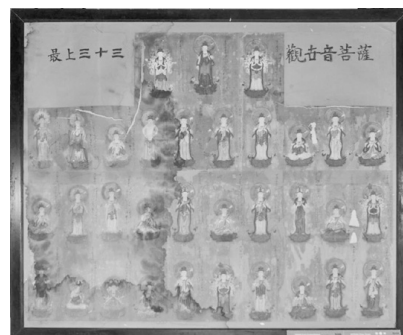
額装 紙本着色

縁 前丸 黒漆内面取り 厚み 3.8cm 見付 7 cm

保存状態

本紙全体にシミと汚れが広がっており著しく目立つ。本紙も茶褐色になっており変色している。左上部には大きな破損がある。

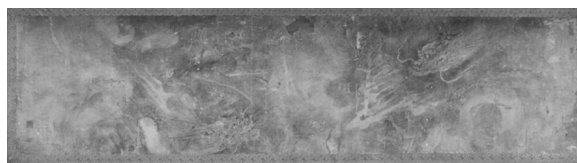
破損した本紙の下には文書が下張り文書が確認できる。骨にも変形が出ており、裏面にも大きな破損がある。



⑪双竜図

寸 法 (cm)

本 紙	縦	50.7	横	211.5
全 体	縦	57.8	横	219.0



形態・材質技法

障壁画 紙本墨画

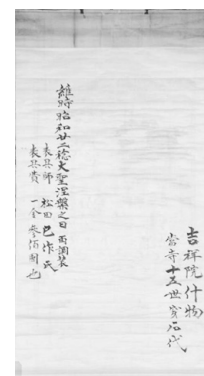
保存状態

須弥壇上部の欄間部分に設置されていた。表面にビニールが掛けられて保護されていた。しかし、固定の為のマスキングの糊が変質し、縁に付着していた。本紙は全体に茶色く変色している。部分的な欠損や水シミは全体に渡って点在している。修理跡がある。印があるが判読不明。

⑫仏涅槃図

寸 法 (cm)

本 紙	縦	132.4	横	94.8
全 体	縦	229.0	横	121.9



形態・材質技法

掛軸装 三段仏画表具 紙本着色

裏面に墨書あり。

「吉祥院什物 當寺十五世 穿石代

維持昭和廿二稔大聖涅槃之日 再調装

表具師 松田 巳作 氏

表具費 一金 三伯圓也」

⑬釈迦三尊十六善神像

寸 法 (cm)

本 紙	縦	116.6	横	58.5
全 体	縦	190.0	横	73.3



形態・材質技法

掛軸装 仏二段表具 絹本着色

画面右下に銘と落款あり。

「明治丁酉春七十歳玉斎謹画（白文印）」

備 考

「明治丁酉」は明治四十年（1908）。「玉斎」は他の作品にも見られる。

⑭俳額

寸 法 (cm)

本 紙	縦	46.0	横	160.3
全 体	縦	64.3	横	181.0



形態・材質技法

額装 絹本着色 墨書

縁 前丸 黒だが面取りは朱 厚み 3.8cm 見付 7 cm

銘と落款あり。

「安政 六年」「玉斎（朱文印）」がある。

吉祥院文化財悉皆調査 まとめ

吉祥院文化財調査では、仏像文化財、書画文化財を中心に悉皆調査を行った。その結果を以下にまとめる。

まず仏像文化財では、本堂須弥壇上に本尊木造釈迦如来坐像、木造菩薩形坐像、木造地藏菩薩立像が安置されている。

釈迦如来坐像は、現在釈迦像を納める厨子が現在菩薩形立像を収める厨子と入れ替わっていることが本調査によって判明し、厨子の墨書銘によれば享保六年（1722年）に造立されたことがわかった。一方の釈迦如来坐像の厨子は、寸法的に菩薩形坐像が収まる大きさではないため、厨子に書かれた墨書銘は菩薩像の造立を示すものではなかった。また、寺内に現釈迦像厨子に適当な大きさの尊像が見当たらなかった。そのため、菩薩形坐像の制作年代を証明する銘はないこととなったが、造形様式的に見て江戸時代に造立されたものと推測した。

地藏菩薩立像は調査報告で示したように、台座に大量の墨書による銘文が残されている。銘文には発願者（理教院）、制作者（法橋光益）、制作年代（宝永五年（1708年））とともに、本像造像から吉祥院にいたるまでの輸送経路が記載されていた。これらの銘文の内容は資料的な価値が高く、本像の造形的秀逸さを含めて文化財的価値が極めて高い像であると言える。また、本堂右隅にまつられる木造千手観音菩薩立像の厨子にも、吉祥院の名が明記される銘文が見られた。このような所蔵する寺院の名称が明記されている仏像は、動産である仏像が造立当初から寺院に収められている事実を証明するものとして、今後歴史的検証を行っていく際の基準作例として位置付けていきたいと考える。

また吉祥院には、大江氏の末裔が所蔵されている大江廣元、大江親廣、多田仁綱の3体の肖像彫刻が委託されている。この3体は造形様式的に見て江戸時代の制作と思われるが、大江氏の肖像を伝える貴重な文化財であると言える。

以上のように、文明年間（1469年～1486年）に寒河江の法泉寺の末寺として開山された吉祥院は、室町時代以降の大江氏と深い関係があることが仏像文化財から証明された。しかし、大江氏本家は戦国時代に最上義光によって滅ぼされたため、江戸時代に造像された吉祥院の諸仏は辛うじて命脈を保った大江氏の末裔によって、先祖の菩提を弔うためなどの目的で奉納されたものであると推測される。また、同寺には一カ寺に所蔵されるには特筆して数の多い12体もの地藏菩薩像が安置されており、先の須弥壇上の地藏菩薩立像に地藏講衆の銘があることから、江戸年間に大江氏もしくは吉川地区において地藏信仰が盛んであったことが感じ取れる。

今後、江戸時代の大江氏の活動や吉川地区での信仰形態について、他の寺院の調査を踏まえてより深い調査研究活動を進めていきたい。

続いて書画文化財では、掛軸5件、額15件、屏風9件、障壁画1件、絵馬3件を調査した。

作品年代は比較的新しく、詳細に作品の変遷を辿れている訳ではないが、巡礼絵馬から最上三十三観音巡礼に関する作品など、近世末から近、現代へと、寺院の変遷と共に地域の信仰の移り変わりを表した作品が所蔵されている。

笹島月山筆・西国三十三體観世音菩薩は西川町指定文化財となっており、地元で活躍していた笹島月山が明治四十年に描いている。以前は実際に法要の際に掛けていた事もあるということで、信仰と作品との密接さが最近まで続いていることが伺い知れる。また、作者は分からないものの大幅の悲母観音が所蔵されており、裏面には奉納された大正元年の年号が記されている。作者は明らかではないものの、年代や状況から笹島月山の可能性が高い。悲母観音は狩野芳崖の重要文化財が下敷きにある事は間違いのないもののやや改変された図様となっている。しかし、ほぼ同様の構図の作品が東京の寺院にも所蔵されている事が確認されている。一見して筆致等の描写が異なる事から別々の作者であると考えられるが、山形の笹島月山と東京の寺院を結ぶ接点は東京美術学校や当時の流行にあると推測する。笹島月山の作品は相当数が町内にあるといい、以前町内で展示を行った事もあるというものの、地元でもいまだ知られていない事が多く、今後調査が進み実態が明らかになる事で、地元での笹島月山の活動が明らかになるだけでなく、地域の作家活動から当時の画家の動向の一端を知るという点からも興味深い作品となっている。

西国三十三體観世音菩薩、悲母観音共に、現在損傷が目立ち始めているため、作品を修復する機会へと繋ぐことも念頭に置きつつ、その作品背景と地域との関わりの調査を深め、調査研究の成果を地域の方と共有することで地域文化遺産として受け継いでいけるように活動を行うことが重要と考えている

他に見られた作家名としては、「玉齊」銘の作品が3点確認された。これは笹島月山とは別の作家と考え

られ、釈迦三尊十六善神像には「明治丁酉春 七十歳 玉齊謹画（印）」とある。額や龍の障壁画など、地域で活躍していた事が伺えるものの、詳細は未だ不明で、今後の課題となっている。

吉祥院には他にも絵馬や俳額が多く奉納されている。多くの作品で損傷が見られるものの、それら全てが修復されることはむずかしい。折れや本紙が裏打ち紙から剥離するなど、長期的には作品を本格的に解体して修復する事は必要と思われるが、当面は現状から悪化しないような保存管理方法が必要となっている。

保存環境は、ご住職が本堂と棟続きの庫裡にお住いになっていることから、清掃、管理ともに行き届いているため、安置されている文化財の状態に大きな問題はないと言える。しかし、環境の良さによって損傷が最小限に抑えられているとはいえ、経年劣化によって生じた表面彩色の剥落などが見られる。今後、必要に応じて修復処置などを講じることも視野に入れて保存活動を行っていきたい。

大聖寺（亀岡文殊）文化財悉皆調査

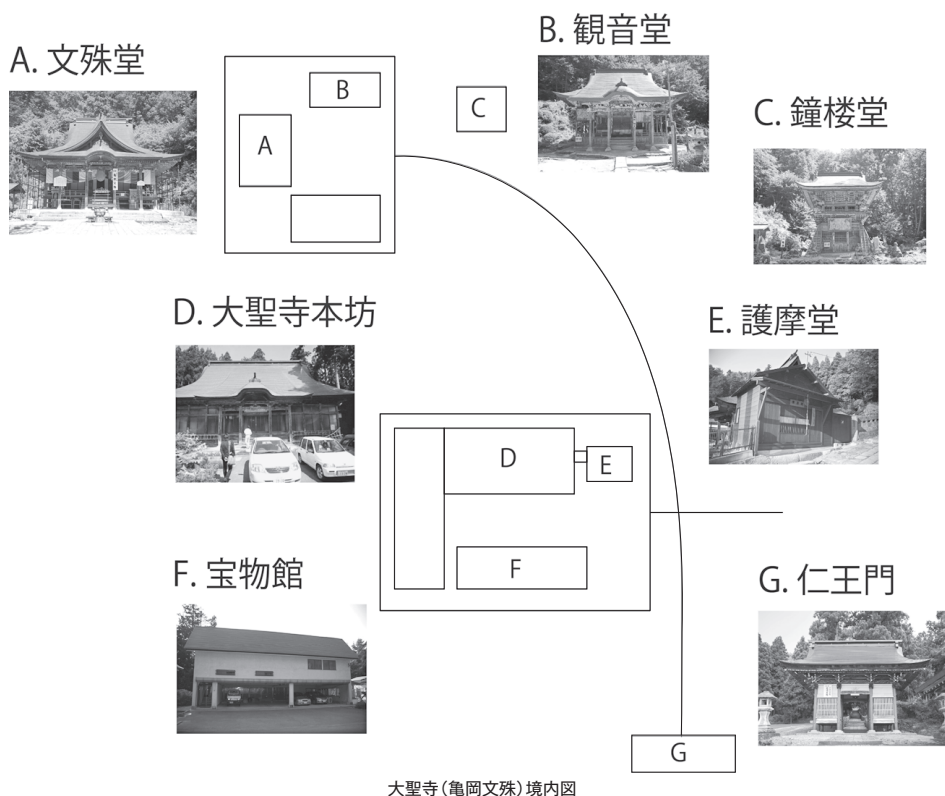
長坂一郎・半田正博・岡田 靖・大山龍顕

大聖寺調査概要

大聖寺は真言宗智山派の寺院で、大同二年（807年）に徳一上人によって開山されたと伝わる古刹である。大聖寺は通称亀岡文殊と呼ばれ、日本三文殊の一つとして厚い信仰を集めている。近世には徳川幕府より毎年御朱印百石を受けて隆盛を極め、また皇室からの崇敬も厚く孝明天皇からの御撫物を賜っている。広い境内には堂宇が林立し、数多くの寺宝が伝わっている。今回の調査では、亀岡文殊境内に点在する文殊堂、観音堂、鐘楼堂、大聖寺本坊、護摩堂、宝物館、仁王門に安置される仏像、書画、絵馬、工芸品等の悉皆調査を行った。

文殊堂は大正三年に建築家伊東忠太によって設計されたもので、室内には秘仏本尊文殊菩薩騎獅子像がまつられ、多くの参拝者の崇敬を集めている。文殊堂の横に立つ観音堂と参道わきに立つ鐘楼堂は、享保年間（1716年～1736年）に待定坊の発願によって建立されたとされ、観音堂には同時期に造立されたとされる木造阿弥陀如来立像と西国三十三観音像、木造弘法大師坐像がまつられ、堂の周囲には奉納絵馬がまつられている。別当である大聖寺本坊には、県指定文化財の木造聖観音菩薩立像や同時代の鎌倉時代の作と思われる木造如来形立像2体が安置されている。他にも銅造歓喜天像、仏画などが祀られ、大聖寺の歴史の深さを今に伝えている。隣接する護摩堂には不動明王像他の諸仏が所狭と祀られている。そのうちの本尊木造不動明王坐像は、江戸期の塗り替えがされているものの、制作は平安期であることが確認された。また同堂の木造不動明王立像は、慶派による鎌倉時代の作であると推測された。本坊向かいの宝物館には諸仏像、書画、工芸品など、天皇御撫物や町の指定品の短冊帳、御朱印状を含む大聖寺の宝物類が収められている。

また本調査では上記の文化財調査と並行して、宝物館、本坊、護摩堂の各所に温湿度データロガを設置することで保存環境調査を実践した。今後、今回の調査で確認した膨大な量の文化財を、大聖寺作品群として歴史的、宗教学的、郷土史的な観点から多角的に研究を推進するとともに、保存環境調査を踏まえた保存体制の改善や修復処置も視野に入れた維持管理方法の構築を課題として研究を進めていきたいと考えている。



仏像および工芸品文化財調査リスト

	名称	安置場所		名称	安置場所
1	木造文殊菩薩騎獅子像	文殊堂	51	木造弁財天坐像	護摩堂
2	虚空蔵菩薩・大日如来・普賢菩薩	文殊堂	52	木造獅子木鼻二頭（阿形）	護摩堂
3	木造阿弥陀如来立像	観音堂	53	木造獅子木鼻（吽形）	護摩堂
4	木造弘法大師坐像	観音堂	54	木造獅子座	宝物館
5	木造三十三観音像	観音堂	55	木造僧形立像	宝物館
6	木造菩薩形坐像（1）	鐘楼	56	木造獅子一對	宝物館
7	木造菩薩形坐像（2）	鐘	57	木造僧形坐像（1）	宝物館
8	木造僧形像頭部	鐘楼	58	陶板弁財天曼荼羅図（手印版板）	宝物館
9	木造十王像（膝あり）（1）	鐘楼	59	木造地藏菩薩坐像（1）	宝物館
10	木造十王像（膝あり）（2）	鐘楼	60	木造如来坐像（1）	宝物館
11	木造十王像（膝あり）（3）	鐘楼	61	木造童子像（護法童子像）	宝物館
12	木造十王像（膝あり）（4）	鐘楼	62	木造地藏菩薩立像	宝物館
13	木造十王像（膝あり）（5）	鐘楼	63	木造地藏菩薩坐像（2）	宝物館
14	木造十王像（膝あり）（6）	鐘楼	64	木造僧形坐像（2）	宝物館
15	木造十王像（膝あり）（7）	鐘楼	65	木造坐像	宝物館
16	木造十王像（膝なし）（1）	鐘楼	66	木造菩薩坐像	宝物館
17	木造十王像（膝なし）（2）	鐘楼	67	木造不動明王立像	宝物館
18	木造十王像（膝なし）（3）	鐘楼	68	木造如来坐像（2）	宝物館
19	木造十王像（膝なし）（4）	鐘楼	69	木造僧形坐像（3）	宝物館
20	木造十王像（膝なし）（5）	鐘楼	70	木造菩薩立像（1）	宝物館
21	木造十王像（膝なし）（6）	鐘楼	71	木造菩薩立像（2）	宝物館
22	木造十王像（膝なし）（7）	鐘楼	72	木造僧形坐像（4）	宝物館
23	木造十王像（膝なし）（8）	鐘楼	73	木造僧形坐像（5）	宝物館
24	木造十王像（膝なし）（9）	鐘楼	74	木造獅子頭（小）	宝物館 倉庫
25	木造大黒天立像（1）	鐘楼	75	紙張り造獅子頭（大）	宝物館 倉庫
26	木造大黒天立像（2）	鐘楼	76	上杉三代定勝公 飯箱	宝物館
27	その他 大黒天像小像	鐘楼	77	桶	宝物館
28	銅造待定坊坐像	鐘楼	78	燈籠	宝物館
29	木造大日如来坐像	本坊	79	盆（箱入り4枚）	宝物館
30	木造聖観音菩薩立像	本坊	80	菊紋箱（1）	宝物館
31	木造如来形立像（1）（左側）	本坊	81	甲冑	宝物館
32	木造如来形立像（2）（右側）	本坊	82	華籠	宝物館
33	銅造歓喜天像	本坊	83	煙管道具一式	宝物館
34	木造興教大師坐像	本坊	84	鏡（柄付き）	宝物館
35	木造弘法大師坐像	本坊	85	菊紋箱（2）	宝物館
36	木造菩薩形立像	本坊	86	立て札	宝物館
37	木造不空罽索観音菩薩坐像	本坊	87	御撫物 菊紋箱（3）	宝物館
38	木造右手	本坊	88	経箱	宝物館
39	木造弘法大師坐像	位牌堂	89	侍定坊の椀	宝物館
40	木造不動明王三尊像	護摩堂	90	侍定坊の椀（2）	宝物館
41	木造不動明王立像（1）	護摩堂	91	南京錦絵大皿	宝物館
42	木造不動明王坐像	護摩堂	92	九谷焼大皿	宝物館
43	木造如来形坐像	護摩堂	93	琴	宝物館
44	木造菩薩形坐像	護摩堂	94	琵琶	宝物館
45	木造脱衣婆坐像	護摩堂	95	槍・薙刀	宝物館
46	木造不動明王立像（2）	護摩堂	96	奉納木札	宝物館
47	木造毘沙門天立像	護摩堂	97	籠	宝物館
48	木造不動明王立像（3）	護摩堂	98	木造仁王像	仁王門
49	木造弘法大師坐像（1）	護摩堂			
50	木造弘法大師坐像（2）	護摩堂			

書画文化財調査リスト

	名称	保管場所		名称	保管場所
1	杉戸絵	本坊	55	真言三祖画像	宝物館
2	衝立	本坊	56	山号「松高山」	宝物館
3	免許状	本坊	57	木造漆塗金泥蒔絵絵馬	宝物館
4	短冊	本坊	58	版木	宝物館
5	台貼り屏風	本坊	59	獅子の浮彫り額	宝物館
6	文殊菩薩画像	本坊	60	山形県 秋田県 北海道 御巡幸輦御休泊供奉御列図	宝物館
7	織仏 文殊菩薩像	本坊	61	山形県 秋田県 北海道 御巡幸輦御休泊供奉御列図 模写	宝物館
8	文殊菩薩画像	本坊	62	版木 文殊菩薩	宝物館
9	文殊菩薩画像	本坊	63	十二天画像のうち伊舎那天	宝物館
10	真言八僧図	本坊	64	十二天画像のうち日天	宝物館
11	真言八僧図	本坊	65	十二天画像のうち梵天	宝物館
12	薬師三尊十二神将像	本坊	66	十二天画像のうち風天	宝物館
13	別本日牌之契證	本坊	67	十二天画像のうち月天	宝物館
14	弘法大師像	本坊	68	種字曼荼羅図	宝物館
15	胎蔵界五仏図	本坊	69	文殊大菩薩	宝物館
16	弁才天像	本坊	70	山号「松高山」	宝物館
17	十一面観音	本坊	71	望青専戒筆一字書	宝物館
18	虚空蔵菩薩画像	本坊	72	牡丹に猫図	宝物館
19	大日如来画像	本坊	73	如意輪観音画像	宝物館
20	本坊内資料調査(配置)	本坊	74	弘法大師画像	宝物館
21	経典	本坊	75	白鷹図	宝物館
22	経典	本坊	76	虫喰櫻	宝物館
23	経典	本坊	77	奉納川柳	宝物館
24	経典	本坊	78	手鑑 (花色紙画帖)	宝物館
25	大般若経	本坊	79	折帖 ①羽州置賜郡永居文殊記録 ②外題なし	宝物館
26	出納台帳	本坊	80	寺領絵図	宝物館
27	版木	本坊	81	三千仏	宝物館
28	不動明王二童子画像	護摩堂	82	金泥書大衆妙典	宝物館
29	愛染明王画像	護摩堂	83	大乘妙典一部	宝物館
30	大宋国の慈雲大師観心十界の図	護摩堂	84	亀岡文殊堂奉納詩歌一冊	宝物館
31	仏涅槃図	宝物館	85	大永の制札	宝物館
32	胎蔵曼界荼羅図	宝物館	86	待定法師忍行念佛傳(天・地) 古社寺取調書 五	宝物館
33	金剛界曼荼羅図	宝物館	87	佛説文殊経	宝物館
34	胎蔵界曼荼羅図	宝物館	88	銅造五鈷輪	宝物館
35	金剛界曼荼羅図	宝物館	89	銅造名取郡物響寺 磬	宝物館
36	胎蔵界曼荼羅図	宝物館	90	銅造五鈷輪	宝物館
37	三尊来迎曼荼羅図	宝物館	91	御朱印状	宝物館
38	梵字不動尊図	宝物館	92	御朱印状	宝物館
39	虫喰文殊尊及び版木	宝物館	93	書状類	宝物館
40	墨竹図	宝物館	94	御朱印状	宝物館
41	海上胤平筆	宝物館	95	御朱印状包み紙	宝物館
42	来迎図	宝物館	96	御朱印状	宝物館
43	望青専戒筆三行書	宝物館	97	付箋 (御朱印状内に入っていた)	宝物館
44	特定坊図	宝物館	98	御朱印状	宝物館
45	四社明神	宝物館	99	御朱印状	宝物館
46	獅子図絵馬	宝物館	100	御朱印状	宝物館
47	色紙和歌	宝物館	101	御朱印状包み紙	宝物館
48	書「鳳」	宝物館	102	御朱印状包み紙	宝物館
49	自画賛蜆子和尚図	宝物館	103	御朱印状包み紙	宝物館
50	観音現鳥	宝物館	104	御朱印状包み紙	宝物館
51	□□俳句集	宝物館	105	御朱印状包み紙	宝物館
52	一行書	宝物館	106	御朱印状包み紙	宝物館
53	文殊菩薩画像	宝物館	107	絵 馬	観音堂
54	一行書	宝物館			

A. 文殊堂

①本尊 木造文殊菩薩騎獅子像

法 量(cm) (本軀)

像高	29.0	耳張	7.3	胸奥 (左)	7.7	肘張	19.8	膝高 (左)	4.5
髪際高	25.0	面幅	4.9	腹奥	10.1	膝張	22.7	膝高 (右)	4.7
		面奥	8.12	坐奥	17.2			裳先出	4.7

形 状

(本体) 菩薩形坐像。髻 (現状欠失)。地髪毛筋彫り。髪際毛筋彫り。天冠台彫出。天冠台は上から列弁・紐一条。連珠文帯とする。金属製の宝冠を正面におく。鬢髪一条耳を渡る。耳朵貫通。白毫相 (白毫欠失)。玉眼嵌入。三道彫出。內衣、覆肩衣、衲衣をつけ、裙をつける。金属製の胸飾を付ける。左手屈臂して前に出す (現状手首先欠失)。左手屈臂して膝上に置く (現状手首先欠失)。右足を前にして安坐する。

(獅子座) 蓮台、返花、八角框座、敷茄子、獅子、框座から成る。獅子は開口、玉眼、向かってやや右を向き、右側の足を前に出す。たて髪先の先を小さく丸めた大きな房状。勢毛は各足2房。敷物を背負い、帯で敷物を繋ぐ。尾は欠失。

品質・構造

(本体) 木造。寄木造。ヒノキか。彩色。頭部は前後2材刳付。玉眼。差し首。体部は前面1材。両肩以下各1材。両肩上各1材。背面1材で箱型に組み上げる。両手先各別材 (現状欠失)。両脚部1材。裳先1材。各刳付。両膝部各刳付。底面に底板を貼る。宝冠、胸飾ともに金属製。

(獅子座) 木造。寄木造。ヒノキか。彩色。獅子は前足を含んだ頭部、胴、後ろ足を含んだ腰部の3材製。玉眼嵌入、面部別材刳付。足先の全てを別材刳付 (左後足先欠失)。

保存状態

(本体) 髻欠失。左手首先欠失。右手首先欠失。頭部は前後材が遊離し、現状は紐で結束。頭部は体部の差しこみ口で遊離。両上脛は朽損し、玉眼が露出する。白毫欠失。鼻先欠失。(両上脛、鼻、耳朵、衣文突起部などの朽損は鼠害によるものか。) 後補と思われる彩色は全身において剥落。

(獅子座) 右後足先欠失。尾欠失。右前脚下の蓮華座の半分を欠失。全体に埃が堆積するが、彩色は制作当初 (江戸時代か) の鮮やかさを残す。左こめかみ部に泥蜂の巣が付着している。蓮台は上面3材の内後方材欠失。中面3材の内、前・後2材欠失。蓮弁は10弁内3枚欠失。返花の後方部材欠失。敷茄子の円部外縁が朽損する (鼠害か)。台座は返花が下を向くなど構成に不可思議な点があり、1段か2段分の部材が丸ごと欠失している可能性がある。また、蓮台、返花の部材欠失により構造的に不安定となり、現状では紐で上下に結んで結束している。さらに台座上に載せる本体を定位置である中心部に置くと安定しないため、現状ではやや斜め前に置くことでかろうじてバランスを保っている状態である。

本体の頭部材の遊離、蓮華座の部材の欠失、獅子座の蓮華部の一部欠失など、深刻な構造的損傷が見られるため、早急な修復措置が望まれる。

所 見

面相部は卵形で、頬骨の狭い形式。地髪部は細い毛筋彫り。耳輪の強い巻きなど、鎌倉時代後期の宋風彫刻の作か。面相部は体部材に差し込む部分が差し首柄のように長くないため、もとは割り首か。体部は箱形の構造。四角く背を丸めて上半身を小さく作る形態から、南北朝-室町頃の制作か。後頭部は後補で、江戸時代の制作か。獅子座、蓮華座は江戸時代の作か。



本尊木造文殊菩薩騎獅子像
正面



本尊木造文殊菩薩騎獅子像
左側面

②文殊堂安置のその他の諸尊

文殊堂裏側には、木造虚空蔵菩薩坐像、木造大日如来坐像、木造普賢菩薩坐像の三体が安置されている。



木造虚空蔵菩薩坐像
像高：30.6



木造大日如来坐像
像高：30.8



木造普賢菩薩坐像
像高：30.5

B. 観音堂

観音堂は享保年間（1716年～1736年）に待定坊の発願によって建立されたとされ、内部には同時期に造立されたとされる木造阿弥陀如来立像と西国三十三観音像、木造弘法大師坐像が祀られている。



観音堂内部全景



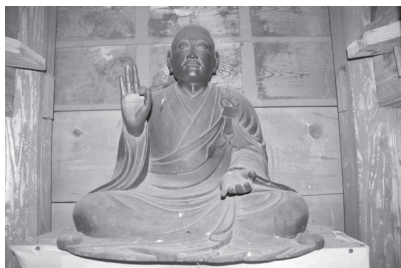
観音堂本尊 木造阿弥陀如来立像
像高：101.0



木造弘法大師坐像
像高：70.0

C. 鐘楼堂

文殊堂へと登る参道の中腹に建てられている鐘楼堂は、観音堂と同じく待定坊によって建立されたとされる。内部には銅造待定坊像が中心に安置され、左右には奉納札ともに観音像2体、十王像17体、大黒天像数体の小像が安置されている。今回の調査では十王像に膝前部一体（膝あり）と膝前部別材矧ぎ（膝なし）の2種類の仕様が確認できたため、十王像が2組安置されていることがわかった。



銅造待定坊坐像



木造菩薩形坐像
像高：28.8



木造十王像（膝なし）
像高：38.5



木造十王像（膝なし）
像高：36.1

D. 大聖寺本坊

亀岡文殊の別当寺である大聖寺の本堂。県指定の木造聖観音菩薩立像を始め、それと同時期の作と思われる木造如来形立像2体、本尊としてまつられる木造大日如来坐像、秘仏としてまつられる銅造歓喜天像などが安置されている。また、多くの仏画が壁面にまつられ、他にも板戸絵、版木、経典などの多くの文化財が安置されている。

①木造聖観音菩薩立像

法 量 (cm)

像高	186.0	面長	18.0	耳張	20.2	肘張	48.5
髪際高	159.0	面幅	15.7	胸奥(左 条帛上)	23.7	裾張	33.8
頂～顎	46.5	面奥	20.4	腹奥	25.8	足先開(外)	26.8

形 状

菩薩形立像。高髻。天冠台彫出。天冠台は紐二条上際に列弁帯。髪際は疎らに八房とし、毛筋を表す。耳朶貫通。玉眼（現状）。鼻孔を穿つ。三道彫出。条帛を付け、条帛の端は上から差し入れる（下端は見せない）。天衣は両肩から各上膊を覆う（肘以下は表さない）。腹に肉割れを二段表す。左手は屈臂して前に出し、掌を内側に向けて横にし、第一指、第二指をまるめ、他は伸ばす。裾（折り返し付）と腰布は右を前にしてつけ、腰帯を付ける。腰をやや左に捻って立つ。

品質・構造

木造。寄木造。ヒノキ材か。頭部は耳後で前後二材矧ぎ。差し首とする。面部を割り、玉眼嵌入（現状は玉眼を埋める）。体部は背面襟元から前後二材を矧ぎ付け、内剝りを施す。左右の肩、肘、手首先を各矧付。両足先各矧付。両足柄各挿入。

保存状態

高髻、面頬部以外の頭部、腰帯正面合わせ目部分削り直し。両足先、両肘以下、右腰部から右膝横にかけての側面部、さらにその下の裾先までの部分は後補。（近年に彫刻家鈴木実氏によって修理）

所 見

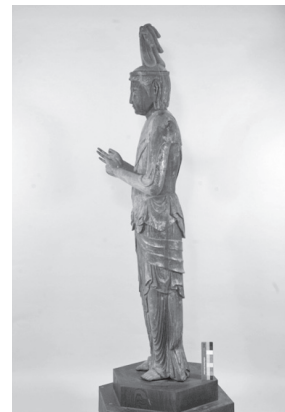
卵形の面相、長めの腰布と腰帯をつけ、衣文線を数多くにぎやかに表すことなどの特徴から、鎌倉時代後期の作か。



正面



背面



左側面

②木造如来形立像（1）

法 量 (cm)

像高(現状、右袖先から頂)	153.8	面幅	16.5	胸奥(右)	22.7
髪際高(右袖先から髪際)	145.3	耳張	20.1	腹奥	24.0
頂～顎	37.7	面奥(現状鼻先後頭部欠失)	15.2	肘張	46.6
面長(髪際－顎)	18.7			裾張(現状)	42.3

形 状

如来形立像。肉髻（現状平彫）。肉髻珠（現状欠失）。地髪平彫り。髪際やや波状。白毫相。眉は長く、眉尻はこめかみに届く。玉眼嵌入（現状玉眼欠失）。耳朶貫通。耳孔を穿つ。鼻は小さく、鼻翼は張らない。鼻孔を穿つ。口は鼻翼より幅広で、上唇が大きく、波状とする。上唇、下唇に刻みを表す。三道彫出。衲衣

を偏袒右肩に付け、右方は覆肩衣で被う。衲衣は腹前から左肩にかけて大きく折り返し、さらに左腹前に小さな折り返しを見せる。覆肩衣は右腹前で衲衣に託し込むが、折り返しを見せる。左手は体側に垂下し、掌を仰いで、やや前に出す（現状、手首先欠失）。右手は屈臂して前に出す（現状、右肘先欠失）。腰をやや右に捻って立つ（現状、両脚像底部欠失）。

品質・構造

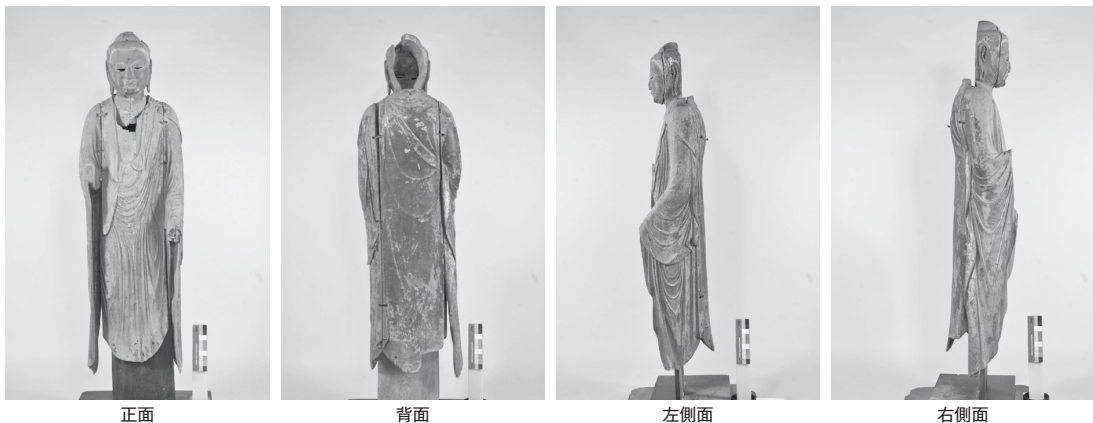
木造。寄木造。カツラ材。頭体幹部は耳後ろで前後二材矧ぎ付け、各材に内刳りを施す。前面材は割り首として、さらに面相部を割り、玉眼を施す。前面材は左胸前部に木芯を含む。左肩以下別材矧ぎ付け。左肩後方から腰にかけて別材（縦48cm×幅4.0cm）矧ぎ付け。袖内側別材（三材）矧ぎ付け（後補）。右肩以下別材矧ぎ付け。右肩上にマチ材（幅7.5cm×厚2.3cm）を挟む（割損のために後補か）。右袖内側別材矧ぎ付け（欠失）。右肘先別材矧ぎ付け（欠失）。両脚部は各、前後材から彫出し、各割り足とし、体部を内刳りした後、前後を矧ぎ付けて差し込んだか（前面材、後面材ともに、下辺に鑿の割り跡が残るため）。螺髪は矧ぎ付け（現状欠失）。表面加飾は漆箔が一部残るが当初であるかは不明。

保存状態

後頭部欠失。肉髻左後方部欠損。螺髪欠失。肉髻珠、白毫、玉眼ともに欠失。鼻先欠損。右肩上部後方小材欠失。三道下から右胸上部にかけて欠損（最大幅10.5cm×最大幅9.0cm）。左手首先欠失。左袖内側後補（三材矧ぎ）。右袖先欠失（内側は肘で欠損）。両脚部亡失。衲衣背面裾部右側先欠損。左肩以下部の彫りが右肩以下部と異なり、左肩以下部の衣文が体部衣文と繋がらないため、左肩以下部は後世の彫りなおしの可能性がある。

所 見

肉髻が低いこと、髪際が波状になっていること、面層が扁平であること、衣文線が整っていること、衲衣と覆肩衣の正面に折り返しを見せること、衣文線は細く、円みを帯びることなどの特徴から、鎌倉時代後期の作であると推測する。



③木造如来形立像（2）

法 量(cm)

（本軀）

像高(現状、左袖先から頂)	154.1	面長(髪際－顎)	18.2	胸奥(右)	22.2
髪際高(左袖先から髪際)	145.7	面幅	16.7	腹奥	24.9
頂～顎	28.0	耳張	19.1	肘張	48.2
		面奥(現状、鼻先欠損、後頭部欠失)	20.5	裾張(現状)	44.4

形 状

如来形立像。肉髻（現状平彫）。地髪（現状平彫）。螺髪貼付け（現状欠失）。髪際やや波形。肉髻珠（現状欠失）。白毫相（現状欠失）。玉眼（現状欠失）。耳朶不貫。三道彫出。眉は長く、眉尻はこめかみに届く。

鼻は欠損。口は鼻翼より幅広で、上唇が大きく、口元を深く刻む。上唇に刻みを表す。内衣を付け、衲衣を付ける。衲衣は右脇を通り、左肩を覆い、端を右肩にかける。右脇から左肩にかけて衲衣の端を大きく左袖にまで折り返し、さらに、左胸部に小さな折り返しを見せる。右肩に覆肩衣を付ける。覆肩衣は右腹にたくし入れ、折り返しを見せる。左手は体側にやや屈臂して垂下し、掌を仰いでやや前に出す（手首先欠失）。右手は屈臂する（肘先欠失）。腰をやや右に捻って立つ。両脚部欠失。衲衣正面左膝以下欠損。

品質・構造

木造。寄木造。カツラ材。面相部は一材（現状は正中で左右になる）。耳前を含む後頭部四材（後補）を体部に差し込む。体部は木心を含んだ一材から彫出し、肩上で前後に割り、内刳りを施すか。左肩以下一材矧ぎ付け。左肩内側一材矧ぎ付け（後補）。手首先欠失。右肩以下一材矧ぎ付け。右肘（袖口含む）以下別材矧ぎ付け（欠失）。螺髪は貼付け（現状欠失）。

保存状態

耳前を含む後頭部から三道下後補。左上膊部半ば（高さ4.7cm、幅9.2cm、奥7.8cm）の欠失部に後補材。左手先欠失。左袖内側後補部一材。右袖口を含む肘先欠失。衲衣正面左脚部欠損。両脚部欠失。両脚部割り脚か。（1）像と同じ造作か。右足以下後補。左肩以下後補。

来迎印を結ぶ手首先が残っており、（1）、（2）のどちらかは阿弥陀如来であると考えられる。

所 見

（1）像と同様。



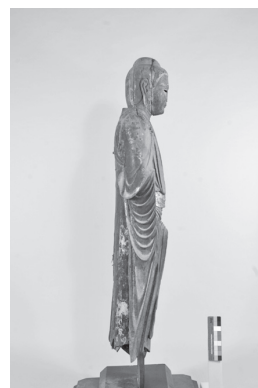
正面



背面



左側面



右側面

④銅造歡喜天立像

法 量(cm)

総高	15.0	像高	12.9	腰奥（最大）	6.5	裾奥	6.4
----	------	----	------	--------	-----	----	-----

形 状

象頭人体。王像、妃像が抱擁して立つ通形の歡喜天立像。王像は、頭頂が平坦で目を吊り上げ、牙を表し、鼻先を曲げる。条帛をつけ（端を背面に表す）、条帛の端は上方から出す。裾を付け（折り返し付き）、腰布を付ける（腰は二段にする）。妃像は、頭頂を平坦にし、目をつり上げ、額に紐二条の上に半花形の頭飾を付ける。牙を表し（王像よりは小さい）、鼻先を曲げる。臂釧、腕釧を付け、臂釧は紐一条の上下に、連珠文帯（腕釧も同じか）。裾（折り返し付き）をつけ、腰布を付ける。互いに五指を広げて、相互の腰後におく。両像共膝下を表すか。

品質・構造

銅造。一鑄製。ロウ型か。湯口は台座裏中央。台座周辺部底面に数カ所の逃げ口を作る。

保存状態

全体に粘着質の汚れが付着している。

所 見

肉身表現が柔らかで、目、牙、鼻先など細部の表現にまで神経が行き届く。状帛は薄く表され、端を下から出す形式は平安時代後期に多く見られる形式である。裾の折り返しや腰布が厚く表されるのは鎌倉時代に入ってから形式であると考えられるが、布の表現は柔らかい。両像共に体軀は太く表される。以上の特徴から、鎌倉時代前期頃の作か。



正面



側面



厨子

⑤本坊安置のその他の諸尊

本坊には、中央の間の須弥壇上に本尊の木造大日如来坐像（江戸時代の作か）が安置され、須弥壇裏には左右に木造興教大師坐像、木造弘法大師坐像（ともに江戸時代の作か）が安置されている。



本坊本尊 木造大日如来坐像
像高：96.3



木造興教大師坐像
像高：49.7



木造弘法大師坐像
像高：49.7

⑥板戸絵

寸 法(cm)

本 紙	(右)	縦	164.5	横	79.3
	(左)	縦	164.5	横	79.2
全 体	(右)	縦	174.2	横	90.5
	(左)	縦	177.4	横	90.8

形態・材質技法

杉戸絵 板本着色

本坊側 左面：竹と鶴（裏面：瞑想する赤衣の老人。足元に杖。遠景に山の稜線）

右面：松と鶴（裏面：樹下に坐す農夫姿の白衣の老人。足元に柄の長い鋏）

保存状態

表面にはしみ剥落、後補、擦れが確認される。特に本坊側は木材の経年劣化、色料の損傷が著しく、双鶴の体部は胡粉があったと考えられるものの、現在は確認することができない。裏面も本坊側と同様に劣化損傷が進んでおり、上部板材には白色の腐朽も見られた。本坊側右下には直径 20 センチ程度の円形の穴痕がある。また、上部の棧には継ぎ足しが見られる。扉絵という性質と通用口という場所柄か、日光や、温湿度の影響は受けやすいと思われる。



本坊側：竹と鶴、竹と松



裏面



本坊側 赤外線画像

⑦文殊菩薩織仏

寸法(cm)

本紙	縦	172.7	横	73.0
全体	縦	234.0	横	107.8

形態・材質技法

掛幅装 仏仕立て三段表具 織仏

本紙 紡地

本紙上部には制作年が織られている。「羽前国置賜郡松高山明治十七年」

文殊菩薩像の下部には奉納者の名が金泥により記され、更にその下に製作した織物師の名が織り込まれている。裏打紙には織仏作成に際しての寄付者の名が記されている。

保存状態

大きな欠損等は見られないが、色彩の褪色が著しい。表具の接着部分には糊離れが起こっており巻癖に由来すると思われる縦皺も多く見られる。肌裏打紙が剥がれている箇所も見られ、裏面総裏には和紙による補強跡や虫損が見られる。

⑧文殊菩薩像（⑦の原画）

寸法(cm)

本紙	縦	175.0	横	83.8
全体	縦	225.8	横	115.5

形態・材質

掛軸装 紙表具 紙本着色

軸首 柿渋くるみ軸 連珠菱文様

画面上部に墨書あり。

「羽前国 置賜郡 松高山 明治十七年」

画面下部には製作に携わった織元の名前と共に作者の名が見える。

「竹ノ森村 陽溪拝画（朱文印）」

八双の題箋部分に墨書あり。

「文殊尊 第三十三号 文殊尊」

保存状態

細かな皺が中央部を中心として本紙全体に入っている。表具にはしみが入り賭け紐なども弱っている（掛紐が弱っているため、テグスをつけて補強した）。八双部分の表具紙は虫に食われており、損傷が著しい。紐が弱っているため八双の側面に補助糸をつけていた。



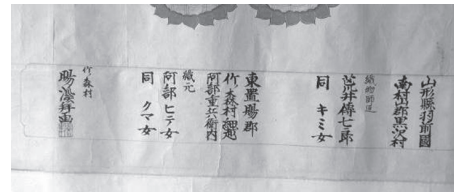
織仙（表）



織仙（裏面）



文殊菩薩像



⑨台帳

概要

位牌堂内の南側壁面に左面7列、右面8列で掛けられている。大福帳から、紙を束ねて紙縫りで綴じているものまで多種にわたる。各時代の紙が用いられており、墨書を基本に記されている。

保存状態

経年の劣化などによる、強度の低下が見られる。



台帳

⑩版木

概要

須弥壇下の櫃内に積み重ねて収められていた。櫃は2箱あり、合わせて92枚。内部には他にも雑貨類が入っていた。調査対象は内部に納められていた版木を対象とした、今回は写真画像を用いて記録。

形態

版木 木材（樹種等の詳細は不明）

保存状態

箱内に折り重なって収められており、シミなどの虫により侵食が進んでいる。



須弥壇下



版木



虫損

⑪経典

概要

本坊内には膨大な量の経典が保管されている。2500冊を超える数が確認され、今回は概要の記録にとどめた。

保存状態

虫により侵食されているものも多く見られた。



保管状況



保存箱



虫損

⑫仏画作品

本坊内には多くの仏画作品が収蔵されている。文殊菩薩を描いた掛軸（先述の織仏）が床の間に掛けられており、須弥壇周辺には真言八僧図や胎蔵界五仏、薬師三尊十二神将図などが掛けられている。



真言八僧図



薬師三尊十二神将像



胎蔵界五仏図



E. 護摩堂

近年全面改築が行われた新しいお堂である。大聖寺本坊より渡し廊下で繋がる構造となっている。堂内の須弥壇上には厨子に納められた本尊不動明王三尊像を中心に複数体の仏像が安置され、壁面には仏画がまつられている。

①護摩堂本尊 木造不動明王三尊像

法量(cm) (中尊本鉢)

像高	22.1	面長	5.5	面奥	7.7	肘張	13.5	膝高(右)	4.2
髪際高	20.0	面幅	4.5	胸奥(左)	6.4	膝張	17.1	裳先出	1.6
頂～顎	8.2	耳張	7.4	腹奥(条帛上)	7.4	坐奥	12.2		

形 状

(中尊) 不動明王坐像。頂平滑。地髪平彫り。左側に弁髪。彫眼。瞋目相。耳朵貫通。条帛。臂釧。左手屈臂して前に出し、羂索をとる。右手屈臂して前に出し、五指をまるめる。裙、腰布をつけ、右足を上にして結跏趺坐する。

品質・構造

木造。一木造。ヒノキ材か。木心を左大腿部に含んだ一材から両肘までを含めて彫出する。内割りなし。

保存状態

表面は後補の分厚い彩色に覆われている。左後頭から右耳前にかけて後補。両肘以下後補。底面後方から2.8cmで後補の板を貼る。裳先部後補。制叱迦童子、矜羯羅童子、台座一式は、不動明王像を修理した際（台座裏銘にある寛文七年か）に新補したものと推測される。

所 見

中尊の木造不動明王坐像は、頭部が大きく面奥が深いこと、胸が広く大きいこと、脇を締めた体形、上膊が太いこと、膝が高いことから量感表現の名残をみせる。脛の立ち上がりが垂直で、古い形状である。衣文線が浅く、本数が少ないことは平安時代後期にみられる特徴である。よって、不動明王坐像は平安時代後期10世紀から11世紀の作かと推測される。

銘 文 台座框座天板裏墨書銘

「智證大師御作 此尊智積院會 尊也_共 誓心遍申 右旨音嘗 請爰寄附也 舜書記 之寛文七_{丁未}」



護摩堂本尊 木造不動明王三尊像



台座底面



木造不動明王坐像 左側面



木造不動明王像 底面

②木造不動明王立像

法 量(cm) (本鉢)

像高(現状)	68.5	面幅	7.2	胸奥(右)	11.7	裾張	17.3
頂～顎	11.5	面奥	10.2	腹奥	13.9	足先開(外)	14.8
面長	8.3			肘張	29.5		

形 状

不動明王立像。卷髪。現状、頂は平滑であるが、頂蓮が莎髻かは不明。額に水波相。眉は太くいからす。左目眇め、右目は見開く。牙は上下出。口はへしませる。鼻孔を穿つ。耳は耳輪を強く巻き込む。耳朶不貫。後頭部の巻髪は総髪とする。条帛をつける。条帛は端を上から入れ、下側は出さない。左手屈臂して索を執り、右手屈臂して腰前で釧を執る。金属製の臂釧、腕釧、足釧をつける（後補）。裙（折り返し付）、腰布をつける。腰を右に捻って立つ。

品質・構造

木造。寄木造。ヒノキ材か。頭部は耳後で前後二材を矧付け、内削りを施す。面相部は割り矧ぎとし、玉眼を嵌入する。差し首とする。玉眼の止め木は一材で、竹釘六本で留める。玉眼は水晶製で、血走りが赤、目は中心から黒、金、青、黒とする。体部は肩下がりて前後二材矧ぎ付。内削りを施し、左右両足を差し込む。左右両手は肩、肘で矧ぎ付。左右肩上部に各小材矧ぎ付。両足先別材、各欠失。腰布の左右の結び紐、各一材別材矧ぎ付（現状右側は割れて三材になる）。各足柄は各脚部と同材。彩色（現状煤けて古色）。現状矧目周辺にのみ布張りあり（当初か）。

保存状態

頂欠失。面相部を除く頭部、前面材の右側欠損。左手第二指、第五指欠失。持物欠失。左足先前半材、側面欠失。右足先欠失。左肩上マチ材（小材）欠失。裙の折り返し右腰部欠失。左耳朶後補。

表面は後補と思われる泥下地彩色に黒色顔料で加飾されているが、所々に剥落が見られる。

所 見

面相部の表現、太めの体軀表現から、鎌倉時代前期、慶派仏師の作か。



正面



左側面



背面



左斜前

③護摩堂安置のその他の諸尊



木造不動明王坐像
像高：24.5



木造如来形坐像
像高：22.0



木造脱衣婆坐像
像高：22.1



木造不動明王立像
像高：51.7



木造不動明王立像
像高：43.8



木造菩薩形坐像
像高：26.2



木造弁財天坐像
像高：11.6



木造弘法大師坐像
像高：8.4



木造弘法大師坐像
像高：9.1



木造毘沙門天立像
像高：38.2

④不動明王二童子画像

寸 法(cm)

本 紙	縦	111.8	横	58.6
全 体	縦	181.6	横	76.8

形態・材質技法

掛軸装 紙表具（三段仏仕立形式） 絹本着色

八双裏、上巻絹に張られた付箋に墨書あり。

「第四十六号甲三十□□和上□不動」

上巻絹には付箋の下に一字が隠れて墨書あり。

「無言筆 有英蔵」

⑤愛染明王画像

寸法(cm)

本紙	縦	61.6	横	58.6
全体	縦	181.2	横	76.6

形態・材質技法

掛軸装 紙表具（三段仏仕立形式） 絹本着色

八双裏、上巻絹に張られた付箋に墨書あり

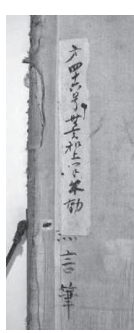
「不動」という墨書が墨で消され「第四十六乙号愛染明王」



不動明王二童子画像



愛染明王画像



上巻部分



部分



部分

F. 宝物館

大聖寺本坊の向かいにある宝物館。以前は土蔵造りであったが、近年建て替えがされて現在の建物となる。館内には大聖寺にまつわる仏像、書画、工芸品等が数多く陳列されている。

①木造獅子像

法量(cm)

高さ（現状・左前足－耳）	38.3	長さ（現状・鼻－尾）	45.2
幅（現状・両肩）	19.5		

形状

文殊菩薩像の獅子座。背中に径1.3cm、深さ1.5cmの台座の柄穴あり。頭頂に径3.4cmの平滑面を置く。彫眼。眉をつり上げ、目を見開き、開口。舌をみせる。正面を向く。胸を張り、左足をわずかに前に出す。勢毛を表わす。耳を立てる。鼻根に瘤。牙を上下に表す。唇をめくり上げる。たて髪の後頭部は巻髪。顎下は長くし、先をまるめる。背中に二重の敷物を置き、上に台座を置く（台座欠失）。尻に革紐（尻ガイ）を表す。前肩にも革紐（胸ガイ）。

品質・構造

木造。一材製。ヒノキか。木心は右側遠くにはずす。右肩に節。

保存状態

完全に素地と呈し、全体的に虫蝕、腐朽菌による被害が著しく脆弱な状態である。左後足大腿から欠損。両前足脛から欠損。後頭部から背中にかけて朽損。体右側耳から胴にかけて朽損。

所見

本像は上面中央に柄穴と思われる穴が確認できることから、文殊菩薩像の獅子座であった可能性が高い。全体的に朽損が著しいが、各所に写実的な表現が見られる。特に①頭部が比較的大きい②軟らかく写実的な肉身表現がみえ、特に肩や脚には筋肉表現が見られる。③左足はやや前に出す動勢表現がみえる。④上唇を

角度が強くめくり上げ上唇の中央をめくれせる。⑤口の中の舌がふくらみ軟らかさがみえる。⑥巻髪の巻きは硬くしまるが高さが低くなっている。以上の特徴から本獅子座は鎌倉時代の作であると考えられる。



②木造菩薩形坐像

法 量 (cm)

像高	44.7	面長	9.8	耳張	11.8	肘張	32.8	坐奥	28.2
髪際高	38.8	面幅	9.2	胸奥(右)	14.2	膝張	38.9	掌先出	3.7
頂-顎	16.1	面奥	12.1	腹奥	16.1	膝高(左)	7.3		

形 状

髪（現状欠失）。地髪毛筋彫。天冠台（幅 2.0cm）の無文帯（波を打つ）。髪際房をつくり毛筋彫。彫眼。鬘髪耳を渡る。耳朶不間。三道彫出。覆肩衣。納衣をつける。納衣は右腕から左肩を覆い、左肩に少しかかる。左手屈臂して前に出す（現状前膊半ば以下欠失）。右手屈臂して前に出す（現状前膊半ば以下欠失）。裾。右足を上にして結跏趺坐する。衲衣をつける宋風の菩薩像。

品質・構造

木造。寄木造。ヒノキ。彫眼。彩色。

頭部幹部は耳後ろで前後二材刳付。全面材は背面に木心を外したヒノキの一材から頭部を彫出し、首二道で割首とし、面相部内に内刳を施す。前方材体部は上下 2 ヶ所、下方に 2 ヶ所、計 4 ヶ所の前後束を設けて、内刳を施す。上方前後束の柄穴は右側がたてに 1 × 高さ 3.0 × 深さ 2.5、左側がたて 1.0 × 高さ 3.2 × 深さ 1.5、下方は右側がたて 1.0 × 高さ 3.2 × 深さ 2.5、左側がたて 1.0 × 高さ 3.0 × 深さ 2.3、下方前後束は地付まで彫り残す（数値は cm）。後方材は木心を右斜後方に外した一材から頭部を彫出し、内刳を施す。上方に 2 ヶ所前後束を彫り残す。

左肩以下地付まで一材刳付。柄穴は上方二ヶ所、下方二ヶ所。内刳を施す。右肩以下地付まで一材刳付。柄穴は上方二ヶ所、下方二ヶ所。内刳を施す。両脚部一材刳付。内刳。柄穴は二ヶ所。右肘外側に別材刳付。

保存状態

髪欠失。左右前膊部以下欠失。左肩から上膝外側朽損。右肘外側別材欠失。彩色剥落。

所 見

面相部は整うが、上半身が四角く短軀になるのは南北朝期の制作か。内部に前後束を上下 4 ヶ所に残すのは珍しい。



③宝物館安置のその他の諸尊

宝物館には、仏像、工芸品などが多数陳列されている。



木造如来坐像
像高：44.5



木造不動明王立像
像高：37.5



木造僧形立像
像高：91.0



木造僧形坐像
像高：47.0



木造地藏菩薩坐像
像高：23.0



木造地藏菩薩立像
像高：45.4



木造護法童子立像
像高：25.5



木造僧形坐像
像高：23.0



木造地藏菩薩坐像
像高：34.4



木造僧形坐像
像高：11.5



木造坐像
像高：20.5



木造如来坐像
像高：21.0



木造僧形坐像
像高：20.8



木造菩薩立像
像高：37.5



木造菩薩立像
像高：28.5



木造僧形坐像
像高：34.5



紙張り造獅子頭
高さ：29.7



木造獅子頭
高さ：10.4



木造獅子像（阿形）
像高：36.5



木造獅子像（吽形）
像高：35.5



陶板弁財天曼荼羅
図（手印版板）
高さ：23.0



御撫物菊紋箱
仏具高：18.5



待定坊の椀
外形：12.0



華籠
外径：28.0

④亀岡文殊堂奉納詩歌一冊（高島町指定文化財）

寸法(cm)

全体	縦	41.5	横	29.5		
箱（蓋込み）	縦（長辺）	46.5	横	36.7	高さ	4.5

形態・材質

冊子装 短冊 紙本着色

保存箱 印籠蓋

「寛永八年戊辰 五月二十五日 日法印良永 詩歌九拾九枚 仍第七番 梅有遅速ノ短尺書副
和歌之出題大國但馬守實頼 頭書描写ノ 寛文八戊申 霜月廿七日大聖寺寺住法印宥舜」

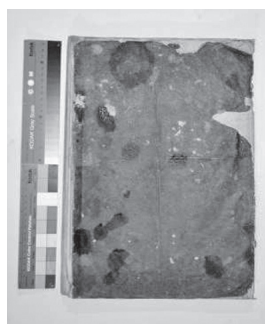
とある。

保存状態

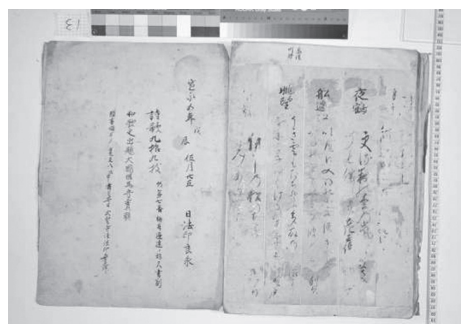
短冊に金銀泥を用いた料紙を用い、各歌人が詠んだ歌が墨書されている。短冊に一枚欠失がみられる。冊子表紙にシミのような跡、欠損がある。背側の上部が欠失している。全体に水シミがあり裏にも水シミ。



保存箱



表紙



⑤大永の制札（高畠町指定文化財）

寸法(cm)

本紙	縦	—	横	—		
箱（蓋込み）	縦（長辺）	46.5	横	36.7	高さ	4.5

形態・材質

制札 板本墨書

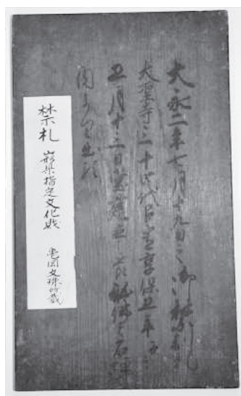
保存箱 差込蓋（蓋は欠失）

箱上面に墨書有り、大永二年七月十九日の日付が有る。

付箋には「禁札 山形県指定文化財 亀岡文殊蔵」とある。

保存状態

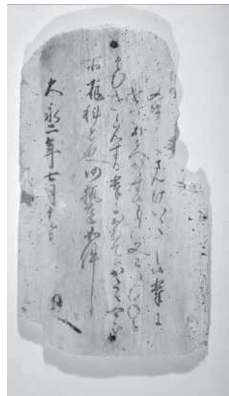
板の周囲が虫損などにより侵食されている。左下の矩形の欠損は加工跡と思われる。表面には白い付着物。裏面には釘跡がある



保存箱



表面



赤外線画像



裏面

⑥両界曼荼羅図

両界曼荼羅図は両界揃っていない物も含めて五幅あり、全て紙本となっている。本紙には緑青などの顔料に剥落が見られ、継ぎ目に剥がれがある。

1.

寸 法(cm)

本 紙	縦	115.8	横	99.2
全 体	縦	230.0	横	126.0

形態・材質技法

掛軸装 三段仏画仕立 紙本着色

裏面上部に奉納者の名が記され、中央下部に墨書あり。

「宝暦十三年歳次癸未春二月」とあり、その脇に「現住安達太良山圓東密寺 □法第三十世法印性海鉄識」。上巻部分にも「胎藏界大曼荼羅 奥州安達郡二本松領二本柳圓東密寺什宝」。

2.

寸 法(cm)

本 紙	縦	112.5	横	97.0
全 体	縦	206.0	横	121.8

形態・材質技法

掛軸装 二段仏画仕立 紙本着色

3.

寸 法(cm)

本 紙	縦	114.0	横	97.0
全 体	縦	207.0	横	121.9

形態・材質技法

掛軸装 二段仏画仕立 紙本着色

4.

寸 法(cm) *同様の胎藏曼荼羅図がもう一幅ある

本 紙	縦	148.9	横	132.2
全 体	縦	220.5	横	151.0

形態・材質技法

掛軸装 紙表具（筋廻し丸表具）紙本着色



1. 胎藏曼荼羅図（表）



（裏面）



2. 胎藏曼荼羅図



3. 金剛界曼荼羅図



4. 金剛界曼荼羅図

⑦十二天

両界曼荼羅と一具で灌頂等に用いられる。五点が確認された。

⑧ 仏涅槃図

寸 法 (cm)

本 紙	縦	186.0	横	137.0
全 体	縦	270.0	横	158.5

形態・材質技法

掛軸装 仏仕立三段表具 紙本着色

⑨ 三尊来迎曼荼羅図

寸 法 (cm)

本 紙	縦	89.3	横	39.0
全 体	縦	170.5	横	54.2

形態・材質技法

掛軸装 三段仏画表具 絹本着色

裏面上巻絹に墨書あり。

「大師御筆 三尊来迎曼陀羅 有英□」

所 見

作品は絹本の仏画が最も古い部類で、多くは紙本着色で江戸時代に実際に使用されていたと考えられる。これらの作品以外にも、「文殊菩薩画像」や「如意輪観音画像」、「三千仏」といった様々な仏画作品が所蔵されており、大聖寺の変遷を辿る貴重な資料群となっている。



十二天



仏涅槃図



三尊来迎曼荼羅図

⑩ 御朱印状

大聖寺寺領百石を安堵した御朱印状で六通の御朱印状が包み紙とともに収められている。寸法はほぼ同様だが、各年代に渡って、紙質に変化があり、紙資料としても貴重な物となっている。

1.

寸 法 (cm)

本 紙	縦	46.6	横	63.7
-----	---	------	---	------

形態・材質技法

書状 まくり 紙本墨書

「安政二年 九月十一日 (朱文丸印)」とあり、印文は家定。

2.

寸 法 (cm)

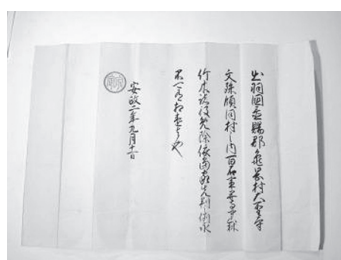
本 紙	縦	46.0	横	—
-----	---	------	---	---

形態・材質技法

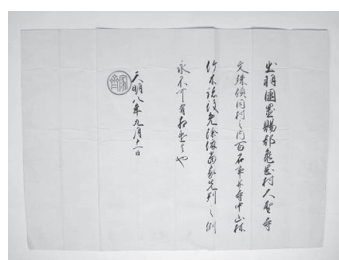
書状 まくり 紙本墨書

「天明 八年九月十一日 (朱文丸印)」印文は家斉

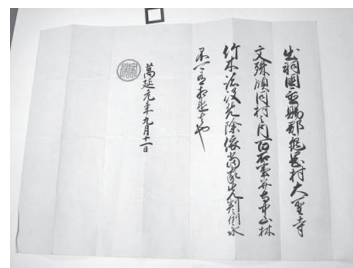
- 3.
- 寸 法(cm)
- | | | | | |
|-----|---|------|---|------|
| 本 紙 | 縦 | 45.3 | 横 | 65.2 |
|-----|---|------|---|------|
- 形態・材質技法
- 書状 まくり 紙本墨書
- 「満延 元年九月十一日 (朱文丸印)」印文は家茂
- 4.
- 寸 法(cm)
- | | | | | |
|-----|---|------|---|------|
| 本 紙 | 縦 | 46.7 | 横 | 65.1 |
|-----|---|------|---|------|
- 形態・材質技法
- 書状 まくり 紙本墨書
- 「享保二年 七月 十一日 (朱文丸印)」とある。印文は吉宗。
- 5.
- 寸 法(cm)
- | | | | | |
|-----|---|------|---|------|
| 本 紙 | 縦 | 51.5 | 横 | 65.2 |
|-----|---|------|---|------|
- 形態・材質技法
- 書状 まくり 紙本墨書
- 「宝暦十二年八月十一日 (朱丸)」とあり、朱の丸の中に「御朱印」の付箋がある。
- 6.
- 寸 法(cm)
- | | | | | |
|-----|---|------|---|------|
| 本 紙 | 縦 | 46.4 | 横 | 63.8 |
|-----|---|------|---|------|
- 形態・材質技法
- 書状 まくり 紙本墨書
- 「天保十年九月十一日 (朱文丸印)」とあり、印文は「家慶」の付箋がある。
- 7.
- 寸 法(cm)
- | | | | | |
|-----|---|------|---|------|
| 本 紙 | 縦 | 51.7 | 横 | 65.3 |
|-----|---|------|---|------|
- 形態・材質技法
- 書状 まくり 紙本墨書
- 「天保十年九月十一日 (朱文丸印)」とあり、朱の丸の中に「御朱印」の付箋がある。
- 8.
- 寸 法(cm)
- | | | | | |
|----------------|---|------|---|------|
| I. 高百石 | 縦 | 18.0 | 横 | 48.8 |
| II. 天明八年 御朱印 | 縦 | 15.4 | 横 | 15.2 |
| III. 宝暦十二年 御朱印 | 縦 | 15.2 | 横 | 3.2 |
| IV. 包み紙 (通□□) | 縦 | 32.0 | 横 | 35.0 |
- 形態・材質技法
- まくり (四点とも) 朱印状についての目録書と、その付箋、および、包み紙。
- I. 「安政六年九月」とある。
- II. 「天明八年 御朱印」と記された付箋
- III. 「宝暦十二年 御朱印」としてされた付箋
- IV. 「通□□」とある。
- 9.
- 寸 法(cm)
- | | | | | |
|-----|---|------|---|------|
| 本 紙 | 縦 | 65.5 | 横 | 46.0 |
|-----|---|------|---|------|
- 形態・材質技法
- 包み紙 まくり 紙本墨書 「天保十年御朱印」とある。



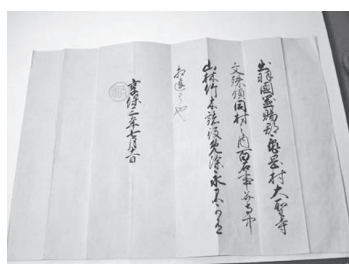
1



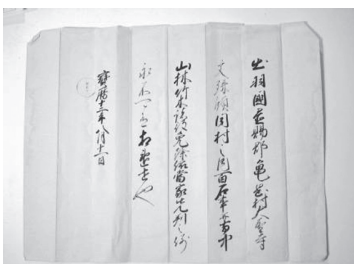
2



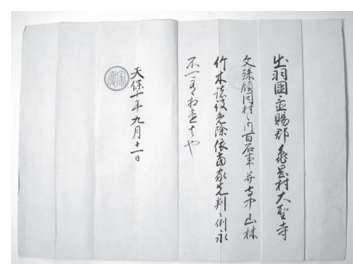
3



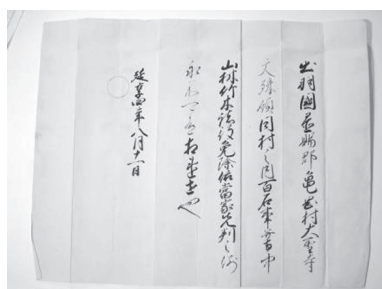
4



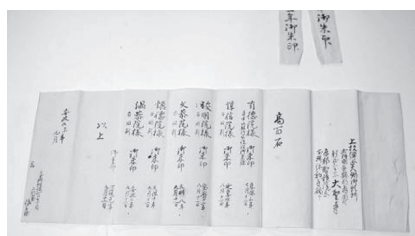
5



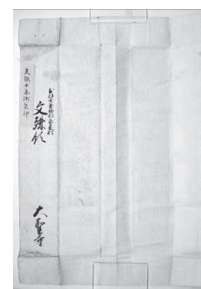
6



7



8



9

⑪寺領絵図

寸法 (cm)

本紙 縦 162.0 横 228.0

形態・材質技法

絵図 紙本彩色

亀岡文殊の寺領を描いている。建物には白い付箋に「本堂」といった説明書を添えている。

保存状態

縦に6箇所、横に3箇所の折り目があり、元は折りたたまれていたことが分かる。全面に折れ皺があり、折れ目に沿って本紙に欠損が見られる。多くの箇所に茶褐色の汚れと黒かびがある。修復跡が有り、補紙には白色と本紙と同系色の二種類がある。本紙地色とは一致していない。



寺領絵図



部分



修理箇所

⑫手鑑（花色紙画帖）

寸 法(cm)

本 紙	縦	19.6	横	17.7
全 体	縦	29.5	横	28.5

形態・材質技法

画帖 和歌色紙 紙本着色

説明書きに「手鑑（花色紙画帖）御てかかみ十体和歌花色色紙堂上寄合書 幕末期の作品 上杉家の姫君からの奉納品」とある。

保存状態

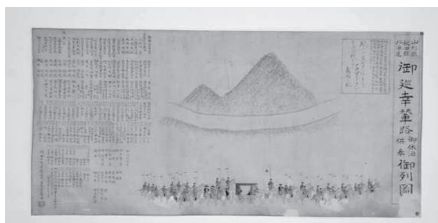
良好



表紙



⑬宝物館のその他の書画作品



山形県秋田県北海道御巡幸幸筆路御休泊供奉御列圖模写



望青専戒筆一字書



猫に牡丹図



山号「松高山」

G. 仁王門

①木造仁王像

法 量(cm)

阿形像高（髻上）	215.0
吽形像高（髻上）	213.5

品質・構造（阿吽共に）

木造。寄木造。玉眼。彩色。髻は正中で2材矧か。髻紐の端を左右につけた跡有。頭部は耳後ろで矧付。体幹部の構造は表面彩色の為に詳細は不明。

保存状態

元結紐、天衣等の付属部材が欠失。一部部材の矧ぎ面で遊離。全身で表面彩色の剥落。

所 見

大寺亀岡文殊の規模を象徴するかのような立派な仁王像。江戸時代の作か。



吽形像



阿形像

大聖寺（亀岡文殊）文化財悉皆調査まとめ

大聖寺（亀岡文殊）は、高島町はもとより山形県を代表する寺院の一つであり、大同二年（807年）に徳一上人によって開かれて以来、現在も多くの参拝者が訪れる篤い信仰を集める寺院であるが、その歴史は意外にも解明されていない点が多い。亀岡文殊では、以前にも様々な研究者によって文化財調査が実践されているが、今回のような悉皆的調査は今までなされていなかった。当センターでは、大聖寺（亀岡文殊）の歴史の解明に少しでも寄与するために、大聖寺（亀岡文殊）に現存する文化財の悉皆的な調査活動を実践し、把握された文化財の相互的な関係性を考察することで、文化財から見る歴史についての研究活動を開始した。大聖寺（亀岡文殊）には、数多くの仏像、工芸品、絵画、絵馬、古文書などの文化財が所蔵されており、今回の悉皆調査ではそれらの文化財 200 件程の調査を行った。

仏像文化財の調査では、中世、近世に造像された多くの仏像が確認された。

中世の造像作例では、県指定文化財である本坊安置の本造聖観音菩薩立像と、同時期に造像されたと思われる木造如来形菩薩 2 体の存在は以前から知られているところであった。しかし今回の調査によって、護摩堂安置の平安時代造立の木造不動明王三尊像や、鎌倉時代に慶派によって造像されたと思われる木造不動明王立像などが確認されるなど、中世の作例が新たに発見された。また、今回特別に調査が許された秘仏である文殊堂本尊木造文殊菩薩騎獅子像は、現状の面部前面、頭部後頭部、体幹部、台座が、何れも中世から近世の異なる時代の制作であることが分かったことによって、亀岡文殊の歴史を本尊の修理履歴から辿るといふ新たな観点が得られた。

また近世に造像された仏像では、大聖寺本坊の本尊である木造大日如来坐像、待定坊の勧進によって享保年間に造立された観音堂諸尊など、かなりの数の江戸時代の制作による仏像が確認された。その規模、芸術性、数量は、大聖寺（亀岡文殊）の江戸期の隆盛を物語るものであるといえる。しかし、それらの尊像が江戸期の何時どのような契機によって造像されたものであるかを示す銘文が発見されていないため、今後、古文書や絵画などの制作年代の推測などと合わせて、総合的に歴史考察を行っていきたいと考えている。

大聖寺には、各時代の貴重な仏像文化財が多く安置されているが、しかしその保存状態は決して良いものばかりではないのが現状であった。特に損傷状態が激しい文殊堂本尊、本坊の如来形立像 2 体、護摩堂不動明王像などは、何れも修復の必要性がある状態であった。また宝物館に安置されている諸尊には、虫喰や腐朽菌に蝕まれた尊像が多数見られるなど、虫害への対策が必要な状態であった。さらに観音堂や鐘楼堂、仁王門などは正面を格子で仕切るだけの半屋外の環境下にあることから、安置されている近世仏の表面彩色の剥落損傷などが著しい状態であった。

続いて、書画調査の内容については、仏像文化財と同様に作品の年代、種類は多岐に渡っている。

歴史資料としては高島町指定文化財となっている大永の制札を始めとして、江戸時代には寺領安堵の御朱印状が將軍家の八代から十三代まで揃っているなど貴重な資料が所蔵されている。

仏画作品では、鎌倉時代から明治時代の印刷や織仏文殊菩薩像といった珍しい作品まで各年代に渡って所蔵されている。古くは鎌倉時代とされている三尊来迎図や四社明神といった絹本の仏画が見られ、江戸時代に入ると両界曼荼羅や、十二天等の紙本の仏画が所蔵されている。江戸時代の仏画には表装が紙表具のものもあり、使用されている唐紙も共通している。裏面には当時の住職の銘などの記載がある作品があり、作品の変遷を辿ることで大聖寺の変遷を辿ることが出来ると考えられる。同様に、高島町の指定文化財である亀岡文殊堂奉納詩歌一冊や花色紙画帖、猫に牡丹図などもあり、これらは米沢藩との深いつながりを示している。また近代の作例では、明治天皇の東北巡幸に関連した書や御列図が残されている。

作品の年代から見た密度はやはり江戸時代に集中していると思われ、作品と地域との関わりが深く作品群として保存されるべき地域文化遺産であるとの印象を受ける。資料としては他の掛軸や絵馬についても同様のことがいえる。

今回調査した件数は 100 件程になるものの、版木や文書、經典類はその膨大な数の為概要の把握にとどまっており、その量の多さは今後の保存を考えた際にも大きな課題となっている。作品の保存環境は最善とはいえ損傷が進行している作品も見られ、今後の修復を含めた保存対策が必要であると考ええる。

以上のように、大聖寺の所蔵する膨大な量の文化財は、個々で見ても文化財価値が高いと認められるものが多くあるが、大聖寺文化財群としてみればその価値は一層高くなると思われる。今後、悉皆調査で把握した仏像、絵画、古文書などの相関性を踏まえた歴史的考察をさらに深めることで、歴史の解明と文化財価値の底上げを図っていききたい。また悉皆調査とともに実践した保存環境調査の結果を踏まえ、所有者らにとって管理上の負担が少ない保存管理方法の方法を修復処置も念頭に置いて探求していくことで、持続的な保存

活動へと繋がる研究調査活動を展開していきたいと考えている。

高畠石と地域文化遺産

北野博司

1. はじめにー研究テーマの設定

平成 22 年度から始まった本研究プロジェクトは、構想調書によればその第 1 の目的を、「地域文化遺産を総合的な文化財の集合体として捉えなおし、現在まで注目されてこなかった潜在的な文化財の再発見とそれによる地域の価値の再構築を図る」こととしている。

これは文化庁が「文化財総合的把握モデル事業」(H20～22)として進めてきた、地域文化財をジャンルや指定の有無によって区分してきた従来の保護の枠組みに加え、特定のテーマやストーリーの下で関連性のある文化財を一体としてとらえ直し、魅力や価値を分かりやすく示すことにより、地域の歴史や文化を語る重要な資産として、総合的に保存活用していこうとする方針と共通するものである。

文化財保存修復研究センターでは、このプロジェクトを前年度まで 5 か年にわたって実施してきたオープン・リサーチ・センター整備事業「地域文化遺産の循環型保存・活用システムに関する総合的研究」の延長線上に位置付け、今回はプロジェクトの趣旨に基づき地域を定めることと、歴史、考古、建築史、保存科学、修復など多分野からのアプローチによる総合的把握と新たな歴史文化的価値付け、さらに地域と連携して調査研究することにより住民目線に立った保存活用につなげていくねらいがある。

高畠町は県内でも有数の遺跡密集地であり、町はそれらを歴史文化的アイデンティティーとし、歴史豊かな「まほろばの里」構想に基づいたまちづくりを進めている。これまでの高畠町をフィールドとした考古学的調査において、地域の歴史文化を語るうえで欠かせない存在として「石」がキーワードとして浮かび上がってきた。特に町内の里山丘陵で広範に産出する高畠石は、地域固有の自然資源であり、縄文時代草創期～古代にかけて利用された数々の洞窟遺跡をはじめ、古墳時代の横穴式石室墳、中近世の石造物、近現代の石切り場跡・近代化遺産・民家の石堀・護岸施設など、1 万年の長きにわたり人々の生活と不可分の関係にあった。これらは現在も町のあちこちに重層的に集積され、日常の風景に溶け込んでいる。それらはこの土地に住んだ人々の暮らしの証であり、そこには信仰や自然利用の価値観など無形の要素も含んで、地域独特の景観＝「高畠らしさ」を映し出している。本研究ではその実態を解明し、歴史文化的な価値付けを試みることを目的とする。

2. 対象とする文化遺産と研究方法

本研究では主として取り上げる文化遺産は以下のとおりである。

- ① 飛鳥・奈良時代に造営された終末期古墳
- ② 中世、近世、近代に設置された石造物
- ③ 近世～現代に採掘された凝灰岩の石切丁場跡
- ④ 近現代の町並み

高畠町を歩くと、町のあちこちに高畠石にまつわる文化遺産があるのに気付く。そこからは先史から現代にいたるまで、地域住民と高畠石の不断の関わりが読み取れる。本研究では、高畠町の歴史や文化の特徴を、高畠石の利用史、自然と人間の関係史の視点からとらえ直すことを試みる。

主として対象とする文化遺産のうち、①は埋蔵文化財であり、地上に露出するものもあるが、その多くは発掘調査を行わないとその特徴が十分把握できない。②～④は有形文化財とそれに付随する無形文化財、文化的景観の類で現況調査が可能な文化財である。

①では考古学的な調査が中心となる。これまで本センターでは置賜地域の古代社会形成期の歴史を考える重要遺跡として、2008・2009 年に町教委と協力して安久津古墳群の考古学的調査を実施してきた。そこでは横穴式石室の構造の特徴や石材資源の利用形態を明らかにするとともに、その歴史的意義について研究してきた。本研究では後に触れるように、現在は米沢市に編入されているが、かつては旧屋代郷に所在した戸塚山古墳群を調査対象とする。これは安久津古墳群と同時期に営まれた約 180 基からなる群集墳であるが、両者は石室構造や群構成に大きな違いが認められる。なぜ、そのような差異が生まれたのか、この点を地域の石材環境と人（技術・社会等）との関わりの中から探ってみたい。

②は石碑や石塔、石仏、石鳥居等の石造物が中心となる。これらは地域の信仰、精神文化の姿を示す文化

遺産である。高畠町では数多くの石造文化財の存在は知られているが、これらを地域の歴史や文化を語る資源とするためには、各時代においてその造営主体や技術、信仰等の背景を具体的に明らかにし、それらの有機的な関係を解明していかなければならない。そのためにはエリアを絞り、対象文化財を悉皆的に拾い上げるような調査が必要となる。

③は近世に始まった角石（延石）生産、これに近代から加わった間知石生産の石切り丁場を対象とする。「高畠石」の名称はその需要が拡大した近代の所産であり、その採掘、利用の歴史が④の町並みに表れている。町内には大笹生や羽山、沢福等、瓜割山等、中規模程度の石切り場跡が9か所あり、その岩肌に採掘が活況を呈した時代の足跡をしのぶことができる。これら以外にも小規模な個人単位の石切り場、また転石を加工した間知石の丁場もある。全体としてみると栃木県宇都宮市大谷や千葉県富津市鋸山のような大規模生産地の小型版のようにもみえるが、その技術や経営、消費形態、景観には、高畠の石材資源の産状、社会、経済と深く関わった特色があるように見受けられる。この点を研究するためには石切り場跡の遺構、石切り技術（工程・道具・身体動作）、生産・流通を具体的に復元、記録していく必要がある。

④では町並みに残る建築、土木、信仰遺産としての高畠石の利用状況と技術、その精神性等を調査する。石塀、基礎、敷地境界、敷石、井戸側、入川樋、屋敷神、石碑などが対象となる。これらが集積したまち並みは、日常のありふれた風景であり、その価値が特別に認識されることはあまりない。しかし、1間、1間半の角石を無造作に平積みしたようにみえる石塀やこれを敷地境界に並べた高畠石のあり方は、他では見られない町並み景観を現出している。敷地の一角には小さな石祠をまつり、裏庭には再利用に備えて破損材が集積されている。また、町のあちこちに講中により建てられた神仏信仰の石塔、石仏が散在する。それらは地域住民の無形の遺産の反映であり、高畠石の資源利用に対する価値感も含意されているようにみえる。この調査は対象地域を絞り、高畠石の利用を悉皆的に記録する。そのうえで石材生産関連遺産とともに総合的に把握し、歴史文化的価値について考えてみたい。

調査にあたっては地元教育委員会と連携するとともに、文化遺産を地域の資源として保存活用していく主体となる住民の参加が課題となる。特に高畠町においては、調査そのものを住民とともに行う活動とすることを念頭に置く。そのため、事業の初年度は組織づくりを中心に進めた。

3. 米沢市戸塚山古墳群の測量調査

2で述べた①の文化遺産にかかわる調査である。置賜地域には飛鳥時代の終末期古墳が南陽、高畠、米沢の3エリアに分布している。このうち高畠町に隣接する米沢市戸塚山古墳群（市指定史跡）には約180基の終末期古墳が群集し、これが良好に残る東日本最大規模の遺跡である。内部主体はすべて横穴式石室で、石材には現地で産出する凝灰岩質砂岩や泥岩（頁岩）が使用されている。

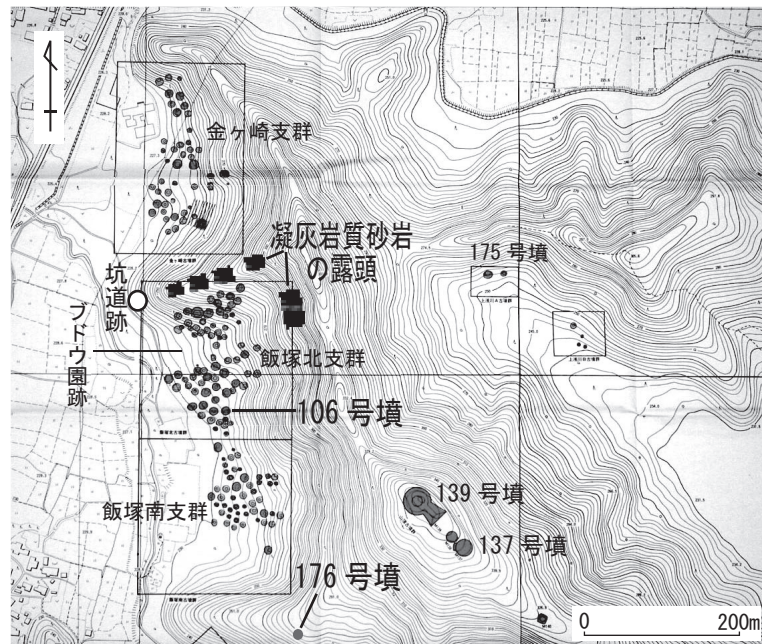
戸塚山古墳群は現在9つの支群に分けられており、終末期古墳は丘陵西麓に集中する。北から金ヶ崎、飯塚北、飯塚南、森合西、森合東の5支群、東に開く谷奥に浅川A、浅川Bの2支群がある。記録を辿ると明治30年頃から開墾や石材採取を契機とした遺物の出土が報告され、時を同じくして研究者らによる発掘調査も始まっている（大栗2011）。しかし、戸塚山で繰り返された数々の発掘にもかかわらず、いまだ石室構造や石積み技術を検討できる実測図がほとんどないのが現状である。

近年、米沢市教育委員会は本古墳群の保存と国の史跡指定に向けた調査を始めており2008年度に金ヶ崎支群にある3基の古墳（23、34、35号墳）の確認調査を行った。これまで本センターでは高畠町の終末期古墳（横穴式石室）の調査を実施し、そこでは地表に露出した大型板状の凝灰岩を使用した「矩形プラン」の石室が構築されていることを明らかにした。これに対し、戸塚山では小型の石材を主体とした「胴張りプラン」の特色ある構造を採用している。このような石室構造の差異がなぜ生じたのか。被葬者集団が保有する石室構築技術の系譜に関わる問題なのか、環境への技術適応としてみるのか。資源・素材と型式・構造との対応関係の解釈は、考古学的にも普遍性を持ったテーマといえる。

2010年度は基礎調査として、過去の調査で開口している2基の古墳の墳丘測量と石室の実測調査を行った。

ア. 立地と石材環境

一般に終末期古墳の横穴式石室は南に開口し、古墳群は南が開けた山麓や丘陵斜面に立地する。戸塚山では当該期の群集墳は、石室は南に開口するが、古墳は山頂から北にのびる尾根の西麓にまとまって分布している。西麓の古墳群は枝尾根により金ヶ崎（45基）、飯塚北（74基）、飯塚南（49基）の3支群に区分されている。また、南麓には森合西（3基）、森合東（4基）の2支群と、丘陵中腹に単独で176号墳が存在す



第1図 飯塚北支群の石材環境

る。このほか丘陵東側の浅川地内では谷奥の南斜面に、上浅川 A（2基）、上浅川 B（4基）の2支群が存在する。

このように戸塚山古墳群は50基あまりが密集する3支群と、1～4基が点在する5つの支群からなっている。このうち飯塚北支群の古墳数が最も多い。当該支群は平坦部の北寄りに空白部があり、これを挟んでさらに2つの支群に分断されるように見える。しかし、ここはかつてブドウ園に開墾、削平された場所であり、2010年度の米沢市教委による確認調査で、もとは古墳が点在していたことが分かった（『戸塚山飯塚北古墳群確認調査現地説明会資料』2010年11月）。ここでは平坦面だけでなく、北側は尾根の稜線近くまで斜面に古墳が作られている。ほかの支群と比較すると直径10～12mのやや大きめの墳丘を持つものが多い点も特徴といえる。

なぜ、戸塚山では古墳群が西麓に集中するのか、さらになぜ飯塚北支群の集中度が高いのか。

この点は石材の産出状況と関係が深いと考える。106号墳の石室石材は凝灰岩質砂岩である。これらは級化作用の発達した岩石で粒径は細粒～粗粒まで多様である。節理面で割れた角礫を中心とする。このような岩石が至近で得られるのは、飯塚北支群の北東部である。丘陵の痩せ尾根西側は直下が急崖をなすが、支群北東部には現在、凝灰岩質砂岩の岩盤の露頭がみられる。この岩盤は節理が発達しており、西側斜面には崩落した石材が点在する。2010年度の米沢市教育委員会の調査区でも地山中には多くの岩石が包埋されていた。また、飯塚北支群と金ヶ崎支群を隔てる枝尾根の頂部にも同種の大型石材が露出し、斜面にも点在する。なお、尾根上には一部硬質頁岩（泥岩）も認められ、尾根先端のかつての坑道口には広く硬質頁岩層が存在する。凝灰岩質砂岩層と硬質頁岩層が互層になっているものとみられる。

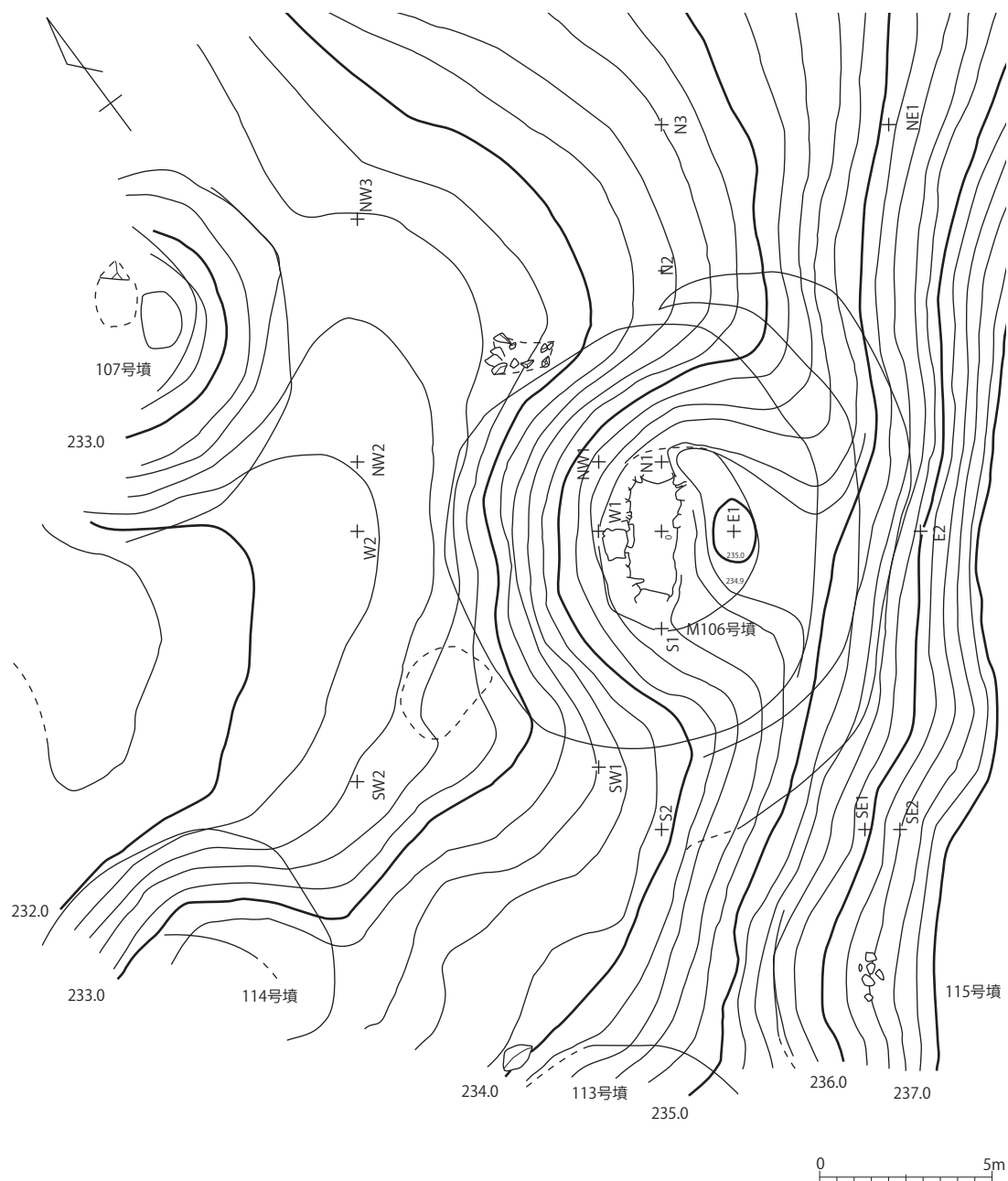
石室は、風化により露頭から崩落した石材や墳丘造成に伴って出土した大小石材を利用して構築されたと考えられる。戸塚山西麓で最も石材供給条件の良かったのが、飯塚北支群の場所であり、そのことが古墳群の密集度の高さと比較的規模の大きな石室墳が存在する理由の一つと考えたい。ここで注意しておきたいのは、岩盤の露頭から西にのびる谷部を挟んで造墓域が2分されるようにみえることである。金ヶ崎支群との境をなす尾根南斜面を中心とするグループと106号墳のある平坦面を中心に造成し、北東斜面に広がっていくグループである。これらは飯塚北支群の細分単位とみることができるとともに、谷部に古墳を作らないのは当然としても、ここに崩落、埋没する豊富な石材をとるための採石空間として利用されたためという見方もできよう。

一方、176号墳は、戸塚山山頂から南西に下り、そこから西に派生する尾根の南斜面上部に単独で立地する。戸塚山の終末期古墳群では特殊な立地といえる。176号墳の石室は硬質頁岩を主体とし、奥壁など一部に凝灰岩質砂岩を用いている。古墳背後の尾根上には凝灰岩や硬質頁岩が露出するが、今のところ大きな露頭は認められない。石室は節理の発達した硬質頁岩を主体に構成されており、近くに小規模な露頭がある可

能性が高い。本墳は単独立地であり、恵まれた石材環境にはない。一方、古墳と平野との比高が45mあり、古墳上からの見晴らしは良い。この選地はおそらく、南側に大きく開けた眺望を重視した結果ではなかろうか。

終末期群集墳の被葬者集団の所在地を明らかにすることは難しいが、最上川の対岸に位置する西町田下遺跡、街道西下遺跡、大浦遺跡群など7～8世紀代の集落が集中する地域がその候補の一つに比定できる。西麓の群集墳はこの地域から最もアクセスしやすい場所でもある。

終末期古墳群の立地についてもう一つの見方がある。それは山頂の139号墳（前方後円墳）等の被葬者を始祖墓と擬制して、その山麓に新たな墓域を設定したというものである（土生田 2010）。戸塚山周辺では山頂に古墳が築かれたのが5世紀後半で、6世紀前半には北東端に山崎支群が造営される。戸塚山古墳群の造営開始時期はまだ明確にはなっていないが、山崎支群の後、早く見ても50年、遅く見ると100年以上の空白期が存在する。土生田氏が説くように、このような関係は全国的にも類例が見られ、選地には石材等の自然要因や集落域からの地理的条件だけでなく、当時の景観認識や宗教観といった精神文化の要因も関与していたと考えられる。



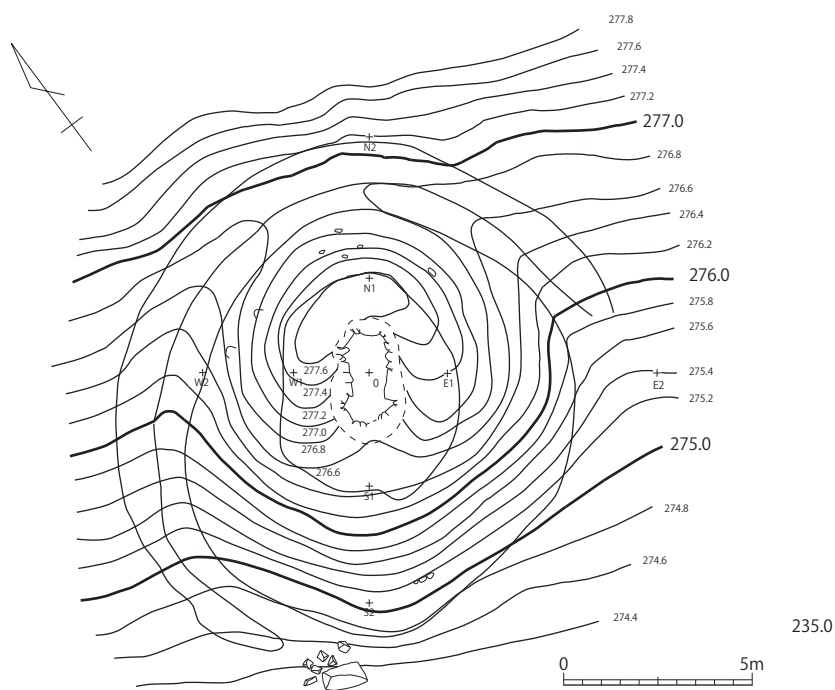
第2図 戸塚山106号墳地形測量図

イ. 墳丘

106号墳は丘陵斜面と山麓平坦面との傾斜変換点に位置し、山側を半円形に削り込んで周溝を設けている。本墳は支群の中で周囲の古墳と周溝を切り合うことなく独立している。墳丘の西側は一部盛り土が流失しており、石室西側壁の背後に石材が露出している。さらに墳丘の西側がやや直線的になっていることから、横穴式石室の背後には略長方形の石積みのあることが予想される。

176号墳は南斜面に立地しており、墳丘の三方に周溝がめぐる。本墳でも石室の北側と東側に大型石材が列状に並ぶのが見え、106号墳同様に略長方形の石積みとその背後に存在するものとみられる。さらに前庭部とみられる場所にも石列があり、そこから墳裾をめぐる列石がのびている可能性がある。

石室の構築とともに背後に石積みを行い、天井石設置後にこれを覆う盛り土で墳丘を構築する点や、列石が墳裾あるいは墳丘内にめぐるとの特徴は、高島町の安久津古墳群などと共通する構築法といえる。ただし、これらの中にも多様な形態が認められるので、その差異の整理は今後の検討課題である。



第3図 戸塚山176号墳地形測量図

ウ. 石室

106号墳と176号墳の石室は、ともに過去に調査された経歴を持つ。それらは玄室を対象としたもので、羨道や前庭部は未調査のままである。また、今回は現況での実測であり、石室内の表土は除去したが、床面は検出していない。石室基底部が出ておらず、実測としては不完全ではあるが、ほぼ構造の特徴は窺うことができる。

まず寸法では、106号墳が玄室長（奥壁から柵石の北端まで）3.0m、玄室幅は中央1.8m、奥壁側1.4m、玄門側1.5m、玄門幅0.7mとなる。176号墳は玄室長2.1m、玄室幅は中央1.5m、奥壁側1.2m、玄門側1.5m、玄門幅0.55mとなる。ともに約30cmの尺で整数に換算できる数値が多い。

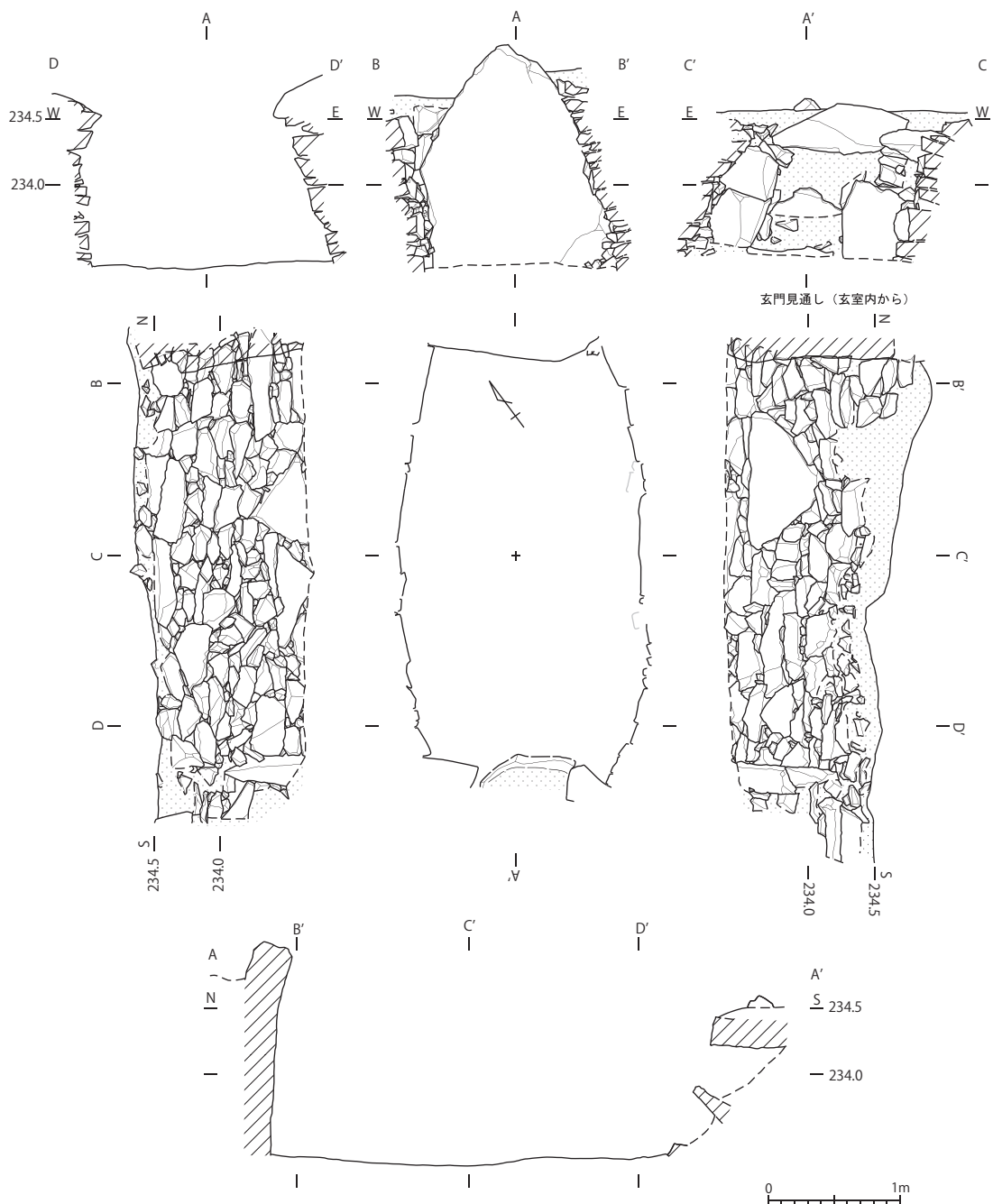
床平面はともに長方形でいわゆる胴張り形態をなす。床面を完全に検出していないので不確定ではあるが、106号墳は直線的な部分と弧を描いているように見える部分がある。これに対して176号墳の側壁ラインは直線と折れからなっている。後者は相対的に石材が大きく、節理で長辺が直線的なためかもしれない。側壁の胴張りが直線と折れによって形成されているのか、弧を描くことを意識したのかは、側壁上部のプランも含めて今後の検討課題とする。

二つの古墳の用材や積みの共通点を整理しておく。奥壁は106号墳が1枚、176号墳が2枚であった。ともに大型石材を用いている。側壁は基底部に腰石を用いない。使用する岩石種により石材形状が異なるため、その達成度に差はあるが、ともに布積みを志向している。小口に積むものや長手に積むものが混在する

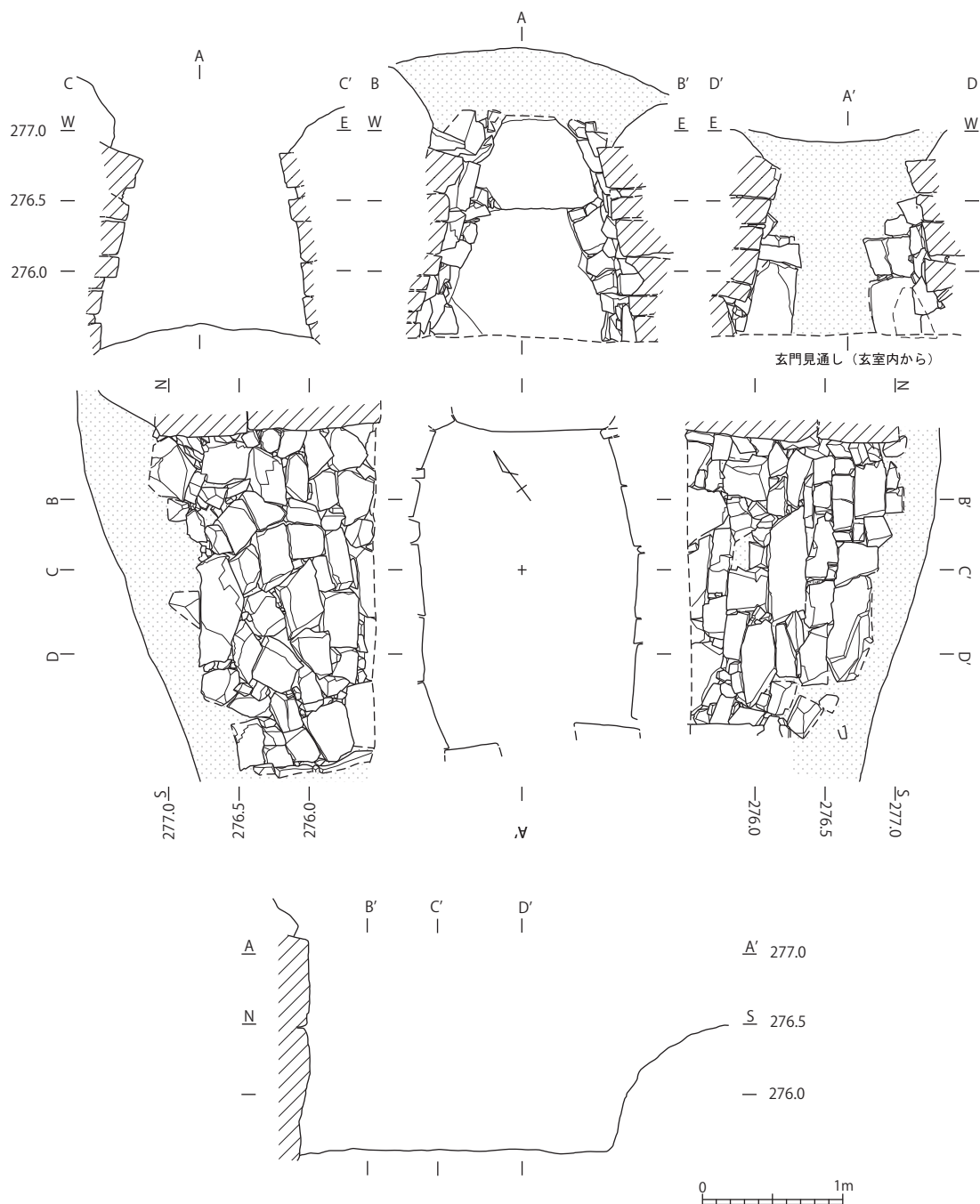
が、節理で割れた平面を石室内に向けることを重視している。玄門の袖石は2段積みとする。楣石をのせるための高さ調整と側壁との深い入り組みで構造の安定をはかる役割が考えられる。大型石材が少ない環境の中で、意図的にこのような構造を採用している可能性がある。

奥壁に大型石材を立てるのは、戸塚山古墳群の一般的特徴といえる。それは多くの古墳で近代に天井石が持ち去られ、現在でも奥壁に大きな1枚石を据えたのが確認できるからである。側壁は腰石を用いないこと、胴張り形態を採用すること、玄門は袖石を2段積みとすること、これらはいずれも小型石材に適応した石室構造と考えられる。

戸塚山古墳群では、近年米沢市教委で調査された金ヶ崎支群34号墳で腰石の使用が窺われるほか、同23号墳、同35号墳でも基底部に一部のみ腰石状の石材を利用している（米沢市教委2010）。これらは石材の産状にあわせ、多角形のものをそのまま使用しており、安久津古墳群や長手2号墳のように、その上面の高さをそろえるものではない。小型石材を小口積みした35号墳では胴張り形態が明瞭に確認できる一方で、23号墳のように顕著でないものもある。



第4図 戸塚山106号墳 石室実測図



第5図 戸塚山176石室実測図

高島町安久津古墳群は豊富な凝灰岩地帯に立地し、大型板状の石材が豊富である。ここでは玄室は矩形の平面プランで胴張りはもたない。側壁は腰石を立て、その上に小型石材を平積みする。8世紀に入るところには石室内部の面にチョウナ削りが多用され、切石状の加工も登場する。このような石室構造の特徴は高島地区の石材の産状に合わせ発達していったものと考えられる。

ここでは米沢戸塚山地区と高島地区の石室構造の違いを主に石材環境への適応というマクロな視点から評価してきた。しかし、高島地区においても時間的な変化や被葬者の階層性を読み取れる違い、個々の石材に応じた技術適応のような違いまで、多様な石室構造が見られた。例えば、戸塚山でも176号墳が平行節理の発達した頁岩を用いることで横目地の通りの良い石積みを実現したが、やや不定型な節理の凝灰岩質砂岩を用いる106号墳では、大小さまざまな形状の石材に板状詰め石を多用しながら、その安定化を図る対応がとられていた。側壁の内転び対策には「胴張りプラン」や「羽子板プラン」、「隅切り・力石」や「玄門ハの字配置」、「奥壁と側壁の隅のあて方の工夫」などがある。これらは石材の形状や性質、石室の意匠に合わせ、

相互に関連性を持ちながら採用されている。技術は材料に応じた柔軟性をもつと考えられるので、それらの関連性を明らかにしながら石室構造を評価していく視点が必要となろう。



戸塚山遠景（西から）



106号墳（西から）



106号墳 平板測量



106号墳 石室実測風景



176号墳（南から）



石材環境の調査

Ⅱ. 成果と課題

本年度の成果としては、まず戸塚山古墳群の調査履歴を整理したことがあげられる。しかし、なお不明な点や遺物が未確認のものがあり、さらなる追求が必要である。

群集墳の立地・分布に関しては、秦昭繁氏のご指導による石材調査で、石材環境との強い関連性が示唆された。石室構造は小型石材に規制された一定の共通性をもちつつ、利用する石材や規模によって技術や型式の多様性が生まれることがわかった。いまのところ、石材調査は着手したばかりであり、来年度以降、丘陵全体、さらに長手古墳や天神裏古墳の丘陵へも範囲を広げ検討を深めていきたい。

古墳の規模や配置など群構成に関する分析は未着手である。古墳群全体の地形測量が今後、米沢市教育委員会により進められる計画であり、確認調査による時期や石室構造の解明と合わせて分析を行っていく必要がある。

石室では開口している 175 号墳の実測と、これまで調査例が皆無である羨道・前庭部の構造の把握が課題となる。その調査は土器類による墓前祭祀の実態や、古墳の造営時期を知ることにもつながる。

戸塚山古墳群の過去の発掘品は、すでに散逸したもののも少なくない。今年度は分散収蔵されているそれら遺物の所在確認と観察を行ったが、古墳の時期推定や被葬者像解明にはさらなる調査が不可欠となる。

本調査の成果はすでに、『置賜地域の終末期古墳4－戸塚山古墳群（106号墳・176号墳）測量調査報告書』（2011年3月）として刊行済みであり、文章は同書第4章を転載した。

4. 高畠まちあるき事業

2で述べた②～④に関わる調査を推進するため、今年度は調査活動の母体となる地元組織の立ち上げを目標とし、関係者との連絡調整、情報収集活動を行った。最終的に3月8日、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館にて「高畠石の会」の準備会を開催し、15名が参加した。そこで本研究プロジェクトの趣旨説明と来年度からの活動について提案を行い、「高畠石の会」の設立、活動方針、活動内容が確認された。当面、本研究センターと高畠町教育委員会、高畠石の会の三者が協力して高畠石にまつわる文化遺産の総合調査に取り組むこととなった。

参考文献

- 大栗行貴 2011 「過去の調査」『置賜地域の終末期古墳4』東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター
土生田純之 2010 「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第65集 九州古文化研究会
米沢市教育委員会 1984 『戸塚山古墳群詳細分布調査報告書』
米沢市教育委員会 2010 「戸塚山金ヶ崎古墳群の調査」『遺跡詳細分布調査報告書』第23集

山形県高畠町大聖寺の環境調査

米村祥央

1. はじめに

戦略的研究基盤形成プロジェクトの2つ目の研究テーマは『環境に配慮し、安全で簡便な地域文化遺産保存管理』を地域住民と展開するための基礎研究と教育普及』（テーマ2）である。山形県内には国や県、市町村の指定を受けていない文化遺産が数多くあり、本研究プロジェクトでも更なる文化遺産を見いだすことが予想される。地域の歴史、アイデンティティを再認識するうえでも重要な役割をもつこれら地域文化遺産は、住民の手で、本来あるべき場所、あるべき形で次世代に継承されることが望ましいが、過疎化や建物の老朽化など問題も多い。本研究テーマ2は、地域文化遺産を地域で継続的に保存できる形にすることが目的である。そしてその手段は大きなエネルギー、大きな予算を要しない簡便な方法でなければ継続が難しいであろう。

研究を実施するに当たり、第一に寺社仏閣を含めた文化遺産展示保管施設の現状を知ることが必要とされる。山形県に限らず、文化遺産を所蔵している多くの施設では、温度・湿度等の環境が管理されておらず、圧倒的多数の施設は環境コントロールができない。本プロジェクトが研究対象とする山形県は、夏の猛暑と冬季の寒さが極端に異なり、冬は雪も多い。屋外の石造文化財や漆喰壁などは凍結融解によるものと思われる損傷を多く確認できる。また、冬季の湿度が高いのも特徴である。そのような環境の下では、文化財保存修復分野で推奨される環境を維持するのは困難である。また、保存修復に用いる接着剤等の材料を同じように使用することも検証する必要がある。さらに、山形県内の施設は付近に緑地が多いため、生物被害も大きな課題といえる。寺院のような建物は小動物や昆虫が内部に容易に入りやすい構造である。本研究でも、総合的有害生物管理（Integrated Pest Management：IPM）の考え方にに基づき、調査による生物被害の現状を把握するとともに有害生物の侵入ルートを特定し、対処を検討する必要がある。

以上を踏まえ、本研究テーマは、調査対象地の文化遺産の現状を、文化遺産そのものと環境の両面から明らかにし、さらに現地の施設で可能な保存管理を現地の住民によって継続できる形で実施することにある。初年度は日本三大文殊の一つの“亀岡文殊”として知られる山形県高畠町の大聖寺についてその環境調査を開始した。

大聖寺の位置

大聖寺がある高畠町は山形県南部の置賜地方に位置する、自然の豊かな地である。その出土品の多くが国の重要文化財にも指定されている縄文時代の押出遺跡に代表されるように、古の人々もこの地を好み、生活していたようである。

大聖寺は高畠町文殊山のふもとにあり、西から東への勾配を登ると文殊堂に至る。本調査は、主に下部の大聖寺本坊と宝物館で実施した。

大聖寺宝物館

本坊正面（西側）に建つ、二階建てのコンクリート製建物である。東面から階段を上り2階部の南側が展示スペースとなっている。北側は別用途に使用し、通常は扉で区切られ、入室はできない。

2. 調査

2-1. 温湿度調査

大聖寺施設の環境特性を検討するため、温湿度データロガーを設置し調査を開始した。

使用機器：HIOKI（株）製温湿度データロガー 6041

調査期間：2010年11月5日より

記録間隔：30分毎

設置場所：御堂内、境内外、護摩堂内部

2-2. 生物被害調査

① 生物被害 第1回調査（調査日：2010年8月18日）

仏像、絵画等皆調査時に生物被害等の状況を目視により調査した。同時に掃除を実施し、その後の変化を次の調査時に比較した。また、館内に侵入する昆虫の侵入経路と種類等を検討するため、宝物館内部の7箇所に昆虫調査用のトラップを設置した。

使用トラップ：(株)イカリ消毒社製 昆虫調査用粘着捕獲機（インセクトトラップ）

フェロモンや餌等の誘因剤のない粘着シートだけのもの

トラップのサイズ：粘着面：8.5cm × 15cm、高さ5.5cm

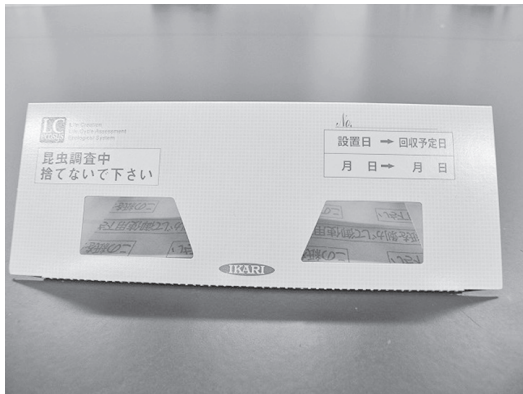


写真1 昆虫調査用トラップ（正面）

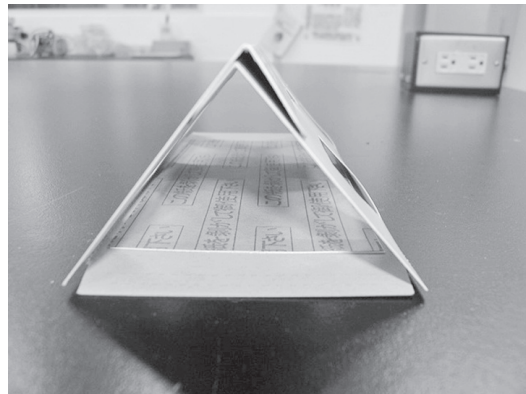


写真2 昆虫調査用トラップ（側面）

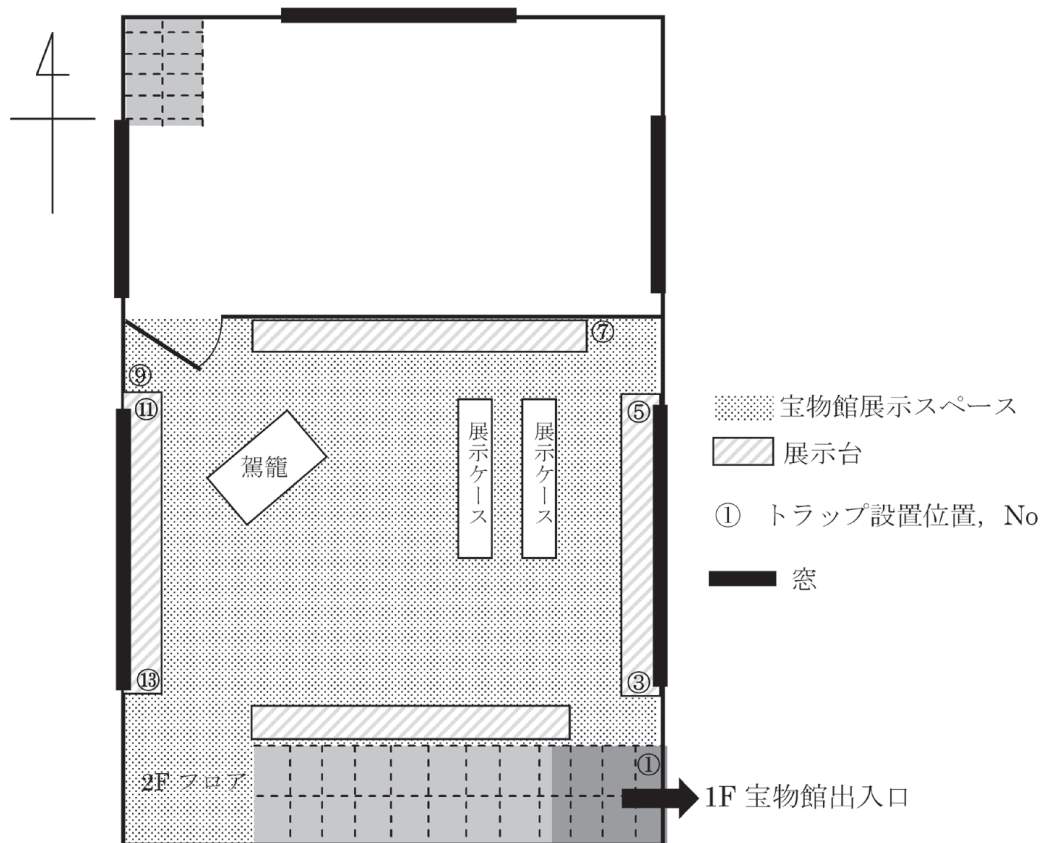


図1 大聖寺宝物館平面図と調査トラップ設置位置

② 生物被害 第2回調査（調査日：2010年11月5日）

第1回調査時の収蔵物や清掃箇所の状態を再び調査した。また、設置したトラップを回収し、各トラップで捕獲された昆虫等の種類を同定すると共に、その数をカウントした。

3. 結果と考察

山形県と東京について、各月の平均相対湿度に対する平均気温をプロットしたクリモグラフを参考にと、冬季に乾燥し、夏季の湿度が高い東京は比較的狭い範囲で変動するのに対し、山形は冬季に湿度が高くなることが特徴である。実際の調査地の温湿度はまだ十分にデータが得られていないため、次年度に報告する予定であるが、概ね同様の傾向を示すと考えられる。

生物被害調査の結果

生物被害第1回調査時に、昆虫によるものと考えられる被害を確認した。木造仏が置かれた展示台に、像の形状に添って細かな木屑が落ちていたため、清掃した。その他、虫の遺骸や糞などを多数確認した。

東西の展示台下にある窓付近にも、カメムシ等多くの虫の遺骸があった。展示室北の部屋にある西向きの窓の冊子に、ヒメマルカツオブシムシの遺骸が無数にあったため、すべて除去した。

第2回調査（11月5日）時に、展示室の木造仏の下には、新たな木屑が落ちていた。そのため、昆虫による被害は現在も進行していることが明らかになった。表1に、回収したインセクトトラップより、捕獲した生物の種と数をトラップごとに表記した。

西向きの窓内側に設置したトラップ1、2で、チャタテムシが多く捕獲されていることが特徴である。チャタテムシは、高湿度を好む性質があり、湿気の多い場所の指標ともなるムシとして知られている。先にも述べたように建物西側が湿潤な環境となっていることがわかる。

表1 各生物調査トラップに捕獲された昆虫と数（表中数値(匹)）

トラップ No.	1	2	3	4	5	6	7	合計(匹)
アザミウマ	2	1	3	1	1			8
ガガンボ	1							1
カマドウマ							1	1
クモ	2		4	7		7	5	25
クロバネキノコバエ	1					1	3	5
ゲジ							1	1
コオロギ						1		1
シミ		1						1
ダニ		1						1
タマバエ	3	1	2	1	1		9	17
チャタテムシ	2	4						6
チョウバエ			2			1	2	5
トビムシ			1		3		1	5
ヌカカ							3	3
ハチ			1	1			2	4
ハネカクシ			1					1
ヒメカツオブシムシ		1			1	1		3
ヒメマルカツオブシムシ								
ヤスデ							1	1
ユスリカ	1		1	1	1			4
ヨコバイ				1				1
合計(匹)	12	9	15	12	7	11	28	94

主なトラップについて、回収後粘着面に昆虫等が捕獲された状態を以下に示した。



写真3 宝物館設置トラップ③（西側ドア前）

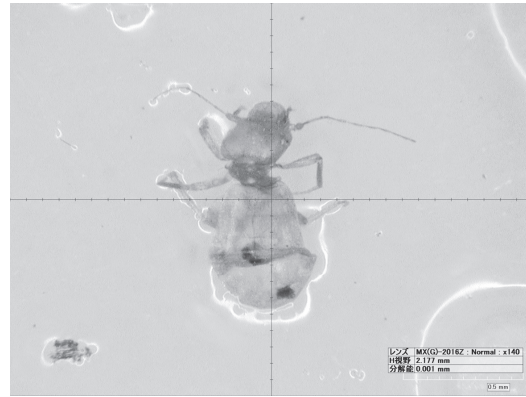


写真4 宝物館設置トラップ④（東側ドア前）チャタテムシ拡大写真

西側窓のトラップには写真では確認しにくいですが、湿度の高い場所を好むことで知られるチャタテムシが捕獲された。



写真5 宝物館設置トラップ⑤（東窓1）



写真6 宝物館設置トラップ⑦（1F入口）

特に1 F 入口に設置したトラップ⑦にはもっとも多くの生物が捕獲された。ゲジやカマドウマなど、大型の歩行性生物もみられる。

宝物館内部の場所ごとの考察

宝物館東側

木彫像などが安置されているほか、卷子、絵馬が展示されていたが、虫害を多くの個所で確認した。

特に「弘法大師坐像」への食害が顕著で、像全体に虫孔と木粉があり、像を移動すると木粉が像の形状に合わせて溜まっていた。上記のように、トラップ設置時にその木粉を取り除いていたが、回収時に新たな木粉が形作られていたことから像内部に現在も虫が食害していることが考えられる。

そのほかの展示作品にも多数の虫孔などの食害痕や虫糞、ヒメマルカツオブシムシの遺骸を確認した。



写真7 像付近の虫糞



写真8 像の形状に溜まった木粉

宝物館西側

今回トラップによる調査では明確な違いは見られなかったものの、窓の西側はすぐ樹木や畑、池に隣接しており、周囲には多くの虫の死骸が確認できた。また、展示室北の部屋の窓枠からはヒメマルカツオブシムシ、ヒメカツオブシムシ、ジンザンシバンムシなどの主要文化財害虫の遺骸が多数発見された。このことから、侵入経路の一つとして西側窓が要注意であると考えられる。

そのため、今後の対策を考えていく上で、宝物館西側を念頭に対策を講じることで今後の被害を抑えることが可能なのではないかと考える。



写真9 西側窓枠に集まった虫の遺骸

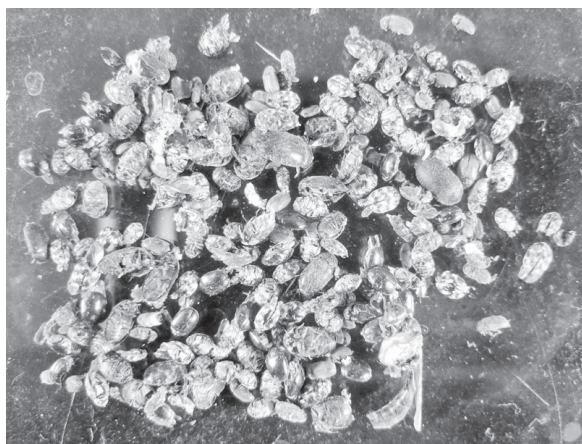


写真10 回収したカツオブシムシの遺骸



写真11 西側展示台の下窓の調査の様子

宝物館北側

北側に展示してある2体の獅子の内、1体は全体に亘って損傷が激しく、現状として辛うじて原型を留め立っている状態であった。

また、それ以外の展示物である、琵琶や琴、それらを納めていた唐櫃などへの大きな被害は見られないものの、琴に1か所虫孔が確認でき、内部に納められていた紙への食害と多量の糞の痕跡が確認できた。また、その周囲にカマドウマ、多数のシバンムシ、イガ類の繭と思われるものも確認できた。展示室北東には、収納スペースとして使用されている部屋に通じる扉がある。その部屋にはカツオブシムシ類の遺骸が多く見つかった西向きの窓があり、有害生物が侵入可能な経路として注意を要する箇所でもある。



写真12 紙の食害と多量の糞 (写真左上)



写真13 唐櫃にたまった昆虫の糞

今後の展開

本プロジェクトの初年度である2010年度は、基本的な環境調査を実施した。大聖寺宝物館では、ヒメマルカツオブシムシなどの文化財害虫が侵入しており、いくつかの収蔵品に被害が発生していることが明らかになった。特に、現在も生物被害が進行している収蔵品や有害生物の侵入口の存在など、早急に改善を要する問題点も明確なものとなった。2011年度には、年間の温湿度データが得られるため、本調査地の環境特性を総合的に理解することが可能となるであろう。また、今年度確認された生物被害については、具体的な対処を実施する必要がある。生物被害が進行している像は、その被害が展示室内の他の作品にも波及する可能性があるため、二酸化炭素を用いた殺虫処置も検討している。建物としては、有害生物の侵入経路として明らかとなった展示台下の窓などに目の細かいメッシュを設置するなど、安価で有効な方法を導入していきたい。

大聖寺の環境調査とその問題点の改善は、本プロジェクトの中で、次年度以降のモデルケースとなりうるであろう。2011年度には、西川町や大江町において新たな調査地も加わる予定であるが、その環境調査においても様々な問題が確認されると予測される。本調査地での手法が有効なものと認識され、他の調査地の環境改善を検討する上でも参考となるよう、成果をあげていきたい。さらに、地域住民と積極的に対話をし、本研究プロジェクトの大きな目的である、住民による文化遺産の保全が継続的に実施されるよう道筋を模索する必要がある。そして次世代を担う若い世代との関わりなども含めて研究の展開を検討したい。山形県は地域文化遺産と住民、我々文化財保存に関わる者の距離が比較的近い地域である。本センターも地域の住民から多くのことを学ぶとともに、文化遺産保存をより一般的なものとして認識してもらえるよう、研究を進めていきたい。

参考文献

三浦定俊、佐野千絵、木川りか：文化財保存環境学、朝倉書店、2004
国立天文台編：理科年表、丸善、2006

平成 22 年度研究調査報告会

はじめに

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」の初年となる本年度は、採択を受けてからの限られた期間の中で内部研究者が主体となって本研究の基盤となる各町での調査活動を始めた段階ではあるが、現地調査から得られた成果と今後の研究事業の展開を深めるために研究調査報告会を開催した。

本報告会は各町における調査・研究の成果について各内部研究者から報告し、外部研究者、各町の関係諸氏、または学内・学外評価委員から意見、講評・指導や客観的評価を受けるとともに、今後の研究事業の展開に向けて議論を深めることを目的に行われた。

主催：東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター
開催日時：2011 年 3 月 6 日(日)13 時 00 分～17 時 45 分
開催場所：東北芸術工科大学 本館 2 階 207 講義室



学内評価委員

・入間田宣夫（東北芸術工科大学大学院長）

学外評価委員：

・三浦定俊（公益財団法人文化財虫害研究所理事長）
・佐藤庄一（山形考古学会副会長）

プログラム

司会：センター長

- 1:00 開会
- 1:00 挨拶 研究事業の概要、各町における本年度の取り組みについて（長坂）
- 1:10 事前視察報告 文化財総合的把握モデル事業視察（岡田）
- 1:20 大江町 文化遺産悉皆調査報告
 - 1) 法界寺文化財悉皆調査
 - ①仏像調査「松山藩酒井家にまつわる諸仏」（岡田）
 - ②書画調査「松山藩酒井家ゆかりの書画と保存」（大山）
 - 意見交換・質疑応答
 - 2) 七軒・本郷地区第1次社寺調査
 - ①仏像調査「仏像にみる地域信仰」（岡田）
 - ②書画調査「『大江町の絵馬』と地域の造形」（大山）
 - 意見交換・質疑応答
- 2:40 西川町 文化遺産悉皆調査報告
 - 1) 吉祥院文化財悉皆調査
 - ①仏像調査「吉祥院と安中坊」（岡田）
 - ②書画調査「吉祥院に見る観音巡礼の遺品と悲母観音」（大山）
 - 意見交換・質疑応答
- 3:45 高島町 文化遺産悉皆調査報告
 - 1) 大聖寺（亀岡文殊）文化財悉皆調査
 - ①仏像調査「亀岡文殊の中世と近世の仏像」（岡田）
 - ②書画調査「宝物殿に見る書画作品と保存」（大山）
 - ③保存環境調査「山形県高島町大聖寺の環境調査」（米村）
 - 意見交換・質疑応答
 - 2) 遺跡調査「戸塚山古墳群実測調査と高島石」（北野）
 - 意見交換・質疑応答
- 5:15 来年度に研究活動に向けて
- 5:30 講 評
- 5:45 閉 会

研究事業の概要、各町における本年度の取り組みについて

長坂：時間になりましたので発表を始めさせていただきます。本日はお忙しい中、お出かけ頂きましてありがとうございます。東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターのセンター長の長坂です。よろしくお願いします。



この会を始めるにあたりまして、少し会の説明をさせていただきます。本文化財保存修復研究センターでは、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」を、本年度より5年間に渡って実践することになりました。今年度が初めの年となります。今年度の現地調査から得られた成果と今後の研究事業の展開を探るための報告会を開催することになりました。本報告会では調査・研究の成果についてセンター内部の研究員が報告致します。それに対して外部の研究者の方及び、フィールドとさせて頂きました各町の関係者の皆様方のご意見を頂くとともに、学内・学外評価委員の先生方から講評を頂きたいと思っております。

本日は学外評価委員として、公益財団法人文化財虫害研究所理事長の三浦定俊先生、山形考古学会副会長の佐藤庄一先生、学内評価委員として本学の大学院長および東北文化研究センター長の入間田先生、さらに学外の研究者として山形大学の伊藤先生、松尾先生、手代木先生、西川町の文化財審議委員の北畠先生、藤本先生、以上の方々において頂いております。さらに大江町、西川町、高畠町教育委員会の方々にもおいて頂いております。

本センターは平成17年から21年にかけて、私立大学学術研究高度化推進事業いわゆるオープン・リサーチ・センター整備事業に採択されまして、地域文化遺産の循環型保存活用システムに関する相互的研究というものを行ってきました。この研究においては、センターの各分野でそれぞれ成果を上げてきており、その成果に関しては年度ごとの報告書を出させて頂いております。この度の研究はその

オープン・リサーチ・センター整備事業を発展させたものです。オープン・リサーチ・センター整備事業においては、各分野がそれぞれのフィールドで行っていたものを、本プロジェクトでは新たに各分野が1つのフィールドで研究を行っていくという目的から始まりました。具体的には西川町、大江町、高畠町を主要フィールドにいたしまして、地域文化財の悉皆調査を実践するということを行います。さらにその文化財の悉皆調査と共に、その文化財を将来にわたって残していこう、保存していこうという新たな研究を加えました。

本研究は、テーマ1の「保存修復活動から展開される地域文化遺産の再発見と新たな価値の創出」とテーマ2の「『環境に配慮し、安全で簡便な地域文化遺産保存管理』を地域住民と展開するための基礎研究と教育普及」という2つのテーマで研究を行います。本年はこの大きな目的のための第一歩となる初年度であります。その成果がどのようなものであるかをご報告いたしまして、皆様のご意見、ご批判を頂きたいと思っております。よろしくお願いいたします。それではこれからご報告を始めさせていただきます。

事前視察報告 文化財総合的把握モデル事業視察

岡田：本センターの岡田靖と申します。今から発表を始めさせていただきます。

まず本日のスケジュールの最初は、歴史文化基本構想・文化財総合的把握モデル事業の視察についての発表をさせていただきます。



歴史文化基本構想とは文化庁を中心にして地方自治体を中心となって推進している事業で、地域の歴史文化の総合的な把握を行い、またその関連する複数の文化財を総合的に捉えることによって新たな価値を見出し、さらにそれによって文化財の価値の向上を図り、それを町づくりへと活用していくというようなことを目的に推進されている事業です。このような歴史文化基本構想の目的は、私どもが進めておりますこの研究事業の主旨と目的、そして方向性を概ね同じくしています。歴史文化基本構想は平成20

年から始まっており、先行して研究事業が推進しているということで、その視察を行うことによって私どもの研究の具体的な方法を学べないかということで、実践地域の視察を行いました。

平成20年から平成22年の3年間にわたって、歴史文化基本構想の文化財総合的把握モデル事業として各市町村に応募をかけ、その中で20件が採択されて実践されております。採択された自治体の中から、今回は高砂市、足利市の2市での取り組みの視察を行いました。

まず高砂市の文化財総合的把握モデル事業についての視察の結果を報告いたします。

兵庫県高砂市は竜山石の生産地として知られています。竜山石は古墳時代の石室にも多く使われた石材で、奈良の方にこちらの石を切りだして造られた遺跡が多く残っています。こちらは採掘場の跡で、杭が打ち込まれて切り取った跡が残っている場所の見学を行いました。こちらは石の宝殿と呼ばれる遺跡で、用途は全く不明の謎の遺跡として位置づけられているもので、四角く切り出した石が下のほうでは地面に繋がっています。こちらは現在、神社の祭神として祀られています。高砂市では以前より大手前大学などとの連携体制をとって、この石の宝殿の調査、又は石切り場の調査を行ってまいりました。また、地元の研究会である竜山石文化会との連携によって墓石の調査などを行い、今回のモデル事業が始まる前から、石文化というものを中心にした研究調査を継続的に進めていたとのことでした。

竜山石の調査



次にこのモデル事業の一環として町並みの調査を実践しておりました。それは、「ひょうごヘリテージ機構」という組織が兵庫県にありまして、それは震災によって町並みをしっかりと残しておかなくてはいけないという気運が高まったことによって設立された団体なのですが、そちらの方との連携体制によるものです。高砂市内の一部の地域に古い民家や塀などが残っている箇所を調査を進めたり、又は道の縁の部分に竜山石を使った遺構が沢山残っているのですが、その調査を行っていたりしています。

町並み調査（ひょうごヘリテージ機構との連携）



有形文化財の調査に関しては、専門の担当者がいないということではなかなか進んでいないというのが現状でした。その点が高砂市の今回のモデル事業での大きな課題であると担当者の方々は話されていました。

もう1点、高砂市は海に面している都市なのですが、海沿いの方に近代遺産が残されています。それらの近代遺産に関しては、以前より町の方で「港町づくり構想」という事業が推進されているのですが、そちらとの連携体制がなかなか今回の事業と上手く結び付けられないということでした。それについては縦割り行政といった部分での苦労があるということをおっしゃっていました。また、近代遺産をどのように近世以前の文化遺産と繋げていくのかというようなことも、大きな課題として捉えているとおっしゃっていました。

次に足利市での文化財総合的把握モデル事業視察の報告を致します。

足利市はご存知の通り室町幕府を築いた足利氏の居住地であった町で、多くの足利氏に関係する文化遺産があります。著名な所ですと樺崎寺、足利学校、鏝阿寺などがあります。

足利氏関係の豊富な文化遺産

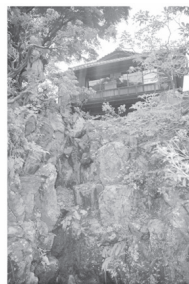


足利市では、それらの建物や歴史遺産を中心に今回のモデル事業を構想されていたのですが、ただ色々問題もありまして、昭和五十四年から五十九年に文化財の総合調査が行われ、有形文化財の仏像や絵画が調査されたのですが、それ以降の調査は行

われておらず、現時点では有形文化財の調査担当官がいないというのが現状だそうです。また、先ほどの足利氏に關係する古い遺産・文化財に関しては色々調査は進んでいるのですが、近世の、特に江戸時代のものも多くこの街の中にあるのですが、調査がなかなか進んでいないということで、それをどのように位置付けていくのかというのが町としての課題だとおっしゃっていました。

今回のモデル事業の中で足利市が推進している事業でとても興味深かった活動は、庭園の調査であります。それは、足利市に足利庭園文化研究会という地元の組織があり、その代表の方がとても熱心な方で、庭園の復活というものをテーマに整備をしようとして活動されています。次の写真のお庭は町の名士の住宅なのですが、今までは庭師の方が今風の手入れの仕方では整備されていました。ですが、足利庭園文化研究会の代表の方が、元々庭が造られた時の形はどうだったのかということを検証して、庭を元の姿に戻すという活動に取り組まれておりました。そして、モデル事業の1つとしてその方が手を入れられ、この庭は造られた当初の姿に復元されたということでした。それがとても町の中で評判になっておまして、他の所でも随時そういった活動を展開されているとのことでした。こちらは近世に造られた庭なのですが、その近世の庭に対してこのような取り組みを実践しているのは全国でも珍しいことで、とても興味深い活動をされていると感じました。

名勝・庭園調査
足利庭園文化研究会の活動



この2市の取り組みについてまとめますと、行政主体でやっているということで目的の主眼が町づくりにあるという点で共通していると思われます。そして、文化遺産をどう捉え、それをどのように現在の町づくりに活かしていくかということを強く目的において、事業を推進されていると感じました。しかし、それらを推進していくにあたって、現状では市民の歴史意識というものがまだ低く、また地域ごとに文化遺産保護の意識レベルにかなりの差があるということが、町全体として取り組んでいく中で大きな課題だとおっしゃっていました。また、先ほ

ども申しました通り、近代遺産との関連性や現代生活との文化遺産の関係性を見出していくという点で、なかなか有効な解決策が出せないことも課題であるとおっしゃっていました。

それと、これは行政ならではの問題で、今日は行政の担当者の方々もお集まり頂いているので納得される所もあるかと思うのですが、教育委員会と他の部署との連携がなかなか取りづらいう問題があります。それは町全体の文化遺産保護の活動において総合的な活動組織の構築が難しいということが、行政の体制の実状としてかなり深刻な問題であるということをおっしゃっていました。また、有形文化遺産の調査が、専門の担当官がいないために、本当に悉皆的な調査ができていないということも大きな課題であるということでした。さらには、指定制度と登録制度という文化財の保護の制度がありますが、それらをどう使い分けるかということも、文化庁が推進している理想と現場での現実とのギャップがあり、どのようにこれらの制度を適応していったらいいのかなかなか難しいところがあるとおっしゃっていました。それと関連して、歴史的建造物群と同じように、美術工芸品も群として保護しようというのが今回の歴史文化基本構想の目的なのですが、それが現行の登録制度の活用では上手く出来ないですし、指定制度でももちろん難しい。それを今後どのように保護していくかというところが、これからの大きな課題であると担当の方々はおっしゃっていました。

以上、雑駁な形ではありますが、歴史文化基本構想文化財総合的把握モデル事業の視察の概要についてご報告いたしました。

それでは次に、本センターでの本研究と、この歴史文化基本構想文化財総合的把握モデル事業との相違点についてご説明したいと思います。

まずは、主体が我々の研究では大学研究機関であることと、歴史文化基本構想では行政主体であることの違いというのが挙げられます。そのことによる1点目の特徴は、私どものセンターが文化財の保存修復を主な研究領域としている点です。具体的な分野では、近現代彫刻、仏像、工芸品などの立体作品と、絵画では掛け軸や屏風、古文書などの東洋絵画作品、近代絵画を中心とした西洋絵画作品、そしてそれら全般の科学研究を行う保存科学があり、さらに日本美術史、西洋美術史、そして考古学による遺跡や埋蔵物などの保存処置など、一応一通りの文化財保存修復に関する分野が揃っております。このような私どものセンターの組織で、複数分野での連携体制を取って調査をすることによって、地域文化遺産の総合的な悉皆調査が可能であると考えており

ます。

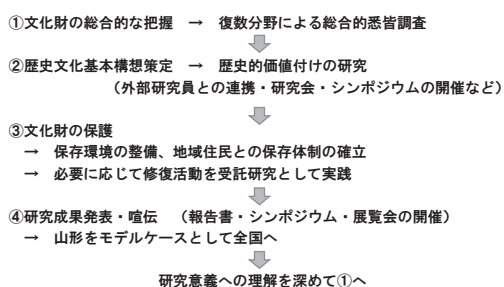
2 点目としては、他大学との連携体制がとりやすいという点が、大学機関としての特徴として挙げられるかと思います。

3 点目は大学による学術的な視点による研究を推進することによって、地域に偏ることのない客観的な視点による文化遺産の評価が可能である点が挙げられるかと思います。これは町の情報を、実際にその街に住んでいない我々が、実際にその町に住まわれている郷土史や地域史の方々と比べて、少し引いた形で文化遺産をとらえられるのではないかと考えられるためです。調査対象を出来るだけニュートラルな視点で捉えること、またそれを歴史的にとらえていく時にも、客観的な視点での研究姿勢をとることが重要であると考えており、それが大学機関が調査活動をするひとつのメリットではないかと考えております。

4 点目としては、我々が保存修復を専門とすることによって実務的な保護活動が実践可能であるということです。それはつまり、地域での温湿度環境の保全であったりとか、実際に損傷を受けているモノに対する修復や、その保存活動が可能だということです。

最後に、行政区分に縛られずに活動できる点も、大きなメリットであると思われます。これは、行政が主体になりますとどうしても町の外のものはなかなか調査しづらい部分がありますが、私どもであれば、行政区分にとらわれずに調査・研究をすることが可能です。今回、西川町、大江町、高畠町の3町を主要な研究対象とさせて頂きましたが、必要があれば超域的な調査研究を行っていく予定であります。なぜなら、先ほどの3町は現代の行政区分によるものであって、当然歴史的に考察していく上ではその行政区分からはみ出した関係性も考慮する必要があると思われるため、他の町での調査活動が必要になってくることが予測されます。そういった時、大学が主体で研究を進めていくことによって、行政区分に縛られることなく横断的、超域的に研究活動を行うことが、地域文化遺産を総合的に把握していく上で大きなメリットとなると考えております。

本研究の活動進行手順



最後に本研究の手順について、先ほどの歴史文化基本構想を例にしてご説明します。

まず歴史文化基本構想での文化財の総合的把握が私どもの研究の中ではどこにあたるかということ、先ほども申した通り複合分野による悉皆調査を行うことによって、町の中にある文化財を総合的に調べ上げるということをいたします。

それを次に歴史的価値付けの研究ということで、地域の横の繋がりや時代的繋がり、または制作者の繋がりであったりとか、宗教や信仰の繋がり、または為政者の繋がりであったりとか、または六十里越街道の様な街道や、最上川などの舟運での繋がりといったことも含め、対象地域の歴史・文化に関係する様々なキーワードで個々の文化財を複合的に考察し、その関係性を総合的に繋げ、モノから地域文化の形を編み上げていくといった研究活動を第二段階として実践していきます。こちらは、私どものメンバーだけで研究していくことはなかなか難しいので、学外の歴史、郷土史、または地理史などをご専門とする先生方にご意見を頂戴して、地域文化遺産の歴史的価値付けについて構築していけたらと考えております。その研究の具体的な方法としては、勉強会や研究会、またはシンポジウムなどを定期的に開催し、調査した個々の文化財と地域の歴史との関係性を考察していくことができればと考えております。以上のことをテーマ1という形で捉えております。

次に、大きく分けてテーマ2とした研究に関しましては、テーマ1で文化遺産価値の向上を図ったものを、どのように地域で残していくかについて取り組みます。それは私どものセンターが主体となつてやることだけではなく、やはり地域の文化財は地域の住民の方々が、または行政の方々が主体となつて守っていくというのが重要ですので、それに対して私どもがどのようなアプローチができるかということを考えていきたいと思っています。その具体的な方策としては、環境調査を踏まえた保存環境の整備というものの提案を行ったり、専門家から見た保存環境の改善の方策について地域住民の方々と一緒に取り組んでいければと考えております。それは、モノが壊れないようにする予防的な保存活動と位置付けております。

しかし、すでに損傷してしまっていて修復の必要があるようなものに関しては、受託研究という形にはなるのですが、センターで修復事業も行っていきたいと考えております。それによって、損傷した状態ではなかなか文化的な価値というものの認識が得られないモノに対して、修復活動を通じて関心を促すということもできますし、実際に修復されたモノ

がまつられるようになれば、文化の見え方というものも変わってくるのではないかと思います。

以上のように、調査、歴史的位置づけの考察、保存、そして修復といった研究活動を一括りにして成果とすることができれば、それを研究発表という形でシンポジウムや報告会などで喧伝したり、または地域で再発見した一つのキーワードで繋がる文化遺産を集めて展覧会を開催するなど、色々な具体的な提案が考えられますが、それらを通じて研究成果をまとめる展開をしながら、成果をさらに高めていきたいと思っております。そして最終的には、この山形でのこの研究活動の成果をモデルケースとして、全国の地方での文化遺産保護に貢献していければというような考えも持っております。それによって、またこの研究の意義や理解が深まると思われ、最初の総合的な文化遺産の把握のための研究調査活動というものが、他の地域でもやり易くなると考えます。そのような循環的な研究活動をしていきたいと考えております。以上で発表を終わります。

長坂：どうもご苦労さまでした。文化庁の行なっております歴史文化基本構想事業と私どもの研究との違いということと、それから私どもの研究の目的についての具体的な研究方法についての報告でした。

大江町 文化遺産悉皆調査報告

法界寺文化財悉皆調査

岡田：引き続き岡田が発表させていただきます。

それでは、三町の研究域の中でも、まず大江町における調査活動からご報告させていただきます。大江町は近世の時代、庄内藩または松山藩の影響下にありまして、それらに関係する寺院・神社が町中に多くあります。その中でも、松山藩酒井家の菩提寺の一つであります法界寺を、大江町の中での第一回目の調査の対象とさせて頂き、文化財悉皆調査をさせて頂いたので、そちらの概要をご報告させていただきます。

法界寺は、慶安元年（1648年）に秀天大和尚によって創立されたとされる浄土宗の寺院です。大江町の中でも近世に創立された寺院というのは二軒だけと少なく、本寺はその内の一軒ということになります。場所は左沢という大江町の中心部に位置し、その中でもJR左沢線左沢駅のすぐ近くに位置しております。

江戸時代の初め頃に浄土宗を信仰する酒井氏が松山藩を成立させたときに建立した法界寺は、同時に大江町の民衆の浄土信仰の拠点としての意義をもっていたと推測されております。また、寺には歴代松山藩主の位牌が祀られており、松山（現在の酒田

市）から遠い地理関係にもあるにもかかわらず、二代藩主、三代藩主、七代藩主が法界寺に訪問したと記録に残っております。

① 仏像調査「松山藩酒井家にまつわる諸仏」

ではまず、仏像の悉皆調査の内容について報告させていただきます。

こちらのお像は、法界寺の位牌堂に安置されている法界寺開山者の秀天上人の銘が残る阿弥陀如来立像です。像は背中面が全く平滑的に彫り込まれておりまして、その面に朱漆で銘文が書かれております。銘文には寛文四年（1664年）と書され、それは開山から16年後にあたります。そして秀天上人の作であると銘記されております。実際に秀天上人が自ら彫刻されたのかは定かではありませんが、秀天上人に関係する像であることは間違いないと思われます。（法界寺② 木造阿弥陀如来立像 参照）

次に、こちらが同じく位牌堂に安置されております木造阿弥陀如来坐像です。法量は像高で30.2cmです。こちら像には立派な造りの台座が現存しており、蓮肉の上にぴったりと像と一致する跡が残っておりますので、一具のものと見て間違いないと思われます。そして光背の裏には陰刻で銘文が刻まれ、元禄三年（1690年）の作であるということが分かります。ただ、こちらの施主である方々のお名前に関しては、現時点での調査ではどなたであるかということまでは特定できておりません。今後研究を進めて、像と施主らの関係性についても調査していきたいと思っております。（法界寺③ 木造阿弥陀如来坐像 参照）

次に、こちらが法界寺の御本尊として祀られております阿弥陀如来三尊像です。現状ではとてもきらびやかな外観を示しておりますが、こちらは平成8年に山形にある小島源五郎（仏具屋）でクリーニングされたということです。阿弥陀如来立像は像高が81cmあり、本当にとても立派なお像です。衣部分に細かい金泥で描かれたとても精緻な模様がみられ、技術的にも卓越したものであります。（法界寺④ 木造阿弥陀如来三尊立像 参照）

次に、こちらが脇侍の観音菩薩立像と勢至菩薩立像です。これは腰をかがめた形式なので、この三尊は来迎形の三尊像であるといえます。脇侍にも同様に、衣文に細かい文様が描き込まれております。これら三尊は、一部欠損等が見られるものの保存状態が非常によく、一部の欠損箇所は現状では補修されております。

阿弥陀如来立像の台座の内側に板が張り付けられていて、銘文が書かれております。銘文によれば、延享二年（1745年）に京都の仏師の前田祐慶という

方が彫ったと書かれております。脇侍の方にも台座に銘文が記され、阿弥陀如来立像と違う名前なのですが、大仏師、多分「かんせい」だと思われる文字が見られますが、はっきり読み取れませんでした。これら異なる名前が見られた点に関しては、分業していたということになるのかどうか、現時点では「前田祐慶」という仏師の調べがついていないので、京仏師の家系図等をたどりながら今後調査していきたいと思っております。

現時点で推測される可能性についてご報告します。大江町史によれば、松山藩三代藩主の酒井忠休（在任期間は享保十七年（1732年）～天明七年（1789年））が、左沢に元文二年（1737年）に来訪したという記録があります。その時に安藤甚兵衛という家臣が案内をして、法界寺に来たという記録が残っております。忠休は幕府でも要職に就いていた方で、奏者番や西の丸の若年寄等を歴任した人物であります。この阿弥陀如来三尊像は銘文により1745年の制作であることが分かるため、忠休が法界寺に来訪した1737年から9年後に造立された像となります。初代松山藩主と二代藩主が法界寺にも祀られており、また二代藩主の50回忌を天明五年（1785年）に法界寺で忠休が営んでいることが記録からわかるため、そういったことをふまえて考えますと、1737年に来訪した際に法界寺の状態を見て、阿弥陀如来三尊像を寄進した可能性もあるのではないかと考えております。いずれにしても、忠休の在任中の造立であるため、何らかの関わりがあったのではないかと推測しております。

次に、本堂の須弥壇の裏手に安置されております善導大師と法然上人の木造立像があり、位牌堂には多数の地藏像が祀られております。（法界寺⑤ 法界寺安置のその他の諸尊 参照）

次に本堂から少し離れた境内に建てられております観音堂に安置されている菩薩立像についてご報告いたします。

この像は、腰を屈臂している像なので、本尊と同じく来迎形の三尊像の脇侍像であったと考えております。ただ現在では独尊として厨子内に納められ、観音堂の本尊として須弥壇の中央に祀られております。こちらは造形・様式的に見て、先ほどご報告しました本堂の御本尊よりも制作年代が古い江戸時代初期頃の作ではないかと見受けられます。これは推測の域を出ませんが、仮にこちらの像が来迎形の三尊像の脇侍で、現在の1745年の造像の三尊よりも前の作であるとした場合、この像は初代の三尊像である可能性も考えられます。つまり、現在の三尊像の造像年である1745年は開山されてから約80年後になりますが、その間に何らかの災害があって阿弥

陀如来像と片方の脇侍が失われ、こちらの一体だけが残った。それで忠休が来訪した際にその現状を憂い、現在の三尊像が造られて、残った菩薩像を独尊として祀ったのではないかと推測しております。（法界寺④ 木造観音菩薩立像 参照）

またもう一体、観音堂には木造菩薩立像が祀られております。

こちらは、首の辺りで真横に亀裂が入っておりまして、元々体幹部と別材の物をつけたのではないかと見受けられました。腕の付け方も同じようにちょっと不自然な形でついております。こちら腰を曲げていますので、来迎三尊像の脇侍であったとは思われますが、先程の菩薩像とは体幹部だけを見ても衣文の調子が大分違いますので、同時代のものではないことは確実視されます。こちらの像の由来については本調査では全く分かりませんでした。多くの修理が後世に加えられて現在に至るということだけは確かなようですが、その為に制作年代の推測も難しい状況にありました。（法界寺⑤ 法界寺安置のその他の諸尊 参照）

次に、観音堂の木造弘法大師坐像についてご報告します。こちらは大江町教育委員会により以前調査された『大江町の佛像』、『大江町の仏師』という報告書の中で紹介されている像です。



明治十八年
左沢原町仏師 四代 林治郎兵衛の作

こちらは御詠歌を書いた額なのですが、『大江町の仏師』によれば、明治十八年に最上・村山地方の寺院に新四国最上八十八カ所霊場を設置し、その中で法界寺を47番目としたという記録があります。額と像を一緒に造って奉納することが新四国最上八十八カ所霊場の設置のルールとしてあったようで、この額とお像の形式、時代的な背景から見て、『大江町の仏師』では法界寺のすぐ近くの左沢原町に居住していた仏師で、江戸末期から明治初期にかけて四代にわたって活躍した林という仏師の一門の四代目、林治郎兵衛の作であると推定されています。ちなみにこの林治郎兵衛は、山形を代表する近代彫刻家である新海竹太郎の師匠にあたるといわれております。

最後になりますが、観音堂に祀られております三

十三観音像についてご報告します。こちらは最上三十三観音で、一番の若松寺から始まりまして三十三番の庭月まで全てそろっております。ただ各像の一部に欠損がありまして、特に光背などに欠損している箇所があります。また、三十三観音とは別に同じ大きさ位の2体の像があり、それを合せて35体の小さな仏像が観音堂に安置されております。

三十三観音像は、『大江町の仏師』などの先行研究には出てこないのですが、衣文や光背の文様の彫り方、または像、岩座、方形の台座の形式の仕方が、林治郎兵衛作と確認されている他寺の三十三観音像と酷似しているため、こちらの像も林治郎兵衛の作ではないかと今回の調査では推測しました。また、方形台座に寄進者の名前が書かれておりまして、安藤三吉という名前がみられます。名字があるという点でも明治以降ではないかということが言えるのですが、先程の弘法大師像を最上八十八箇所霊場として設置した祈願者の一人に安藤三吉という名前があり、同一人物であるすればこの観音像は明治期のものであると言え、先の造形的な一致点から見て弘法大師像と同じ林治郎兵衛が彫った可能性が高いのではと推測しております。



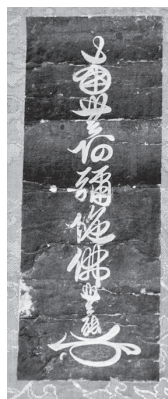
以上で仏像関係の発表を終わります

②書画調査「松山藩酒井家ゆかりの書画と保存」

大山：本センター東洋絵画修復の大山龍頭と申します。それでは続いて法界寺の文化財悉皆調査のうち、書画の調査について述べさせていただきます。

今回の悉皆調査では仏像の調査班と書画の調査班が合同で入って実施しました。日程は2010年9月の14日から16日、後日12月24日に追加調査を行いました。調査した箇所は、法界寺の本堂と観音堂と山門の3箇所です。法界寺は先程岡田研究員が申し上げました通り1648年大江町の松山藩の成立と同時に創立されたお寺になります。調査内容については、まず作品の状態の記録として写真撮影、赤外線写真の撮影を行っております。損傷状態を調査して調査を作成し、保管場所についても可能な限り調査しました。併せて作品についての聞き取り調査を行いながら作品の背景について探りました。

調査した対象は、掛軸や額装の作品、扁額などですが、それが8件、法界寺が一時期無住であったために再建を果たした頃からの歴代の住職の写真が9件ありました。後日12月に調査した古文書が1件あります。古文書の総数は50点を超える数があったわけですが、古文書については全ての内容は記録できておらず、保管状態のみ記録しています。では、調査結果に移りたいと思います。



法界寺の寺宝として様々な案内に載っている作品で、当麻曼荼羅図があります（法界寺⑦当麻曼荼羅図参照）。紙本着色の仏画ですが、寸法が本紙で約2m四方の大幅になります。実際にお寺の堂内に展示すると、天井から床までぴったりと収まってしまう大きさです。制作時期等は明らかになっていませんので、図像的な部分

から時代などを読み解くことと、三段仏画表具の総縁部分「南無阿弥陀仏」という付箋の下部に文字と花押が書かれています。この解読をすすめることで研究が進むかと思っておりますが、残念ながらそこが読めていません。損傷状態が進行していきまして、表具裂の隙間から捲れ上がっている箇所ですとか、横折れが繋がっている箇所が画面全体に見られます。斜光をあてて見ますと、画面の全体に亘って折れや損傷が進行しているのがよく分かります。修復を必要としている状態とは思うのですが、作品がどういう位置づけにあるかということが分かってこない、修復という事例に入っていくことが難しいのではないかと思います。そこで当麻曼荼羅図がどういう位置づけにある作品なのか調査から分かった点について報告します。

当麻曼荼羅図というのは、正式には阿弥陀浄土変相図といいます。中国の浄土教に基づいた観無量寿経変相図です。当麻寺にある国宝の当麻曼荼羅図が

有名で、縦横 4 m 弱という巨大な作品です。古くから損傷がひどかったために、原寸大の写本が作られ、転写をされたという経緯があります。1 回目は鎌倉時代の建保年間に行われていますが現存していません。第 2 回目は 1137 年に転写されました。原寸大の転写に併せて 4 分の 1、6 分の 1 といった縮小版、あとは木版に起こしてそれを多くの人に流布することが始まりました。第 3 回の原寸大の模写が文亀三年(1503 年)。さらに下って貞享当麻曼荼羅が貞享三年(1686 年)に制作されました。貞享本は基本的には図像を文亀本 1503 年のものから写し取っていますが、細部に違いがあります。そういう経緯の中で多くの写本あるいは、刷本などが作られ、当麻曼荼羅は日本の各地に伝えられています。

さて、文亀本と貞享本を本作品と比べますと、色彩構成等に貞享本と共通している点があることが分かります。現在変褪色が進行していることも考えると当初はもっと類似した色彩だったと思います。阿弥陀如来背後の石畳に小菱を配することが貞享本との大きな違いということになっています。



こちらの画像は、個人蔵の版本の当麻曼荼羅図です。正確な年代は把握できていませんが江戸時代に作られたと思われる作品です。寸法も法界寺本に近い、これが拡大した図です。法界寺本と細部に亘って共通する図像だと思います。この石畳に小菱が描かれている所が法界寺本、貞享本とも共通している所で、文亀本ではこの菱形の紋がないために、法界寺の当麻曼荼羅図も貞享本以降に制作された可能性があると考えています。また、法界寺本は木版の当麻曼荼羅図を下書きとして彩色をして仕上げていますと考えられます。色彩構成についても貞享本を参考にしているということで、制作時期は 1686 年以降に制作された可能性がある。色料は非常に美しく、朱色一つとっても様々な色調に描き分けられていて非常に手が込んだ彩色がされている。木版に彩色して描いていることについては簡略化をしたために木版に彩色したというよりは、この時代の一つの特色だったのではないかと考えています。制作年については 1686 年以降であれば、近代になって制作した可能性も考えられるけれども、修復箇所が数種類見

られることから考えると、最近の作例ではなく、かなり時間が経っていると考えています。そのため貞享本という当麻曼荼羅図が成立してからそれ程時代が下らない頃に制作されたのではないかと推測しています。

そのあたりの時間軸を視野に入れながら、他の作品を見てみたいと思います。(法界寺⑩ 扁額 参照)

こちらは扁額で「左沢山」という山号が記されています。寸法が縦 35.5cm で横が 91.8cm。法界寺の建立にあわせて制作されたといわれている作品です(⑩-2 参照)。表面の緑の塗料は既に剥落し始めていてすぐ取れてしまいそうですが、緑の色料の下には青い色料が確認され、以前は青色の文字だったことが分かります。もう一つの扁額が「法界寺」と板地に彩色されています(⑩-3 参照)。こちらには延享三年という銘が記されていました。肉眼では確認し難い状態でしたが、赤外線写真から墨書が確認できました。表面は木地が露出していますが、顔料が付着していて、当初は彩色されていたことが分かります。もう一点「左沢山」の扁額があります。紙本の作品で裏に墨書があり八代藩主酒井忠匡公の書となっています。損傷が進行していて、山という文字も破損が進んで危険な状態です。後日改めて古文書調査に伺った際、五十数点にのぼる古文書類、件数は一件として数えたのですが、調査した中に「詠境院殿」の法事に関する記録が含まれていました。詠境院殿は二代目の酒井忠孚公のことをさしています。これらの作品を年代順に並べてみるとこうなります。

調査作品内の年代

慶安元 (1646) 法界寺設立 山号額「左沢山」
 貞享三 (1686) 貞享本当麻曼荼羅図
 享保二十(1735) 二代 忠 豫 十二月十六日松山にて死去。心光寺に葬る。
 元文元 (1736) 式次第 詠境院殿
 元文二年(1737) 三代 忠 休 左沢を廻村。巨海院、法界寺にも参詣
 延享三 (1746) 額「法界寺」
 「延享三年丙寅年七月十三日當山良善上人代」
 宝暦五 (1755) 「宝五の大飢饉」
 天明三 (1783) 「天明の大飢饉」
 天明五 (1785) 詠境院殿(二代忠豫)五十回忌法要を法界寺で執り行った。「安部昌良家藏書・大江町史」

山号額「左沢山」:「奉納 酒井忠匡公 御筆 額一面 鈴木小市 庄司三郎兵衛」 酒井忠匡 安政三(1856)~明治四十四(1911)

詠境院殿法事式次第「龍集乙卯十二月二十八日」
 乙卯 1735、1795、1855、1915

一番古い山号額が「左沢山」という山門にかけられていた額になります。二代目の忠孚公が享保二十年(1739 年)に亡くなりました。松山の心光寺に葬られますが、法事に関しての文書が法界寺に残ることから法界寺でも法要が行われただろうと思います。以下、延享二年に三代目の忠休公が延享三年に山号額「法界寺」を奉納されている。もうひとつ、大江町史によると天明五年には詠境院殿の五十回忌

法要を法界寺で執り行ったという記録があります。おそらく、これだけ当麻曼荼羅が大幅であるのは、なんらかの大きな動きにあわせて制作されたのではないか、この五十年の間のいずれかの時期で制作されたのではないかと推測しています。もうひとつ注目したいのは、宝暦五年と天明三年に大飢饉が起こっています。当麻曼荼羅という浄土教の仏画がこのような時期に作成されても不思議ではなかったのではないかと推測をたてると当麻曼荼羅の成立時期としては貞享年の成立以降で忠予の菩提を弔うための意味があるとすれば1736年、あるいは飢饉などにより疲弊した農民を癒す意味があるとすれば天明五年(1785年)、この時期が制作時期の範囲で、いずれにしても三代の忠休が在世していた時代であることから制作にも関わっていたのではないかと考えています。また、彩色がとても美しいので地元での制作のみならず、最上川の水運が身近にあった大江町であるとすれば、京都から運ばれてきた可能性なども今後考えてみる余地のあるところだと思います。



当麻曼荼羅に続く大きな作品で、法界寺には仏涅槃図が所蔵されています。(法界寺⑧ 仏涅槃図参照) こちらには後ろに墨書きがありまして明治十六年の年号と施主の板垣安治という名前が入っています。法界寺は以前の山形知事、板垣清一郎氏とも関係の深かったということで、関連があるのかと思っています。作品をみますと、ちょっと変わっている阿修羅が描かれていたり、動物も独特な造形が確認されて、非常に表現が豊かです。

ただやはり本紙の横折れ等がヒビになり、損傷が進行していて、本尊の釈迦では、横折れ等に金泥による補彩箇所が確認されます。ということは、明治の記載については作品を制作した時期ではなくて、作品を修復した時期というふうを考えられます。そうすると、この独特な造形というのは江戸時代の作例ではないかと考えられ、これについてはまた今後なんらかのかたちで調査を続けていきたいと思っています。作品自体は保存箱に納められておりま

す。元々収められていた箱ではないと思うのですが、木の箱に納められて保管されています。

もう一点がこちらの幽霊図ですけども(法界寺⑨ 幽霊図 参照)、後ろに墨書きで山形懸下西村山郡法界寺桜蘭齋武田墨霞が描いた、という記述があります。近くで見ると、迫力のある造形を持った幽霊画で、非常に素晴らしい作品。細部まで緻密に描かれた作品で、あまりこの武田墨霞という作家を存じ上げなかったのですが、どういった作家であったか調べてみました。武田墨霞は山辺町に生まれました。二年間絵の師匠について勉強をし、その後は自由奔放な画家生活を送りました。昭和二六年に山形市旅籠町永昌堂で印刷された「山形県村山四郡書画諸先生貴名概略」という表がありますが、その中に筆頭である柿本鉄堂の隣に名前が記されており、地域の中では本当に活躍をした作家であったということが分かります。山辺町には墨霞の幽霊図が三幅残っていると山辺町史に記されておりまして、一件については習作。それが生家の武田長衛門宅から菩提寺の山辺安国寺に奉納されているということです。もう一点は専念寺に納まっている、幽霊画を描く経緯となった羽田重衛門という方が奉納された作品です。山辺町史では残る一点が、大江町左沢実相院にあると記されているけれども、もしかすると、こちらの作品がそれに該当するのではないかと考えています。そのあたりは今後明らかにしていければと考えています。残る資料は明治昭和に入ってからの写真資料になります。一時期無住になっていた法界寺ですが、本堂は創建当時から今も残っています。屋根は茅葺きではなくて現在は銅葺きですけども、本堂内には歴代の住職の写真が掲げられていました。

また観音堂には観音巡礼にまつわる額等が納められております。今後の課題ですけども、今回調査をした当麻曼荼羅図あるいは涅槃図についての追跡調査を行うこと。また、大江町においての悉皆調査の継続を行うこと。地域で活躍した作家の再評価という観点から、武田墨霞の幽霊画の調査を行っていきたいと考えています。悉皆調査を合同で行っていることで、お互いの気付かない部分、私達でしたら仏像の裏書きとの比較、または古文書の記述との照合等々を進めていくことで新たな発見をして、まず地域の文化遺産への知見が得られればと考えています。これで発表を終わります。

法界寺文化財悉皆調査 意見交換

長坂：どうもありがとうございました。ただいま、大江町の法界寺の悉皆調査の報告をさせて頂きました。

今の報告の通り、法界寺は松山藩の菩提寺という性格のお寺でございます。法界寺の仏像や当麻曼荼羅などの存在が、松山藩の菩提寺のお寺としての法界寺の歴史について意義があるものではないかと思われれます。特に今の発表にあった現在の御本尊の施主について、三代忠休公が関係されているとの報告がありました。この三代忠休という方のときにどうも法界寺をずいぶん世話をされたというような感じがいたします。忠休という方は幕府の奏者番などの要職を務めた方とのことで、法界寺にとって松山藩の三代忠休という方はずいぶん意味があるような気がいたします。また三代忠休という方は、松山藩の歴史にとっても重要な人物ということになるのでしょうか。その辺、松尾先生何かご意見ございませんか。

松尾：すいません。知識がないものですから、今後の検討課題にさせていただきます。逆にちょっと一つ質問をいいですか。

当麻曼荼羅は大体絵解きで有名ですよ。ですから、そういうことはやっていたのでしょうか。



大山：申し訳ありません。その辺の背景についてはまだ調べておりません。

長坂：当麻曼荼羅ですけれども、印刷されたものに彩色したというやり方だというのは、これはやっぱりひとつの新しい発見ではないかと私自身は思っています。そういうことはきっと江戸時代はやってたのでしょうか。これだけ大きなものを印刷してそれを彩色するという例はあまり聞いていないので、これをきっかけに探せば他に何か出てくるのではないかなという気はしますが。そうすると、江戸時代の江戸錦の広がりや道具などからの観点からの調べ方で研究を進めていきますと、仏教史でも大きな意味を持つのではないかなと、私個人的には思います。

半田：木版彩色は室町期でもかなり盛んで、東寺なんかでも木版彩色の両界曼荼羅などがありますので、室町期には木版彩色がかなり始まっており普及し始めていると感じております。

戸村：法界寺の戸村と申します。私どもも昨年住職

を亡くしまして、若い者が残されて何も分からなかったのですが、このように調査していただきまして、法界寺の報告書をいただきまして、宝としてこれからも大事にしていきたいと思っております。

それから今、当麻曼荼羅の件で話題になっておりますけれども、法界寺では秋と春の彼岸に一週間掛けております。それから涅槃図は、今年の場合ですと、旧暦の二月十五日、お釈迦様が亡くなった日ですが、寒いものですから旧暦でやっております。それが三月の十九日土曜日になっております。終日掛けておりますので、もしよろしければ左沢のほうにお運びいただければと存じます。そのときに一年に一度、幽霊画も一緒にお出ししてお参りさせていただきます。

それから当麻曼荼羅ですが、松山の心光寺さんに私の眼からみてまったく同じものが飾ってあるのを私随分前ですけどお参りさせていただきました。

以上でございます。このたびは本当にありがとうございました。



入間田：今の話を承って、興味があったんですけど、当麻曼荼羅。それからこの一番目立つ上のところに〈南無阿弥陀仏〉とあって、花押がある。あれはどなたのかという言い伝えはありますか。

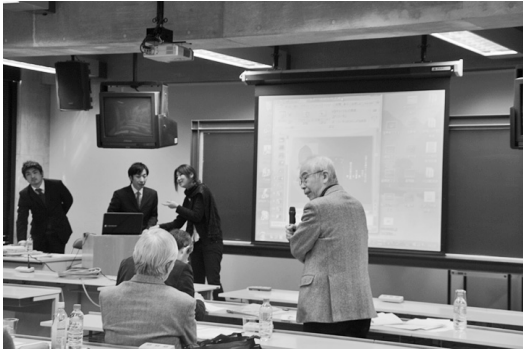
戸村：住職昨年亡くしまして、わたくしども本当に何も分からなくて今回の調査に本当に救われております。

入間田：そうですか。いや、あれはもしかすると、本山の住職のそういうものかなと思ったのですが。

あの花押が誰の花押かということ。つまりこれが、正真正銘の当麻曼荼羅のありがたいものだよという証明になる。浄土真宗だと東本願寺だったり西本願寺、つまり偉い人の花押とかの可能性もありますから、だとすると面白いですが。

長坂：ありがとうございました。本当に当麻曼荼羅の花押はなんとか誰のものなのかというのは探さなければいけないと私も思っています。その他、歴史の方で伊藤先生なにかございませんか。

伊藤：悉皆調査をなさってですね、今のお話は法界



寺ですけれども、詳しいことを勉強させて頂いて本当にありがとうございます。

私、この発言をどこでしたらいいのかなと思っておりまして、プログラムをみながら迷っていたのですが、今指名されたのであえて立ちました。と言いますのは、今回は5年のうちの1年目で、大江町と西川町などを調査されたということですね。西村山郡となると、当然寒河江市があり、それから朝日町があるということになってきます。このように大江町の法界寺を悉皆調査されると、これは近世ですから、左沢藩だとか松山藩だとかいう話に集約しがちなのですが、長坂先生を始めとしてセンターの皆さんも十分視野に入っているとは思いますが、御存知のように村山一群となるとどうしても他の地域や他の時代も関係してくるのかと思われます。例えば大江氏関係の遺跡群、または関係の文化遺産なども出てきますし、それから慈恩寺だとかですね、いろんなことが出てくるということになりますね。そうすると最終的な歴史文化構想を立てられるときには是非そこら辺のところを見通されて研究を進めていただきたい。特に大江町でも国史跡になりました左沢楯山城の保存計画なども立てられているわけです。また入間田先生が芯になられて、同じく左沢で文化的な景観の構想も立てられています。そういうところを踏まえたうえで構想を立てて頂ければと思います。ここで発言するのが今いいのか分からないのですが、特別法界寺に直接関係ないですがこのお話させていただきました。どうもありがとうございました。以上でございます。



長坂：ありがとうございます。来年度からの調査でも、将来を見通しての計画というのは当然考えております。今のご意見、先の見当について参考にさせていただきます。それでは、次の報告に移らせていただきたいと思います。

七軒・本郷地区第1次社寺調査

岡田：では、引き続き大江町での調査報告になりますが、今度は七軒・本郷地区で実践致しました第1次社寺調査について報告させていただきます。こちらの調査は先ほど報告させて頂いた法界寺の調査報告とはちょっと趣を異にしております、一ヶ寺を調べあげるといよりは、広い地域に散らばっている神社または寺院を二日間にわたってスピーディに調べるといった方法で行いました。七軒、本郷の二地区には古い縁起をもつ社寺が点在しておりまして、大江町教育委員会で以前にも調査を実践されています。先ほどの発表でも少しご紹介いたしました『大江町の佛像』の際の調査が、昭和五三～五九年にわたって行われて、その後、平成元年～六年にかけて『大江町の絵馬』の調査、そして平成十年～平成十二年にかけて『大江町の仏師』の調査がされています。それらは小さな冊子ですが、調査報告が『大江町の佛像』『大江町の仏師』がそれぞれ三冊ずつと、『大江町の絵馬』が七冊にわたって刊行されております。

このように大江町教育委員会によって調査されているのですが、既に調査から10年、20年が過ぎっており、当時調べた地域自体が住民の高齢化が進んでいたり、過疎化が進行したことなどによって、現状において実際に調査したものがあるかどうかの所在確認をする必要があるということで大江町教育委員会からのご要望を受けたこともあり、今回の調査を実践することになりました。

今回の調査では、七軒、本郷地区に点在する13軒の社寺を調査しました。それらをわかる範囲ですが縁起の年代順にご報告いたしたいと思います。

① 仏像調査「仏像にみる地域信仰」

まずは、所部というところにあります腰王神社についてです。こちらは縁起についてはよくわからない

① 所部 腰王神社



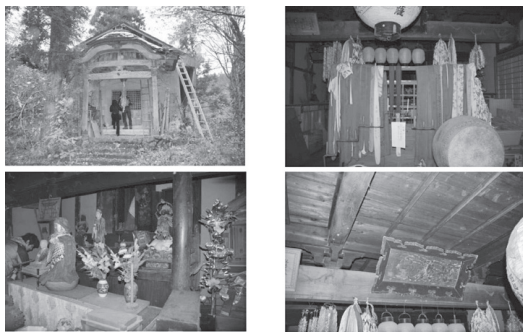
建久3年(1192年)の創立と伝わる。

いのですが、腰王または古四王信仰というものは縁起としては古代までさかのぼる可能性がありますので、こちらを最初に報告させていただきます。

社内には厨子が三つほど奥に祀られておりますが、全てに戸帳が何重にもかけてありまして、まったく中に何があるのか確認出来ないような状況でした。また現状では隣の西光寺で鍵を管理されているということで、普段は全く開いていないということでした。そのため、堂内に入った途端に湿気が溜まっていることが実感できるような状態であり、今後、環境改善の必要があるのではないかと感じました。

次に貫見にあります地蔵堂についてご報告します。こちらは土蔵造りの珍しい建物で、門扉に細かい彫刻が施されています。内部は多くの奉納品が祀られており、奥に何体かの仏像が安置されています。このお堂は建久三年（1192年）の創立と伝わっております。

② 貫見 地蔵堂



建久3年（1192年）の創立と伝わる。

御本尊は木造の地蔵菩薩立像なのですが、青芋で織ったものと思われる布が沢山着せられておりまして、顔の一部しか見ることができません。そのため、体部の方がどうなっているのかはわからなかったのですが、お顔だけ見てもかなり朽損が激しいように見受けられました。このお像は、朝日町や置賜のほうから大井沢を抜けて出羽三山へといたる道智道という道を開いたと言われる道智上人の作と伝わっております。この情報は先程ご紹介した『大江町の佛像』に記載されており、道智上人の作ということであれば室町時代の作ということになるのですが、その点に関しては今回の調査では確認しておりません。像の納められている厨子には、とても優美な屏絵が描かれております。しかし屏は現状で外れかかっていて、埃が堆積している状態です。また調査中にこの布の中から鼠が飛び出てきまして、その他の状況も含めて環境や管理の改善をする必要があるのではないかと強く感じた次第です。

次に本尊の地蔵菩薩像の前に並んでいる三体のお

像について報告します。まず蚕神についてですが、頭頂に蛾がのっかっていて、右手に絹糸を持っているというお像です。しかしこのお像は、以前の調査時には健全な姿だったのですが、現状では左腕の矧ぎ面がはずれて、彩色層の皮一枚でつながっている状態で、このまま放っておいたら左手は落ちてしまう危険な状況です。

次の摩利支天像に関しても、腕が何個か亡失していました。また不動明王像に関しても、右足先がなかったりとか、光背も損傷して像の後ろに寝かせてある状態で、火焰部が全て崩壊してバラバラの状態になっております。

堂の左隅の方に小さなお像が安置されております。こちらは十一面観音像なのですが、これは先程の『大江町の仏師』の中の紹介によると、左沢原町仏師の四代目の新海竹太郎の師匠と言われる林治郎兵衛の作であると記載されております。こちらの弘法大師像は、像底の構造を他の類例と比べるとまったく同じ構造をしているので、治郎兵衛の作とみて間違いのないと思います。ただこの像もかなり損傷が激しく、大師像の椅子の上部は脱落して下に転がっているという状況で、十一面観音像も光背の先端部が欠けているという状況です。

また他にも半鐘がありまして、こちらは銘に「安政五年 山形鋳物 佐藤金七 藤原国忠」とありました。

お堂は、側面にブルーシートが張られている状況で、天井の屋根が雨漏りをしている状態でした。調査した日はちょうど雨だったのですが、本当にぼたぼたと雨水が漏れている状態でありました。先程ご覧いただいた仏像群が沢山納められているお堂としては、管理状態は決して良い状態ではないと思われます。

次に黒森地区にある八幡神社です。こちらの祭神は応神天皇で、寛元年間（1243～47年）に創立されたと伝わっております。こちら祭神が戸帳に覆われておりまして、お像の確認はしておりません。

③ 黒森 八幡神社



祭神は応神天皇、寛元年間の創立と伝わる。

次に貫見にあります熊野神社です。こちらは創立が元亀年間（1570～1573年）とされています。建物は全て建て替えられているので当時のものではありません。

りません。内部にはこういったものが安置されております。

④ 貫見 熊野神社



元龜年間（1570年～1573年）の創立と伝わる

次に貫見の大里神社です。こちらは寛正年間（1460～1466年）の創立と古い縁起を持ちます。祭神はかなり朽損した木彫像です。大己貴神を祀っているとされています。こちらの神社は大江氏に関係し、大江氏最後の城主、大江高基の寄進があったという記録があります。また、江戸時代にも幕府から朱印を受け、信仰を集めていたことが記録から伺い知ることが出来ます。お堂の周りには多くの石碑やお墓が建っておりまして、そちらの方の調査はまだ行っていないのですが、併せて調査していくともう少し歴史的な部分というものが見えてくるのかと考えております。

⑤ 貫見 大里神社



寛正年間（1460年～1466年）の創立と伝わる

次に貫見の雷神社。こちらも創立は康元元年（1256年）と古いです。祭神は大黒神のように見えます石を祀っております。この石が雷神ということで、日照りが続いたときにはこのお像を社から出すと雨が降るといふ信仰がありまして、今でも日照りの続く時には雨乞いの儀式をされるそうです。

⑥ 貫見 雷神社



正元元年（1256年）の創立と伝わる。

次に中の畑にあります雷神社です。こちらも創立が永享年間（1429～1441年）と言うことで、古いです。立派な鳥居を抜けて参道が続き、先に山門が

あります。そこから曲がって突き当たりに本殿があって、脇道にちょっとそれるとまた小さな祠があります。これらは山の斜面に建っていて、うっそうとした森に囲まれた中に位置しております。

⑦ 中の畑 雷神社



永享年間（1429年～1441年）の創立と伝わる

こちらの主祭神は、本殿にあります風神、雷神です。これらはとても素朴な造りなのですが、魅力的なお像が祀られております。こちらは『大江町の佛像』の方に調査記録と写真が載っていて、その時の写真では太鼓を背中に背負っているのですが、現状では全て床に脱落している状態でした。ですので、昭和五十年頃の調査から30年間の間に、かなり損傷が進んだということが伺い知ることが出来ます。

山門の方にもかなり埃が堆積し、虫の糞等が散らばっている状態でした。山門には二体のお像が祀られておりまして、これらの観音像と弘法大師像は、造形的に見て先ほどの林治郎兵衛が造ったものではないかと推測しています。



本殿 木造雷神像

本殿 木造風神像



山門 木造十一面観音菩薩立像



山門 木造弘法大師坐像

次に顔好にあります羽黒神社です。こちらはとても立派な社殿であります。創立年ははっきりしていませんが、大江親廣の家臣の菅原安親によって創立されたと伝えられています。ただ現在の建物は再建されたものでして、それがいつかと言うことはわかりません。ただ大江氏から黒印をもって寄進を受け、徳川より朱印を受けたと記録にありますので、中世の頃、または江戸年間において、重要な信仰拠点であったということが分かります。また、現状でも多くの氏子さんがいらっしゃいます。

こちらの主祭神は薬師如来を祀っております。縁起によれば、このお像は菅原安親が鎌倉より請い賜ったものとされています。その縁起が確かであれ

ば、鎌倉時代の作と言うことになるのですが、その辺の確認はまだ行っておりません。

⑧ 顔好 羽黒薬師神社



大江親広の家臣菅原安親によって創立

次は黒森にあります黒森寺大日堂です。こちらも縁起ははっきりとしていないのですが、寒河江にあります総持寺（真言宗寺院）の末寺と伝わっております。現在は廃寺となっております、近くにありますが貫見の光学院の管理下にあるということです。ただ地域の方々がとても熱心で、廃寺になった時に運動を起こして、光学院の管理下にされて信仰を守りされたそうです。

こちらがご本尊の大日如来坐像なのですが、台座が一度完全に崩壊して、現状では像をのせるべき蓮肉が逆さまになり、敷茄子の下に華盤があって反花が一番下にあるという、目茶目茶な組み方になっています。お像自体も、左手、右手先等を欠失しておりまして、かなり損傷が激しい状態です。お像を納める厨子には銘があり、「寛文四年（1664年）仏師栄西作」と書かれておりました。造形的に見てもとても素晴らしい像で、また銘もはっきりしたものがこのような保存状態にあるというのが、文化財価値に対して適当な状況ではないのではと考えております。

もう一体、大日如来像の左手に安置されておりますのが、弘法大師坐像です。こちらは台座の裏側に墨書がありまして、「天保八年（1837年）林文作」と銘記されております。林文作と言うのは、先程から何度も名前が出てきております左沢原町仏師四代目の林治郎兵衛の祖父にあたる林家二代目ということになります。この二代目の方と四代目の方の遺作が多く大江町には遺されておまして、今後こちらの林家の仏師の流れについて研究を深めていきたいと考えております。またそれと、四代目治郎兵衛の弟子である新海竹太郎も含めて、近世から近代にいたる山形の彫刻史の流れというようなものを、今後の研究の一つのテーマとしていきたいと考えております。その基準作ともなる文作の銘のある代表作がこちらに安置されているのですが、こちらもやはり

彩色の剥落がひどく、顔などには大きな傷のような感じで剥落が生じており、修復等を含めました保存処置が必要な状態であると考えられます。

⑨ 黒森 黒森寺大日堂



次に橋上、三合田というところのバイパス沿いに金毘羅神社があります。こちらは中に立派な社殿が入っていて、外から見えるお堂は鞘堂というかたちになっています。中の社殿の主祭神は金毘羅権現像でして、こちらは左沢原町に居住していた熊谷亀次郎という方が彫ったという銘があります。この方は山形の仏師の星野次郎左エ門に弟子入りして彫刻を学んだと記録にありますが、先程から出てくる林家とはちょっと作風を異にしております。

⑩ 橋上三合田 金毘羅宮



左沢原町居住の熊谷亀次郎の作
安政4年

次にやはり三合田にあります観音堂についてです。こちらは山の中腹にありまして、長い石段を登って行った先の木々に囲まれた環境にあります。そのような環境ですので、壁面とかに藻類とかが繁殖しておりまして、湿気がかなり高いなということ

⑪ 橋上三合田 観音堂

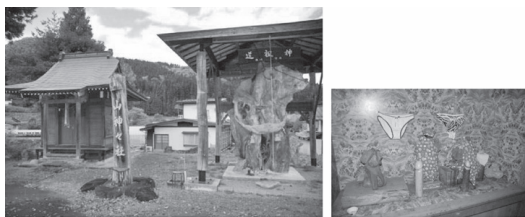


がそれからわかります。

こちらには本尊として木造観音菩薩立像が祀られています。堂の右奥には弘法大師坐像が安置されているのですが、こちらも造形的にみて林治郎兵衛の作かと思われます。

次に貫見の山神社です。こちらは縁起が定かではないのですが、民間信仰の神社として、奉納品には下着や男根を象ったものなどが奉納されています。また神社のとなりに枯れてしまった巨木が道祖神として祀られています。

⑫ 貫見 山神社



⑬ 小新 稲荷神社



最後に小新の稲荷神社ですが、こちらは中に社殿がありまして、中に沢山の奉納品が収められています。また、外には石碑がいくつか建っています。仏像を中心とした発表は以上です。

②書画調査「『大江町の絵馬』と地域の造形」

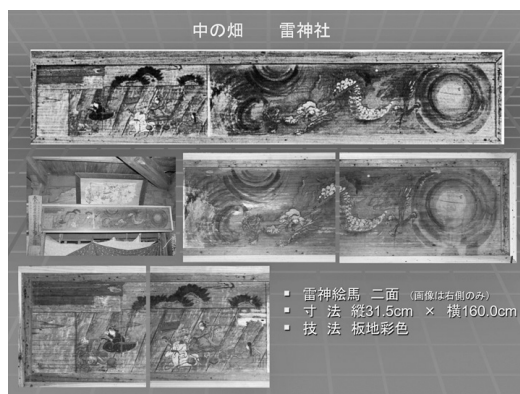
大山：それでは引き続き、同時に調査を行いました。社寺にありました絵馬について報告させていただきます。

今回の研究事業の中で、地域のなかにある書画作品を探すというよりは、地域の中でどのようなものが書画に該当する作品としてあるのかということを少し考えました。まず大江町では、先程からお話に挙がっている『大江町の絵馬』と言う小冊子の中で、町内にある絵馬についての悉皆調査を行いながら、それを紹介していたという経緯がありました。全7巻で、1巻から3巻が絵馬について、残る4巻が俳句について刊行されています。山形県についても県立博物館が昭和五十九年度から調査研究事業として所在調査を行いまして、こちらの所在目録と

して発行されております。そんな経緯もありましたので、今回の研究事業の中で“地域に所在する絵馬”というキーワードで、絵馬には書画だけではなくてモノも奉納されていたりとか、色々形式もあることですから、他分野が入り込みやすいのではないかと考えて、絵馬を意識的に確認して回ることにしました。丁度、大江町教育委員会の方が七軒と本郷の地区を巡回するということでしたので同行する形で実現したのが今回の調査です。

これは貫見の熊野神社に奉納されていた繫馬絵馬で（大江町 七軒・本郷地区第1次社寺調査④-3参照）、大きさはそれほど大きくはないのですが、『大江町の絵馬』に載っていた写真と比較をしますと、白黒で確認はしづらいですが、損傷等が進行しているということは見られませんでした。

同じように、こちらは中の畑の雷神社の絵馬になります。雷神絵馬という名称で紹介されていて、実際には左側にも同じ寸法の絵馬が続く、かなり細長い独創的な形態の絵馬になります。写真で確認しづらいですが、現在は表面にアクリルが入っています。室内は湿気がかなり高いのですが、カマドウマがいっぱいいたので、そういう虫の影響を防いでいるかと思います。



顔好の羽黒神社に奉納されていた絵馬では、富士裾野巻狩絵馬、七福神絵馬などがありました。表面には茶褐色の変色あるいは汚れが見られるんですが、以前の白黒写真と比較しても、色彩は確認出来ないですが、大きな損傷が進行しているとは見られませんでした。

ですが、同じ羽黒神社に奉納されている龍女成仏絵馬という名称の絵馬の場合ですと、『大江町の絵馬』では部分写真が紹介されていました。実際に現地へ赴いて確認したところ絵馬は五角形の形をしていて、下の約5cmほどの部分が欠損してなくなっていました。『大江町の絵馬』でもその部分は切り取られているので、実際に当時どのような状況であったかはわかりません。現状を確認出来たことで今後、損傷が進行しないように継続的に見ていけれ

ばと思います。

橋上三合田の観音堂には、このような養蚕絵馬が奉納されています。白黒の写真ですが当時から表面にビニールが覆われていたことがわかりました。本紙表面にはフォクシングや虫による損傷がかなり進行している状態ですが、『大江町の絵馬』掲載時からさらに進行したものかどうかは、現段階ではわかりませんでした。この作品は養蚕に関する大江町では唯一の絵馬ということで貴重な資料なのではないかと考えています。



所部の腰王神社にあった羅生門絵馬でも大きな損傷の進行は確認出来ませんでした。同じように孟宗絵馬も同様に大きな損傷の進行は確認出来ませんでした。ですが中の畑の雷神社、先程雷神絵馬という細長い絵馬があった神社ですが、そこに掲載されていたある作品については、現地で確認した限り所在を確認出来ませんでした。今回はあまり細かく探してはいないので、もしかしたら現在もあるのかも知れませんが風化が甚だしいという記載があったために、もしかするとその後の風化、あるいは損傷によって失われてしまったかもしれないと考えています。

地蔵院の中には額等の奉納品が数多く確認出来ました。地蔵院のお堂は先程岡田研究員が「鼠が出てきて」と言っていたお堂で、内部が埃やカビ、虫害によって汚れているために確認で留めたのですが、『大江町の絵馬』にはまだ紹介されていないので、地域の中にまだまだ様々な作品があるのだと実感しています。

同じように、貫見の熊野神社には独特な造形を持った天井絵が奉納されていて、とても生き生きと花鳥画が描かれ、様々な銘が入っていました。各年代にわたり、多くの信仰を集めたあとが確認されます。同じように衝立ですとかまだまだわからないものや新たな作品があると確認しています。

こちらは橋上三合田。先程の「養蚕絵馬」があった観音堂ですけれども、唯一祭壇の上部の壁面に障壁画の形で雷神の姿が描かれていました。コミック

的な独創的な造形で、いわゆる正統な美術の流れとは違う、独特ですごく生き生きとして注目に値する造形をみることが出来たと思っています。

大江町は江戸時代に青苧の栽培、貿易等で非常に栄えた経緯がありました。現在センターでもこの中の畑雷神社に奉納されていた戸帳についての保存処置を行っていますが、同様に青苧を使ったと思われる奉納品が数多く散見されました。同じように戸帳として使われているもの、あるいは奉納の布として垂れているといったもの、様々な形でその地域の文化を象徴する素材の使用が見られたので、今後それらを追跡調査していくことで新たな知見を得られるのではないかと考えています。



絵馬については、温湿度などの影響を受けやすい環境に奉納されることが多いので、損傷の進むのが宿命のようになっている部分があります。特に近世、近代から現代に至る多くの絵馬については、数も多いためなかなか修復という話になりづらいのが現状だと思っているのですが、これを今後どういった形で保存していったら良いか、何らかの方法を導き出すことが出来るのかということを、今回の事業の中で実現していければと考えています。

同じように絵馬が損傷していた例では、当初見た時はお面が二枚床に落ちてしまっていると思っていただけでしたが、よく他にも見てみると奉納絵馬の一部であったということがありました。

俳額の風化した事例では、現在ですと茶褐色に汚れた中にある墨の文字などは赤外線読み解くということが行われていますが、更に風化が進みますと赤外線画像等でも文字が確認出来なくなるのではないかと思います。そういった風化の中で読めなくなりそうな文字を確認していく方法というのも研究対象としては考えられると思っていますところですが。

地域の中で絵馬を保存する為の取り組みとして見られたもので、橋上三合田の観音堂ですが、虫損等の損傷で形状がほとんど残っていないような状態で、地域の方達が、模写という形で描かれた同じ絵馬を奉納している。そういう形で地域の中で自分た

ちの信仰を受け継ぐという事例がありました。

今回の調査は、実際にはどのような物があるのかという確認をすることに留まっています。ですので、今後同じようにこの調査の継続と、そこから最終的には保存管理の方法、あるいは文字情報の解読から新たな知見を得るということを進めていきたいと考えています。

今回七軒地区、本郷地区を回った際に見られた被害としては、動物による被害、小動物が巣を作るために、お堂に穴をあけるといった被害、あるいは虫、カマドウマですとかシミ、蜂の巣等による被害。また、雨漏りによる湿気の混入、カビ、壁面に付着した藻類といった微生物による被害というものも見られました。あるいは長い時間で自然に劣化をしていった経年の劣化などが見られました。

これらの損傷を見たところですね、今回の調査区域では、自然劣化の被害が著しいという傾向がありました。今後の展望としては、専門家あるいは行政の指導等だけではなくて、やはり住民の関心をどれだけ高めることができるのかというのが重要な課題であると考えています。

調査全体のまとめでは地道な研究活動により、認識の向上を図ることで、文化遺産への関心を呼び起こし保存修復活動を通じた文化財保護の観点からの管理保存修復体制の構築を図りたいと考えています。以上で発表を終わります。

七軒・本郷地区第1次社寺調査 意見交換

長坂：ご苦労さまでした。大江町の七軒、本郷地区の社寺に関する報告でした。これに関しては、仏像の調査ですと林家一門の作の仏像であるとか、絵馬ですと画題が豊富で、天井絵などがあつたりとか、それから土着的な民間信仰の文化遺産があつたりとか、非常に興味深いテーマが見出されたとは思いますが、そして環境に関する報告がやはり特別な印象を与えるものでして、とにかく無宗地区の保存対策ということが一番大きな問題提起として出てきたところです。これに関して山形大学の手代木先生、ずっと保存対策について研究されてこられたご経験から、こういうことに関してどういう方法が考えられるかということでご意見を頂きたいのですが。

手代木：三浦先生のような非常に著名な保存修復の先生の前でお話させて頂くのは非常に心苦しいのですが、私は前のオープン・リサーチ・センター・プロジェクトの方で一部このような研究をさせて頂いた経緯もございますので、そこからお話をさせて頂きたいと思います。

この現状に関しましては、山形県内だけではなくて、全国的に、もしくは世界レベルで、やはり被害

がその地域に合わせたコミュニティの中で、その中の風土によって出てきてしまう被害としてもっと広く認識されるべきだと思います。それで、一番確認しておかなければいけないのは、この状態になってしまったことというのは、本当に悲しい状況であると感じます。ただ、地元の人が全然それに対して無関心だとか、やってこなかったとか、そういうような結果ではないと思います。その歴史の中で部分的にこういう状況があつて、それを地元の方々がどう考えるかもあるのですけれども、どこに戻すかとか、新しくどういう風に進めていくかということの考慮を、ちゃんと私たち保存修復家は受け止めて、それに合わせた活動をその場その場で作り上げていって、それのお手伝いができるというのが保存修復家の醍醐味であると思います。ですので、先ほどの報告の今後のまとめの中にもありましたけれども、信仰をどうするかということや、地域の方々がどうするかということとかが大きいとは思いますが。それが例えばですけれども、町づくりというようなキーワードが適していると思えばそういうふうにしていくという方法もあると思いますし、それに関しては例えばお金が発生しないと駄目だとか、今の社会情勢の中で求められているところがあると思います。そういうところにくっつけていく。あとは、今回は大江町教育委員会の菊池さんが随分一緒に回られていると思うのですが、先程伊藤先生からお話がありましたが、菊池さんがやってらっしゃること、いろんな地域との関わりでやっている事業に対してのまとめかたといったところも含めて、包括的に考えていくことが重要だと思います。



岡田：ありがとうございます。まさに手代木先生から頂いたお言葉通りの現状でして、先程伊藤先生からのご発言もまさにその通りなのですが、如何に総合的に保存活動を進めていくかというところが、一番大きな課題となると考えております。ただその時に、ある程度役割分担をしなければいけないとは強く思っています。最初の歴史文化基本構想の視察報告の時にもお話したのですが、行政がやるべき仕事、住民の方々がやるべき仕事、我々文化財保存修

復家がやるべき仕事というところをきちんと分けて、お互いが依存しあわないで、本当に良い関係で連携がとれるような体制を作らない限りは、きっと上手くいかないと考えています。そして、今回のような5年間という限られた期間での研究活動になると研究期間の切れ目が縁の切れ目になってしまっただけ目なので、如何にこの5年間で期間が終わったあとにも続けられるようなシステムを構築していけるかというのが、一番の重要なポイントだと考えております。今後ともいろいろと皆様方のご指導いただきながら、その辺を模索していきたいと思っておりますので、よろしくをお願いいたします。

長坂：これは非常に大きな問題なので、今後とも考えていきたいと思います。

西川町 文化遺産悉皆調査報告

吉祥院文化財悉皆調査

岡田：次は、西川町の吉祥院の調査報告をさせていただきます。

西川町は、先程伊藤先生からお話にもあったとおり西村山地方として考えていくと、中世には大江氏がその辺を席卷していました。こちらの吉祥院は、その大江氏に関係する寺院ということで、現存する西川町のお寺の中では一番古いお寺である〔文明年中（1469～1486年）の開山〕と聞いております。そのような理由で、吉祥院を西川町での最初の調査対象とさせて頂き、仏像、書画の悉皆調査を行いました。それではまず初めに、仏像に関する調査についてご報告させていただきます。

①仏像調査「吉祥院と安中坊」

まずは、須弥壇の壇上に安置されております木造地藏菩薩立像です。像高は二尺ほどの立派な立像です。

そちらには台座の背面にびっしりと銘文が書かれております。銘にあります金仲山というのは安中坊、つまり大江親廣に始まる大江氏安中坊の別称のことです。理教院というのは大江氏の一族の廣隆のことで、安中坊系図に名前が出てくる方です。このお像は銘文によれば廣隆の母、または家内が寄進をして作ったということになるのですが、最も興味深いのは、京都の仏師、法橋光益という方が造像して、それを宝永四年（1707年）に吉祥院に奉納されたのですが、その輸送してきた経路というのが銘文に書かれています。それが京都から酒田、そして羽黒山、月山を越えて岩根沢へと出て、こちらの吉祥院へ運んだと銘記されております。像にお寺との繋がりが明記されていることもさる事ながら、造像からお寺に至る輸送経路まで書かれてい

るというのはとても珍しい事例であります。そして、発願者からその奉納理由までが書かれています。この地藏菩薩像は造形的にもとても素晴らしいお像なのですが、保存状態もこの時代からの年数が経ったものとしては充分よいものだと思います。彩色に関してもとても精緻なものが施されております。銘、造形、加飾のいずれをとっても、とても貴重な事例だと思います。（吉祥院③ 木造地藏菩薩立像(1) 参照）

次に、吉祥院の本尊であります須弥壇の中央に安置されている木造釈迦如来坐像についてです。ちょっと小ぶりの像高30cmのお像なのですが、このような厨子に入っております。

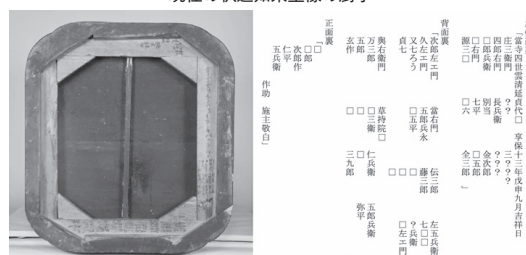
釈迦如来坐像と十一面観音菩薩坐像の厨子



もう一体、厨子入りのお像、須弥壇の右側に伝十一面観音菩薩坐像が祀られているのですが、実はこの厨子が先ほどの釈迦像と取り替えられている可能性が高いことが今回の調査でわかりました。それは十一面観音の厨子内の床板部分に跡が残っているのですが、それがちょうどこの釈迦如来坐像の台座（蓮華座）の大きさとぴったり一致しました。ちなみに、現状の十一面観音像が入った状態では厨子の扉が閉じない状況ですので、そのことから十一面観音と現状の厨子が明らかに大きさがあっていないといえます。そういった理由から、元々十一面観音像の厨子が、釈迦如来像の厨子であると見て間違いないと断定しました。そしてその十一面観音像が現在入っている厨子、つまり元々は釈迦如来像の厨子であると思われる厨子の底面には銘があり、松田長兵衛という方が施主となって享保六年（1721年）に造像したということが記されています。

では、現状で釈迦如来像が入っている厨子の底に

現在の釈迦如来坐像の厨子



は何かあるかという、このような銘がびっしりと書かれておりました。

こちらには享保十三年（1728年）と記され、先ほどの厨子から数年後に作られた厨子ということになりますが、こちらの中身が何像であったのかが現状では分かりません。今回の調査では該当するお像がなく、どこにいつてしまったのかが気になる場所です。

次に現状で釈迦如来像の厨子に入っている十一面観音菩薩坐像についてですが、何故“伝”と言ったかということ、お寺や以前行われた調査では十一面観音と呼ばれておりましたが、今回の調査で頭頂の化仏がささる穴があまり古くない穴であることが分かりました。それは頭部内部にその穴を彫り抜いた木屑が詰まっている点からで、そういった所作から考えると本像は元々違う菩薩像として造られて、近世、江戸時代年間頃に新たに穴を開け、そして十一面観音像に仕立て直したと考えた方が妥当ではないかと考えました。その辺について定かではないのですが、十一面観音というにはちょっと疑わしいということで、“伝”という名称にさせていただきました。ただ像高43cmの立派なお像で、造りから見ても優れたお像であります。以前に行われた調査では室町時代の作とされていましたが、今回の調査では、造形的な特徴から見ると江戸時代くらいまで降るのではないかと考えております。

次に、こちらが大江氏の末裔の方が所蔵しているお像なのですが、現在、吉祥院の方に委託という形で保管されております、木造の大江廣元、親廣、多田仁綱の坐像です。

像高は15cmと小さなお像なのですが、それぞれの背中に陰刻がありまして、何像であるかというのがそれではっきりしています。また、一体ずつ、全て小さいながら丁寧に作られた厨子に納められております。像は構造的には前後二材矧ぎで、この構造や造形的な特徴から見て江戸時代の造像ではないかと我々は推測いたしました。しかし、現状で大江廣元らの肖像をあらわしたものが現存しないので確認できませんが、こちらの像は元々何か古い像があったか、もしくは絵があったのか、それを写したのではないかと考えられます。なぜなら、顔の特徴等がかなり細かく表され、特に多田仁綱の像に関してはとても表情豊かで個性的な顔を示しています。となると、何らかのやはり元があり、それを江戸時代に写したと推測するのが妥当ではないかと思っています。また日本国内に、廣元にせよ親廣にせよ、肖像が残っていないとすれば、こちらの像というのは、江戸時代の作とはいえ貴重な物であるといえます。ただ、所々に朽損が進んでいまして、状態とし

ては決して最良ではない状況にあると思われます。（吉祥院④ 木造大江廣元像・木造大江親廣像、木造多田仁綱像）

次に、吉祥院で興味深かったのは、最初にご紹介したお像も含めて12体もの地藏菩薩像があることです。（吉祥院⑤ 吉祥院安置のその他の諸尊）

これらは大きさも様々で、大きなもので43cm、小さなものでは10cm余りです。また錫杖等が失われている僧形像は地藏菩薩であるとは断定できないのですが、形状から地藏だと思われます。形状では、半跏像3体、立像9体のお像が伝わっておりますが、ちょっと量が多すぎるように思われます。一カ寺にこれだけの量の地藏菩薩が集まっているというのはとても珍しいもので、それが何故なのか、現状ではまだ調べはついておりません。この吉川という地区は、大江氏が一番最初に居住した場所として、近くには伊藤先生が発掘に携わられた阿弥陀堂屋敷があります。地藏菩薩が大江氏に関係するものなのか、それとも近世にまた違う信仰がこの辺で始まって地藏信仰というものが発展したのか興味を持っているところなのですが、現状では残念ながら調べはついておりません。だからこそ、この一カ寺で調査を終えるのであれば、なぜ地藏が多いのだろう？で終わってしまうのですが、今回の戦略研究調査では、町丸ごと調べようということなので、他の近隣の寺院も調べたり、または吉祥院の本寺が寒河江の方にあるのですが、そちらの方との関係性を調べていくことによって、一カ寺の調査では分からなかった部分が今後見えてくるのではないかと期待をしております。

次にこちらの銘がある千手観音像についてご紹介させていただきます。

像の丁度背面にあたる厨子の内側、像に隠れるようなところに銘が書かれております。このような銘です。



像高：25.4



「此千手親自在尊者天台沙門有海念持尊也
吉川邑奉安置于安中坊阿弥陀堂二世悉地
成就師僧父母六親九族乃至沙界平等普潤
維時弘化四丁未年六月謹記之」

こちらにも安中坊や吉祥院の文字がみられ、元々このお寺に伝わったものだということがわかります。仏像というのは動産ですので、動く可能性があります。ですので、そのお寺にあるからといって建立当初からあったとは言えません。そのため、こう

いった銘があって、しっかりとお寺との関係性が書いてあれば、間違いなくこれはこのお寺にあった像ということが言えるので、そういったものを軸に歴史的な事実を読み解いていきたいと思っております。

次に、吉祥院を開山した邑山珠忠のお像です。この方は本寺であります寒河江の法泉寺の二代目住職ということで、吉祥院の開山の和尚であります。こちらの位牌には銘が書いてあり、寄進者は當院十世とあります。

今回の調査では過去帳を見せて頂いたのですが、そちらには十世の方の没年が書いてありませんで、十一世の方が明治十四年に亡くなられたということが過去帳の記載にはありましたので、次の方が明治十四年ということであれば、十世は江戸末頃の方であると言えるのではないかと思います。よってこの像も江戸末の作の像であると考えられます。

もう一体、祖師像があるのですが、こちらはかなり損傷が激しくて、さらに頭部と体幹部がもしかしたら別のものではないかとも思われます。頭部に関しては、見るととても造形的に優れたもので、それなりに古い造形であるという風に見受けられました。あくまで推測の域を出ませんが、こちらの頭部が幕末に彫られた祖師像の初代の像である可能性もあるのではないかと思います。しかし現時点の調査では根拠の提示までは至りませんでした。

最後に菩薩形立像が何体か安置されております。こちらは後で大山研究員から報告があると思いますが、観音信仰がこのお寺にあったのではないかと考えられておまして、観音に関係するものが画幅の方でも沢山あります。菩薩形像もまた大小様々ですが、十一面観音と聖観音、先程の十一面千手観音などがあります。

以上で仏像の方の調査報告を終わります。

②書画調査「吉祥院に見る観音巡礼の遺品と悲母観音」

大山：それでは引き続きまして、吉祥院の書画調査した作品の中から報告させて頂きたいと思っております。こちらが吉祥院の概要になります。法泉寺二世開山で、寒河江城主由来の菩提寺であるなど、経緯については岡田研究員の発表のとおりです。調査日程は三日間。西川町教育委員会の方にご協力を頂いて、吉祥院の本堂と位牌堂を中心に調査をいたしました。法界寺同様に調査を行って、計33点の作品を調査しています。その内、額が多くを占めています。主題としては、観音をモチーフとした作品が様々な形で確認されました。

吉祥院には西川町指定文化財である、西国三拾三體観世音菩薩という絵画作品を所蔵しております。

これが今回西川町の悉皆調査を始めるにあたり、吉祥院から始めるきっかけとなった作品です。作者が笹島月山という地元の日本画家でして、経歴はこうなっています。

明治七年三月三十日に地元で生まれ、東京美術学校に進学して、明治三十六年に卒業して、町内には多くの作品があるといえます。この作品には保存箱、内箱も外箱もきちっと揃っておりまして、しっかりとした由来が明記されておりました。これによると明治四十年、32歳の時に描いた作品であるということが分かります。作品の状態を観察したところ、かなり状態は良いという印象でした。

笹島月山

- 本名: 笹島秀弥
- 明治7年(1874)3月30日、川土居村大字吉川、笹島長座衛門の四男に生まれる。
- 山形中学校卒業後、東京美術学校に進学
- 明治36年(1903)卒業、川端玉章の門下に学んだ。
- 町内には相当数の作品があるといい、文化祭で個展を実施したこともある。
- 昭和十九年七月七十一歳で死去。
- 町の文化財に「若き日の達磨」、「白衣観音」がある。

しかし、やはり年月が経っているということで本紙部分にわずかながら浮きが見られたことと、軸首が外れていました。

保存環境としては内箱も外箱も揃っていることで、ある程度安定した環境にあると思われるのですが、やはり経年の影響で作品の損傷が進んでいるという状態です。

次に、こちらの悲母観音です。本堂内の床の間に掛けられており本紙が縦152.1cm、横87.5cmと大きな作品になっています。細部まで緻密に描いておまして、中々見るできない作例ではないかと注目しました。

同じように本紙には損傷箇所があります。表具裂に剥離がみられるとか、やはり掛軸の軸棒の付け根部分に損傷が進んでいます。

笹島月山の作品と関係があるのかは分かりませんが、悲母観音ということで、裏面には墨書きがあり、工藤三九郎という施主が大正元年に奉納している。工藤三九郎さんは地元の名家で菩提を弔うために奉納されたという経緯が記されています

先程の三十三体観音については、こちらの吉祥院では今はもう行っていないということだったのですが、以前は年に一回はちゃんと出して法要を営まれていたそうです。そういう経緯がありまして、絵画作品としてではなくて、実際に仏画として使用されていた観音の作品であったということが分かっています



ます。

有名な狩野芳崖筆の重要文化財「悲母観音像」と比較すると構図や図像には共通する部分はあるけれど、やはり違っています。今回の作品に直接的に結びついているような印象というのはあまり受けられません。2008年に東京芸術大学が行った狩野芳崖に関する悲母観音の展覧会の中で東京の寺院に悲母観音が奉納されているということで、図録で拝見したのですが、そちらの作品は構図や彩色が本作品と非常によく似ているのがお分かり頂けます。今回調査した悲母観音像とは細部の表現がやや違いますが、共通する構図で、何らかの繋がりがなければこれだけの作品の類似性はでてこないと言えるのではないかと思います。吉祥院の悲母観音の作者は第一に笹島月山である可能性が考えられますが、作品の作者をお寺さんに確認したところ、残念ながらよくわからないということでした。作者が笹島月山だとすると、東京美術学校に在学時あたりに何らかの繋がりがなければ東京と山形にこれだけ類似した作品があるという説明がつかないので、明治の頃、美術学校の教育のなかで、もしかしたらこういう作品を描いた機会があった可能性が考えられますがそのあたりは今後調査していきたいと考えています。

次には最上三十三箇所霊場の巡礼絵馬についてです。吉祥院は絵馬が本堂に数点懸けられておりまして、その中では小さな作品です（吉祥院⑧ 巡礼絵馬 参照）。大正の13年に奉納されているのですが、損傷は大きく進んではいません。残念ながら右下に作家の銘が書かれているのですがどのような文字か読めないために、作者等はわかりません。

経年劣化による損傷も見られます。

同じように最上三十三観世音菩薩という作品も堂内に懸けられています。全面的に茶褐色の汚れとシミが見られて本紙に亀裂等がはしっています。丁寧に一体一体書かれていてこの文字は先代の住職が書かれていた文字とお寺の方がおっしゃっていました。

こちらの作品は三十三観音の巡礼絵馬です（吉祥院⑨ 巡礼絵馬）。制作は明治三十九年。横幅180cmある大きな額装作品で、こういった経緯でこのような作品があるのか興味があるところです。この背中の文字を見ますと吉川という文字が読めるのでこれも笹島月山に何らかの関係があるのかは今後探っていきたいと思います。損傷は虫が表面を食べた跡や亀裂がありますが、以前一度修理をされていたようで損傷部分には補彩のあとがあったり補筆をした跡が見られました。

一点、本堂に懸けられていたわけではないのですが「奥の倉庫で保存されていた作品でこういう物があります」と、お持ちくださった作品がこちらの巡礼絵馬になります。



非常に損傷が進んでおり本紙部分は以前に修理されてほとんどが裏打ち紙あるいは補紙の跡です。そのあとに上から文字を書きなおしています。そのため本紙のオリジナル以外が大部分で、その中に吉祥院十四世の文字が見えるため、制作時期は江戸時代後期にあたると思っています。さきほど見てきた絵馬の中で本作品が一番古く、その当時の巡礼での先達ということもあり、吉祥院のお坊さんにもそのようなことがあったのかと思います。現代の奉納絵馬では四国八十八箇所ですとか最上三十三観音から広がって広範囲に区域が展開されており、世相を反映しています。

こちら本堂の須弥壇上部に懸けられていた一風変わった障壁画になります。（吉祥院⑩ 双竜図）

横幅2mの大作ですけれども表面にビニールをかけ保護していてあまり作品の全容を確認できてなかったようです。損傷があちこちに見られますが修

理をされてある程度安定した状態でした。赤外線カメラを利用すると雄大に龍が描かれている姿が見られます。落款だけが捺されて銘はなかったのですがこの落款から作者を紐解いていけばおそらくお寺にとっても重要な作品になるのではないかと考えています。こちらは俳額ですが（吉祥院⑭ 俳額 参照）、奉納時期が安政六年。表面のガラスの隙間にカメムシが何匹もいる状態だったのですが、「玉斎」という作家の作品の絵が何枚か確認されていました。こちらの仏画「釈迦三尊十六善神像」ですけれども明治丁酉春七十歳玉斎謹画とあります（吉祥院⑬ 釈迦三尊十六善神像 参照）。玉斎という作家は西川町町史を紐解いてみてもわからなかったのですが、文化十二年(1815年)生まれであったことがわかっています。同じようにこちらは涅槃図になります（吉祥院⑫ 仏涅槃図 参照）。裏書きに昭和二十二年に表具し直した。という記載があります。あとは山号額が所蔵されており中には飲中八仙歌の屏風の作品等が所蔵されておりました。今回は本堂を中心に調査をおこないましたが、他にも小さな作品等が無数にあるということが最終日にわかりました。今後は作品の追跡調査、あらたに西川町についても絵馬の調査を進めていき、来年度の研究活動の方針となると思っています。以上で発表を終わります。

吉祥院文化財悉皆調査 意見交換

長坂：ありがとうございます。西川町は吉祥院の調査を行なったわけですが、いろいろとおもしろい問題もでてまいりました。

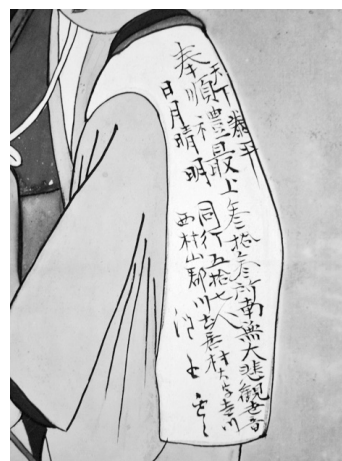
仏像では江戸時代の制作を中心に、大江氏に関係する像、それから地藏信仰、観音信仰に関するものがありました。それから絵画の方では、笹島月山の絵描の作家の描いたものが実際に仏画として使われていたという見解や、それから庶民信仰としての観音信仰をいつ頃どのように広まったのかという問題などがでてまいりました。

西川町についてこれらの問題について何かご存じのところがあればと思います。北畠先生ご教示頂ける事があれば何かお願いしたいのですが。

北畠：ありがとうございます。教えていただくことばかりで大変驚きながら感激しながら見させていただきました。ちょっと、おやと思ったことで、二三お聞きしたいことがございます。

実は吉祥院が、安中房大江家はご承知のとおり最上に滅ぼされて、そのあと安中房が大江の僧院としてずっと続くわけで、ここも菩提寺だということです。もう一つは笹島月山と吉祥院の関係がさうとう深いということも知ってはおりました。

ひとつには地藏信仰、観音信仰があったのではということで、地藏菩薩像がいっぱいあったということですね。大江家の信仰というのは資料の上から辿ってみますと もともとは時宗、廣元にしても親廣にしても阿字、時宗門徒でしたが、寒河江に土着した鎌倉末からは今度は禅宗に変わるのですかね。寒河江の国主の下に菩提寺をつくっていきまして、安中房のもともとの宗旨は阿弥陀信仰、阿弥陀屋敷として作ったというように思っておりますけども、ご承知のように吉祥院は禅宗でございます。ただ、あの地藏信仰あるいは観音信仰は、もちろん近世のきちんとした資料の上で確認していないものですから何も申し上げ出来ないのですが、一つだけ面白いと思ったのは絵馬の中に三十三観音の巡礼の絵馬がございました。西川町はご承知の通り三山信仰で、慈恩寺、本道寺の方に行きますと湯殿山の巡礼の絵馬はもちろんあるのはご存じの通りですけども、最上三十三観音も丁度あそこは道筋であるわけです。ただ絵馬に三十三観音と書いてあったのがここから見えたものですから、それには最上三十三と書いてあるじゃないですか。これはやっぱり出羽三山参りではなく最上三十三観音だと改めて確認させていただいたことだったので、やはりこのような色々な庶民信仰が入り混じっているなと思ったりしていました。ただ、古い時代の信仰、大江家の正統の信仰というものがどういうことなのか、自分でも言いながらきちんとできないのですけれども、そういう点ではむしろ、この吉祥院にこういう文化財の残り方を考えて頂きながら教えて頂いたということです。



安中房は大江家の宗家が細々と生き残ったというかたちで、後では最上家から多くはないですけども所領を安堵してもらったり、御朱印を貰ってというかっこうで、安中房大江の菩提寺としてあったわけでもあります。中世から現代まで繋がってきた大江家の内側を覗かせて頂いたような感じです。どうもありがとうございました。



高島町 文化遺産悉皆調査報告

大聖寺（亀岡文殊）文化財悉皆調査

岡田：では、高島町での取り組みということで大聖寺の調査について報告をさせていただきます。こちらの調査は昨年 2010 年 8 月に 6 日間かけて行いました。大聖寺はご存知の方も多いかと思いますが、高島町または置賜地区でも代表的な寺院でして、縁起としては大同二年（807 年）の創立で、徳一聖人が開山したと伝えられております。徳一上人ですと法相宗となるかと思われそうですが、現在は真言宗に属しております。その辺りは、徳一と空海の関係に起因し、真言に途中で変わったのではないとも言われております。

延喜式の出羽国の記載に承和二年（835 年）に、文殊会が始まったという記載があります。出羽で文殊会があった場合、文殊会は通常国分寺で開かれるというのが通例なのですが、当時国分寺が出羽国には無かったため、大聖寺（亀岡文殊）で開かれたのではないかと考えられております。

同時期の創立では近くに安久津八幡神社がありますが、阿久津八幡社の前身にあたります安久津阿弥陀堂が貞観二年（860 年）に建立され、慈覚大師円仁またはその弟子の安然によって、地元の豪族安久津磐三郎の協力を得て建てられたと伝わっております。その後、前九年の役、後三年の役の後に鶴岡八幡宮より八幡神を勧請して、安久津八幡神社となります。置賜地方で松島八幡を西の八幡として、安久津八幡を東の八幡として信仰を集めたとされています。亀岡文殊と安久津八幡の関係は、同時期に出来て、近い関係の中で歴史が流れてきたのではないかと考えております。ただ、亀岡文殊に関しての中世の頃の歴史というのは、現状でもなかなか解らない部分がありまして、今回の調査等から得られた情報やもうちょっと深い調査を今後実践していきながら、それらを遺跡等の発掘などによって証明していくというのが良いのではないかと考えております。しかし発掘調査はなかなか実践が難しいですので、こういったお寺に伝わるモノから、何か少しでも

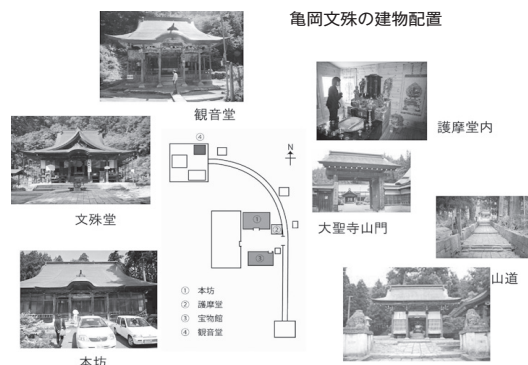
探っていけないかと考えております。

亀岡文殊の近世からは、幕府から寛文年間に実質百石程の現物支給を受けて、元禄年間にはやはり百石の私領地を受けております。そして、享保三年に八代將軍吉宗から朱印状を与えられて、その後幕末まで続きます。また天皇家からも撫物を賜るなど、天皇家將軍家両方からの篤い信仰、または崇拝を集めたお寺であります。

現在でも日本三大文殊の一つとして、多く全国からの受験生の参拝を中心とした多くの参拝者が訪れております。

お寺の境内はこのような形になっておりまして、仁王門から石畳の参道をずっと抜けて、大聖寺本坊から急な登り坂になって途中に石造物や鐘楼があり、登りきったところに観音堂と本堂（文殊堂）があります。文殊堂の裏にも、蔵王権現堂があり、左手の裏には歴代のご住職のお墓が並んでおります。仁王門から続く参道には、もともとは塔頭が建ち並んでいたのですが、今は門扉を残すのみとなっております。また、参道の中腹左手に、大聖寺の本坊と、本坊に付随するような形で護摩堂があります。そして本坊向かいには宝物館があります。宝物館はつい最近までは土蔵造だったのですが、建て替えをして今は宝物館というかたちで一応一般開放されておりますが、そのことがあまり周知されていないので、人が訪れることがあまりありません。特に常人が付いていて、拝観料を設定しているわけでもないため、お願いをすれば拝観させて頂けるという宝物館です。

今回調査をさせていただいたのが、仁王門、本坊、護摩堂、宝物館、鐘楼堂、観音堂そして文殊堂の計 7 か所です。まずは仏像の調査の内容について報告させていただきます。



① 仏像調査「亀岡文殊の中世と近世の仏像」

岡田：仏像の調査に関しては、わかる範囲内ではありますが、年代順にご報告させて頂きたいと思えます。

まず護摩堂の本尊であります不動明王三尊像につ

いてです。この像は一見したところ、極彩色に彩られていて近世の作かなと最初は思っていたのですが、台座の裏にこのように銘文がありまして、寛文七年（1667年）に修理をし、もともとは智証大師の作であると書かれております。それで詳細に調べてみますと、まず頭がとても大きい、そして胸が厚いという特徴が見られました。本像は一木で彫られている像高 22cm の小さなお像なのですが、全身に補修が見られ、像底には裾先に矧ぎ寄せた後補箇所が見られ、腕先も肘から先は明らかに急に細くなっているのの後補だと思われます。そして肩の部分から上腕にかけてはとてもたくましい形状で、仮に表面の彩色を取り除いた形を想像すると、とても古式の造形を示していると判断しました。よって、この像の制作時期は、平安時代 10 世紀から 11 世紀の作ではないかと、今回の調査では推定しています。（大聖寺・護摩堂① 木造不動明王三尊像 参照）

次に、文殊堂についてご報告します。この御堂自体は、大正時代に伊東忠太の設計によって建てられた御堂です。こちらの本尊は秘仏であり、普段は開帳していないのですが、今回の調査ではご住職等々の多大なご協力を頂きまして、特別に調査させて頂くことができました。

文殊堂のご本尊である文殊菩薩騎獅子像は、本体だけの像高が 29cm であります。本像台座は、現状では紐で括っていないと自立できないような状況です。蓮華座部分の台座の部材も何個か無くなっています。中心軸もずれているとは思いますが、これはわざとで、これを正位置に置くと倒れます。それぐらい危うい状況となっています。

文殊堂本尊
木造文殊菩薩騎獅子像



像高：29.0
腹奥：10.1
膝張：22.7



本体は首が挿し首になっているのですが、この前面の部分だけをはずしてみると、体幹部に割首の跡が見受けられました。そして後頭部材は前面部材に比べて長く、挿し首になっています。この頭部の前後材は、造形的には上手く合わせてありますけれども、両材を詳細に観察して、なおかつ体幹部との整合性を観察しますと、違う時代につくられた各部材が組み合わさっていると今回の調査では推定いたし

ました。さらに面部はつり目でふくよかな顔をしているというのは、明らかに宋風を示しておりまして、鎌倉時代後期頃の作ではないかと見受けられます。ただ体幹部に関しては、造形的に少し時代が降り、南北朝か、室町頃ではないかと考えられました。台座に関しては、極彩色のあり方や造形から見て、江戸時代のものと思われます。といったように、鎌倉、室町もしくは南北朝、江戸という 3 時代にわたって、部材が組み合わさって現状に至っていると思われます。しかし、江戸時代に作られた台座も現状では著しい崩壊状態にあるということで、文殊堂の本尊は亀岡文殊全体の本尊ですので、お寺にとって一番重要な像がこのような状況にあるというのは、今後考えていかなければいけない問題であると思われますし、ご住職にもそのようにお伝えしております。



次に、宝物館に安置されております木造の獅子座についてご報告します。このお像は、背中の中心部分に臍穴らしきものが開いており、それによって単独の獅子狛犬の獅子ではなく、文殊菩薩の獅子台座の獅子であると判断いたしました。このお像は、朽損が甚だしい状態なのですが、その中でも各所に写実的な表現が見られます。例えば、頭部が比較的大きく写実的な顔つきを示し、口の中の舌が膨らみ、柔らかさが見えます。また、上顎の中央が角度鋭く強くめくれ上がっている点が特徴的です。体幹部の肉表現も柔らかく写実的な表現が腕や胸の部分に見られ、また左足をやや前に出す動作が見られます。そして、頭部の巻髪の高さが低く抑えられているというような特徴がみられます。これらの点を他の作品から比較すると、この獅子座は鎌倉時代の作であると本調査では推定しました。これは可能性の域を出ないのですが、先程の文殊堂の本尊の面部だけが鎌倉時代の作だと考えると、この面部とこの獅子座がワンセットだった可能性も考えられるのではないかと推測できます。今後、炭素 14 などの科学的な調査方法を使った調査機会があれば是非調べてみたいと思っておりますが、そういったことで

なければ、それ以上の年代の特定は難しいのですが、可能性としては十分考えられると思います。
(大聖寺・宝物館① 木造獅子像 参照)

次に大聖寺本坊に安置されている三尊についてです。

まずこちらが聖観音菩薩立像で、山形県の指定文化財になっております。これは、彫刻家で本学の元非常勤講師をされていた鈴木実氏によって修復がされております。膝前や足先、腕の一部などの部分は、鈴木氏による補作であります。

次に二体の如来像についてご報告します。こちらの像高は現状で153cmと154cmで、裳先より下の像手部材を失った状態でほぼ同じ大きさです。先ほどの聖観音の像高が186cmなので、元々はほぼ同じくらいの大きさの像であったと考えられます。

これらの3体は、造形的に見て明らかに鎌倉時代の様相を示しております。寺伝によれば、近くの安久津八幡から伝わったものであるとされています。たぶん廃仏毀釈の頃なのではないでしょうか、安久津八幡から川に流されたというようなお話もあるのですが、いつ頃からか大聖寺で保管されるようになったと伝わっております。

本坊 木造聖観音菩薩立像と木造如来形立像2体



如来像2体は、見ての通り著しく損傷しておりますが、それでも鎌倉時代の造形を色濃く残している貴重な仏像ですので、もうちょっと良い形での保存方法を講じた方が良いのではと考えております。

それと、もともと安久津八幡にあったのだとしたら、ではこの如来像は何像なのかという話になります。手先が失われているために何とも言えませんが、両像とも右手を上げて左手を下げているということは確かで、お寺には当時のものかは解らないのですが右手が二つ残っております。今回はそのうちの一つしか確認できていないのですが、過去の資料によれば二つあると言うことです。それで、その両方ともが来迎印を結んでおり、右手が二つなので、この如来像は両方とも阿弥陀像ということにな

ります。安久津八幡の前身は安久津阿弥陀堂ということなので、そこの本尊であったのか、もしくは八幡神の本地仏の阿弥陀であったという可能性もあるのかと思っておりますが、推測の域を出ません。

次に現在護摩堂に安置されております不動明王立像です。

こちらは像高68cmのお像で、見ての通りとてもバランスの良い形状、造形を示しております。現状で頭部が遊離していますが、運慶作の願成就院や浄楽寺の不動明王像に視線、姿勢においてとても似ており、造形的にも優れたものが見られます。これは明らかに慶派の造形を示しているということは確かです。ただ運慶からどれくらいの時代が降るのかは定かではありませんが、鎌倉時代の間、運慶から遠く降らない時期の制作ではないかと推定しております。(大聖寺・護摩堂② 木造不動明王立像 参照)

現状では頭部が体幹部に落ち込んだ状態で、頭部の部材が一部欠失しております。像の芸術品の価値または歴史的な価値からみると、この保存状態というのはあまり好ましくない状況であると思います。また、台座との接合も不安定で、護摩堂の壁に寄り掛かるように安置されております。修復を含めた改善措置を視野に、これからの活動を続けたいと思っております。

次に普段は秘仏としてまつられております銅像の歓喜天像で、今回特別に調査させていただきました。こちらは蠟型鑄造によるものだと思います。現状の表面には、油分の強い付着物が付いておりまして、べたべたした状態でありました。ただ、保存状態としては良好で、造形的に見てこちらも鎌倉時代ものではないかと今回の調査では推定いたしました。

像は現状で厨子に収まっておりますが、厨子の部材が遊離しておりまして、崩壊の危険性もある状態でした。また、扉の飾り金具もはずれております。こちら、厨子に対する保存管理の改善または修復を行ったほうが良いのではないかと考えております。(大聖寺・本坊④ 銅造歓喜天立像 参照)

次にこちらが宝物館の方に安置されております像高44.7cmの菩薩坐像です。造形様式的に見て、室町または南北朝の頃の作ではないかと思われます。こちらのお像は、体幹部の前後部材を四点の前後柄で組み合わせています。構造的にまるでプラモデルのように組み合わせることができます。両腕部材や膝前部材に関しても柄がついておりまして、組み立て式になっております。このような前後柄が残ってい

る例というのはあまり多くないため、そういった意味でもとても貴重な事例になるかと思われます。ただ、宝物館の保存環境の全般的な現状と、現状で耳朶の穴に紐を通して面部を留めるという留め方に関しては、もう少し保存のあり方の改善が必要かと思われます。(大聖寺・宝物館② 木造菩薩形坐像 参照)

次からは近世の作と思われる仏像について報告いたします。

こちらは本坊の本尊として祀られております大日如来坐像です。こちらは光背、台座ともに立派なものに座しており、江戸時代の京都の名のある仏師の彫ったものではないかと造形からは見受けられるのですが、残念ながら銘等は発見出来ませんでした。

本坊本尊 木造大日如来坐像



像高：96.3 腹奥：28.9 膝張：68.9

続いて、文殊堂の横にあります観音堂と、鐘楼堂についてご報告します。この2つのお堂に関してははっきりと由緒が解っておりまして、江戸時代の享保十五年に待定坊という僧が勧進をして建てたと伝えられております。

観音堂の中には、阿弥陀如来立像を御本尊として三十三観音がまつられ、右手に弘法大師坐像がまつられています。こちらのお像も待定坊の時代、江戸時代に作られたものとされています。(大聖寺・観音堂 参照)

次に鐘楼堂には、小さな御像が沢山納められているのですが、建立当初から安置されていたものではないと思われます。なぜならば、十王像がまつられているのですが、こちらが2セット確認できたからです。膝ありと便宜的に名づけました膝前まで一木で彫り込んだセットが7体あり、もう1セットは膝なしと表現しましたが別材で膝前を矧ぎ付けていたと思われる十王像が9体残っております。この膝ありの十王像に関しては、造形的に見て室町頃のものではないかと今回の調査では推定しました。そして、膝なしの十王像は江戸時代頃の制作ではないかと推定しました。いずれにしても、時代の異

なる十王像が2セットあるということになります。現状では十王堂が亀岡文殊境内には現存していないのですが、いつの時代かまでは十王堂があり、十王信仰があったということを証明するものであると考えておりますが、今後、その裏付けをとる調査を行っていきたいと思っております。(大聖寺・鐘楼堂 参照)

続いて仁王門に安置されております仁王像についてです。こちらは江戸時代の作と推定されますが、とても造形的にも優れ、亀岡文殊という大寺の規模に見合う立派な仁王像が安置されております。ただ、やはり仁王門という風雨に晒されるという状況で、なおかつ冬には完全に仁王門が雪に埋もれてしまうような環境なので、こちらの仁王門、または観音堂や鐘楼堂などの格子だけで仕切られた御堂に関しては、内部に安置される御像の痛みがとても激しい状態でした。特に彩色層の剥落が激しかったので、その辺の修復や保存管理体制の改善が今後望まれます。(大聖寺・仁王門 参照)

次に護摩堂と宝物館にそれぞれ安置されております毘沙門天立像と不動明王立像についてご報告します。こちら2体は、大きさや造形的に見て一具であったと思われます。それが別々に安置されている点に問題があるのではないかと思っております。

護摩堂 木造毘沙門天立像
宝物館 木造不動明王立像



像高：37.5



像高：38.2

次に本坊に安置されております弘法大師坐像、興教大師坐像と、本坊ある位牌堂にも弘法大師坐像が安置されております。また本坊には破損した菩薩像が2体安置されております。

続いて護摩堂についてご報告いたします。護摩堂は最近建て直しをされたのですが、夏季はかなり高温になっておりました。ですので、本当に真新しい建物なのですが保存環境に問題があるかと思われましたので、こちらは後の保存環境調査報告として米村講師の方から報告いたします。

次に旧護摩堂の木鼻ですが、今は護摩堂の中に安置されております。その他にも、護摩堂には小さな

御像が沢山安置され、先ほど紹介した不動明王三尊像や不動明王立像とともにまつられております。また、護摩堂には十王信仰等に関係があると思われる脱衣婆像が安置されております。このように、宝物館、本坊、護摩堂などにまつられている仏像が、もともとの安置場所がわからなくなって、現状では混在している状態ではないかと思われます。(大聖寺・護摩堂③ 護摩堂安置のその他の諸尊 参照)

次に宝物館についてです。宝物館の中にも色々なものが収められております。

弘法大師像から地藏菩薩像、僧形の形をしておりますお像など、多種多様な仏像があります。なかには、朽損が激しく何像であるのか判定できないものもありました。また、造形の尖った部分の彩色だけが損傷を受けているものがあり、鼠か虫の被害を受けたものと思われます。

仏像以外にも、近世のもので大きな紙の張子で作った獅子頭などがあつたり、ほかにも宝物館には多くの工芸品と一緒に納められています。このような色々なものが綺麗に並べられて展示されております。こちらは天皇家からの御撫物です。またこちらは待定坊が使っていたお椀だそうです。待定坊は、鐘楼堂の裏で入定されたということで、即身成仏になられたそうです。(大聖寺・宝物館③ 宝物館安置のその他の諸尊 参照)

以上立体物に関してのご報告を終わります。

②書画調査「宝物殿に見る書画作品と保存」

大山：引き続き、大聖寺の悉皆調査から、宝物館に所蔵されていた書画作品を中心に発表したいと思います。調査した日程は2010年8月19日から24日という6日間調査を行いました。保存環境の調査については後日また調査に行っています。過去に大聖寺では何度か調査をされた経緯があり、昭和二十四年山形県文化財保護審議会が出している『羽陽文化』によると、所蔵作品等を調査されているという記録があります。現在宝物館等に記載されてい

るキャプションなどはその当時の調査結果を参照していると思われます。

調査した件数ですが、掛軸は17件、板戸絵が1件、屏風が2件で額が2件、計24件が本堂の中に納められていました。向かって右奥にあるのがこれが秘仏である歓喜天の厨子と壇になります。壁一面に經典類が積まれて保存されていてあちこちに虫による被害があるのですが、今回は現状の確認に留めました。本坊右手奥には位牌堂が続いており、壁面には台帳が掛けられていました(大聖寺・本坊⑨ 台帳 参照)。須弥段の奥、裏側に納戸があり、その木箱の中には版木が詰め込まれて収納され、版木という括りで2件でしたが、92枚の版木が納められていました(大聖寺・本坊⑩ 版木 参照)。台帳と版木はメジャーを並べて写真撮影して記録をすることに留めています。木箱の中に入っていたということと、暗くて湿気も多い場所であるということもあり、表面は虫による被害が見られて、侵食が進んでいる状態でした。今後、何らかの対策をとることが望ましいと考えています。

宝物館の文書類の調査結果は、こちらの19点になります。先ほどの参道を南から登ってきて、左手の門をくぐってさらに左手が宝物館となっています。

宝物館内は、壁面に絵画作品が掛けられて、その手前に工芸品、仏像が並んでいます。中央にガラスケースがあつて、その中には文書類が納められていました。掛軸は総数41件になりますが、壁面に隣り合うように展示されていました。このような状態で展示され、絵馬、文書、あるいは工芸品類が並んでいます。



観音堂では絵馬が周囲を取り囲むように掛けられていて、16点を確認しました。今回は写真の記録に留めています。

過去の亀岡文殊調査

昭和24年 4月5日
「出羽文化資料」P86 川崎浩良著
木像観音立像三仏について

昭和31年 5月11日 山形県文化財保護協会により、彫刻、工芸、考古資料、古文書、絵画、について
上記三仏、大永二年禁制制札、文明五年物置寺銘牌、本山よりの文書、御朱印状、埋蔵金大等 他絵画数十点を調査

昭和31年 9月18、19日 高良町総合開発審議会の依頼により、武田好吉氏が木造獅子像、阿彌陀如来坐像を調査

昭和32年 5月12日 大聖寺の依頼により従来のものを再調査。木造釈迦如来坐像、同天部立像、同如意輪観音坐像、同地藏菩薩坐像、同不動明王坐像が調査された。

その後も武田氏らにより、複数回の調査が入っている。

「羽陽文化」第79、80巻



大聖寺の中にある作品群の中で、現在高島町の指定文化財に指定されているものは2つあります。

一つ目は「大永の制札」です。大聖寺の山門の前から掘り出された経緯があります。表面は腐朽が進んでいて現在は宝物館のケース内に納められているので、現在進行しているかは確認できなかったのですが、かなり侵食が進んだ状態になっています。文字等は現状でもある程度確認はできますが、赤外線画像を使って文字情報を記録しました。

宝物館の所蔵作品は各年代に渡っていて、絹本の作品は意外に褪色が少ない状態でした。「四社明神」「三尊来迎図」「弘法大師図」「白鷹図」といった作品が宝物館でも最も古い部類の絵画作品になるのではないかと考えています。

『羽陽文化』の調査に掲載されていた、過去の調査でも調べられていまして、それぞれ鎌倉時代といわれています。作風はもう少し時代が下っている気がします。作品としてはしっかりしていますが、裂が全くななくなってしまっている箇所や裏面上巻部分の紙が虫による食害で損なわれています。本紙の大部分が裏打ち紙から浮き上がってしまっているなど、状態としてはどれも危機的でした。

次にもう1件の高島町の指定文化財、亀岡文殊堂奉納詩歌百首になります（大聖寺・宝物館④ 亀岡文殊堂奉納詩歌一冊 参照）。百首の短冊が冊子にまとめられて木箱に納められていて、直江兼統が慶長七（1602年）に大聖寺で句会を開いた際の短冊を一冊の冊子にまとめたものです。変色や傷みが出ている所がありますが、今現在はガラスケース内で納められているので、比較的安定しているのではないかと考えています。

他の調査作品は、あまりに数が多いため、今回は確認という形になっています。多くの作品は上巻部分の損傷が著しく、後は横折れ、軸首の損傷というものも共通していました。表面からでは分からない場合でも、虫による食害で裏面上巻絹部分が、ずたずたになっています。

大聖寺には複数の両界曼荼羅が収蔵されていました。唯一裏書から制作年代がはっきり分かる作品で

は、墨書きに宝暦十三年（1763年）に制作といった由緒書きが記されています。その先の調査にはまだ至ってはいません。

書画作品では、上巻部分を展示室にあわせて丸めるなど、工夫をしながら展示をしていました。両界曼荼羅の作品ではこの掛軸を巻き上げたときに一番外側に当たる部分が虫による食害でなくなっています。掛金が透けて見えるのが分かるほどです。この状態を継続するのは危険なので、改善策を何らかの形で提案できればと思っていますところです。

本坊内に収蔵されていた仏画や、本堂にあった仏画作品では、寸法や、表装に使用している紙の文様が共通しているものがあります。中廻しという赤い箇所も和紙でできていますが、かなり似通った文様になっています。

先ほどの両界曼荼羅と様式等が違うので、別の時期に仕立てられていると考えられますが、この類似する作品群はある一時期に大聖寺に所蔵されたなどの経緯でそろっているのではないかと推測しています。

今回の調査では、掛軸の一番外側、上巻きという部分に宥英という名前が数多く見られました。この名前は過去の調査でも確認されていたようで、一見してかなり貴重と思われる作品の裏面にはこの宥英という名が記されており、ある一時期に貴重な作品だという認識を持って取り扱っていたということが考えられるということでした。

どの作品も損傷は著しく、本紙が裏打ち紙から浮いている状態で、全面に渡っているために絵がはがれかけている危機的な状況であると思われます。

十二天像という灌頂等で使う仏画では本来12枚あるはずの仏画で、宝物館では5枚しか確認することはできませんでした。貼り風帯が欠損している状況が見られました。

両界曼荼羅と真言八祖像でも、やはり表装が共通しており、同時期に揃えられた作品ではないかと考えています。

大聖寺の作品では、表装裂の代わりに和紙を使っている量が非常に多い。和紙を使った表装を紙表具と呼びますが、江戸時代に多く見られるので、そういう文化背景が全般的に広がっていたことが分かります。

大聖寺には、有名な亀岡文殊という通称があるので、文殊菩薩に関する作品は非常に多数見られました。その中でも、一風変わった作品で、本堂の床の間に掛けられていた作品ですけれども、織物で獅子に乗る文殊菩薩を織った作品になります（大聖寺・本坊⑦⑧ 参照）。明治十七年奉納など、来歴が分かり、裏面に奉納をした人達の名が記されていて、

信仰の厚さというものがよく分かります。興味深いことに、すぐ隣に紙本着色で同じ図像の掛軸が掛けられていまして、本紙下部分の記載が合致しているところから、この織仏の下図として描かれていた作品と考えられます。これによると、当初の鮮やかな色彩が様々な理由により褪色して、現在に至ったのではないかと考えられます。

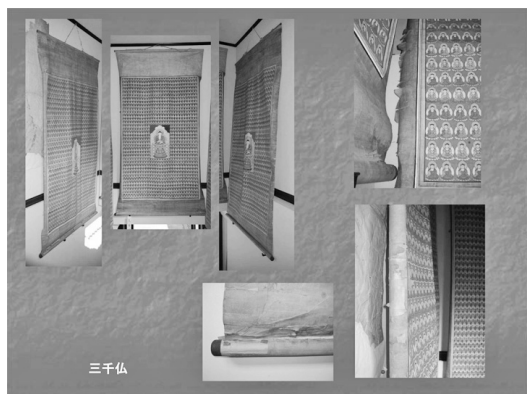
また、明治十四年に天皇が東北を巡幸した際、高畠を通っているのですが、その御一行を描いた絵図、それに随行していた侍従が大聖寺を参拝した際の俳句の掛軸も見られ、ある時期の地域の動向が作品となって残っています。

他には様々な書の掛軸などが見られます。

文書類の中には手鑑という金箔に草花図をあしらった美しい作品も展示されていました。この作品も羽陽文化に掲載された過去の調査の中で、上杉家の姫君から奉納されたという風に記されておりす。

今回、板絵が二面あるのですが、板戸絵ですね、一見ただけでは風化により画面の表情が全く確認できない状態なのですが、赤外線画像を使うと二羽の鶴の絵が確認されました。裏面には二人の老人が座っている絵が残っています。あとは御朱印状が亀岡文殊の収蔵品の中では非常に目を引くのですが、八代吉宗から十二代まで揃っていて大聖寺の寺領を与えるという御朱印状が揃っています（大聖寺・宝物館⑩ 御朱印状 参照）。この写真ではちょっと拡大はしていないのですが、非常に凹凸のある厚みがしっかりした和紙に記されていて、各年代ごとに和紙の表情が異なっていることから、一枚一枚調べることで、その年代の変化みたいなものが見えると考えられます。宝物館の入口から二階に登っていく階段に掛けられた絵図ですけれど、寺領を描いた絵図で、横が2 m という非常に大きな作品で、傷みが出ているのですが、現在ある程度修理された状態で展示されています。

階段の壁面に掛けられた三千仏、非常に大幅で縦3 m に近い大きな作品になります。入口の空気の



流通を直接受ける事や、右手に小さな窓があるために日光の影響等も直接受ける環境下にあります。その為、劣化の進行が現在一番懸念される状態で、調査結果を報告に伺った際に報告させて頂きました。

今回は作品の記録を作ったという段階ですが、調査中にもまだ他にも多くの作品が発見されて、今回全ての悉皆ができた訳ではないので、今後作品背景の追跡調査と同時に、まだ残っている作品群についても何らかの形で調査を進めて行きたいと考えています。また損傷が多いので、一点一点の作品の保存修復ではなくて、包括的に全体を調査保存できる方法があれば検討して対処していければと考えています。

以上で発表を終わります。

③保存環境調査「山形県高畠町大聖寺の環境調査」

米村：続きまして、本センターで保存科学を担当しています米村が、大聖寺亀岡文殊保存環境調査についてご報告させて頂きたいと思います。今回は特に宝物館を中心に報告させて頂きます。

本プロジェクトでは大きく二つのテーマに分かれておりまして、このテーマ2は、『環境に配慮し、安全で簡便な地域文化遺産保存管理』を地域住民と展開する為の基礎研究と教育普及を行っていくこととなっております。

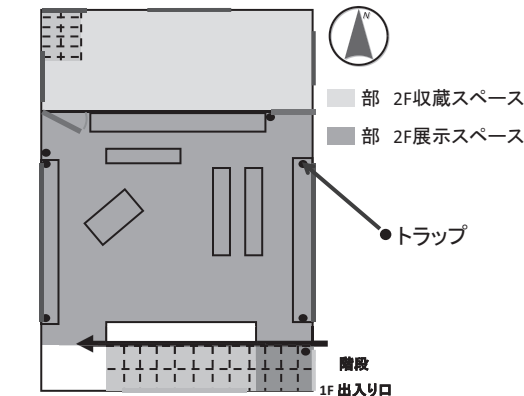
地域には様々な状況の中で文化財があり、一般的な博物館や美術館のような環境を整えるというのは不可能であると同時に、それが良いという訳でもありません。限られた状況の中で実際に文化遺産と普段から関わっている地域住民と一緒に、どのような形で残していくかということを考えていくことが重要になっています。

このプロジェクトの平成二十二年度における取り組みとして、先程まで報告がありました悉皆調査の調査地の環境、温度、湿度、照度や生物被害などこうした項目に関する調査を進めて、調査地の総合的な環境を把握しようと試みました。

調査方法としては、よく博物館等でも最近行われているイカリ消毒（株）が出した昆虫調査用のトラップを使用しています。これは一般的に販売されているゴキブリホイホイのような、中に餌やフェロモンが付いているものではなくて、虫などが生活の中で普通に動いて通過したものを捕獲するというものになります。宝物館の中に7箇所設置して、2010年8月22日から11月5日までの75日間、調査しています。目視と顕微鏡観察によって捕獲した生物の種類と数を計測しました。また、温湿度はデータロガーを設置し、30分毎にデータを収集しています。調査期間は諸事情で11月以降となっております。

すので、現段階で4ヶ月程度のデータが得られている状況です。まず宝物館の平面図がこちらです。

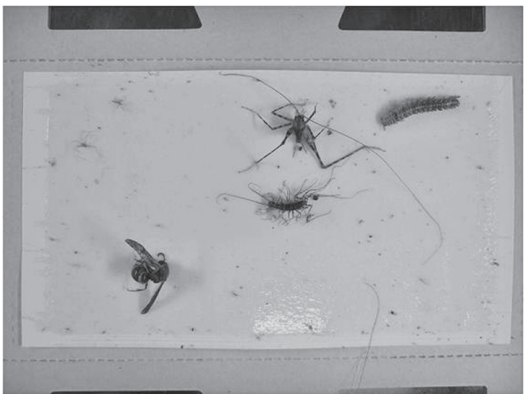
亀岡文殊宝物館 平面図およびトラップ設置



先ほど岡田研究員の発表の中で、宝物館の写真が出てきましたが、二階建ての建物の二階部分だけが宝物館になっています。図の上が北側になりますが、南側に入り口の階段があり、登ってから北に向かって展示スペースがあります。この二階のスペースは大きく二つのスペースに分かれており、北側の収蔵スペースは展示公開されていません。二階の南側に、展示スペースがあります。この間は扉二つで区切られており、普段はここで区切られています。トラップは、入口と外部、東側、西側と北側に設置しています。この図の中で太線で表示しているところは、窓になっていまして、展示スペース内では、展示台の下に窓があります。

これは入口に設置したトラップで、開いてみると、主に歩行性の昆虫や、一部こうした飛翔性の昆虫も捕まっています。こうした生物を全部計測していきます。

亀岡文殊宝物館 1F 入口設置トラップ

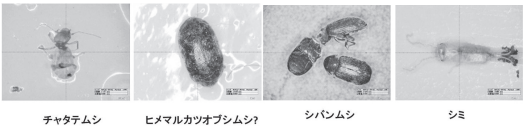


実際にトラップで捕獲した生物のうち、文化財害虫として同定したものは、シバンムシ、それからシミです。少しトラップの中を頑張って歩いて息絶えた状態が分かります。

こちらは、チャタテムシ、ヒメマルカツオブシムシだろうと思いますが、チャタテムシから受ける、文

化財被害は少ないのですが、暗くて湿度が高い場所を好むので、その環境指標にも役立っている虫です。

トラップで捕獲した生物



この他に、イガの繭など様々な生物を捕獲しました。こうした生物を種類ごとにカウントしていくと、こちらの表のようになります。

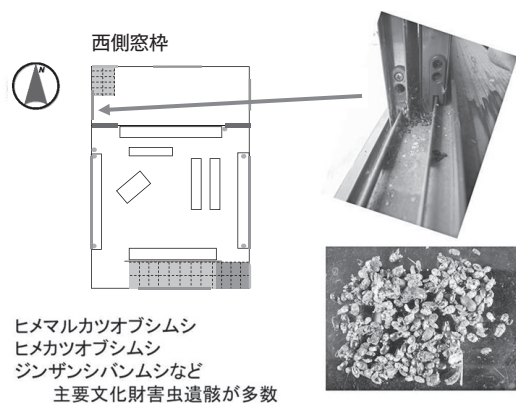
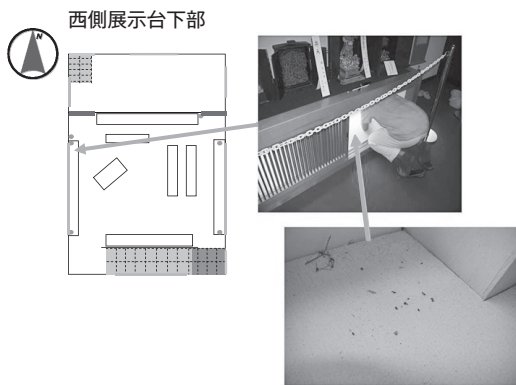
表 亀岡文殊宝物館設置トラップ調査結果

	西窓①	西窓②	西ドア前	東側ドア前	東窓①	東窓②	1F入口	計
アザミウマ	2	1	3	1	1			8
ガガンボ	1							1
カマドウマ								1
クモ	2		4	7		7		25
クロバネキノコバエ	1					1		5
ゲン								1
コオロギ						1		1
シミ		1						1
ダニ		1						1
タマバエ	3	1	2	1	1			9
チャタテムシ	2	4						6
チョウバエ			2			1		5
トビムシ			1		3			5
ヌカカ								3
ハチ			1	1				2
ハネカクシ			1					1
ヒメマルカツオブシムシ		1			1	1		3
ヒメマルカツオブシムシ								
ヤスデ				1	1			1
ユスリカ	1		1		1			4
ヨコバイ				1				1
合計	12	9	15	12	7	11	28	94

方角的に何か得られるかと思ひ、西側と東側と入口で分けてみたのですが、実際見てみると西と東で大きな差はないように思われます。ただし西側にチャタテムシがいる傾向はあると思います。一階入口のトラップが群を抜いて捕獲しているというのが分かりましたので、やはり一番の侵入経路は一階だと思ひますが、窓からの侵入もかなり多いようです。ただし先ほどお話ししたように、トラップの調査は8月22日からですので、どちらかという虫の活動がやや衰退してきている時期です。

実際もう少し春から夏の辺りが一番多くなるため、もう少し早くトラップを設置していれば、より多くの虫が捕まっただとは思ひますが、傾向としては同様の結果が得られると思ひます。

展示台の下は60cm程度の隙間があり、その向こうに窓があります。やはりこのような箇所に多くの虫の死体があります。調査した段階で既に死んでいたのがトラップに捕獲されることはないのですが、既にこうした虫が沢山存在し、侵入可能であることがわかります。同様に西側なのですが、収蔵スペースの窓の棧の隙間に、虫の死体が多数ありました。全て集めてみたところ、ヒメマルカツオブシムシ・ヒメカツオブシムシ・シンザンシバムシなど主要文化財害虫として一般的な虫の死体が多数ありました。



物への影響について、東側展示台の引法大師坐像を調査の為に動かしてみると、座像の形に木の粉が、集まっています。下だけではなく外側にも、この像全体に、虫の穴と木粉が沢山出ています。

東側展示台「弘法大師坐像」への被害

像全体に虫孔と木粉

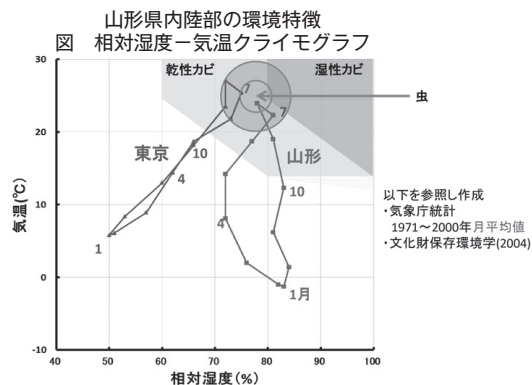
トラップ設置時に
木粉を取り除いたが、

回収時に新たな木粉

像内部を現在も虫が食害していることが考えられる



トラップを設置した8月の段階で、このように粉が多く出ているところを全部掃除して取り除いたのですが、トラップ回収時に新たな粉が出ていました。像内部の食害は現在も進行形になっていることが、これで明らかになっています。虫による被害が生じているということが分かりましたが、調査地の温湿度変動特性を知りたいところです。現段階で四ヶ月分のデータなので気象庁で公開しているデータを使って、おそらく、同様の環境になるだろうというデータを作ってみました。こちらは気象庁の統計で1971年～2000年の温湿度月平均値から作成したクライモグラフです。カビの情報等は文化財保存環境学という書籍を参考にさせて頂きました。



クライモグラフは、横軸が相対湿度、縦軸を気温とし、月平均値をプロットした図です。1月ですと83%位の湿度で、気温がマイナス2、3℃前後です。2月になって少し温度が上がり湿度が下がって、一年間変動していきます。この方法で測定地の温湿度の大まかな傾向を見ることができます。同じことを東京で見ても、1月の平均気温が5度で、湿度が50%です。山形に比べて直線状を動いているということ、それから、気温が高い夏季に湿度が高く、気温が低い時期に相対湿度が低くなっているということが分かりますが、山形は年間を通して相対湿度が70%を越えています。一番寒い1月、12月の湿度が、最も高いのです。そして4月、5月辺りの湿度が一番低く、穏やかで過ごし易いということになると思います。また、7月、8月に湿度がある程度上がり、秋以降、寒くなって湿度が高い状況をずっと維持していきます。おそらく今度の計測データも、これに準じた形になってくると思います。図の、右上のエリアはカビが発生する領域として知られているものです。カビの発生する最低の条件があり、相対湿度が60%、気温が約25度ということになりますが、実際はものを置いた時に10年位かかって、カビが生えてくる指標です。もっと短いスパンでカビが発生するのは大体70%位と言われています。今回の調査の中では、カビによるものと考えられる被害は確認されましたが、危険性があるだろうということは考えられます。それから、この緑の枠の中は、虫がよく出てくる条件なので、南の地方より活動の時間は短いといえます。冬に一気に寒くなりますので、11月から1月は、虫を見かけることは殆どなくなります。一気に発生して、短い期間で活発に活動していくのではないかと考えられます。今年度の結果だけを見ても、本調査地は明らかに文化財害虫の被害があります。宝物館だけでなく、本日の報告であった様々な状況にも共通して言えることだと思われ、周辺環境に非常に多くの生物が存在していることがわかります。宝物館の場合は、重要な侵入経路があり、一階の入り口と東西の

展示台の下の窓が明らかなので、改善したほうがいいと言えます。特に春先が重要になってくるのではないかと考えています。それは、この虫が3月から5月に成虫になり、その後産卵をするという生活環をもっているからです。一時的に温かくなったり、ちょっと光が出てくるところに集まったりするのは、昆虫によくある性質です。実際にこの東北芸術工科大学の建物でも、春先になると、窓の近くに大量のテントウムシが集まってきます。それと似たような現象と考えています。来年度は対策を含めた調査計画が必要と考えています。例えば窓に細かいメッシュを入れてみるとか、入り口付近になんらかの形で虫が入りにくい状態を作っていくことです。また、実際に虫害が進行している収蔵庫については、先に殺虫処理をしていく必要もあると考えています。そうでないと、さらに進行してしまう可能性があります。

一番最初にお話したように、テーマ2は、簡便な文化財遺産保存管理を地域住民と展開する為の研究なので、得られた結果を、今回は宝物館になりますけれども、お寺の方々と検討して、改善可能なことを考え、プロジェクトが終了した後でも継続できる形にしていきたいのです。また、その他の地域においても同様の研究・展開をしていきたいと考えております。

大聖寺（亀岡文殊）文化財悉皆調査 意見交換

長坂：以上高島町大聖寺の調査報告でした。この大聖寺で保存環境に関する本格的な調査を行っている訳ですが、ここで三浦先生にまず御意見、御講評を頂きたいと思います。

三浦：三浦でございます。今日お話しを伺いまして、まず大変丁寧なきちんとした調査をされたということに敬意を表したいと思います。大変お話を伺っていて面白かったです。

それで研究は、今米村さんからもお話しがありましたけれども、テーマ1とテーマ2とに分かれている訳ですね。それでテーマ1の方では、地域遺産の再発見と新たな価値の創出ということで、最初の悉皆調査を色んなところで始められた訳ですけども、お話を聞いていて大変面白かった。本当にこんなものが、いいものが沢山あるのだなという印象を受けましたけれども、多分これからあと四年またやる訳ですけど、やはり一つ一つの文化財、あるいは作品の良さということだけじゃなくて、全体としてそれがこの地域の文化とどう関わっていくのかといったことを更に進めるのがこのテーマですよね。今日お話しされた中でも、まだまだ個々の作品についても調べなければいけないことが残っているようですね。

ども、それをやるだけではなくて、全体像として、例えば彫刻だとか絵画だとかのそういったものが何故そこにあるのか、あるいはそれがあるということが地域にとってどういう意味を持っているのか、ということを進めていって頂きたいと思います。それが新たな価値の創出ということに繋がっていくのだろうと、そこに是非期待をしたいと思います。



それからテーマ2の方では、今米村さんの方から説明がありましたけれども、地域遺産の保存管理ということですね。まずは、岡田さんと大山さんの方からご報告のあった大江町の社寺調査。ああいったところの保存の状況を見てみると、大変難しい問題、例えば雨漏りの問題だとか色々あって、そちらと比べると今お話があった大聖寺の宝物館は非常に良い方だと思いますね。地域としても広いですから、それを全部やろうとしようとするのはなかなか大変なことだと思います。ですので、ターゲットにできる場所として、大聖寺の宝物館を最初に選ばれたのだと思いますけれども、それはそれで間違っていないと思いますね。その中で、地域、あるいはそこで仕事をされている人達と、あるいは関係している人達と、一緒にどうすることがまずやっていけるかということを模索されるという方法は良いと思います。それで、そういった方向で進められていくとしても、それが一回きりのものではなく、研究計画として後まで続くような形でやっていくということが大切だと思います。是非そういう方向で進めて行って欲しいと思います。それと、やはり大聖寺の宝物館のようなわりとしっかりしたところだけではなくて、もっと大変なところもある訳ですね。そういったところというのは、建物を建て直すとか、あるいはその地域で支える人とどうやって作っていくとかいった、また別の問題が出てくるのだと思います。そういったことも含めてかもしれないのですが、まずどこからはじめたらいいかというような管理の方法や、いろいろな場所で応用出来る方法を、この研究の中で少し広げることができたらいいなと思っています。

またそれだけではなくて、もうひとつお話を伺っ

て見ると、このいろんな研究結果の中には問題があるように思います。というより問題を解決しなければならない問題があるということです。ひとつひとつの文化財というと本当にもうすぐにでも修理をしなければいけないだろうというものもあります。そういったものをどうするか。修理することはこの研究とはちょっと離れた問題だろうと思うのです。ただそういうものをお持ちの所有者の方々に、どういうふうに接していったらいいですよということをお話して、あるいは部分的にはなんらかの形でこの東北芸術工科大学の方で引き受ける。もちろん予算的な裏付けがないと駄目でしょうけども、そういった道筋を合わせてお話をしていくといったことを考えなくてはいけないのかなと思います。この研究計画というのは、いろんな方向へ進んでいく必要があるのかなと思いました。



それでさっきの話に戻るのですが、虫で喰われていた木彫像についてですが、まだ虫が生息している可能性があり、これには取り扱い方の話をする必要があります。すぐにそのまま返すのではなく、できることを言うならば、それは他と隔離するような形で置いていただくと更にそこからの被害が広がらないので、最初の段階としては燻蒸とか殺虫処理をする前にそれをどこか別のところに置くとか、あるいはどうしても展示したいとおっしゃるならば、なにかで囲って虫が逃げないような形にするとかといったことを案内しながら、少しでもより良い方向へと進めていくということがこのプロジェクトの中でできたらいいと思います、是非頑張って頂きたいと思います。以上です。

長坂：どうもありがとうございました。三浦先生から保存に関して御教唆を頂きました。

では次に、調査研究に関してはやはり歴史的な観点から御意見があるのではないかと思います。なにぶん亀岡文殊では数多い報告がありましたが、鎌倉時代の作例というものも出てきたのですけれども、これに関しては松尾先生いかがでしょうか。

松尾：私自身初めて、秘仏の文殊菩薩像のお顔が鎌倉時代のものであって、そのほかの部分の時代は違

うのではないかとということをお聞きしまして。とにかくこういった秘仏の仏像を、実際我々が普段拝見できないものを、また貴重なものを拝見させていただいて、私自身吃驚しております。

また、護摩堂の本尊の不動明王三像が修復されたのは江戸時代ということで、もとは古いものではないかという見解ですが、平安まで遡るのですか。それはその様式から見られてということですが、山形大学に炭素年代を測定する機器がありますので、それらを使った調査などをして年代が出てくるというですね。



岡田：はい。しかしとても小さな御像ですし、なかなか難しいかもしれません。また樹皮までが存在していないと正確な伐採年代が出せないものですから、その辺、このお像の場合何処までできるかっていう問題があるように思います。ただ、本体から大まかにでも成長年代の幅を考えても1000年頃とのデータがでたとして、後補箇所から1700年頃の年代データが得られれば、ある程度歴史の裏付けを探ることができるかと思います。そういったことも含めまして、今後、山形大学や他の大学との連携体制をとって研究していくことも視野に入れております。

松尾：とにかく、亀岡文殊に関しては文献がありませんよね。ですから、モノを通して亀岡文殊の歴史が分かればいいなと私自身は思っております。とにかく、今回の報告では突然こういうものが出て、本当に驚いているところでした。今後の成果に期待しています。

長坂：ありがとうございます。では次に、この地域の中世の歴史についてということで、伊藤先生何かございませんでしょうか。

伊藤：そうですね。歴史ということでふられましたが、高島あたりですと、基本的には11世紀の末頃から屋代の荘園がありまして、鎌倉期の地頭というところ、大江とか長井が入ってくるでしょう。あと南北朝に来ると伊達が入ってくる訳ですね。安久津八幡宮は荘園鎮守としてありまして、八幡宮の本地仏は阿弥陀ですので、そういう関係があるというのは

分かります。あと徳一が入って法相宗、その後真言宗となる。そして真言密教の影響があって色々な仏像があるというのは良く理解できます。安久津八幡と大聖寺との関係、そしてその地域の領主との関係をどう考えていったらいいかと考えておりました。今すぐはまとまってお話をできるようなことはないのですが、今回の報告では色々な研究素材を与えて頂いたなという気がいたします。

長坂：ありがとうございます。それから、書画の調査でも中世のものが大量にあるのですけれども、それは中世仏画や版木だとかですね。それで中世の大聖寺の信仰といいますか、それを支えたものとの関係に、中世という時代区分で見ただけでも特別なものがある気がします。まだ今のところ調査しただけというところで、整理ができていない段階です。また、近世の遺品に関する考え方に關しましても、今日おいで頂いている方々にご指導いただければと思います。

それでは、次に高島町ですね、もう一つの調査についてご報告いたします。



遺跡調査「戸塚山古墳群実測調査と高島石」

北野：本センターで考古部門を担当しております北野といいます。私の方では米沢市、高島町での活動ということで、戸塚山古墳群の測量調査等について発表させていただきます。



これまでずっと仏教美術の世界のお話だったのですが、これからは埋蔵文化財調査の話になります。昨年度までのオープン・リサーチ・センター整備事

業の中では、高島町に入って5年間、飛鳥時代の終末期古墳であるとか、同時期の焼き物の窯跡の発掘して、その時代の歴史像の解明とともに、人々が地域固有の自然資源をどういうふう利用してきたか、その技術と、その土地にどんな特色のある遺跡を残してきたかについて研究してきました。

その中で、高島というのは高島石を基盤とする地質・地形の中で生まれた文化財、すなわち古墳をはじめ、中近世の石仏・石塔、鳥居、近代に入ってから高島石を土木建築資材として切りだした石切り場跡があり、そういう石使い、石切りの技術が面々と伝えられてきた場所である。そんな遺跡や遺物が集積した環境の中に現在の暮らしがあるということが、地域固有の特色ある景観として浮かび上がってきました。

今年度からのこのプロジェクトでも、大きなテーマとしては、高島石に代表されるような地域固有の自然とそこに展開した有形無形の文化遺産を、時代やジャンルを超えて総合的にとらえ直し、新たな価値づけを試みる。そして、地域の歴史や文化を新たなストーリーとして作り直してみようというのが、コンセプトになっています。さらにはそれらがこれからのまちづくり等の資源として生かしていければいい。そう思っています。

もう一つは、地域の歴史文化資源の再発見、価値の研究を、地域住民と共に展開していく。以上の2点を柱としてこのプロジェクトに取り組むこととしています。

今年度最初に取り組んだのは、米沢市にある戸塚山古墳群の測量調査です。4世紀から7世紀まで非常に長い間営まれた約200基からなる山形県を代表する古墳群です。米沢市ということで高島町とは違うんですけれども、もとは屋代郷に属していた高島の隣接地です。高島町の終末期古墳の研究を通して、地域の石材資源とそこで展開した古墳文化、具体的にいうと横穴式石室の石室構造というのが非常に密接に関わっているということが分かってきましたので、今度はそういう高島石とは違う石材環境の中で、どういう古墳文化が展開したのかということと比較研究する意味で、この遺跡を取り上げることとしました。

表は山形県の古墳時代後期の略年表です。ここに西暦が入っていますが、調査したのは戸塚山古墳群の7世紀、飛鳥時代の群集墳です。

山形県では置賜盆地にのみ横穴式石室を持つ終末期の古墳が展開していきます。置賜盆地の東西南北、米沢、川西、南陽、高島というように区切りますと、川西を除いた3地区にこの終末期の古墳群がそれぞれ分布しています。

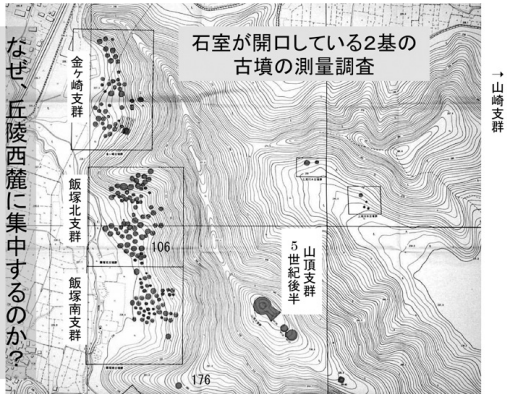
山形県の後期から終末期の古墳									
地域	米沢	川西	南陽	高畠	上山	山形県心部	山形県山形市	山形県山形市	山形県山形市
古墳 7	TK216	TK208	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223
500年	TK216	TK208	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223
古墳 9	TK216	TK208	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223
600年	TK216	TK208	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223
700年	TK216	TK208	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223	TK223

そして、これをベースに8世紀、9世紀の古代社会というものが形成されていく。その形成プロセスを、こういう古墳研究を通して明らかにしていくというのが考古学の地域社会研究の一つのテーマであります。

考古学ですから、そういう物質文化の編年とか分布状況、地域差みたいなものが考察の基礎になっていくので、その材料を集めていかなければいけない。「編年」というのは遺跡の時期を決めるという、最も基礎的な作業ですが、この戸塚山古墳群ではまだそれすらもなされていない。そんな中で石室編年をしようとするときに、漠然とした考え方があって、最初は自然石の小型の石積みがあって、それがだんだん大型化、形式化していく。あるいは石材が未加工のものから、加工が加わったもの、さらにそれが精緻になったものへと変化する。こういう発展史観に基づいた変遷プロセスを置賜地域の古墳編年にあてはめて組み立てられたような編年もあります。

しかし、地域地域で異なる自然環境があるのに、それを考慮しない編年が成り立つのか、といった点は検証してみなければいけません。実際、高畠地域とか米沢地域、赤湯地域にある古墳の石室の形や構造はずいぶん違うようにみえます。「地域差の要因は何か」という問い。自然、石材環境に対する適応形態の違いなのか、あるいはそれぞれの古墳群を営んだ人たちの技術伝統、文化伝播の違いなのか、はたまた、その両方なのか、そういう問題を頭に置きながら調査を進めています。

これは置賜盆地の航空写真ですが、最上川がずっとここに流れています。ここが高畠地区、ここが赤湯地区、ここが米沢地区、今回調査した戸塚山がここになります。川西地区の方には終末期の石室を持つ古墳群がありません。ただし、川西には下小松古墳群という5世紀後半から6世紀前半代の大規模な200基余りの群集墳があります。これらは石を使わない木棺直葬墳です。終末期のものがここに無いのは、こちらの丘陵部に石材資源が非常に乏しいというようなことが一つの要因として考えられます。



この写真は戸塚山の丘陵です。独立丘になってます。JR 置賜駅がこの辺で、奥羽本線がすぐ横に走っているの、車窓からも良く見える山になります。終末期の群集墳は、この山の西側に集中して存在しています。これが分布状況です。

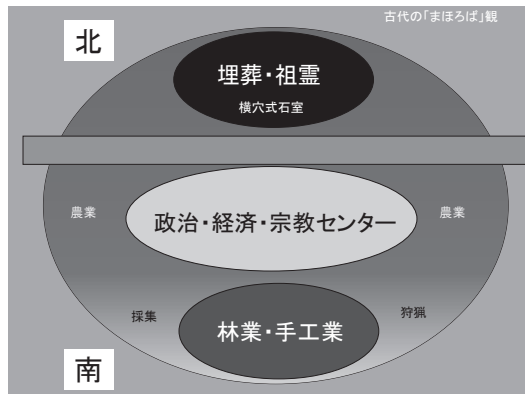
今回、その中で石室が開口している2基の古墳を測量しました。一つは丘陵の割と高い所に単独である176号墳、もう一つはこの群集墳中の106号墳です。

この古墳群は丘陵の山頂部に、5世紀後半辺りに造られた139号墳、置賜盆地ではこの時期に一番大きな前方後円墳が造られています。その傍らにある帆立貝式の古墳、137号墳からは、かつての発掘で箱式石棺が見つかり、中から女性の人骨等が出土しています。前方後円墳はまだ未調査です。先程言いましたように、全体で200基ぐらいが存在している、山形県でも最大規模の古墳群です。特に丘陵の西側の斜面から裾にかけて終末期、7世紀代の群集墳が180基存在している。これは東日本でも大規模な部類でありますし、そのほとんどの墳丘が残っているのは終末期の群集墳の典型的な姿として非常に貴重です。

米沢市の方でもそういう認識で、過去1986年位に包括的な分布調査をやって、市の史跡としました。ただしですね、市の指定史跡にはなっていますが、終末期古墳群については分布調査のみですので具体的な古墳の中身がよくわからない。戦前、地元高畠地区の石室構造の変遷



の人や高校の先生、旧制の山形中学の先生達が調査したことがあるのみですので、墳丘構造や時期、副葬品、儀礼等、実態が良く分かっていないというのが現状です。



そこで、米沢市では2009年度から国指定史跡を目指そうということで、国庫補助事業によって戸塚山古墳群の範囲確認調査をはじめたところです。そこに我々も自分達のテーマを持って協力しながら、この史跡の調査を進めていこうということになっています。

ところで、高畠町の横穴式石室墳はこういう大きな凝灰岩石材を使っているのが特徴です。元々は地表から顔を出した自然石、転石を使っています。これらはみな自然石です、大きな。そして、最終的にはこういう切石と言われるような表面をチョウナ状の平刃工具で加工した、矩形プランの独特の石室が沢山造られています。

これまでの研究によって、高畠の小地域ごとの古墳の変遷というのが明らかになってきました。そして、石室構造の変遷だけではなくて、終末期古墳群が造られる環境というか、空間みたいなものの特徴がみえてきました。スライドはその模式図です。

これは飛鳥の高松塚などをはじめ、終末期古墳の特徴ですが、中国からいろんな思想を取り入れており、埋葬に関わるものでは、北に丘陵を控えて南面する、南側が開けたような土地に古墳群を造る。そして、横穴式石室は南に開口する、そういう約束事、特有の空間性というものがあります。

そういう点からみると戸塚山の立地、分布というのは、やや違ってきます。独立丘陵の西側に古墳がある。石室の入り口は全部南を向いているのですけれども、尾根の西側に古墳が密集している。なぜなのか。先ほど言いました自然環境との関係はあるのか。

米沢市教育委員会との連携は先ほど申しましたが、測量は福島大学の考古学研究室の協力を得て共同で現地調査を行い、あと地元は上郷地区というんですが、こちらのコミュニティーセンターや中学校

の協力も得て、現地見学会や講演会などが行われました。

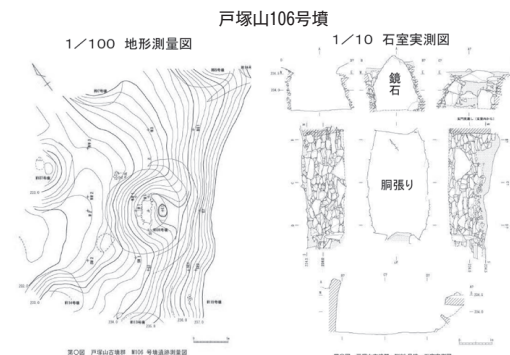
これは現地調査の様子です。発掘を伴わない調査を今年は念頭においてやりましたので、こういう平板測量によって古墳の地形を測る、あるいはこうやって石室の石を手測りで詳細に描いていくという作業です。



これらの古墳は過去に石室が発掘されていて、または地元の方が古くに石材を利用するために天井石を持ち去ってほとんど古墳では失われています。発掘後、放置してある石室はどんどん壁面が緩んで、崩壊の危機に瀕していきます。

この石室は、こちらの東側の壁が崩落寸前になって、調査後は米沢市教育委員会さんが土嚢で仮保存をしているところです。そういう崩壊、破壊の危機に対処するためにも、できる限り早急に現況調査をやるという課題もあります。

調査成果として、スライドのような地形測量ですね。今回測量した106号墳の周りに古墳が群集している様子が分かります。石室は「胴張り」という特色ある平面形が明らかです。こういう図面を作ることが、構造を分析したり、編年研究をしたりする基礎になる訳ですから、今後ともそれを継続していきたいと思っています。



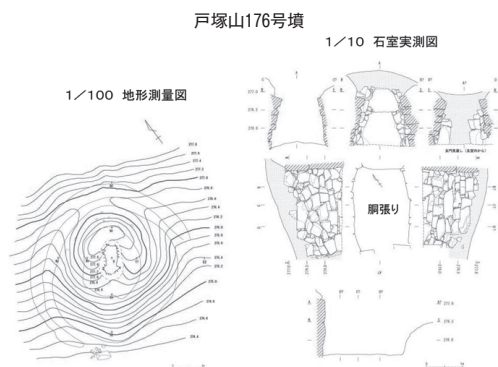
高畠の古墳との違いは、あまり大型の石材がないということで、使っている石がまず小さい。もちろんこれは自然の節理で割れた石です。奥壁にこういう大きな「鏡石」を立てていくというようなやり方

は共通しています。高畠の古墳ですと玄室の基底部には大型の石材＝腰石というのを立てるのですが、ここでは使用していない。

戸塚山のもう一つ大きな特徴は「胴張り」という石室の中央部が膨らむ平面形です。こういう小型の石材を長く積んでいくと、構造的に中央部が崩れやすい訳ですけども、それを防ぐための技術的な対応と評価できます。戸塚山の特徴である胴張り形態というのは、やはり石材の形状ということと密接に結びついたものだといえます。

この義道部とか前庭部というのが、この先にまだありますが、そこは未調査です。ですから、石室を実測するだけではまだ年代の根拠がはっきりしない。そこで来年度以降、墓前祭をした土器が出土するような部分を断片的に発掘して、時期を推定する手がかりを得ていきたいと考えているところです。

ここにでてるのが176号墳です。これはほかとはちょっと異質な環境でして、多くの古墳は山麓部に群集してるんですが、これは丘陵の中腹に単独で立地してます。南側に開けた高台ですので非常に南側の眺望が良い。視界や空間を優先して造った古墳だと思います。石室は同じように胴張り形態です。



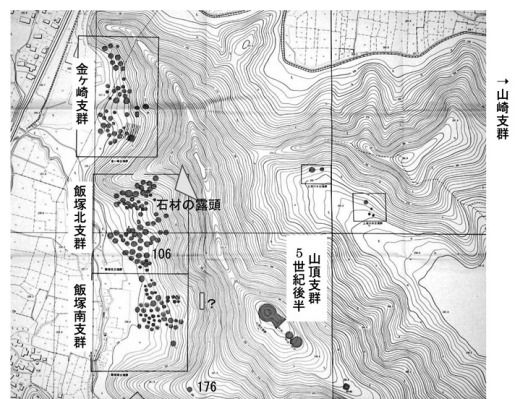
ところで古墳に使われている石材ですが、106号墳は凝灰岩質砂岩、176号墳は頁岩、あるいは泥岩と呼ばれる石が主体です。

周辺の石材調査や地質図をみるかぎり、いずれもこの山にある岩石です。古墳が集中するエリアの上

部には凝灰岩質砂岩の露頭があることが分かりました。この露頭の一番近いところに古墳が沢山存在します。こういう尾根筋に露出しているような石材も、使われている可能性があります。直接ここから切り出したというのではなくて、節理が発達しますので、自然に石が崩れ落ちてくる。それらを拾ったり、土中から掘り出したりして使ってるのではないかと思います。先程の露頭というのはこの写真です。

この空白部には本来古墳があったのですが、ブドウ園の開墾の時に削られて失われてしまった場所です。米沢市の教育委員会がここにトレンチを入れて調査したところ、ここにもたくさんの古墳があったことが確認されました。

さて、今年度の調査で分かってきたことですが、戸塚山古墳群が丘陵の西麓に主として分布している理由の一つは、先程の露頭も含めて西側の急斜面下に石室の構築に適した石材が分布していること。そういった石材環境の要因が重要であることです。



高畠町の安久津古墳群の例で言いましたように、背後に丘陵があってその前に大きな川があって、その南側に集落域が控えているというような、終末期古墳の独特の空間性というものが、この戸塚山古墳群では、高畠のそれを90度回転させると、丁度適合する。墓域を設定するための設計思想、「風水」のような考え方が背後にあったことが推察されます。

おそらくこの古墳群を営んだ被葬者集団というのは、米沢市の大浦地区、古墳群に西にあたりますが、あの辺に7世紀から8世紀前半代の集落が密集しておりますので、そういう所を母体にして成立したのではないかと考えています。

もう一つはこの戸塚山の調査委員会の委員でもありますけれども、専修大学の土生田先生が仰っていることで、始祖墓と擬制的同祖同族関係という考え方です。これらの群集墳は7世紀代にこの地域に新たに進出してきた勢力だと思われますが、かれらが墓域を設定する時に、仮に直系の祖先でなくても、大きな前方後円墳なんかがある場所に墓域を作り、その前方後円墳の被葬者を自分たちの先祖と擬制して地域支配に利用していく。というようなやり方。擬制的同祖同族関係を集団の編成原理とした社会であると。戸塚山の山頂には平野からもみえる大きな前方後円墳がある。その麓に墓域を設定したのだと。私も当時、前方後円墳の存在は十分意識されていたと考えています。

まとめ

・立地論

- 石材環境・・・自然要因
- 周辺景観・・・宗教的要因
- 始祖墓・・・同
- 集落遺跡との位置関係

90度回転すると高島
地区と同じ景観
・・・環境適応

・石室構造論(編年・技術系譜)

- 設計寸法、配石、積み、玄門、胴張り構造の特徴
- 基礎資料を提供
→H23年度 時期や構造の解明を目的に106号墳の羨道・前庭部の発掘へ

地域の自然条件がそれぞれ独自の石室構造を現出。
それぞれの環境の中で多様性を理解する必要あり。

それと先程申しましたように、豊富な石材資源、群集墳を作っている緩斜面のひろがり、このような自然的な要因と、同時期の集落遺跡との眺望的な関係とか、あるいは図で示したような他界観みたいな宗教的要因、それら複数の要素に適合したのが戸塚山丘陵の西麓だったというふうと考えているところです。

今日は石室の構造について説明する時間はないですが、どうも尺単位できちっと設計されている。106号墳であれば、玄室の全長が10尺ですね、最大の幅が6尺という、整数で割り切れる寸法です。石室構造ではほかに詰め石とか、持ち送りとか、玄門構造とか、高島の方とは違う部分もだんだん分かってきます。

来年度以降もこういう地道な調査をやりながら、戸塚山古墳群の基礎資料の充実、歴史的背景の研究をつづけ、当初のテーマである地域固有の自然資源とそこで展開する物質文化の特徴について考えていきたいと思っています。

最後に、本プロジェクトで取り組むもう一つの課題「高島まち歩き」について説明します。

今年度は実は具体的な現地調査がほとんどできてなくて、「竜山石」を生かした町づくりを進めている、兵庫県高砂市の文化財総合的把握モデル事業の視察をしたり、最近、シンポジウムを開いて盛り上がっている千葉県の房州石について調べたり、凝灰岩産地の情報収集を進めてきました。それと、これから歩く高島で、まち歩きの母体となる組織作りを進めています。地元の方々を中心に「高島石の会」を作って、3月8日ですから明後日ですね、1回目の世話人会をやる予定です。前回のプロジェクトでも取り組みましたが、伝統的な石切り技術の調査、すでに閉じた石切丁場跡の調査を進めていきたいと思っています。同時に町中にある石造文化財の悉皆調査、指定品以外の高島石を使った石造物をできるだけ悉皆的に拾ってリストやマップを作る仕事をしてみたいと思っています。来年度はどこかエリアを決めてスタートします。私の方の発表は以上です。

たかはた町歩き

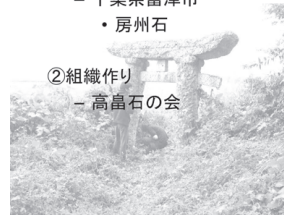
①先進地視察・情報収集

- 兵庫県高砂市
・竜山石
- 千葉県富津市
・房州石



②組織作り

- 高島石の会



長坂：どうもご苦労様でした。考古学に関する調査報告ということで、考古学会の佐藤先生、何かございませんでしょうか。

佐藤：佐藤といいます。考古学の方ではですね、古墳時代の古墳がいつまで造られたかというのが大きな問題になっておりまして、ある人はそれは奈良時代に入ると古墳は造られないんだと、こういう風な考え方も今までは結構あったんですが、北野先生の方では高島の調査、あるいは戸塚山遺跡という180を超えるその頃の古墳の分析を通じて、地道な調査から、または発掘と、こういうような形で、大体その方向性、奈良時代の初めまでは古墳は造られたという見解を出されているようでありまして、非常にそれについては感心しているところです。特に今の発表について私の方で感じたのは、後半に出ました高島石、古墳の調査ということだけに留まらず、その古墳の調査を町作りの為にどういう風に生かしていくかという観点で高島石というキーワードを北野

先生が見つけれられて、更にはそのキーワードの中で組織作りをされている。こういった所については、町づくりという面からもこれから参考にさせて頂きたいと思います。



来年度の研究活動に向けて

長坂：ありがとうございます。それではプログラムの最後に、このプロジェクト研究の来年に向けての活動について発表したいと思います。

テーマ1の「保存修復活動が展開される地域遺産の再発見と新たな価値の創出」につきましては、来年度はまず地域文化遺産の悉皆調査を引き続き行います。概要は仏像、近代彫刻、工芸品等の立体作品調査、絵画、絵馬、古文書等の調査など、それらは今年度の引き続きになります。そして来年度から新たに、西洋絵画の調査、それから今北野さんから言われましたように石造物に関する調査も行います。また、新たに文化財の技法材料に関する研究を始めます。それは、立体作品（仏像）の技法材料に関する基礎研究、紙資料を中心とした東洋絵画素材の研究、西洋絵画技法に関する基礎研究などを計画しております。

それからテーマ2の「環境に配慮し、安全で簡便な地域文化遺産保存管理を地域住民と展開するための基礎研究と教育普及」については、来年度は地域文化遺産の保存環境の調査をする継続して進めつつ、それを踏まえた対策の研究を行っていきます。それから文化遺産の保存状況調査から、文化財の劣化状況と保存環境との関係性についての研究も、来年度も引き続き行います。それから、地域環境に対応する修復材料の研究、これは今年度着手できなかったもので、来年度新たに着手いたします。以上が来年度の研究に向けての展望ということになります。

では、センターの来年度の研究に携わる人員が来ておりますので、それぞれ展望に関して意見を言って頂きます、それではまず岡田研究員から。

岡田：私は、専門が仏像修復ということなのですが、具体的な活動としては、今日発表させて頂

いたような内容の悉皆調査を継続して行っていきたいと思います。今年度は実質半年間という期間だったで、三町で一カ寺ずつということになっていましたが、このペースでは町の悉皆調査というのが五年間では出来ませんので、来年からはもうちょっとスピードアップしていきたいと思います。調査の方法も、今年一年実践したことからの反省もふまえながら、もう少しスピーディーに、且つ効率的にやる方法がわかってきましたので、密度を下げずに、スピードアップしながら、三町での悉皆調査を推進していきたいと思っております。

それに合わせまして、来年度からは「何故モノが壊れるのか」という所を探っていきたいと思います。それは結局、材料の基礎研究という所に繋がるのですが、モノが何で出来ていて、そして保存環境の調査研究と共にそれがどういう環境下にあるかを調べ、それがどのように関係してどう壊れていくのかという所をしっかりと考えて行きたいと思っています。

そういった事を踏まえながら、まずは調査してきたものを、今日お越し下さっていらっしゃる歴史または郷土史、または美術史といったことがご専門の先生方とともに、より高い研究というものを構築させて頂き、またはご指導等を賜わりながら文化的な価値というものの向上を図っていきたいと考えております。

それは、今まで一つのモノを点でしか見ていなかったものが、他の横の繋がりとというものをどんどん構築していった、線で繋いでいく。それを今度、地域であったり、時代であったり、または作家であったりっていう、縦と横の繋がりを構想していくことによって、文化の立体的な把握というものを生み出せたら、文化遺産の価値というものがより分かり易くなると考えています。そういった研究により見つけた文化遺産の価値を地域の方々と共有する事によって、地域の方々のご協力にお応えしていききたいと思っています。

そのためにも、本当に皆様、先生方の御指導やご協力なくしては、この研究は成り立たないと思っておりますので、今後とも宜しくお願い致します。

長坂：では、大山研究員。

大山：地域にある文化財を構成している素材が、どういう風に出来ているのか。例えば大江町では青荳、西川町ですと和紙とかあるいは修理をしていると、地域で作ったであろう和紙を使った紙表具といった形式が沢山見つけられるので、そういった部分の、素材の研究の方を進めたいと思っております。

講 評

長坂：ご苦労様でした。来年の方向を各研究員から聞こうと思ったのですが、ご講評を頂く時間になりましたので、入間田先生からお願いいたします。

入間田：従来は地域の文化財の本当に一点一点良い所だけを取り上げて摘み食いをするみたいな形のものであったのが、今回は地域の悉皆調査という事で、地域の側に立った大きな視点の転換というのが凄く面白いなと思いました。

それから、大江町と西川町に関しては報告にあったように、道智道などによって繋がって、あの辺が一つの地域であり、羽黒山や湯殿山に向かう行者の道というのが非常に混在して、研究地域として良いかなと思ったのですが、もうひとつの高畠の方の研究を、どういう地域であるかを考えて、企画をする際にどうしていくかをもう少し分かるようにして頂けるといいかと思いました。

それから、大聖寺のような大きな寺院と、大江町の場合でも法界寺みたいに藩に関係する寺院、そういったある程度地域や集落っていうのを超えたような文化財と、大江町の山間部の集落の本当にもう小さなところにあるわずか数点の文化財っていうのは、やはり在り方が違うのではないかと思います。それで、今回の趣旨から言うと、むしろ集落ごとのレベルでの文化財っていうものをトータルに押さえ、それと集落を超えた様な文化というのが、どのようにリンクしているかっていう事が問題となってきますよね。だから、そういう点で言うと、高畠の方は今回大聖寺だけなんですけれども、大江町でみたような集落ごとの小さい仏像とか書画とかはどうなっているのか、という事も是非やっていかないとね。地域における文化財といっても、集落を超えて広いエリアでの宗教活動をしている場所と、それから文字通り集落の信仰とを、上手く組み合わせるような所があると思うんですね。そういうのを是非見ていかなければと思いました。



それからもう一つは、私共も大江町で文化的景観というものに関わらせて頂いていたのですが、こういう調査をする目的というのは今日話題になってい

る地域住民の文化財についての認識を深めていくこと、あと地域の誇りというか、やはりそこを形作ることが大切であると。そういった地域の人々自身の力によっていろいろな地域のお寺などが守られていると考えられるのであって、地域の誇り、地域の人々にとってそれぞれ文化財はどういうものなのかを考えていかななくてはいけない。

そういう点でいえば、絵馬とか、あるいは俳句の額とか、詠歌の額とか、そういった文化財があると必ずそれに伴って祭りとか色んな講であるとか、地域住民の集まりがありますね。だから、一つの文化財の背景には必ず人々の集まり、ソーシャリゼーションのようなものがあって、それが今危うくなっているから、それと文化財が中々リンクしない。ですから、その所の文化財そのものの調査だけではなくて、やはり聞き取り調査でね、文化財は何故その地域の集落に奉られているのかという根本の動機みたいなのを是非明らかにしてみたい。

逆に殿様レベルのお寺の地域の周りには、殿様から寄進があったという事でモノがある。そうでないようなものも同時にありますが。しかし何故、わざわざ苦労して京都などから持ってきたかとか、または地域の生産者によるものもあるのですけれども、それらの動機みたいなところも是非明らかにしてみたい。そういったことが、本当の意味でその地域の誇りっていうものの形成に役立つのではと思いました。

長坂：ありがとうございます。では外部評価委員の佐藤先生、お願いします。

佐藤：貴重な発表ありがとうございました。昨年度までのオープン・リサーチ・センター整備事業に続いての文部科学省の研究事業ということで、しかも、それが言わば複合的保存修復活動というセンターの中に六つの部門を持つ芸工大らしい研究という事で、ほっとしている所です。

私はずっと県庁に勤務していたので、今まで文化財という言葉を使っていたが、この頃文化遺産という言葉を知ったのですが、今回の冒頭にも出ましたように、文化庁の歴史文化基本構想というのは、指定文化財というと指定になっているものだけなのですが、指定になっていないものも含めて、しかも複数の市町村も範囲にして、全体的に文化財を守っていこうと。文化財というと大切なモノだという、文化遺産というとそこに今まで色んな人が関わって長く守ってきたコトだと、文化遺産という言葉もいいなと思った訳です。

それで、今日の全体の発表の中で、色んな新しい再発見というものがあったわけで、例えば大江・西川では、江戸時代の初めからの色々な仏像というも

のが沢山ある。さらに亀岡文殊については、10世紀から11世紀になるレベルのものがあるかもしれないという。こういったことも踏まえて、これから色んなところで期待したい所です。

特にこの事業というのと、その拠点となる市町村を仕切った場合に先ほども言いました文化庁が平成20年から進めてきた歴史文化基本構想事業との関連というものを是非考えて頂きたい。

それは今まで私が携わってきた考古学でいうと、なにに古墳、なにに遺跡を整備するといったことではなくて、全体的に、複合的に、有形の文化財もあるし無形の民俗芸能もある文化遺産というものを組み合わせるといった形の研究事業という所です。その為には、例えば大江・西川・高島にとって、どういうふうに文化財を整理していくかという事の中での物語といったものを作ってくれたら良いのではないかと。是非、その物語の中のキーワードとなるものを、さらに一歩進んでその町の物語を、是非それを作って頂きたい。

それで先ほど長坂先生がそれぞれ文化ワールドというようなことをおっしゃれましたが、単に保存修復でなくて、その対象となったものがその地域の中で、または物語の中でどのような位置づけを占めるのか、そこまで踏み込んだ形で是非研究をしていただきたい。それから、その物語の構築に保存修復部門だけでは足りないという場合は、外部の講師もいれて、例えば民俗芸能であるとか、あるいは建造物であるとか、その辺のところを加味しながら、拠点として協力してきた市町村が具体的な形で関係していければいいと思います。



また最後になりますが、こういった地域の文化遺産というものは、今までの先人の色んな業績というようにものがあるが、守られ、更にそれが報告されてきている訳ですので、この研究事業の中で色々なものが確認された場合に、是非あの先人の業績というか、研究業績というものが、どういうものであったのかも参考にしていきたい。往々にするとマスコミというのは、初めてだとか、一番古いとかいうのに飛びつき易い事になりますので、先人の研究

業績というものを踏まえながら、その成果というものを取り込むように研究して頂きたいと思いますので、よろしくお願いします。

長坂：どうもありがとうございました。この会の最後に先生方にご講評頂きました。

この研究事業は今年度から始まった訳ですが、文部科学省の採択時期がありまして、始まる時期が年度始めからではなく年度の途中からという形になりまして、今年度は調査だけという形になったのですが、来年度からは今の評価委員の方々のご意見も十分に考えさせて頂いて、単なる調査だけではなくそこからさらに進んだ状態で、来年度はご報告が出来ればと思っております。

大変長い時間になりまして、申し訳ございませんでした。それではこれで、本日のプログラムを終了させていただきます、どうもありがとうございました。

総 括

平成 22 年度の研究活動のまとめ

本研究の初年度となる平成 22 年度の研究活動は、本研究の採択が得られた夏季から約半年間という限られた期間での活動となった。そのため、対象地域ごとの文化体系の特色をつかむことを本年度の研究の目標におき、研究調査対象の選択において町史などの先行研究をもとに研究成果の推測を立てたうえで計画を行った。研究活動は、主にテーマ 1 に関する地域文化遺産の新たな価値の創出のための活動として、研究フィールドとした大江町、西川町、高島町の 3 町の寺院における地域文化財の把握を目的とした悉皆調査から実践することとした。また悉皆調査は、今回の研究調査では複合分野での合同調査を実践するという新たな試みに着手したため、各町における寺院での総合的文化財悉皆調査方式の確立を、調査の実践を通じて模索した。

本年度実践した調査活動は、3 町で各 1 ヲ寺ずつと、大江町山間部の社寺の総合調査、高島町での遺跡調査である。そして調査後、悉皆調査によって把握した文化財の歴史的関係性を考察するために、歴史家や郷土史家などの連携による研究体制の構築を目指して各町での歴史研究に以前より取り組まれている研究者らに協力を求め、年度末に開催した研究調査報告会を皮切りに地域文化遺産価値の向上を目的とした研究活動を開始した。また、以上のようなテーマ 1 の活動とともに、本研究の全体の研究目的である地域文化遺産の総合的な保護へとつなげる活動として、悉皆調査の中でテーマ 2 に位置付けられる文化財の劣化状態や材料観察を同時に行い、保存環境に関する温湿度や虫の生息状況などの調査と合わせた地域文化遺産の保存対策へとつなげる活動を開始した。

では、今年度各町で行った研究調査によって得られた具体的な知見をまとめてみたい。

まず大江町では、法界寺調査を実践したことによって江戸時代の松山藩酒井家統治に関する作例が数多く確認され、大江町における酒井家の歴史的な位置づけの一側面が垣間見えた。来年度には左沢藩酒井家の菩提寺である巨海院の調査を実践し、研究の拡大に努めたい。

大江町の七軒・本郷地区の社寺調査では、大江町の民間信仰や湯殿山信仰に関する文化財が多く確認された。それらの文化財は、特に江戸時代に同地区が地場産業を含めて大きな隆盛期を迎えたことを示すものであった。またそれらは、隣接する西川町や朝日町、寒河江市などに所在する社寺と同系列の信仰体系に属することが多く、現在では行政区分が異なる他の町における文化背景や信仰体系の関係性に関して超域的に調査する必要があることを痛感させた。それと同時に、過疎化が進む同地区では、信仰の衰退、管理者の不在などを原因とする地域文化財の荒廃などが深刻化し、隆盛した江戸時代の地域文化遺産が急速に失われつつある現状を目の当たりにした。今後それらの問題に対する対策が、本研究の大きな課題となることを確認した。

西川町では大江氏に關係する吉祥院の調査を実践したが、大江親廣が隠遁した中世頃の文化遺産は、他の周辺寺院も含めてあまり多くは現存していないのが現状であった。そのため、大江氏が禪宗に改宗した室町時代以降の關係寺院の文化遺産を中心に調査考察していくことで、大江氏の当該地域での活動を探求していきたい。また、西川町に拠点を置く湯殿山の信仰に関する文化遺産や、地域の民間信仰についても調査研究を展開していきたいと考えている。

高島町では、同町の代表的な寺院である大聖寺（亀岡文殊）の調査を実践し、仏像、工芸品、書画に関する膨大な数の文化財の把握を行った。今回の調査により、亀岡文殊に伝来する諸尊の中で中世に造立されたと思われる作例が新たに数点確認されたため、それらの物的証拠から中世の大聖寺の歴史について探求していきたい。また全所蔵文化財の中でもっとも多い江戸時代の作例に関しては、幕府より朱印を受けた江戸期の繁栄ぶりを証明するものとして、今後より詳細な研究を進めていきたいと考えている。

また、仏像、書画ともに、虫食い、表面塗膜の剥離、剥落、絵画面の破れなどが文化財に発生していることが確認されたため、劣化損傷の原因と思われる保存環境の把握のために、同寺の宝物館、護摩堂、本坊などに温湿度データロガーや虫とラップを設置するなどの環境調査を開始した。それによって文化財への被害の原因を明らかにし、具体的な保存環境の改善に向けた対策を行っていききたいと考えている。

遺跡調査に関しては、4 世紀から 7 世紀までの非常に長い間営まれた約 200 基からなる山形県を代表する戸張山古墳群の実測を行ったことで、地域の石材資源とそこで展開した古墳文化が横穴式石室の石室構造と

いう形で密接に関わっているということが分かってきた。今後、発掘調査を含めた継続的な調査活動を展開し、置賜地方での古代の歴史について探求していきたい。

以上の今年度実践した調査成果を年度末に研究調査報告会を開催したことで、歴史家や郷土史家、または各町の行政担当官らと意見交換を行い、来年度以降の研究体制の見直しを行った。

平成 23 年度の研究の展望

平成 23 年度の研究活動は、平成 22 年度の研究成果を踏まえ、テーマ 1 に関する悉皆調査活動による地域文化遺産の総合的な把握を目的とした調査活動を継続して行うとともに、テーマ 2 へとつながる地域文化遺産の保存環境と文化財の劣化状態の因果関係についての調査や研究活動を展開していきたいと考えている。

また、歴史的関係性および新たな文化財価値の創出に関しては、平成 22 年度の調査によって確認された各町の文化財を基軸として調査、研究を拡大し、外部研究協力者との連携を深めながら研究活動を展開していきたいと考えている。その際、各寺院を闇雲に調査研究するのではなく、歴史的、文化的関係性におけるキーワードを設定することで、より効率的な調査活動を展開していきたいと考えている。

それらの活動は、報告会でも指摘を受けたように、西川町、大江町などは中世から近世の時代に同質の文化圏に属することから多くの関連性が見出されつつあるため、より広域的な調査展開を超越的に行う必要があると考え、研究対象フィールドとした 3 町以外での調査活動も展開していきたい。高畠町に関しては、先の 2 町と地理的、文化的に大きな隔りがあるため、高畠町単独の視点で研究活動を展開した方が明快であると考えた。高畠町での調査研究は石文化への研究を主体に置き、関係する遺跡調査を継続するとともに、町に点在する石文化を確認する町あるきのプロジェクトなどを展開していきたい。また、社寺関係としては、平成 22 年度に調査を行った大聖寺（亀岡文殊）を中心に置き、同寺に関係が深い社寺の調査活動を中心に調査研究活動を展開したいと考えている。

以上の研究の展望にそって設定した平成 23 年度以降に取り組んでいく研究キーワードを以下にまとめる。

平成 23 年度以降の研究キーワード

1. 大江町・西川町

- ①大江廣元から始まる寒河江荘の地頭統治に関連する大江氏関連文化遺産について
- ②湯殿山信仰（出羽三山信仰）に関する文化遺産の調査研究活動
- ③左沢原町仏師・林家一門関係の造像活動（様式・技法・材料研究を含む）に関する仏像文化財調査
- ④大江町左沢藩松山藩の酒井家関係の文化遺産について
- ⑤地域に散在する地域所在の絵画作家の実態調査と損傷状態の確認
- ⑥絵馬調査から見る地域信仰
- ⑦地域特有の素材（青芋・和紙など）に注目した基礎的研究と教育活動
- ⑧大江町小清地区の民家の実測調査と集落景観調査

2. 高畠町

- ①大聖寺（亀岡文殊）調査を軸とした関係寺院の文化財悉皆調査
- ②大聖寺宝物館における保存環境調査
- ③高畠の風景が描かれた石版画を軸とした関係する絵画の調査
- ④石造物の悉皆調査
- ⑤高畠石を用いた町並み調査
- ⑥旧屋代郷戸塚山古墳群の調査

3. 共通

- ①文化財に用いられている彩色と劣化原因に関する調査研究
- ②文化財に用いられている素材（紙・木材・青芋など）に関する基礎情報の収集
- ③過疎地域での地域文化遺産の保存修復に関する取り組み

以上の研究キーワードを研究方針の軸とし、複合的調査研究活動を実践するために当センター研究員による内部研究会を毎月開催して研究方針の確認を行いつつ、研究調査によって明らかになった情報を外部研究協力者である歴史家や郷土史家ならびに科学者らと連携体制のもとで考察することで、研究の内容を深化させていきたい。

地域文化遺産の保護のためには、地域住民の文化遺産への関心の喚起が不可欠であると考えている。そのためには、過去の文化遺産が現代生活とどのように繋がり、現代においてどのような価値を持ちうるのかを、考察、認知していく必要があると考えている。そのため、研究成果を地域文化遺産保護の当事者である地域住民や自治体などと共有することで、より現実的な地域文化遺産の保護活動につなげることを目標において、今後の研究活動を展開していきたい。

文化財保存修復研究センターの概要

建物名称／文化財保存修復研究センター

建築規模／763.38㎡

延床面積／1階 752.10㎡

／2階 590.10㎡

／3階 716.15㎡

／4階 284.86㎡

／合計 2343.21㎡

最高高さ／18.95m

軒高さ／13.415m

構造／鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造

竣工／平成17年3月27日



■ 1階



①遺物処理室

真空凍結乾燥処理装置、PEG 用恒温含浸処理槽等を使用し出土した木製埋蔵文化財や水害で被災した書籍の保存処理を行います。また金属製品の保存処



理や各種材料の光照射強制劣化試験や強度試験も行います。

②立体作品修復室－1

手術用実態顕微鏡、レーザ・クリーニング装置、歯科用精密グラインダーなども使用し、古代から近代の立体作品（石膏・石造・陶磁・モルタル等）や木造の仏教彫刻等の調査や修復を行います。



③歴史遺産研究室

県内遺跡の発掘調査のための前線基地であり、現在進行中の窯業遺跡から出土した土器類等の考古学研究等を行います。土器の形態や色彩、硬度等の計測も行います。



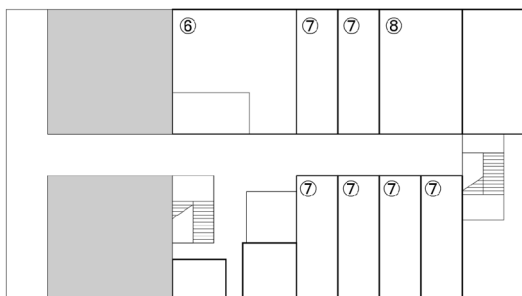
④ X線透過撮影室

デジタル（フラッドパネル）・アナログ共用透過X線撮影・TV観察装置、据置型大型資料用蛍光X線分析装置を使用し作品・資料の構造調査や材質分析を行います。



⑤文化財保存修復研究センター事務・図書室
研究員・事務員が常駐します。またセンター図書の収蔵・閲覧、会議室の機能ももっています。

■ 2 階



⑥収蔵庫（防火金庫扉および風除室）

無機系脱酸・脱塩基性調湿内装材を壁材とし、温度・湿度管理の空調を完備しています。国や県市町村指定の文化財の保存修復のための一時的な保管に対応できるよう管理体制を整えました。収蔵庫内部では、作品の写真撮影や計測などを行なうとともに、物理的・化学的・生物学的な保存環境の実験的研究も実施します。



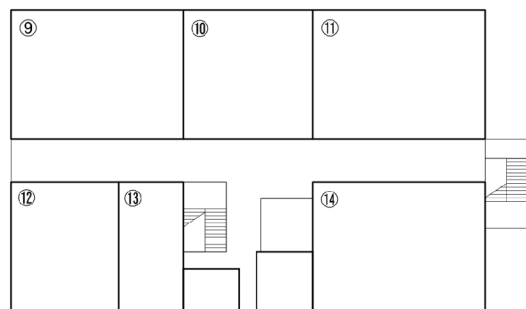
⑦教員研究室（7室）

教員5名および専任研究員1名の研究室です。

⑧院生研究室（1室）

外部の共同研究者やPD・RA、院生などの研究室です。ミーティング・テーブルを置き、研究成果のプレゼンテーションやディスカッションを行ないます。

■ 3 階



⑨東洋絵画修復室

掛軸や屏風、古文書や典籍などの和紙や絹、鉱物性顔料や膠などの伝統的材料を用いて描かれた作品・資料の修復を行います。作品の性質上風を嫌うため、空調は秒速1 m以下の「エアー・ソックス」を採用し、また大型の除湿機・加湿器を導入しています。



⑩機器分析室

X線回折分析装置、ガスクロマトグラフ質量分析装置、顕微フーリエ変換赤外分光分析装置、モバイル型蛍光X線分析装置、イオンクロマトグラフ装置、ガスクロマトグラフ装置、可視紫外分光光度計、三次元蛍光分光光度計、光学顕微鏡（実態・金属）、走査型電子顕微鏡などを使用し、作品の劣化状態や構造、材質等を分析します。



⑪保存科学研究室

文化財材質の調査や分析を実施する、いわゆる実験ラボです。恒温恒湿器2台と乾燥機、純水製造装置、化学天秤などがあり、さまざまな材質試験を実施します。



⑫立体作品修復室－2

立体作品修復室－1とともに、各種素材による資料の調査研究をおこないます。修復に用いる接着剤等からの有害気体を浄化・排気するシステムを導入しました。

⑬準備室

研究者の研究準備機能をもっています。また立体作品等用および遺跡・建造物用の非接触レーザ三次元計測器を用いて、文化財の精密測定を行ないます。計測データは、パソコンにより可視化し、またデジタルアーカイブを可能にします。

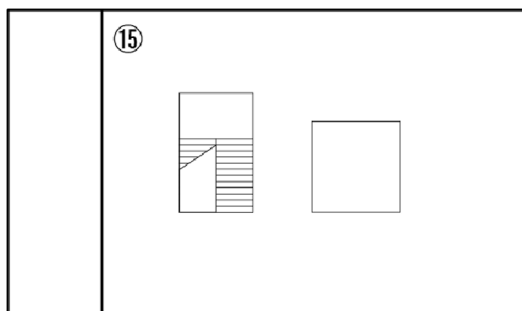


⑭西洋絵画修復室

油彩画を中心とした西洋絵画を対象とし、これらの制作材料や技法の研究、修復材料や技術の研究などを行ないます。



■ 4 階



⑮展示室

文化財保存修復研究センターの研究に関係するさまざまな企画展の開催、修復の過程や完了作品の展示、研究成果の公開等に使用します。



※1 遺物処理室および立体作品修復室－1は、大型資料に対応できるよう2階まで「吹き抜け」になっており、ホイスクレーンなどの重機を擁し、開口部の大きい搬入口トラックヤードが用意されています。

※2 本棟のエレベータは作品運搬用であり、大型の資料の移動を考慮しています。

※3 二重の窓ガラスや蛍光灯は紫外線を除去し資料の劣化を防ぐ対策が取られています。また壁材には珪藻土を使い、周囲雰囲気湿度安定化を図っています。

■研究設備・機器

基本設備

- ・収蔵庫（金庫扉、風除室、無機系脱酸・脱塩基性調湿内装材壁）（金剛）
- ・有害気体・粉塵排気システム（ダルトン）
- ・恒温恒湿試験室（ダルトン）

調査・分析用

- ・据置型大型資料用蛍光X線分析装置（リガク）
- ・モバイル型蛍光X線分析装置（米・イノベックス社）
- ・デジタル・アナログ共用透過X線撮影・TV観察装置（独・エクスロン社）
- ・可搬型X線撮影装置（独・エクスロン社）
- ・遺跡・建造物用レーザ三次元非接触計測装置（オーストリア・リーゲル社）
- ・美術品・考古遺物用レーザ三次元非接触計測装置（コニカ・ミノルタ社）
- ・X線回折分析装置（独・ブルッカーエニックス社）
- ・ゲル・パーミエーション・クロマトグラフ装置（Waters社）
- ・手術用実態顕微鏡（ツァイツ社）
- ・手術用実態顕微鏡（ライカ社）
- ・実態顕微鏡（オリンパス）
- ・金属顕微鏡（オリンパス）
- ・EDX 附属走査型電子顕微鏡（日本電子）
- ・EDX 附属走査型電子顕微鏡（日立）
- ・イオンクロマトグラフ分析装置（日立）
- ・可視紫外分光光度計・大型積分球附属（日立）
- ・三次元蛍光分光光度計（日立）
- ・顕微装置附属フーリエ変換赤外分光光度計（パーキン・エルマー社）
- ・ガスクロマトグラフ質量分析装置（日本電子）
- ・ガスクロマトグラフ分析装置（日立）
- ・赤外反射画像観察装置（浜松フォトニクス）
- ・自在型照明器具
- ・デジタルマイクロスコープ（ハイロックス社）

修復技術・材料試験用

- ・YAG レーザ・クリーニング装置（仏・クオンテル社）
- ・PEG 用恒温含浸処理槽（6m 長、ダルトン）
- ・真空凍結乾燥処理装置（0.5m および 1.5m 長、宝製作所）2 台
- ・耐光試験用キセノン・フェードメータ（スガ試験機）
- ・金属遺物用クリーニング装置
- ・紙資料用オートグラフ（材料強度試験機）
- ・恒温恒湿試験器 2 台
- ・定温乾燥器 4 台

平成 22 年度研究活動業績一覧

1. 歴史文化基本構想視察 高砂市 平成 22 年 6 月 16 日～17 日
2. 歴史文化基本構想視察 足利市 平成 22 年 7 月 6 日～7 日
3. 戸塚山古墳群発掘調査 米沢市大字浅川 平成 22 年 7 月 28 日～8 月 27 日、9 月 29 日、10 月 7～10、23、24 日、11 月 7 日
4. 社寺悉皆調査 高畠町大聖寺（亀岡文殊） 平成 22 年 8 月 19 日～24 日
5. 社寺悉皆調査 西川町吉祥院 平成 22 年 9 月 7 日～9 日
6. 社寺悉皆調査 大江町法界寺 平成 22 年 9 月 14 日～16 日
7. 地域文化遺産素材調査（和紙）岐阜・美濃 平成 22 年 10 月 9 日～10 日
8. 地域文化遺産素材調査（和紙）奈良・吉野 平成 22 年 10 月 26 日～29 日
9. 戸塚山古墳群出土資料調査 米沢市埋蔵文化財資料室 平成 22 年 11 月 4 日
10. 社寺悉皆調査（追加）・環境調査 高畠町大聖寺（亀岡文殊） 平成 22 年 11 月 5 日
11. 社寺悉皆調査 大江町七軒・本郷地区第 1 次社寺調査 平成 22 年 11 月 9 日～10 日
12. 戸塚山古墳群発掘調査 現地説明会・講演会 平成 22 年 11 月 23 日
13. 戸塚山古墳群出土資料調査 山形大学付属博物館 平成 22 年 12 月 7 日
14. 戸塚山古墳群出土資料調査 山形県立米沢興譲館高等学校 平成 22 年 12 月 7 日
15. 戸塚山古墳群発掘調査 地質・石材調査 平成 22 年 12 月 14 日
16. 社寺悉皆調査（第 1 次） 大江町大井沢地藏堂 平成 22 年 12 月 18 日
17. 社寺悉皆調査（追加） 大江町法界寺 平成 22 年 12 月 24 日
18. 平成 22 年度研究調査報告会 平成 23 年 3 月 6 日
19. 高畠石の会設立準備会 県立うきたむ風土記の丘考古資料館 平成 23 年 3 月 8 日

報道紹介

地域文化遺産 後世に

芸工大文化財保存センター 3 町での調査報告

山形市の東北芸術工科大文化財保存修復研究センター（長坂一朗センター長）が昨年スタートさせた、県内各地の地域文化遺産の価値を見いだして後世に残す研究の調査報告会が 6 日、同大で開かれた。研究員が大江、西川、高畠の 3 町で調査した仏像や書画といった文化財の保存状態など、現状を説明した。

本郷地区の社寺、西川町では吉祥院を調査。高畠町では、

亀岡文殊、高畠石について調べた。このうち、亀岡文殊の大聖寺と宝物館、観音堂など 7カ所の収蔵品について研究員は「経典や仏像に虫の食害があったり、風雨にさらされた仁王像の傷みが激しいなど、保存方法の改善が必要だ。どのような形で残していくか、地域と一緒に考えていきたい」などとまとめた。

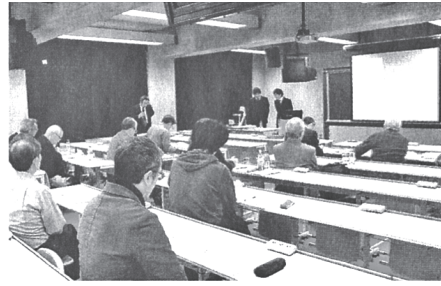
2011 年度以降、各地の遺産を地域住民が安全で簡便に、環境に配慮した方法で保

存、管理できるよう、住民とともに検討する。

同センターは、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、10 年度から 5 年間のプロジェクトとして「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上」システムの研究を展開している。

県内各地で調査した地域文化遺産の現状について発表した報告会

山形市・東北芸術工科大



日付	新聞	タイトル
平成 23 年 3 月 7 日	山形新聞	地域文化遺産 後世に

研究者一覧

長坂一郎 Ichiro Nagasaka 1954 年新潟県生まれ

現職／文化財保存修復研究センター長・教授（美術史・文化財保存修復学科兼務）

学歴／早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 文学博士（早稲田大学）

職歴／福井県立博物館学芸員を経て東北芸術工科大学専任講師、准教授 2009 年より現職

専門／日本彫刻史

著書／『神仏習合像の研究』 単著 中央公論美術出版（2005 年）

半田正博 Masahiro Handa 1938 年東京都生まれ

現職／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員・教授

学歴／1954 年長野県小県郡本原村立中学校卒業

職歴／1954 年美術・額装（有）岡村多聞堂入社を経て、1967 年、半田九清堂に入社、現在に至る

専門／東洋絵画修復

著書／「吉野の紙と表具」『季刊和紙』全国手すき和紙連合会（1994 年）、『在外日本美術の修復』編集協力 中央公論社（1995 年）、『和紙文化辞典』久米康生著 編集協力 わがみ堂（1995 年）、「書画を護る和紙」『和紙との対話』 単著 （1996 年）、「ヨーロッパの和紙 印象に残った文様の和紙」『季刊和紙』 全国手すき和紙連合会（1997 年）、『図解日本画用語辞典』執筆指導 東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室編 東京美術（2007 年）

藤原 徹 Toru Fujiwara 1951 年広島県生まれ

現職／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員・教授（美術史・文化財保存修復学科兼務）

学歴／1975 年東京造形芸術大学彫刻科卒業、1995 年ツール美術学校保存修復科卒業（修士号取得）

職歴／1997 年武蔵造型研究所に勤務、2000 年宮城県美術館へ勤務等を経て 2004 年より現職

専門／立体作品保存修復

著書／Restoration' une Sculpture en platre de Joseph comte de Nogent, Ecole Regional des Beaux-Arts de Tours（1996 年）、『佐藤忠良記念財団、修復報告書 第 1 号』共著 佐藤忠良記念財団（1998 年）、『東京国立博物館文化財報告 I』共著 東京国立博物館（1999 年）

森 直義 Naoyoshi Mori 1956 年青森県生まれ

現職／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員・教授（美術史・文化財保存修復学科兼務）

学歴／ベルギー国立 ラ・カンブル視覚芸術高等専門学校 保存・修復課程

職歴／1994 年森絵画保存修復工房設立

他の役職／森絵画保存修復工房代表

専門／西洋絵画保存修復

著書／『修復からのメッセージ』 単著 ポーラ文化研究所（2003 年）、「残されている課題 ―ベルギーにおける絵画修復―」『イタリアにおける美術作品の保存・修復の思想と歴史―欧米各国との比較から』平成 15 - 18 年度科学研究費補助金 研究成果報告書（2007 年）、「今、西洋絵画修復家として」『日本芸術の創跡』世界文芸社（2010 年）、「西洋絵画の組成とその調査」『光を描く印象派展』青森県美術館（2011 年）など

北野博司 Hiroshi Kitano 1959 年石川県生まれ

現職／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員・准教授（歴史遺産学科兼務）

学歴／1982 年富山大学人文学部卒業

職歴／1984 年石川県教育委員会、2000 年から現職

専門／日本考古学 研究テーマは窯業史、古代地域社会論、近世城郭

著書／『出羽の古墳時代』共著 高志書院（2004 年）、『文字と古代日本』第 2 巻 共著 吉川弘文館（2005

年)、『日本海域歴史大系』第2巻 共著 清文堂(2006年)、「律令国家転換期の須恵器窯業」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第134集(2007年)など

三浦功美子 Kumiko Miura 1966年東京都生まれ

現職／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員・准教授(美術史・文化財保存修復学科兼務)

学歴／1991年東京芸術大学大学院美術研究科保存科学課程修了

職歴／1991年半田九清堂、2003年山領絵画修復工房、2006年伝世舎設立

他の役職／伝世舎代表、山形県立博物館協議会委員

専門／東洋絵画修復

米村祥央 Sachio Yonemura 1971年千葉県生まれ

現職／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員・専任講師(美術史・文化財保存修復学科兼務)

学歴／1997年東京農工大学大学院工学研究科物質生物工学修了、2000年東京芸術大学大学院美術研究科保存科学課程修了

職歴／2000年(財)元興寺文化財研究所入所、同研究所勤務を経て、2004年から現職

専門／文化財保存科学、分析化学

岡田 靖 Yasushi Okada 1975年愛知県生まれ

現職／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員・専任講師

学歴／1998年東京芸術大学美術学部彫刻科卒業、2004年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程文化財保存学保存修復彫刻修了 博士(文化財)

職歴／2004年東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学保存修復彫刻研究室非常勤講師、2007年(財)文化財保護・芸術研究助成財団在外研修員としてイタリア・フィレンツェの国立修復研究所(OPD)などで研修、2009年より現職

専門／彫刻文化財(仏像)保存修復

著書／Sculpture lignee in Giappone e in Italia tra 1000 e 1500. Un confronto fra tecniche di assemblaggio, OPD Restauro No.20, p281-293, Opificio delle Pietre Dure e Laboratori di Restauro di Firenze (2009年)、「庭月観音像の科学的調査と修復実践に関する研究」『東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要 No.1』(2011年)など

大山龍頭 Tatsuaki Oyama 1976年東京都生まれ

現職／東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター 常勤嘱託研究員(東洋絵画修復)

学歴／2006年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程文化財保存学専攻保存修復日本画修了 博士(文化財)

職歴／2007年宇都宮文星芸術大学美術学部日本画専攻助手 2009年東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター ORC 事業内 PD. を経て現職

専門／日本画古典絵画模写 東洋絵画修復

他の役職／日本美術院院友

著書／『図解日本画用語辞典』共著 東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室編 東京美術(2007年)、『日本絵画の謎を解く― 東京芸術大学文化財保存学日本画博士の研究』共著 東京芸術大学出版(2007年)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22～26年度）
「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」

平成22年度

文化財保存修復研究センター研究成果報告書

Bulletin of Institute for Conservation of Cultural Property

2011.3

平成23年3月31日発行

東北芸術工科大学
文化財保存修復研究センター

〒990-9530 山形県山形市上桜田三丁目4番5号

TEL 023-627-2204

FAX 023-627-2303

E-mail iccp@aga.tuad.ac.jp

ホームページ <http://www.iccp.jp>

ISSN 1881-5553

©Institute for Conservation of Cultural Property (ICCP), Tohoku University of Art & Design, 2010